
ホーソーンの庭で

山本 水城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホーソーンの庭で

【Nコード】

N6799Q

【作者名】

山本 水城

【あらすじ】

― 出先でその報せを受けたユージーン・マクラ克蘭は、夜半に辻馬車に飛び乗ると、ロンドンを離れ、夜通し牧草地を駆け抜けた。― ユージーンが旧友のヴェルマス子爵、コーネリアス・ウォーレン卿の生家を訪ねたのは、ホーソン（サンザシ）の花咲く季節のことだった。コーネリアスの孤独を感じながらも、これまで彼の心に深く踏み込むことの出来なかったユージーンは、次第に友人の過去を知ることになる。そして、その家には、その存在がほとんど知られていないコーネリアスの妹がいた。

再会の五月（1）

1

出先でその報せを受けたユージーン・マクラランは、夜半に辻馬車に飛び乗ると、ロンドンを離れ、夜通し牧草地を駆け抜けた。

そして、旧友であるヴェルマス子爵——ユージーンにとっては、子爵がその儀礼称号の使用を認められるまで名乗っていた「コーネリアス・ウォーレン卿」と呼ぶ方が、いまだにじっくりと来るのだが——その「コーネリアス」の父であるストラウド侯の地所に到着したのは、翌朝早く、まだ朝霧の立ちこめる時刻だった。

実は、急ぎ駆けつけたからといって、特段どうということとはなかったのだ。

ストラウド侯爵が、落馬が元で亡くなった時、息子であるコーネリアスですら、その臨終の場に立合うことがかなわなかったのである。

ロード・ストラウドの死は、それほど急なものだった。

拳げ句の果てに、手違いは重なるもので、コーネリアスからの報せがユージーンの手が届くまでには、かなりの時間がかかっていた。

ユージーンが今更急いだところで、候の埋葬に間に合う訳でもなかった。

コーネリアスは、ユージーンのパブリックスクール時代からの友人だ。

幼い頃に母を亡くしたせいなのか、コーネリアスは如才ない人づきあいを得意としていた。

だが、ユージーンの目からみれば、その幅広い交際の中に、コーネリアスにとって真に心を開けるような相手が、さほどの数が存在しているようにはみえなかった。

むしろ、ユージーンにはコーネリアスが、ごく孤独な人間に思えていた。

実際、そつのない振舞いで大勢の人の輪の中にあるときでさえ、コーネリアスが明るく笑うようなことは滅多になかったのだ。

ユージーンといえば、生来、世の中を突き放したようなところがあり、人付き合いにおいても自身のペースを乱すことはなかった。そのために、パブリックスクールの仲間からも、ひどく独特な雰囲気を持っている人間だとみなされていた。

そんなユージーンの風変わりなところに惹かれてもしたのだろうか、コーネリアスはユージンには心を開いていた。

ユージンにとっても、コーネリアスの物の考え方には共感を覚えることも多く、二人は互いに、互いにとって数少ない親しい友人となっていたのだった。

そうはいつても、二人の付き合い方は、実はある程度の距離を置いたものでもあった。

もしかすると、ユージーンのそうした態度に、コーネリアスの方が合わせていたところもあったかもしれない。

ヴェルマス子爵、そして、ほどなくストラウド侯爵の爵位を継承す

ることになるコーネリアスは、学生時代からまるで変わっていないようだった。

対外的にはごく社交的な態度を貫いており、複数のクラブにおける人気者の地位を不動のものにしている。社交界でも、いわゆる花形だ。

一方、ユージーンの方も相変わらず「風変わり」であって、社交の場に積極的に顔を見せることも少ない。コーネリアスと同じクラブに所属しているわけでもなかった。

そのため、紳士達の間で、この二人の間に交流が存在することは、存外、知られていないようなところもあった。

そんなコーネリアスが、ユージーンにわざわざ、地方の領地に住まう父の死を報せてきたのである。

ユージーンが一晩中、馬車を駆ってストラウドまでやってきたのは、このような理由があったからだった。

再会の五月（2）

2

ストラウドまでは、馬車をいくつか乗り換えた。

目指す館の外れに近づいたところで、ユージーンは馬車を下りた。

大した荷物も持っていなかったし、こんな早朝、喪中の屋敷の車寄せに馬の蹄とやかましい車輪の音を響かせるのは、気が引けたからである。

馬車を降りてから、かなり歩いたはずだが、屋敷の入り口にたどり着かない。

次第に薄れてきているとはいえ、まだ朝霧はある程度の濃さを残していたし、初めての場所ということもあり、ユージーンは進むべき方向の見当を見失いそうになっていた。

まだ、三十になるまでは少し間がある、若い壮健な男であるユージーンといえども、医師としての仕事を終えた後の夜通しの馬車での移動は、決して楽なものではなかった。

上着を脱ぐために、手にしたバッグを地面に置きいったん立ち止まると、ユージーンは思わずため息をもらした。

風が渡る。

庭木の枝葉がざわめく。

ふと、歌声が聴こえた。

……少女の声のようだ。

ユージーンは声の方へと歩みを進めた。
木々が少し開けたところに行きあたる。
すると、残っていたもやが流されるように晴れ、日差しが、一層明るさを増した。

ユージーンが最初に見たのは、横顔だった。

たくさんの大きな白い芍薬の花を、両腕からこぼれおちそうなほど抱えている。

まだ真新しい墓碑の前で、長い銀髪を結いあげずに垂らしたまま、彼女は静かに歌っていた。

耳慣れない唄だった。讃美歌でもなさそうだ。

それはひどく印象的な声だった。

一人の人間の声のはずなのに、時折ハーモニーがかかって聴こえるような不思議な響きだ。

サンザシの花が、まるでその歌声に合わせるかのようにふりそそぎ、彼女の髪に、肩に降り積もっていた。

突然、唄が止んだ。

銀色の髪が大きくなびく。

彼女はユージーンの方をゆっくりと振り返った。

他人がいたとは思ってもよらなかったのだろう、驚きのあまり、彼女の手からは芍薬の花がすべてこぼれおちた。

ある種、最近の流行なのかもしれないが、それにしても、彼女の体

は華奢すぎた。

コルセットのない、さっぱりとした形の黒いドレスを身に着けていたが、その腰はユージーンが片手でつかめそうなほどに細く、肩も腕も花束より重いものを持つことなど、とても出来そう見えなかった。

だが、なによりもユージーンの目を奪ったのは、彼女の瞳だ。

まったくもって三月のスミレと同じ色をした右の瞳。

左の瞳は、夏の湖を思わせるエメラルド色。

朝靄と同じくらい、いやそれ以上に、透き通ってしまいそうなほど白い彼女の肌が、いっそう瞳の色を際立たせている。

もの言いたげに、かすかに彼女の珊瑚色のくちびるが動いた。

しかし、こぼれおちたのは声ではなく、瞳からの大粒の涙だった。

彼女は無言のまま数歩後ずさり、踵を返すとサンザシの花びらの中へ、かき消すように去って行った。

再会の五月（3）

3

動揺のあまりに震える両手を、口元へと押しあてながら、カロリー・ウォーレンは早足で庭を横切っていった。押し殺した吐息とともに、涙が頬を伝い、細い顎からこぼれ落ちると、朝露に濡れた草に足をとられ、彼女は地面へと投げ出された。

倒れたショックで、逆に体の震えが止まる。

カロリーノはゆっくりと体を起こした。

打ちつけた膝が鈍く痛み、すりむいた掌には、うすく血がにじんでいた。

湧き上がる悲しみ、そのほかの様々な感情を抱いて、ずっと昔に亡くなった母が好きだったという唄を、そして父の心の中でもおそらく最も大事なものであったろうその唄を、父の墓前で歌っていたカロリーノは、突然現れた見知らぬ男にひどく動揺していた。

それというのも、彼女は屋敷の中の、ごく限られた家人以外の人間に会うことなど絶えてなかったからだ。

故ストラウド侯爵、ジョージ・ウォーレン卿は、娘のカロリーノを、まるで中国の象牙細工の鳥かごに閉じ込めるかのようにして育てていたのだった。

痛む脚を引きずりながら、カロリーノは自室のテラスのフランス窓までたどり着いた。

体ごと倒れこむように窓枠を押し、部屋の中へと倒れこんだカロリー

ーノの体は、朝露でぐつしよりと濡れていた。
気力を使い果たしてしまった彼女は、床の上へと倒れ込んだ。

どれくらい経っただろうか。

ノックに返事がないことを不審に思ったミセス・オーソンが、扉の隙間から中をうかがつくと、カロリーノが瞼を固く閉じ、人形のよう
に床に横たわっていた。

ミセス・オーソンはカロリーノが生まれる前からの女中頭、いわば
ストラウドの屋敷の生き字引である。

そして、身分的には不釣り合いな立場であつたとはいえ、生まれて
すぐに母を亡くしたカロリーノのことを常に気かけ、細やかに世
話をしていたのは、このミセス・オーソンただ一人といつても過言
ではなかつた。

ストラウド候は、娘を屋敷の一角に閉じ込めていたものの、自分自
身は彼女とはほとんど接触を持つとしなかつた。
そして、それは時が立つにつれ、ますますひどくなっていたのだつ
た。

「嬢様！ カノさま。 あれまあ、どうなさつたのです？」

かがみこみ、カロリーノの体をゆすりながら、ミセス・オーソンは
おろおろと声と上げた。

ミセス・オーソンが数回呼びかけて、やっとカロリーノはうつすら
と瞼を開いた。

「体中、びしょぬれじゃございませんか！ ああ、朝露にあたりな
さつたんですね。 あれまあ、どこもかしこもひどく冷たくなって」

ベッドの上のブランケットを手にとると、ミセス・オーソンはカ
リーノの頭からすっぽりとそれをかぶせ、体をこすり始めた。

ひととおりそうやってから、ミセス・オーソンは、ふと気がついたように、今度は暖炉の方へと向かい、灰を掻き起こした。

「……だいじょうぶよ。ミセス・オーソン。火はいらないわ」

カロリーノは、ブランケットを胸の前で掻き合わせながらこう言ったが、その声はひどく弱弱しかった。

ミセス・オーソンは、カロリーノの言うことなどまるきりお構いなしに、火を起こしてしまうと、今度は衣装ダンスから服を取り出し始めた。

「ほれ。早くその濡れた服を替えなさいと。嬢様、お手伝いしますから、ね？」

服を着替えさせられたカロリーノは、そのままミセス・オーソンによつてベッドへと寝かしつけられてしまった。

上掛けをカロリーノの顎まで引き上げて、身体をくるみこむように上掛けをベッドへと押しつけて、ミセス・オーソンは言った。

「今、お客さんのと一緒に、嬢様にも暖かい飲み物やなんかを用意してきますから。それまでベッドで、おとなしくしていなさるのですよ」

「……お客様？」

カロリーノは思わずこう問いかけた。

父の埋葬も終わり、弔問客は、昨日のうちに皆帰ってしまったはずだ。

ミセス・オーソンも「これで大分落ち着きましたかね」と独りごちていたのに……。

カロリーノの疑問はもつともだとも言うように、ミセス・オーソ

ンは頷いた。

「今朝方、ついさつき、おつきになったんですよ。コーネリアス坊ちゃんの、いえ、旦那様ミイロードの古いお友達でいなさるそうで」

……もしかして、さっきの？

「その方は男の方？ 何とおっしゃるかたなの」

カロリーノは上掛けの中から、扉の方に歩いて行くミセス・オーソンに精一杯視線を向けながら尋ねた。

ミセス・オーソンは立ち止まり、振り返ると一瞬、あれまあ、とても言いたげな表情をみせた。

「そりゃ、コーネリアス坊ちゃんにも、ご婦人の友人がいらしてもおかしくはないでしょうがね」

「……そういう意味じゃ……ミセス・オーソン」

カロリーノが戸惑いながらも口になると、ミセス・オーソンはいたずらっけのある笑顔を浮かべた。

「お客さんは男の方ですよ。寄宿学校に入られていた時のお知り合いだそうで、お名前は……確か、マクラ克蘭様とか言いなすった。せいのお高いかたでしたよ」

……ああ、きつとさっきの人だわ。

驚いて顔も良くみていないけど、確かにとても大きな人だったもの。

「よっぴいて馬車で駆けつけ下さったようですね。ちょっとばかりお疲れのようにもみえましたねえ……」

ミセス・オーソンは少し考えてから、こう続けた。

「でも、コーネリアス坊ちゃんにそんなにお親しいご友人がいらしたなんて、わたしはとんと存じ上げませんでしたねえ」

ミセス・オーソンのこの物言いに、カロリーノは心の中で同意した。

——兄様がパブリックスクールに入られてからは、お目に掛かることもほとんどなくなつたし。ヴェルマス子爵を名乗るようになってからは、めつたにストラウドにはお戻りでなかったもの……。

幼いころにはそんなことはなかった。
わたしを氣にかけてくれていたのに……。

ふたたび、涙がこみ上げてきそうになつが、カロリーノはそれを振り払うように、ミセス・オーソンに声をかけた。

「それならお客様の方のお世話をしてあげてね、ミセス・オーソン。わたしはだいじょうぶ……それにいまは、何もほしくないの」

これを聞くと、ミセス・オーソンは、顔をしかめた。

「いけませんやね。食べたくなかうがなんだろうが、体はおなかのなかからも暖めなけりや。また、嬢様がひどい熱でも出しなさら、こつちは生きた心地もしませんよ」

そう言い置いて、ミセス・オーソンはカロリーノの部屋から出て行った。

再会の五月（４）

4

ユージーン・マクラ克蘭が屋敷に入ると、いかにも控えめで切れ者といった風情の初老の執事が、彼の上着と荷物を素早く引き取った。

「こちらにお通しするようにつかっております」
執事は、静かにその部屋の扉を開けた。

そこは、読書室だった。

いや、そう呼ぶのは少し躊躇われる。

ざっとみわたしたところでもその蔵書の規模は、小さな図書館にひけはとらないものだったから。

「お飲み物をお持ちいたします。よろしければお好みをお教え下さいませ、マクラ克蘭様」

ユージーンは窓際に置かれた、その部屋で一番古そうな、だが一番ゆったりとした肘掛け椅子に体を預けると、軽い溜息とともに執事に答えた。

「そうだな…… コーヒーがあるとありがたい」

「かしこまりました、軽い物とご一緒に、直ぐお持ち致します」
執事は足音も立てずに、部屋を出て行った。

ユージーンは肘掛けに腕を立て軽く頬杖をつくようにして、瞼を閉じた。

すると、ほどなく、ノックの代わりに「ユージーン？」という呼びかけがあり、扉が開いた。

目を開けたユージーンの前には、父を亡くしたばかりの彼の友人、コーネリアスが立っている。

「わざわざ、こんな田舎まですまない、だが、久しぶりだな？　どれくらい経つだろう、最後に君に会ってから」

コーネリアスは、朝早くから一分の隙もなく喪服を身につけ、さらにこれまた、模範的なほどの社交性を示してみせた。

葬儀に埋葬、弔問客の応対、疲れているだろうに……。

ユージーンは親友の胸中を思いやり、胸がいたんだ。

「コーネリアス、このたびのことは……」

弔いの言葉を言いかけたユージーンを遮って、コーネリアスは言った。

「いいんだユージーン。お悔やみの言葉なら、ここ数日で一生分聞いたよ」

すかさず、ノックがあり、執事がコーヒーを運んできた。

「うちの豆が君の気に入ると良いけど……」

ほぼ無音でコーヒーの支度を整える執事に向い、耳打ちするようにコーネリアスは続けた。

「ロード・ユージーンはコーヒーにはうるさがたでね」

余計なことを……と眉をひそめたユージーンを見て、コーネリアスは軽く笑い声を立てた。

そして、再び、執事に向い「後はいいいよ」と続けた。

すると、かき消すように、彼は部屋から去っていった。

今どき、あれほどのバトラーもなかなかいまい……。
家向きのことには、どちらかといえば疎い方のユージーンでさえも、
ストラウドの執事の出来の良さには感心させられた。

「……彼かい？」

コーネリアスはユージーンのことを読んだかのように言った。

「バーンズの父は僕の祖父の代のストラウド侯から仕えてくれた
バトラーだね。彼も7歳の頃からここで働いてる」

コーネリアスはデミダスカップを口に運んで一息つき、「父はバー
ンズをとて信頼していたからね」と付け足した。

「……これからは『君の』執事だ。心強いじゃないか」

ユージーンのこの言葉に、コーネリアスは微かな笑みのみで答えた。

……らしくない。気弱な表情だな。

ユージーンは旧友の横顔をうかがいながら思った。

すると、コーネリアスはふたたび、気丈な喪中の主の表情に戻り、
ユージーンに言った。

「食ベにくいからって、君がパイを好まないことは、無論覚えてい
るよ。だがね、ここへ来たからにはミセス・オーソンのパイを食ベ
ないなんて、そんなとんでもないことはさせやしない」

ユージーンの前には、コーヒーとともに美しく焼き上がったカス
タードのパイが置かれている。

「これは友人としての真剣な忠告だよ、ユージーン。一口試してみ
るべきだ」

コーネリアスの言うとおり、ユージーンはパイが苦手だった。
味が特に嫌いというわけではない。まあ、甘い物はあまり好まない

のではあるが……。

ユージーンは他の事では特段スマートさに欠けることもないし、実際、学生時代からコーネリアスなどより、よほど手先は器用なたちだった。

だが、こと、パイだけは……。

細かなくずを、膝にこぼさずに食べられたためしがない。

見るとコーネリアスは、とてつもなく優雅な仕草でカスタードパイを口に運んでいる。

空腹でもあったし、疲れのせいか、ユージーンにはめずらしいことであつたが、ひどく甘い物を口に入れてみたいような気分になっていた。

幸い同席しているのは、コーネリアスだけだ……。……ままよと、わざと手づかみで皿からパイを取ると、ユージーンはそのままかじりついた。

一口食べたらずまらなかった。

黙々とパイにかじりつくユージーンを、さもおもしろいものでも見るようにコーネリアスが覗き込んでいる。

カスタードパイの最後の一口を飲みこみ終わった後、ユージーンは、コーネリアスが口を開く前にすかさず言った。

「美味かったか？　なんて、訊くなよ」

一瞬の間をおいて、父の喪のさなかの息子としては、まったくふさわしからぬ大声を上げてコーネリアスが笑い出した。

ユージーンはカップのコーヒーを飲み干し、むっつりと黙ったまま、友人の笑いがおさまるのを待っていた。

やっと笑いの発作が止まったコーネリアスは、目尻に浮かんだ涙を指で拭いながらユージーンに言い返した。

「……訊きやしないさ、そんなこと」

そして、コーヒーポットを手にとると、「コーヒーをもっといかがか？　ロード・ユージーン」と猫なで声を出した。

ユージーンはポットを邪険に右手で追い払い、鼻で笑うと、こう答えた。

「そんな、お茶会の女主人ホステスみたいな台詞は聞きたくないね、ヴェルマス卿？」

再会の五月（5）

5

「バーンズさん、今のはもしかしてコーネリアス坊ちゃんの笑い声かね?!」

厨房に繋がる食器室に入ってきた執事に、ミセス・オーソンはこう声をかけた。

「……私にもそのように聞こえましたが。ミセス・オーソン」
バーンズはごく短く答えた。

無表情なその顔とは裏腹にヴェルマス卿の、コーネリアスの、いましがたの笑い声には、彼も少々面食らっていた。

「コーネリアス坊ちゃんが笑いなさるのは、久しぶりに聞きましたよ」

ミセス・オーソンの方はといえば、驚きを隠さなかった。

「そう言えば、お客様のほうはどうですかね？　まだ何かありそうですね、バーンズさん」

ミセス・オーソンの問いかけに、バーンズは静かに答えた。

「しばらくお二人だけで、お話なさりたいようです。当分は特にご用を言いつかりはしないでしょう」

手にしていた銀の盆を丁寧に片付けながら、バーンズは言い足した。

「それが何か、ミセス・オーソン？」

その言葉を待っていたかのように、ミセス・オーソンは話をきりだした。

「いえね、それならちょっと、嬢様のところに暖かい物をお持ちし

てご様子をみてきたいと思ひましてね」

「レデイがどうか？」

「どうかってことでも、ないんですがね……」

ミセス・オーソンは言い淀んだが、バーンズはそれ以上は何も追及しなかった。

「お客様の御用向きについては、何か言いつかつても、私ひとりで大丈夫でしょうから」

バーンズは、ミセス・オーソンにこう言つたと食器室を出て行つた。

「……午後にも、父の墓所に案内しよう。埋葬は昨日終わつたんだ」

膝と言わず、胸元と言わず、服のあちこちに付いた飴色のパイの粉を必死に払っているユージーンに向つて、少々唐突にコーネリアスは言つた。

そして、ユージーンが言葉を返そうとするのを遮るように、すかさずこう続けた。

「ところで、君は少しの間、横になつたらどうかと思つのだが、ロード・ユージーン・マクラ克蘭？」

「コーネリアス……」

「その鏡を使って、頬に付いているパイくずを払うはらうついでに、自分がどんな疲れた顔色をしているか観てみると良い……バーンズ！」

執事が滑るように読書室に入ってきた。

「ロード・ユージーンをご案内してくれ」

有無を言わず、コーネリアスはユージーンを休ませる心づもりらしかった。

「かしこまりました、ではこちらに、マクラ克蘭様」

執事のバーンズが、静かに扉の方へとユージーンを誘つた。

「……ヴェルマス卿」

執事につれられ部屋を出る時、ユージーンはすれ違いざまコーネリアスに対し、慇懃に呼びかけた。

どうしても、コーネリアスに文句を言わずにはおれなかったのだ。

「せめて……服からパイकुずを全部はらいおわるまでは、バトラーを呼び入れないでいてほしかったのだがね」

ユージーンの背後でしまった扉の向こうからは、かなりの間、コーネリアスのかみ殺したような笑い声が聞こえ続けていた。

木々達の白昼夢（１）

6

ユージーンが憎まれ口をきいて、読書室から退出した後も、しばらくの間コーネリアスの笑いの発作は続いていた。旧友の顔を見て、緊張の糸が切れたのだろうか？ 少しのことで不思議に気持ちが高ぶった。

いずれはくるべきものだ、と、コーネリアスにも漠然とした覚悟はあったものの、父、ストラウド候の死はあまりにも早すぎた。実際、ウォーレンの一族の実権は、ストラウド候が完全に握っていた。

彼は長としてまだ完璧に現役だったのだ。

やっと笑いが収まり、コーネリアスは深く溜息をつきながら、先ほどまでユージーンが腰掛けていた肘掛け椅子にくずおれるように沈み込んだ。

報せを出したものの、ユージーンが来るかどうか、コーネリアスは期待していなかった。

……いや、期待しないようにしていた。

彼はうわべだけの儀礼など歯牙にもかけない人間だ。

来る理由がないと思えば、ここに来ることはない。

無駄に失望など、したくはなかった。

葬儀にも、埋葬にもユージーンの姿はなく、コーネリアスはそのことに気がつく度に、自分がどれほど旧友の顔を見たいと望んで、その来訪を期待しているのかを思い知らされた。

よく眠れぬまま迎えた明け方。

早朝、ユージーン・マクラ克蘭卿の来訪を告げに、少しばかり当惑気味に、執事のバーンズが寝室にやってきた。

……随分、間が悪いじゃないか？

コーネリアスは、なにかひどくじらされたような、腹立たしいような、いつそ気抜けしたような、そんな複雑な気分になせられた。

だが、旧友の姿を一目見たときに、――読書室の古ぼけた椅子に頼杖をついて、目を閉じているユージーンの様子を見た途端――コーネリアスは理解した。

そして、それまでの、何と言おうか……不快な気分は消え去ってしまった。

ユージーンがコーネリアスからの報せを受け取ってから、おそらくまだそう時間が経っていなかったのだらう。

すぐにここに駆けつけてきたのだということは、彼の様子から明らかであった。

しかし、彼は、ユージーンは、その様なことについて一切いいわけすることはなかった。

その潔さが、ひどくユージーンらしかった。

いや、潔いというよりは、諦念、と言った方がいいのかもしれない。

「到着が遅れた事実は、理由もいいわけも関係なく、変えられないことである」と。

コーネリアスには彼のいいそうな言葉が想像できた。

たとえ、から元気でもなんでも、声を出して笑ったことで、コーネリアスは心に滓のように溜まっていた重苦しい物が、ほんのわずかではあるが取り払われた気分だった。

広大な地所と財産、それにウォーレンの一族。

突然背負うには、コーネリアスはまだ少し若すぎるし、背負う物もあまりにも大きすぎる。

だが、それ以外にも、彼の心にかかることがあった。

それは、コーネリアスのごく個人的な感情に起因することだった。

とはいえ、ここ数年来、それは彼の心に無数のひっかき傷をつけつけていた。

コーネリアスは、肘掛け椅子から立ち上がると、なにかを少し迷うように書棚の前で立ち止まった。

しかし、すぐに心を決めた様子で、読書室を後にした。

木々達の白昼夢（２）

7

葬儀に参列させるかどうか……。

コーネリ阿斯も最後まで迷ったのだった。

突然のストラウド侯の事故死だけでも、社交界に噂の種を提供するようなものであったのに。

この上、さらに話題を追加させることになりかねないのでは？

それが気がかりだった。

とはいえ、コーネリ阿斯は、そのことをストラウドの執事のバーンズにさえ、ひとこと相談することもできなかった。

実の娘を、父の葬儀に行かせない……そんなひどいことを口にするなどとは。

カロリーノ・ウォーレンは、コーネリ阿斯の血の繋がった真の妹であつた。

そして、今となつてはたった一人の肉親である。

その存在自体には、なんらスキャンダラスなところはなかった。

パークスの名鑑にもその名は載っている。

ストラウド侯爵の娘、ヴェルマス子爵の妹と。

ただ、実際には、彼女の存在はほとんど全くといっていいほど世間には知られていなかった。

父ストラウド侯が、カロリーノをあらゆる外部との接触から遮断し

ていたからだ。

彼女の存在自体を抹消してしまう気なのではないかと、コーネリアスも思うほどであった。

なぜ？ ストラウド侯はそんな真似をしてきたのか……。

どのみち、いまさらもう、尋ねることもかなわないのではあるが。だが、妹が突然公の場にでることによって引き起こされる周囲の人間の驚きが、コーネリアスには容易に想像できた。

歳の頃、十代も後半の名門の女性。

社交界にデビューしてないなんて、そんなはずはない。ありえないことである。

それが突如現れる。

しかも、カロリーノは美しかった。

社交に長け、あらゆるレディたちと何らかの交流があるといっても過言ではないコーネリアスの目から見ても、いまだにカロリーノほど美しい少女は見たことがなかった。

そんな妹の突然の出現は、ご婦人方の茶会や紳士達のクラブにおいて、蜂の巣をつついたような騒ぎを引き起こすに十分すぎる出来事であろう。

なぜ、いままで、候が彼女を人前にださなかったのか？

さまざまな憶測、ありもしない事情を詮索されるに違いない。

だが……。

もし、彼らの中で、生前のストラウド侯爵夫人を覚えている人があれば。

そんな疑いなどすぐに晴らしてくれるのだろうか……。

十数年前に亡くなった、コーネリアスとカロリーノの母であるレディ・ストラウド。

レティシア・ウォーレンのことを。

カロリーノにはレディ・ストラウドの面影があった。それもとても色濃く。

そして、父親譲りでコーネリアスと同じ、ウォーレン一族ならではの緑色の瞳を持っている。

……彼女の場合、それは片方だけなのではあるが。

カロリーノは母に似すぎている。

とくに最近、コーネリアスは強くそう思うようになっていた。

彼が一番多感な頃に失った最愛の母に。

かつては、歳のはなれた妹を、コーネリアスはとても愛おしんだ。だが、それはまだ、カロリーノがひどく幼い頃のことだ。

彼女をおいてパブリックスクールへ行くことになった時は、心配で胸が痛んだ。

それまでのカロリーノに対する父の接し方を思えば、なおさらだった。

休暇の度に、妹の様子を見に、ストラウドの館に急ぎ戻ったものだった。

しかし、いつの頃からだったろう。

カロリーノの姿に、母が、『レディ・レティス』が重なる。

目鼻立ちや、華奢な体つきなど、姿形だけではなかった。

彼女は母を、レティスを知らないはずなのに。

そのちよつとした仕草や口調。

それらは、驚くほど母に似ていた。

コーネリアスはカロリーノを見るのが、次第につらくなっていった。

そうなのだ。

父が、なぜ妹に対し不自然な……不自然すぎる態度をとっているのか。

今はコーネリアスにも判っていた。

もともと体が丈夫ではなかったストラウド侯爵夫人は、一度の出産すら無事に終えられるかが危ぶまれていた。

嫡子としてコーネリアスが生まれているのだから、侯爵夫人が無理にカロリーノを出産する必要などどこにもなかった。

だが、彼女は生むことを固く決心していた。

予想されたことではあったが、それは難産であった。

カロリーノを産み落とすまでその命が続いたのは、まさに母としての執念のなせることであつたという以外に、説明のしようがなかった。

つまり、ストラウド侯は、妻の命を娘に奪われたようなものだったのだ。

このストラウドの館に閉じ込められている妹を、不憫に思わないわけでは決してなかった。

しかし、コーネリアスの足は、カロリーノの成長につれて、ますますここから遠のいた。

そんな冷たい仕打ちをしてきた妹に向かって、父の葬儀に出るなど

は……。

カロリーノにそう告げることは、できないままだった。

だが、妹にも察するものがあつたのであろう。

彼女は、弔問客がひっきりなしに館に出入りしている間、一步も部屋から出てはこなかった。

そして、葬儀にも、埋葬にも参列することはなかったのだ。

……結局、自分はすべてを妹におしつけて逃げたのだ。

昨夜、コーネリアスは一晩中、自分を責め続けた。

ここ数日、喪主としてあらゆる雑事に追われていたコーネリアスには、カロリーノの元に足を運びいとまなど、まったくなかった。

今、彼女がどうしているのかすら知らなかった。

ストラウド候のこのほどの急逝にあたって、臨終に立ち会えたのは使用人の他、カロリーノただひとりだった。

…… たった独りで父親をみつた妹に対して、これ以上思いやりのない仕打ちをすることはできない。

彼女と会って、なにか話さなければ。

だが、いまさらどんな顔をすればいいのか。

そう思い悩みながらも、コーネリアスはどうとう決心し、カロリーノの部屋に向うことにしたのだった。

館の奥深くにあるカロリーノの部屋の前で、コーネリアスはノックする寸前、わずかに躊躇った。

と、その時、扉が内側から開いた。
そして、部屋の中を振り返るようにしながら、ミセス・オーソンの
のっそりと現れた。

目の前に立っていたコーネリアスにぶつかりそうになり、ミセス・
オーソンは一瞬、目を白黒させた。
だが、さすがにストラウド侯の女中頭、すぐさま何事もなかったか
のように静かに扉を閉め、コーネリアスに声をかけた。

「おや、コーネリアス坊ちゃま、いえ、ミー・ロード」

「……いいよ、別に。坊ちゃまでも」

コーネリアスはすかさず答えて、ミセス・オーソンのために体をず
らした。

「嬢様のご様子を見て来て下さったんですね？」

ミセス・オーソンはごく小声だが、喜びを隠さない様子でコーネリ
アスにこう言った。

「ああ……どうしている？」

コーネリアスが切り出しにくそうにこう口にすると、ミセス・オー
ソンは少し眉をひそめながら答えた。

「せっかく坊ちゃんがいましてくださったんですがねえ。いま嬢様
は眠っておられるのですよ」

「……？」

「いえね……。今朝早くにどうもお庭を歩かれたようで。わたくし
が今朝のご用をうかがいに参りましたら、なんとお部屋の床に倒れ
ておいでで……」

「なんだって？ 倒れて？」

「お体が朝露ですっかり濡れていらしたので、おそらくそうかと」

庭……。

父の墓前にいったのだろうか？ わざわざそんな早くに……。

「さきほど手が空きましたんで、熱いお茶をお持ちしてみたのですが、もう、ぐっすりお休みになっていて」

ミセス・オーソンはこう言いながら、静かに歩き出した。

「……そうか」

とりあえず、今は顔をあわせなくてすむ。

コーネリアスは、自身が少しばかりほっとした気分になっていることに気がつき、ふたたび自分に対して嫌気がさしてきた。

そんなコーネリアスの気持ちを知ってか知らずか、ミセス・オーソンは懇願するように続けた。

「嬢様もコーネリアス坊ちゃんが来て下さったと知ったらお喜びになんないます。坊ちゃんがいるいろいろお忙しくなさってるのは嬢様も判っておいですから。どうか、また。ね、時間を取ってくださいまし」

そうか……。やはり、ミセス・オーソンも僕の態度には思うところがあったのだ。

コーネリアスは彼女の言葉をこういう風に受け止め、さらに憂鬱に

なつた。

「だが……倒れたって一体？」

コーネリアスの問いかけに対し、ミセス・オーソンは彼を安心させようとしてか、力強くこう請け合った。

「わたしも心配したんですがね、いまのところはただ、眠ってらっしゃるだけのご様子ですよ、ええ。」

木々達の白昼夢（3）

8

「で、ユージーン。君はここまで、一体どうやって来たんだい？」

先に立って歩いていたコーネリアスが、おもむろに振り返ると言った。

「どうって……飛んでは来ないさ」

「そうかな飛んで来たんじゃないのか？ あのバーンズが、君が玄関の前に来るまで客の到着に気付かなかった。鉄道を使つたにせよ、駅からここまでは随分あるだろう？」

コーネリアスは喪服を脱ぎ、フィールドジャケットに長靴といひかにも領邸の主らしい服装に着替えている。

そんな五月の庭にふさわしいでたちの友人と比べて、ユージーンと言えば、昨日から着たきりの黒のフロックコート姿だ。体に沿わせて少しばかり細身に仕立ててある以外、とりたてて特徴もない。

「昨晩報せを受け取った時には、もう鉄道は動いている時間じゃなかった」

「……？」

コーネリアスは無言で立ち止まり、ユージーンの顔を、自分の頭半分くらい上のところにある旧友の顔を見上げた。

陽差しを遮るようにボーラーのつばに手をやりながら、ユージーンは言った。

「歩いて来たんだ」

「ロンドンから？」

すかさずコーネリアスがたたみかける。

「そうじゃなくて……敷地の外から」

「じゃあそこまでは？」

「キャブで……」

「辻馬車！ ロンドンから？ ばかな、ここまで走るもんか」

コーネリアスは軽く両手を挙げてみせると、ふたたび歩き出した。

「途中で乗り換えたんだ。次がなかなか見付からなくて、大分時間を取ってしまった」

「だったら……今朝まで待つて一番の列車で来れば良かったろうに。それでもアフタヌーンティーに少し遅れるくらいの時間には、ここに着いているさ」

「……そうだな」

ユージーンはそういつて少し口をつぐんだ後、付け足した。

「気がせいちゃって……」

この言葉に、コーネリアスはふたたびユージーンの方を振り返った。そして、笑い出すのか、泣き出すのかどちらともつかない表情を浮かべたが、すぐさま平静さを取り戻そうとするかのうように、数回頭を振った。

「コーネリアス？」

ユージーンが少し心配げに呼びかけると、コーネリアスは唐突にユージーンに注意を促した。

「おっと、ユージーン・マクラ克蘭卿、その足下。ぬかるみに気をつけて」

そして、いつもの如才のない、眉一つあげぬといった顔に戻るところ続けた。

「少し水はけが悪いところがある……バーズに君の分の長靴も用意させれば良かったかな」

そう言つて歩き出したコーネリアスを追いかけて、ユージーンはふたたび口を開いた。

「……葬儀はどうだった？」

コーネリアスは歩みを僅かに緩め、ユージーンの横に並んでから答えた。

「まあ、ね。知った顔も知らない顔も、よくもあれだけ集まったよ」
「……なるほど」

ユージーンが曖昧に相槌を打つと、

「なんだい？ ユージーン」

コーネリアスは怪訝そうな声を上げた。

「いや……、葬式というのは死んだ人間のためにやるものではないからな、実際」

「……どういう意味かな？」

「いかにわたしが社交に疎い人間だからって、君の置かれている立場くらいは想像に難くないよ、コーネリアス」

ユージーンは肩をすくめてみせた。

「それで？」

並んで歩きながら、コーネリアスはユージーンに先を促した。

「独身の次期ストラウド候と、あわよくば縁続きになりたい人間はごまんといるだろうからね……」

ユージーンの手を握り、コーネリアスは軽く口の端に微笑をたたえると、「ご明察」と皮肉るようにつぶやき、こう続けた。

「そうだな、弔問客は僕の喪が明けられるのも待ちきれないようすだっ

たよ」

「むりもない、今どき爵位も地所にも財産にも不自由していない貴族の嫡子など、探検家の持ち帰る標本ほどにめずらしいからな」

「ひどい言いようだ、ロード・ユージーン。ひょっとしてパイの恨みかい？ 人をウミガメかなにかみたいに」

「似たような物だろう」

ユージーンは笑いながら言い返してやった。

「君の方こそ、相変わらず変わり者扱いだよ、ユージーン・マクララン卿」

コーネリアスは話の矛先をそらした。

そして、美しい芝生に整えられた庭木のある区画を抜け、そのまま背の高い木々生い茂る中にわけ入っていく。

ユージーンは黙ってコーネリアスに続いて歩いた。

「……ロード・ユージーン・マクラランは、研究者としては第一級と認められているのに、わざわざ診察に走りまわっているってね」

木漏れ日が二人の目の前の地面に作り出す模様が美しい。

風が渡る度に、その模様が揺らめいた。

「わたしの噂をするほど、クラブでは最近話題を欠いているのか？」

「実は、君は昔から噂話の中心さ、ユージーン。君についての噂を知らないのは、君くらいなものだ」

コーネリアスは、すっきりと背筋を伸ばし、軽く背中を手をまわした、いかにもパブリックスクール育ちを感じさせる姿勢の良さで颯爽と歩き続けている。

「カロリンスカに是非にと請われたのを蹴った、とも聞いているが？」

「……よくまあそんなことまで」

ユージーンはあきれてみせたものの、こつも続けた。

「別に蹴ったわけじゃない。今は手が離せないことがあつて、すぐにはいけないと言っただけだ」

「……経済的な問題なら」

コーネリアスが遠回しな口調で言いかけたのを、ユージーンはきっぱりと制した。

「ヴェルマス卿、わたしは自分一人生きていく位は十分面倒をみられている。心配はご無用だ」

これを聞くと、コーネリアスは小さく溜息をつき、口を開きかけてまたつぶんだ。だがすぐに、思い直したかのように言った。

「すまなかった。ユージーン、悪かったよ」

「なにも……謝ることはないだろう？ コーネリアス」

コーネリアスの突然の謝罪に、ユージーンは少々面食らった。

すると、突然視界が開け、目の前に小さな草地が現れた。

コーネリアスがふと足を止めた。

ユージーンも立ち止まり、前方に視線を投げる。

……ここは、今朝の？

ユージーンは早朝、このカントリーハウスに到着した時のことを思い出していた。

そして、あの歌声の持ち主のことも。

目の前に開けた草地には、陽差しに白く墓碑がきらめいており、墓

前には大輪の芍薬が無数に散らばっている。

やはり……。

今朝の場所だ。

そんなことを思いながらも、立ち止まったコーネリアスの瞳に動揺の色が浮かんだことに、ユージーンは気がついていた。だが、ユージーンは無言でコーネリアスの横を通りすぎ、独り、墓碑の前に歩み寄った。

花が散らばっているあたりで立ち止まり、黙祷を捧げる。

ユージーンが目を開け、顔を上げると、隣にはコーネリアスが立っていた。

コーネリアスは、ユージーンの視線を避けるように、墓碑を見つめている。

「……今朝、偶然この場に来たんだ」
ユージーンはこう切り出した。

「……なんだって？」

「歩いて玄関まで行こうとして、霧にまかれて迷ってしまっただけ」
コーネリアスは黙ったままだった。

「……それで妖精に逢ったよ、いや……幽霊かな？」

「ロード・ユージーン?! 今は妙な冗談を聞きたい気分ではないな」

コーネリアスは突如声を荒げた。

「わたしが冗談なんて気の利いたことを言える男じゃないって、コ

「コーネリアス、君ならよくご存じのはずだ」

「ユージーン、一体……」

「銀色の長い髪をしたレディが、その白い花束を持って。ここで唄っていたよ」

「それが……なんだっていうんだ」

「今朝、読書室で『面倒な弔問客はみな帰った、客は君だけだ』と
いったらどう？ 君は」

ユージーンは、コーネリアスの狼狽ぶりに逆に戸惑ったが、さらに続けた。

「君が誰にも内緒で妻を持っているというのでなければ、さもなくばストラウド候に秘密の愛人がいたというのでもなければ、彼女は幽霊か妖精だろう？」

コーネリアスは黙り込んだ。

長い沈黙の後、コーネリアスが重く口を開いた。

「それは妹のカロリーノだ」

「……妹？ 君のか？ コーネリアス」

コーネリアスは頷いた。

「いや……驚いた。初耳だ」

友人の驚きの表情に、コーネリアスの頬は僅かにゆるんだ。

「それはそうだろうな、誰にも言ったことはない」

「なぜ？ 誰にも言わないなんて……」

今度はユージーンの声が固くなった。

「コーネリアス。それはちよつと信じられないな…… ストラウド侯爵令嬢、しかも妙齡で……。アブのような社交界のお噂製造元の追及から免れることなんて可能だとは思えない」

「可能なんだよ」

コーネリアスは淡々と続けた。

「カノは、妹は、生まれてからこの家を一度も出たことがないからね」

驚きのあまり、もはやなにかから尋ねてよいやら判らない、といった表情でユージーンが息をのんだところに、木々の間から声が掛かった。

「坊ちゃん！……コーネリアス坊っちゃん」

息せき切ってやってきたのは、ミセス・オーソンであった。

「どうしたっていうんだ、ミセス・オーソン」

コーネリアスが歩みよった。

「ああ、坊ちゃん。さっき、嬢様のお部屋にご様子をうかがいにきましたら……」

「カノが？ カノがどうしたって」

「それは、ひどいお熱でして。火みたいに熱くなっている……」

「ああ、これまでは先生（お医者様）をお呼びするときは、必ず先に旦那様にお伺いしなければならなくて」

「……なんだって？」

コーネリアスは驚きを隠さなかった。

「おお、坊ちやま、先生をお呼びしてもよろこばいましょう？ 後生ですからいいと言ってくださいまし」

ミセス・オーソンはかなり取り乱していた。

「ミセス……、ミセス・オーソン？」

ユージーンが躊躇いがちに声をかける。

ミセス・オーソンは我に返ったようにユージーンを見上げた。

「ああ、お客様……マクラ克蘭様、みつともないところをお見せしてしまつて……」

慌てて場を取り繕おうとするミセス・オーソンをやんわりと制し、コーネリアスとミセス・オーソンの双方を見ながら、ユージーンは言った

「医者だ」

「……は？」

ミセス・オーソンが戸惑いの表情でコーネリアスの方を見上げる。

「呼ばなくても、ここにいます。わたしは医者だ」

ユージーンは軽く片手を上げながら、そう繰り返した。

木々達の白昼夢（４）

9

「……マクラ克蘭様、先生……。なにか、ご用意する物は……」
コーネリアスとユージーン、紳士ふたりの早歩きになんとか追いつこうと、小走りのミセス・オーソンは息を切らしていた。

「念のため部屋で湯を沸かしておいてくれ、それとタオルを」
ユージーンは手短に指示すると、一番手近のテラスから館の中に入っていた。

ミセス・オーソンはユージーンに言いつけられた用事を取り仕切るべく、使用人の一角へと向った。

だが、ユージーンの後ろから室内に入ってきたコーネリアスは自分はどうすべきかと、はたと足を止めた。

すると、すかさずユージーンがが振り返り、鋭く声をかけた。

「コーネリアス、わたしは部屋からバッグを取ってこなければ。一緒に来てレディのところまで案内してくれ、ほら、何をしている！」

階段を駆け上がるようにして自室に飛び込むと、ユージーンは被っていたボーラーを無造作にソファアに投げた。

上着も脱ぎ捨て、同じように放って、シャツの袖をまくり上げる。そして、ドクターズバッグを手にとって、ざっと中をあらためた。

そもそも、粗忽者のホールボーイ、ケニーが、コーネリアスからの至急の報せをフットマンのダニエルに丸一日、渡し忘れたことから始まった。

間が悪いことに、その後ユージーンは、多忙で帰宅せず、ダニエル

はそれを保管し続ける恐怖に耐えかねた。

そしてついには、ケニーにその失態のカタをつけさせることに決めたのだった。

ケニーはユージーンの後を訪ね回り、昨晚遅くに往診先から出てきたところで、やっとユージーンを捕まえ、報せを渡すことができたのだ。

ホールボーイに一日中、家を空けさせたツケの支払いは、フットマン達が負うことになった訳だから、結果的にダニエルばかり、はズれくじを引いたようなものであったが……。

ユージーンが、こんなところにまで往診カバンを持ってきているのは、ケニーから報せを受け取ってそのまま、ストラウドの館に来たからにほかならなかった。

コーネリアスに案内され、ユージーンがカロリーノ・ウォーレンの部屋に入ると、たらいを抱えた皿洗いのメイドとおぼしき一人の小間使いが湯の準備をしていた。

レディのプライベートルームにしては、なにか、奇妙な印象の部屋だった。部屋の大きさが、どことなくしっくりこない。

そもそもこの部屋は地階にある。

このようなスタイルの館のプライベートルームは、階段の上にあるのが普通ではないのか？

「先生、お湯はこのくらいで足りましようか」

すぐさまミセス・オーソンがコーネリアス達に近寄ってきた。

ユージーンが十分だと答えると、彼女はただちにメイドを下がらせた。

ユージーンはベッドに近づいた。

横たわっていたのは、確かに今朝出会った少女だった。

あの透けるように白い肌が、頬、耳、首筋とバラ色を帯びており、一見して発熱はひどそうだった。

ユージーンは聴診器を取り出し、自分の首にかけた。

「レディ、わたしは医師のマクラランです」

ごく簡単に声をかけ、ユージーンは直ぐに患者の手首を取った。脈を取りながら、呼吸数を数える。

聴診のため上掛けに手をかけたときに、ユージーンは、ミセス・オーションとコーネリアスの存在に思い至った。

「……上掛けをはねてレディの音を聞きたいのだが？ ミセス・オーション」

ミセス・オーションはただちに、レディ・カロリーノの胸元にかけてある物をはだけた。

コーネリアスは、少し離れたところにあるベッドルームチェアに腰を下ろしている。

ユージーンが聴診器のチェストピースを当てると、カロリーノは息をのんでわずかに体を引きつらせた。冷たかったのであろう。

「失礼、レディ」

ユージーンはごく儀礼的に告げ、すぐに聴診に戻った。

さらに喉、首筋などを触診していく。

レディの肌の滑らかな感触を頭から追い払うのに、ユージーンはわずかだが努力を要した。

背中の聴診を行おうと、カロリーノの肩を片手で軽く抱き抱えた瞬間、力なくうなだれた彼女の頬とくちびるが、微かにユージーンの掌に触れた。

と、そのとき、ユージーンの背筋に軽く電流のようなものが走った。

思わず手をとめたユージーンを見て、手助けを求められたと感じたミセス・オーソンが、すぐに手を伸ばし、カロリーノの頭を支えた。

「どうも……。ミセス・オーソン」

ユージーンはすぐに聴診を続けた。

コーネリアスはと言えば、見るともないようなあいまいな視線をユージーン達によこしていた。

「あ、あの。恐れ入ります、ロード……」

突然、麦わら色の髪をしたストラウドのホールボーイが、扉から中をうかがうように顔を覗かせ、おずおずとコーネリアスに声をかけた。

バーンス達がばたついていたのか、ボーイが直接ここまで取りつぎにきたのだ。

「シエスタベリ伯爵家の使いが、あの……マクラ克蘭様のお荷物を届けに」

コーネリアスが、椅子から立ち上がると少し苛立たしげに、ボーイに向って言った。

「ロード・ユージーンは今取り込み中だ！ 一体……バーンスは何をしている？」

ユージーンは手にしたアンブルに向けていた視線をドアの方へと動かし、叱責されたボーイに向って頷くと、コーネリアスをなだめるかのように口をはさんだ。

「持つてくるよう頼んであった。受け取るから、使いは少し待たせて置いてくれないか？」

ホールボーイはユージーンの言葉にお辞儀で答え、そそくさと立ち去っていった。

コーネリアスは忌々しげに溜息をつき、ふたたび椅子に腰を下ろした。

「……スルピリンを打っておいから、熱はじき下がる。今のところ肺炎などの心配はなさそうだ」

手を洗い、まくり上げていた袖をおろしながらユージーンは言った。ミセス・オーソンがユージーンにタオルを差し出して待っている。コーネリアスはベッドルームチェアから立ち上がり、ユージーンの話聞くために近づいてきた。

「レディには、できるだけ水を飲ませて。熱くも冷たくもないものを。ピッチャーあたり塩と砂糖を二つまみ位いれて溶かすと良い」ユージーンはミセス・オーソンにこう言い置くと、無言でコーネリアスを誘い、カロリーノの部屋を出た。

「レディの呼吸音に若干気になる点がある、コーネリアス。一度きちんと診た方がいいと思うのだが……」

ユージーンはコーネリアスにこく小声で切り出した。

「……どこかひどく悪いのか？」

コーネリアスはユージーンの顔を見上げた。不安げというのか、なんとも言えない表情だった。

ユージーンは少し間を置いて友人に答えた。

「まだ判らないさ、そのために診察するのだから……心配しすぎないでくれ」

グレートホール側の回廊の隅に一人のフットマンが立っていた。

「おや、君の使用人だね」

コーネリアスに言われ、ユージーンはただちに訂正した。
「『わたしの』ではなく『父の』だ」

そして、ユージーンは足をはやめてフットマンに近づきながら呼びかけた。

「ダニエル、お前が来たのか」

「ロード・ユージーン、お着替えを届けに参りました」

ダニエルの横には、小振りのトランクが二つ並んでいる。すると、コーネリアスも近づいてきた。

「ユージーン、一日その格好でいるつもりなのかと心配したが」と声をかけ、少しばかり皮肉っぽく微笑んで続けた。

「どうやら、今晚から君をダイニングルームにディナーに誘うことができそうだな」

ユージーンは苦笑するほかなかった。すると、コーネリアスはダニエルのわきのトランクに目をとめていった。

「おや、まさか荷物はたったこれじゃないんだろう？」

そこで、ダニエルがすかさず間をとらえて口を挟んだ。

「ユージーン様、これからお部屋にお運びして、荷ほどきをさせて頂きます」

ダニエルはトランクを抱え上げた。

「手伝いはいい、トランクだけ置いたら、すぐにロンドンに戻れ、ダニエル」

「しかし、ロード・ユージーン」

「昨日はケニーが家を空けて、今日はお前が一日家にいないんじゃない、戻った途端フットマン連中からいじめぬかれるぞ。いいから、一本でも早い列車でさっさと帰れ」

そばで黙ってやり取りを聞いていたユージーンがこらえきれずに、
忍び笑いをもらして言った。

「荷物の整理にはバーンズをよこすよ、ユージーン」
そして、ユージーンの返事も聞かず、

「いいね、ディナーは7時だ、着替えていてくれ」
と言い残し、立ち去った。

木々達の白昼夢(4) (後書き)

こんにちは。 お立ち寄りありがとうございます。

ところで、英国貴族物…… お詳しい方が多そうです。

なんとなく、

世の中毎日進化してる時代で、考証とかとりあえず、なんでもありの方向でいけそう？ 日本でも『暴れん坊將軍』とか許されてるし、などと安易に考え、エドワーディアンの(それも薄ぼんやりとエドワード7世が「即位して数年度の間」的な)設定にしたものの。わたしのエドワード時代への認識(というか知識)は、色んな意味で幻となってしまったあの名作『キャンディ・キャンディ』ぐらいしかなく……。

二点

貴族への呼びかけと、儀礼称号の事を。

日本語で手に入りやすい文献でみると、

(1) フルネーム公爵、侯爵、伯爵の次男以下までは呼びかけは「ロード・名_{もしくは}前」

と言う説と

(2) 伯爵以下の次男以下は(ないしは長男も)「ジ・オノラブル・名前」にすべしという説の2つがあるように読めました。

それぞれの典拠を当たれば正解はでるのですが、そこではまると話が進まない感じにもなり、現状(1)の説で進めています。

ユーージンもコーネリアスも一応親しい友人なので、互いに慇懃無礼に「ロード」と呼びかけてるといった感じですか（？）。

もし、正解をご存じの方、お教え頂く機会があればと勉強になります……。

ちなみに……

ハウスキーパーのミセス・オーソンが、カロリーノのことを気安く「カノ様」だとか「嬢様」とか呼ぶのはどうなのかというところ。

彼女は、ナニーではないのでちよつと不自然なのかも知れませんが、まあ物語の設定で、乳母的にも世話を焼いてきたということで「可？」と判断し、書いております。

コーネリアスを「坊ちゃん坊ちゃん」大安売りするのも、自分が乳母だったぽい子の兄ちゃんだからってことで、ちよつと気安い、という感じ……。

呼びかけにバリエーションがあった方が、会話で誰が誰を呼んでいるかをわかりやすいかなという理由が本当なんです。

かえって不自然だったかも知れませんが。難しいです……。

儀礼称号は、通常（もし持つてるなら）親の物の1段階したの物を名乗ることが通常で、自然なのかな？　と言う点。

コーネリアスは、ストラウド侯爵の息子ですが、「何とか伯爵」ではなく、ヴェルマス「子爵」という風に2こ下の物を使っております。

なんとなく、コーネリアスの「若輩者感」を出したかったからです。（あとユーージンの父ちゃんが伯爵なので同じ字面を避けたかったこともあります）

父ちゃんが伯爵も子爵も持っていればどっち使ってもokという認識でいきましたが、これも、やはり正解があるのでしょいか。

木々達の白昼夢（5）

10

シエスタベリ伯爵の使用人の中でも、ユージーンは、不思議なことにダニエルとはとりわけ馬があつた。

ユージーンはシエスタベリ伯爵の第二子だ。ヤンガー・サン

兄で嫡子のエイルズフォード子爵は、ロンドンのメイフェアにある父のやや小振りのタウンハウス、通称エイルズフォード・ハウスに住んでいたが、ユージーンの方はと言えばいまだ、父のケンジントンのタウンハウス、『ザ・プレイス』にとどまったままだった。

そのため、ザ・プレイスにおいては、決してユージーンのヴァレツ僕トというわけではないのだが、ダニエルがなんとはなしに、ユージーンの面倒を見る役回りになっていた。

部屋に向いながらユージーンは尋ねた。

「お前が詰めてくれたのか、ダニエル？ 用事をふやしたな」

だが、ユージーンの予想に反してダニエルはこう答えた。

「いいえ、ユージーン様。わたしでは」

「では誰だい？」

ユージーンの問いかけに、意味ありげに間をおき、ダニエルは言った。

「驚かれませんように」

「もつたいを付けるな、ダニエル」

「ミスタ・オーガスタが」

「……え！ オーガスタ？」

……想像もなかった。ユージーンは思わず立ち止まった。

「ほら、驚いた」

ダニエルはしてやったり、といった表情を隠そうとはしなかった。そして、

「時に……ユージーン様」と続け、右の頬にだけ片えくぼを作ってみせた。

「一体ここへは、何をしにいらしたんです？ さっきから消毒のよ
うな匂いがしますね」

ユージーンはダニエルを見下ろすように視線を投げた。

「純粹にストラウド侯爵の弔問だ。ただ……なりゆきで仕事ができ
ただけで……」

ダニエルはわざとらしく溜息をひとつついて言った。

「おやおや、本当に働くのが好きですね、ユージーン様は。そん
なに忙しくしていたいのなら、いかがでしょう、わたくしと仕事を
交換しませんか」

「フットマンとか？ いや、そればかりはごめんこうむる」

ダニエルの提案をユージーンは即座に却下した。

「……それでは、兄君のエイルズフォード卿はご健勝なんだね？

最近なかなかお目にかかる機会がなくて」

コーネリアスはスグリのソースを腿肉に絡めながら、テーブルの向こう側からユージーンに問いかけた。

ダイニングルームの寒々とすら感じられるほどの高い天井は、壮麗な装飾で埋め尽くされていた。

しかしその装飾も、このだっぴろい部屋にコーネリアスとユージーンたったふたりだけ、という状況で空白を埋めるには役不足だった。

「ああ、夫人も子供らも……。いや、もうハムは結構だバーンズ。付け合わせを少し」

予想通りバーンズの給仕ぶりはすばらしかった。

「甥っ子と姪っ子だったっけね、ユージーン？　もう大分大きいのかい？」

コーネリアスの問いかけにグラスを取ろうと伸ばした手をとめて、ユージーンは答えた。

「上の男の子の方は、パブリックスクールに入るにはもう少し間があるかな……。しかし、コーネリアス。我々は互いに何だってこんな遠くから話さなくっちゃならないんだろうか？」

コーネリアスは軽く笑い声を立ててから言った。

「……バーンズ、次はもう少し近くに席をつくってくれ」

コーネリアスのボタンホールは白いカーネーションだった。

なぜか白い花を見ると、ユージーンにはレディの、カロリーノ・ウオーレンのことが思い出された。

……あのとき。

舞っていた花は、あれは何だったか？

サンザシ
ホーソンだろうか……。

ユージーンは自分のジャケットに目をやった。襟には何もつけていなかった。

しゃれっ気がなさ過ぎるかも知れないが、ボタンホールはあまり好きではない。

だが、テールコートは完璧だった。

さっきまでトランクに詰め込まれていたのに、まるでいましがたアイロンをかけたようだった。

荷ほどきを手伝いにきたバーンズは、ユージーンの着替えをどつさりとパントリーに持ち帰り、アイロンをあてる心づもりのようだった。

しかし、それは見事に当てが外れた。

小振りのトランクから次々と出てくる服のどれもが皺一つない。

アイロンの余地などどこにもなかった。

あの無表情のバーンズが、心底驚嘆している様子が、ユージーンにすら手に取るように判ったほどだった。

結局、バーンズは手ぶらでユージーンの部屋から退出した。

……そりやそうだ。だって『あの』オーガスタが荷造りしたというのだから。

ユージーンは心の中でつぶやきながら、部屋を出て行くバーンズの背中を見送った。

オーガスタは、ユージーン之父シェスタベリ卿の従僕ヴァレットだ。

とりわけその衣装の取り扱い技術は、名のある家のアップーサーバント達の間で一種、贅美的ですらあった。

オーガスタは『シエスタベリ伯爵』のヴァレットであり、腹心であるから、兄のエイルズフォード卿の手伝いすらしようとはしなかった。

ましてや、居候の次男坊のユージーンのことならなおさらだ。

それが、わざわざ……？

家に戻ったら、父に事情を聞いてみなければなるまい。

「つねづね思うんだが、コーネリアス」

ユージーンは考え事から、友人との会話への意識を戻すため、一言発した。

「たったひとりかふたりの事に、日々これほど大げさなことをする必要はあるのだろうかと」

コーネリアスは、フットマンが皿を下げ終わるのを待つてユージーンに答えた。

「そうは言ったって、シエスタベリ伯だって、来客がなければおひとりだろう？」

いくつかの艶聞がなかったわけでもないが、たしかに、シエスタベリ伯爵は、ユージーン達の母を早くに亡くしてから一貫してやもめ暮らしで通っていた。

「……いや、ジェイン大叔母がいるからね」

ユージーンは答えた。

ジェイン大叔母は、シエスタベリ伯の叔母にあたる。

シエスタベリ伯爵夫人が亡くなった後、亡夫のデヴォンシャーの地所を引き払いシエスタベリ伯のところへやってきて、今もそこにいる。

彼女はザ・プレイスにおいて必要とされた範囲で女主人の役割を果たし、幼い頃のエイルズフォード卿ヘンリー・マクラクランとユージーンにとっては監督者のようなものだった。

「それでも……君と三人だけだろう？」

コーネリアスがなおも問いかけた。

「だけ、なものか。あの大叔母ひとりで、存在感は十分すぎる」

ザ・プレイスでは、ジェイン大叔母は『マアム』とだけ呼ばれていた。

その呼称は、実際の身分など関係なかった。

実際、彼女はシエスタベリの館の『マダム』以外の何者でもなかったからだ。

「そうそう、『ジェイン大叔母様』ね……。時に、順番が前後したがお父上は？ シエスタベリ伯は？」

コーネリアスは、さらにユージーンに尋ねた。

「ああ、相変わらず殺したって死にそうにないほど元気だ」

小憎たらしい父の顔が思い浮かんで、思わずこう漏らしたユージーンはすぐにそれを後悔した。

ストラウド侯爵だって、まだ五十代。そろそろ引退を考える歳とはいえ、そうそう年老いていたわけでもなかった。

しかし、ユージーンの心配をよそに、コーネリアスは軽い笑い声をたてた。

「まあ、僕もそんなことだろうと思っていたよ、儀礼的に聞いたま

でさ」

次の料理が運ばれてきた。

フルのディナーなのだろうか……。だとすれば、まだ品数は半分と言ったところだ。

ユージーンは食事することに少々飽きてきた。

もう十分満腹だし、後の皿を上手に残しながら続けていく事を考えると若干憂鬱にもなった。

「ユージーン、お父上は北の方の地所は結局どうなさったのだ？」
また唐突にコーネリアスが尋ねた。

「……北？ ああ『ポーデーズ・アビー』があつたあたりのことが処分したらしいな」

ユージーンの父シエスタベリ伯爵は、ストラウド侯爵のあまりにも由緒ある家柄と比べれば、新参と云つていい経歴の貴族ではあつたが、地方に持つていた地所は相当なものであつた。

特に、所有していた十八世紀に建てられたカントリーハウス『ポーデーズ・アビー』はかなり著名なものだつた。

しかし、シエスタベリ伯には、領地に関する思い入れは皆無であつた。

こここのところ、大貴族といえども暮らし向きの内実は厳しい家が多い。領地、特に農地からの収入が思わしくないのだ。

ロンドンに土地があつたり、地所がおそろしく広大であれば、その影響はまだ少なくてすんだ。

だが、元来が贅沢にできている貴族の暮らしを維持するとなると、

かなりの家柄といえども徐々に行き詰まりを感じていたようである。地所やカントリーハウスの売却、アメリカ人のブルジョワとの結婚は、一種昨今の貴族の流行であった。

ただ、シエスタベリ伯の場合は、それとはまったく事情を異にしていた。

彼の生活には何の問題はなかったのだ。

シエスタベリ伯爵は、実のところある種の『ダンディ』として社交界に知られていたが、服飾や社交に莫大な浪費をするというタイプでもなかった。つまり、特に金には困っていなかったのである。

単に、遠方の領地が面倒なだけだったのだろうか。

彼は先祖伝来の土地を次々処分し、ロンドン近郊の土地や銀行関係に、その財産を振り向けていた。

「あの『ポーデーズ・アビー』をアメリカの石炭成金が手に入れたという噂は本当だったんだな……」

こう言つて、コーネリアスは溜息をついた。

「良い値で売れたと言っていた。父はブルジョワ相手に、随分と上手く価格を引き上げたらしい」

コージーンは答えた。

「あんなすばらしいハウスを……。売る必要などないだろう？ お父上は。まったく」

コーネリアスは憤懣やるかたないといった感じだ。

まあ、それは社交界一般の意見だろうな、とコージーンも思っていた。

「『変人』と言われてもしかたないだろうな、あの父は。あのあたりに鉄道用地の買収がかかってね。まず農地をべらぼうな値段で鉄道会社に売りつけてね……。ああワインはもう一杯頂くよ、バーンズ」

注がれたワインに口をつけて、ユージーンは続けた。

「近くに鉄道が通れば、『アビー』の価値が上がるからという理屈らしい、いやはや。我が父ながら、あこぎと言おうか何と言おうか」といつて、ユージーンは苦笑した。

「まあ、その親にしてこの子あり、だと僕は思っけどね、ユージン？」

コーネリアスがつぶやくようにいったが、ユージーンはあえて聞かなかったことにした。

「エイルズフォード卿は……兄君は、反対しなかったのかい？」
コーネリアスはナプキンで軽く口の端を拭いながら、続けた尋ねてきた。

「……そんなことまで噂になっているのだな？　だったら訊くまでもないだろう」

ユージーンは旧友相手に少々皮肉めいた口調を使って続けた。

「エイルズフォード卿はもちろん大反対だったがね。他のところならともかく、『ポードーズ・アビー』での鱒釣りは兄のお気に入りだったから」

「そんなに金を集めてどうするのだろう？　シエスタベリ伯は……いや、ユージンひどく立ち入ったことだった、すまない」

「コーネリアス、謝る必要などないさ」

ユージーンは友を安心させようと、すぐさま答えた。

「詳しいことは知らないが、シティにつき込んでいるらしいな、株やなんかだ。他にはメイフェアで売りにだされているタウンハウスを手に入れるつもりらしい」

「……株、ねえ」

コーネリアスは独り言のようにつぶやいた。

ユージーンは半分程度まで口を付けた皿を下げさせて、コーネリアスに言った。

「株が良いのか、土地が良いのか。正直わたしにはあまり判断出来る問題じゃないのだが。いずれにせよ株は一種のギャンブルにすぎないからな」

「……そりゃそうかもしれないが、投資先を上手く選んで分ければいいのではないのかい？」

コーネリアスの言葉に、ユージーンは軽くクビを捻って見せた

「富が地球上から無限に生産されると言う考え方には、わたしは懐疑的なんだよ、コーネリアス。確かに、君の言う理屈でリスクは分散されるかもしれないが。どうだい？　すべての株の値段が突然下がってしまうば途端に資金繰りが間に合わなくなる連中が多いのではないのかい？」

コーネリアスは目をしばたかせた。

「おやおや、ユージーン。なんてカッサンドラ的な」

しかし、すぐにユーモアを取り戻したように明るく続けた。

「なるほど、だから君は医者をやって飛び回っているわけだ、眠っ

ている間にも生まれる株の利益を当てにせずね」

「コーネリアス、確かにわたしは生きるために働く立場だ。兄にはすでに嫡子がいるし。いつまでもシェスタベリの家にいるわけにもいけない」

「では、なぜ医者を。君なら研究でやっていけるはずだ」

コーネリアスはたたみかけるように言葉を継いだ。

「コーネリアス。すべてのことはそうであるとも言えるが、こと、医学の研究については、理論は決して臨床とは切り離せないんだよ。患者を診るのは研究のためでもある」

ユージーンはかなりきつぱりとした口調でコーネリアスに言葉を返した。

「またしても失言かな。ゆるしてくれ、父の死で気が動転しているかもしれない……君が来てくれていなかったら、今日のカロリーノのことはもっと大変だったろうに」

ユージーンは溜息混じりにコーネリアスに言った。

「失言でなどあるものか。コーネリアス……」

そして、一呼吸の後、言葉を続けた。

「レディの様子が気になるのだが、後で行ってもかまわないだろうか？」

「もちろんだよ、ユージーン……バーンズ！」

コーネリアスはバーンズを呼び寄せた。

「……はい、ミセス・オーソンがレディの様子を見ております、旦那様」

「では、ロード・ユージーンを後でお連れするように」とバーンズに命じ、コーネリアスはユージーンに向かって言った。

「ディナーの後に診てやってくれるだろうか？ わたしはスモーキングルームで待っていていよう。ああ、ところでユージーン、君？」とコーネリアスはもったいを付けてから続けた。

「まさかとは思うが。スモーキング・ジャケットは持ってきているんだろうね？」

白い花の願い（1）

11

つかの間のようなまどろみが途切れ、目を開くと、視線の先にはおそろしい物たちが見える。

……本当はどちらが夢なのだろう？

頭がひどく痛んだ。

天井に見えるのは黒い大きな野犬、光る目の木菟^{ミズク}……。

頻繁に熱を出すカロリーノにとっては、幻覚の中の彼らは、逆に慣れた存在であるとも言えた。

しかし、胸がちぎれてしまいそうな、たまらない恐怖感が発作のように襲ってくる。

……熱のせい、怖くなどない。

混乱する意識のなかで、カロリーノは祈るように、必死に自分に言いかけせる。

ミセス・オーソンの呼びかけに、カロリーノは幾度目かのまどろみから目覚めた。

「嬢様。先生が、マクラ克蘭様がいらっしやいましたよ」

……マクラ克蘭、先生……？

カロリーノは、うつすらと瞼を開けた。

ミセス・オーソンの後ろから、夜会服姿の大きな人影が近づいて来る。

……
先生
燕尾服
ドクターなんて、おかしいわ。

……
テールコートを着たドクターなんて……

カロリーノはぼんやりとそう思った。

「レディ。ご気分は？」

テールコートの男は、カロリーノの枕元に立って、ごく素っ気なく言った。

短い黒い髪を美しくなでつけて、身体に合ったすばらしい仕立ての服を着ていた。

「失礼……」

コーネリアスよりも、ストラウド候よりも低い低い声で、彼はこう言って、カロリーノの頬に手を滑らせた。

さっきまで、ミセス・オーソンの手を氷のように冷たく感じていたカロリーノは、思わず身構えた。

しかし、その手は温かく、そして、驚くほど大きかった。

「熱は大分下がっているな」

そういつて、ドクター・マクラクランと呼ばれた男は、聴診器を取り出した。

やっぱり、ドクターなのね……。

男の様子を見やりながらカロリーノが考えていると、ミセス・オーソンがカロリーノの胸元の上掛けを下へとずらした。
続けて、素早くナイトドレスの胸元も露わにされた。

カロリーノは熱のせいではなく羞恥のため、頬に熱を帯びるのを感じた。

そんなカロリーノの様子にかまうことなく、チェストピースが胸にあてられる。

ひんやりとした感触が胸の上を移動していく。カロリーノは思わず身を硬くし、息を詰めた。

「……レディ？ 呼吸をして」

カロリーノが目尻に涙を浮かべて恥じらっている様子に、そこで初めて気がついたユージーンは、手を止めて彼女に声をかけた。

「すぐに終わります……。ゆっくり、吸って、そして吐いて」

軽く目を伏せて、ユージーンは診察に集中していた。

彼の黒い瞳を縁取る長い睫毛が、頬に影をおとしている様子を、カロリーノはベッドから見上げた。

こんなに黒い瞳を見たのは初めてだった。

コーネリアスもストラウド候も、瞳は鮮やかなエメラルド色、髪は金色だった。

カロリーノはうつぶせにされた。

背中や首筋を、ユージーンの長い指先が触れていく。

お医者様の診察を受けたことなど、何度もあるのに……。

こんなに恥ずかしいと思ったことはなかった。

カロリーノは自分の耳の付け根がひどく熱くなっていることに戸惑った。

ユージーンは診察を終え、聴診器をはずして首にかけた。

「どこか痛むところや、つらいところは？ レディ」

尋ねられたカロリーノは、まだ上手く声が出せず、ただ数回頭を振った。

続けてユージーンは、カロリーノの胸元を直しているミセス・オーソンに、

「レディがなにか口にできるようだったら、なるべく食事を取らせるように」

と指示を出し、小瓶を取り出した。

「食事の後、胸がつかえるようであれば、これを」

そして、ユージーンは立ち去り際に、カロリーノに声をかけた。

「レディ、わたしはヴェルマス子爵の古い友人です。数日滞在する予定ですから、なにかあればすぐに」

……兄さまの？

そこで初めて、カロリーノは、朝、ミセス・オーソンが言っていたことを思い出して合点がいった。

朝早くにいらした兄さまのお客様……。

……あのとき、庭で見た。

「お父様には、ストラウド侯爵はお気の毒なことでした」

悔みを述べたユージーンの言葉は短かったが、思いやりに満ちた響きがあった。

バーンズとミセス・オーソン以外で、面と向ってカロリーノに慰めの言葉をかけてくれたのは、彼が初めてであった。

カロリーノの目から思わず涙があふれ出した。

……ストラウド侯爵の落馬は、侯の愛馬である青鹿毛のパーシバル号が、空鞍で自ら厩舎に戻ってくるまでは、誰にも気がつかれなかった。

乗馬を好み、その腕前にも自信のあったストラウド侯爵は、しばしばひとりで遠乗りに出かけたが、それが裏目にでてしまったのだ。急ぎ探しに出たフットマンや馬丁が侯爵を見つけ、館に連れ帰ったときには、彼はもう虫の息だった。

いつもならば、呼び寄せられなければ父の側に行くことも許されていなかったカロリーノだったが、事の深刻さを瞬時に判断した執事のバーンズが、彼女を侯の臨終の床に連れて行った。

ストラウド侯の意識は混濁しており、もはや周囲の状況がどれほど理解できているかも怪しい状態であった。

突然の事態にショックを受けながら、カロリーノは父の枕元に近づいた。

「……父さま」

そつと手を取って握ると、父ストラウド侯は、その死の床で初めてこれまでカロリーノに見せたことのない慈愛に満ちた微笑みを浮かべた。

それを見て、カロリーノの胸には驚きや喜び、様々な感情がわき上がった。しかし、やっと声にできたのは、ただ、呼びかけだけだった。

「父さま、父さま」

カロリーノは父の手を握る力をいっそう強くした。

すると、ストラウド侯はそれに答えて、切れ切れに言葉を発した。

「レティス……ああ、レディ・レティス！ どこに行っていた？

……お前」

そして、それがストラウド侯爵の、この世での最後の言葉となった。兄のコーネリアス、ヴェルマス子爵がロンドンから急ぎ駆けつけた時には、父はもうとっくに事切れていた。

ユージーンの慰め言葉で、カロリーノの脳裏に数日前の出来事がまざまざとよみがえった。

彼女は涙をを隠すように、枕に顔を埋めた。

一度あふれはじめた涙はとまらなかった。

なんとか声だけは押し殺してはいたものの、ベッドの中でカロリーノの細い肩は激しく震えた。

ユージーンは、その肩にそつと手をかけた。

「レディ……」

ゆつくりとカロリーノ身体を仰向けに戻し、ユージーンは続けた。

「悲しみを抑えるのはいいことではない、かならずどこからあふれ出してくるものだ。泣きたいのなら好きなだけ泣くべきだ」

そして、両手の甲を顔にあて、懸命に涙をこらえようとしているカロリーノの手首を掴んだ。

そのまま、カロリーノの顔から手をほどかせると、ユージーンは彼女の目からこぼれおちる大粒の涙を、長い親指の先で拭い続けた。

ともに部屋から出たユージーンに、ミセス・オーソンが声をかけた。「ディナーはいかがでしたか？ マクラ克蘭様」

ユージーンはすかさず答えた。

「すばらしかったよ、ミセス・オーソン」

「……ダイニングはバーンズさんが仕切ってますから問題などなかったでしょうが、お味の方は」

「よくできていた」

ユージーンはこう答えたが、あんなに品数がなくてもいいのだが、という言葉は、最後にのみこんだ。

「……そういえば、パイを」

ふと、ユージーンは思いついて口にした。

「今朝、パイを出してもらったが、あれはあなたが？ ミセス・オーソン？」

ミセス・オーソンはすべてを承知したといった表情で頷いて、ユージーンの問いに答えた。

「ええ、もちろんパイを焼くのは私の仕事ではありませんがね、でもどのコックも、ことパイに関しては私に及びませんから」

「……なるほど」

ユージーンが微笑んで納得すると、ミセス・オーソンの様子がまた一段と打ち解けたものになった。ユージーンは気に掛かっていたことを尋ねてみる気になった。

「レディの部屋は、以前からあそこに？」

ミセス・オーソンの表情が一瞬こわばった。

あまり上手い訊き方ではなかっただろうか？ ユージーンは早くも少々後悔し始めた。

しかし、ミセス・オーソンはすぐに表情を緩めると、むしろ微笑みに笑みさえ浮かべて答えた。

「レディ・レティスが……奥様がお亡くなりになるまでは、あそこはモーニングルームでした」

「……え？」

「今は、モーニングルームも応接室ドローイングルームも亡くなった旦那様が別のところにお移しですが……。地階の、嬢様の部屋の一角に誰も立ち入れないようにと」

「なんだってそんな……」

ユージーンは予想だになかったミセス・オーソンの答えに、思わず言葉を詰まらせた。

ミセス・オーソンは言葉を続けた。

「さて、私どもには旦那様の考えていらしたことは……。ただ、旦那様は嬢様を人前に出すことをお嫌いなすったので」

午後到庭でコーネリアスが言っていたことは、やはり本当だったらしい。

……生まれてから一度もこの家を出たことがないからね……と。

考え込んでいるユージーンに、ミセス・オーソンがおずおずと声をかけた。

「あの、マクラ克蘭様……カノ様のご様子を許して差し上げてくださいますし」

「……なにがだって？」

突然、話題が変わり、ユージーンは少々戸惑った。

「嬢様にお声をかけてくださったのは、マクラ克蘭様が初めてでございます……コーネリアス坊ちやまもこちらに戻られてからは、一度もカノ様とはお会いになってらっしゃらなくて」

「一度もつて……」

「……嬢様は、旦那様のお葬式にも、埋葬にもお立ち会いにならなかったのだ」

自分の父親の葬式に出ないって？ 一体……。
ユージーンは押し黙った。

しかし、その怪訝な表情から彼の心の中をうかがったかのように、ミセス・オーソンはこう言い継いだ。

「……カノ様はお出になりたくても、出られなかったんですよ」

と、廊下の向こうからリネンをもったフットマンが急ぎ足で向ってくるのを見て、ミセス・オーソンは急ぎ口をつぐんだ。

話はそこまでだった。

ミセス・オーソンはユージーンにお辞儀をすると、そこから左に、使用人達の区画へと足早に去っていった。

やれやれ。

小さな謎がひとつ解けても、またひとつ、謎が生まれたか。

ユージーンは知らず口の端を曲げて、溜息をついた。

回廊にさしかかったところで、ユージーンはバーンズと行きあつた。

「旦那様がスモーキングルームでお待ちです、マクラ克蘭様」

先刻コーネリアスにはからかわれたが、オーガスタの神がかり的な荷造りのなされたトランクの中には、もちろん、しっかりと喫煙室用のガウンも入れられていた……。

これから階上に上がり、着替えてまた下りて……。

そこまでコーネリアスを待たせるのも気が引けたし、実際自分も面倒だった。

「バーンズ、このままモーニングルームに案内してくれ」

ユージーン言葉に、バーンズは静かな礼のみで答えた。

白い花の願い（2）

12

「まだお休みにならないのですか？ 旦那様」

ジェントルマンズ・ルームにいるコーネリアスに、バーンズが声をかけた。

もう、夜半も過ぎたというのに灯っている明かりに気がつき、様子を見に来たのだった。

「父があれこれと手を付けたままにしていたことが、まるで判らなくてね、ランド・スチュワードもどこまで係わっていたのか……」
コーネリアスは深い溜息とともに、手にした書き付けの束を、目の前の古いマホガニーの机の上に置いた。

「書斎の方にも、出したままの書類がいくつもあるようだ」

バーンズはわずかに躊躇いながらも口を挟んだ。

「ミー・ロード。差しでがましいようですが、今晚はもうお休みになられた方が」

それは提案でも、懇願でもなかった。

もつとシンプルな……まさにバーンズ的な物言いである。

しかしユージーンは新たに、別の書類に気を取られていた。

「ああ。だが……もう少し、切りの良いところまで見てしまつよ」

バーンズはそれ以上は口を挟まなかった。そのかわりにこう続けた。

「なにか、飲み物でもお持ち致しましょうか」

「いや、バーンズ。僕のことは気にせず、先に休んでかまわない」

コーネリアスの言葉に、バーンズはきつぱりと言葉を返した。

「……屋敷の明かりがすべて消える前に部屋に引き取らせていただいたことは、これまでございませんので」

コーネリアスが休むまでは、下がるつもりはない。

バーンズの婉曲ではあるがおそろしく明確な返答に、コーネリアスも根負けせざるを得なかった。

「分かったよ、バーンズ。これで切り上げよう」

手にした書類を丁寧にそろえながら、コーネリアスはふと思い出したかのようにつぶやいた。

「今度こそはロード・ユージーンのスモーキング・ガウンを見られると思っていたのに……残念だった」

「……は？」

らしくないことであつたが、バーンズは主人の発言に対し、少々素つ頓狂な声を上げた。

コーネリアスは、バーンズに視線を向けて言った。

「一度も見たことがないんだ、バーンズ。お前、ユージーンの荷ほどきを手伝つたろう？」

「はい、お手伝いをさせて頂きましたが」

「ガウンは入っていたな？」

「さようにございます」

バーンズの答えに、ユージーンはさらに詰め寄った。

「どういったものだった？」

バーンズは一瞬目を見開いたが、すぐにいつもの無表情に戻った。

そして、いつもどおりの淡々とした、どちらかと言えば少々慇懃無礼な口調でコーネリアスに返事をした。

「さようでございますね……口では説明が難しゅうございます」

その答えに、ユージーンは少々不快な顔をしてみせたが、たちまち表情を戻していった。

「どうにかしてでも自分の目で見てみるということだな？ バーンズ」

バーンズはコーネリアスの恨み言には答えず、話を変えた。

「それにしてもシェスタベリ卿のヴァレット従僕の荷造りの腕前ときたら恐ろしゅうございます」

「なんの話だ？ バーンズ」

「マクラ克蘭様の荷造りをしたのは、シェスタベリ卿のヴァレットだと耳にしました」

「それで？」

「あんな小さなトランクによくもあれだけ詰めたものだ。まるでトランクの奥がクローゼットに繋がっているのかと思うほどで」

突然のバーンズの雄弁ぶりに、コーネリアスは面食らった。

「……バーンズ、それはお前にしては最上級の贅辞だと理解しているのかな？」

バーンズは静かな頷きで答えながらも、続けて言った。

「無駄と考えられる物は一切入っておりませんでした……あのたみ方といたら。旦那様のご友人のお父様のヴァレットでなければ、うちに『盗みたいくらい』でございます、ミー・ロード」

バーンズのこの言葉に、コーネリアスは思わず忍び笑いを漏らしたが、明かりのせいなのか、そのエメラルド色の瞳はひどく灰色がかって見え、それがコーネリアスの表情をひどく疲れたものにしていった。

「バーンズ、僕はうちの使用人の働きぶりにはとても満足している。みなにもそう伝えてほしい」

コーネリアスのこの言葉に、バーンズはしばし主の顔を見つめてから静かに答えた。

「……かしこまりました」

するとコーネリアスはまた話題を変えた。

「明日の夜もテールコートでディナーに呼びつけたら、ユージーンはどういう顔をするかな？」

とつさのことではあったが、バーンズはこれにはすぐに返答した。

「マクラクラン様におかれましては、タイの換えは十分にお持ちとお見受けいたしました」

「準備は万端ということだな」

コーネリアスは愉快きわまりないというように、片方の眉を上げて言った。

そんな主人に向かって、バーンズはこう切り出した。

「旦那様、マクラクラン様はどちらかと言えばすべての食事をモーニングルームで簡単にすませられることをお望みのご様子では」

コーネリアスは今度は、声を立てて笑った。

「だから、わざとダイニングルームに呼んだんじゃないか」

バーンズは軽く溜息をついた。

「……旦那様、からかいもたいがいになさらないと。マクラクラン様のご機嫌を損ねかねないかと」

しかし、さらに笑いながらコーネリアスは言った。

「バーンズ、僕の友人はなかなかの変わり者だと思わないかい？」

賢明にもバーンズは、その問いに対する答えを避けたが、代わりにこう続けた。

「……マクラクラン様がいらしてくださって、本当にようございました」

これを聞いて、ユージーンはふつと笑いを鎮めると、バーンズの言葉をかみしめるようにうなづいた。

「……ああ、そうだな」

そこでバーンズは、部屋からさがろうと静かに扉の方へ向った。すると、立ち去ろうとするその背中に向ってコーネリアスが付け足した。

「正式なことがあるまでは『旦那様』じゃなくて『コーネリアス様』のままがかまわない。バーンズ」

バーンズは振り返り、コーネリアスに礼をして、きつぱりと言った。

「……ストラウドの主は、すでにあなた様でございます。ミー・ロイド^{旦那様}」

ユージーンは、本を片手にベッドに横たわっていた。

しかし、ページをめくる手は止まったまま動かない。

文章を目で追っても、文字がすり抜けていくようだった。

最初にレディ・カロリーノを診察した、あの時……。

手に触れた彼女の頬とくちびるの感触が何度もよみがえった。

「……まいったな」

思わずつぶやきが漏れる。

……ユージーンには分っていた。

あの時の自分の状態が何だったのか。

あれは、男としての反応だった。

すぐに気を取り直して診察を続けたものの……。

医師としては適切ではない感情だった。

レディ達の診察など、何度もしている。

だが……。

ユージーンは女性に免疫のない人間だというわけではない。

さらに言えば、女性達からなんの相手にもされないような人間でも、決してなかった。

たしかに、娘を良い家に片付けたいと願う母親を持つ女性達のお相手としては、避けられがちなヤンガー・サンではあったが、ユージーンの人目をひく長身に端正な顔立ちは、むしろ女性達の関心をおった。

午後の訪問や馬車の中で、ご婦人達からあからさまな隙をみせられることも、しばしばであったと言っている。

もちろん、今、研究の傍ら、医師としての仕事に打ち込むようになってから、そういったお遊びからは手を引いてはいた。

だが、かつては火遊びの相手に事欠くことはなかったと言っている。

それでも……。

ユージーンは深い溜息をつくと、本を閉じた。

雪のように花が降り積もる……。

まるで花びらが、彼女にわずかでも触れたいとばかりに……じぞつて舞いおりていく。

けぶるように白い世界で、彼女の瞳だけが鮮やかな紫と緑。

掴んだ手首は、折れてしまつのではないかと思つほどの細さだった。
だが。

……歌声以外、彼女の声を、話すのを、聞いてもない。
さっきも、話しかけた途端に泣き出してしまった……。
そう言えば、自分は彼女の泣き顔しか見ていないのだ。

ユージーンはあれこれと考えを巡らせていたが、やがてもう一度溜息をつき、明かりを消した。

白い花の願い（3）

13

ユージーンがストラウドの屋敷に来て、数日が過ぎた。

突然にロンドンを飛び出すように出てきていたこともあり、ユージーンは、ダニエルに言付けて何人かの人間には、自身の居場所を報告するように頼んでいた。

だが、今のところ、この屋敷の電話にまで連絡を寄こしてきたのは、ひとりだけだった。

バーンズが慇懃に電話の取り次ぎに来たので、何事かと行ってみれば、患者のひとりのミス・マグダレンが、いつものことながら関節痛の悪化を訴える内容に過ぎなかった。

ユージーンは図らずも、田舎でのちよつと休息を取りに来たような具合であった。

ストラウド侯のカントリーハウスでユージーンが新たに得た患者の方はと言えば、こちらも容態をこじらせることなく回復に向っていた。

彼女は、レディ・カロリーノは線の細い、見るからに身体の丈夫そうではない少女で、高熱で大分体力を落としてはいたが、幸いにも肺炎などの重篤な症状となることは避けられていた。

ミセス・オーソンはユージーンが来訪してくれていた幸運を、何度感謝しても足りない様子だった。

主、コーネリアスの動静はというと、慌ただしかった。

ヴェルマス卿コーネリアス・ウォーレンは、父ストラウド侯爵の葬儀から一週間と経っていないというのに、家周りの雑事に追われて

いた。

ユージーンと朝食をともにできなかった日すらあったほどだった。そんなコーネリアスの様子は非常に心配でもあったが、逆に自身の滞在が負担になってはと、ユージーン・マクラクランは引き上げる潮時を探り始めていた。

レディ・カロリーノ・ウォーレンの容態次第だな……。

ユージーンはそう考えていた。

自分のかけた言葉にカロリーノが泣き出したときから、ユージーンは診察においては彼女に対し、努めて事務的な態度を取るようになっていた。

それがレディのせいというよりは、自分自身の問題に起因しているということとは、ユージーンも認めざるを得ないことだった。

彼女に対して、これ以上、患者に対するもの以外の感情がわき上がってこないように……そういう用心の気持ちからなのだから。

その朝も、コーネリアスは朝食時にモーニングルームでユージーンと少しの言葉を交わしたものの、それはごくわずかの時間に過ぎなかった。

彼は家令との打ち合わせを急ぐために、早々に席を立っていった。しかし、コーネリアスは、去り際にこう言い残した。

「君ともう少し話したいことがあるんだ、頼むからいきなり今日の午後に帰ったりしないでくれよ、ロード・ユージーン」

正直なところ、ユージーンは、その朝コーネリアスにいとまごいを切り出すつもりだったので、少々出鼻をくじかれてしまった。

こうまで念を押されては、出て行く訳にもいくまい。

ユージーンは屋敷の庭でも散策することにして、館を出た。

この数日の滞在中、朝食にもディナーにも、レディ・カロリーの姿はなかった。

今では、もう起き上がって来られないほど体調が悪いわけではないはずだった。

自分が診察しているのだ。ユージーンにはそれは確信できた。

コーネリアスが彼女を呼びよせないであろうか？

それ以上はユージーンも詮索ができないままだった。

ミセス・オーソンに対しても、これは同様であった。

なにとはなしに、ユージンは庭を外れて、木々生い茂る方へと足を進めた。

ストラウド候のカントリーハウスの庭はおおむね素晴らしく手入れがされていたが、ある一角だけは、まるで木々が茂るがままのような状態だった。

もちろん、そういった『自然な』様子に見せるよう、庭師たちがさまざまな技巧をこらし、手をかけているということもありえるのだろう。

庭についてはさほどの知識のないユージーンには、そのあたりのことは計り知れないのであるが……。

ふと気づくと、ユージーンはストラウド候の墓所のあるあたりに近付いていた。

そして、そのことに気がついた時、ユージーンは内心でなにかを期待していた。

その期待は報われた。

まぶしいばかりの午後の光の中、白い花の木の下に、レディ・カロリーが佇んでいた。

彼女は歩み寄ってくるユージーンの方に視線を向けていた。

ユージーンは不自然にならないようにと心の片隅で気にしながら、彼女の方に早過ぎもせず、ゆっくりすぎもしない速さで近づいて行った。

「ごきげんよう、ドクター」

ごく礼儀正しく、レディの方から挨拶があった。ユージーンもそれに対し敬意を込めて挨拶を返した。

「こんにちは、レディ。お加減の方は？」

「もう何ともありません、ありがとうございます」

紫とエメラルド色の瞳を輝かせ、カロリーノはユージーンに答えた。ユージーンにとっては初めて見る彼女の笑顔だった。

そして、それによって、これまではどこか神秘的な印象だった彼女の表情が、ずっと愛らしく、少女らしく変わったとユージーンは感じた。

挨拶の後、しばらくの間、ふたりの間には沈黙が流れた。

ユージーンはレディに対する礼を失してはと、なにか言葉が続けるべく口を開いた。

「……庭のこのあたりは、他とはだいぶ様子が違いますね、レディ」
カロリーノの表情がふと明るくなった。

「ここが好き？ マクラ克蘭さん……ドクター？ どうお呼びしたら……」

ユージーンもつられて表情を緩めた。

「どちらでも、レディ、好きな方で」

カロリーノは微笑んで頷いた。

「……ここには母も、レディ・ストラウドも眠っているんです……」
カロリーノの視線の先に、まるで木々と草々に溶け込むようにひっ

そりと、小さな墓碑があつた。

ユージーンの瞳を見上げながら、カロリーノはこう言いついだ。

「ずっと以前に、兄さまが教えてくれたの……母^{かあ}さまこは、ここがとてもお好きだったって。特に花盛りの頃が」

そして、カロリーノは目の前の枝の白い花に細い腕をさしのべた。

「きれいでしょう？ ……ここでずっと眠りたいって思った母さまのお気持ち、わかる気がするの」

花びらがこぼれおちた。いくつも、いくつも。

カロリーノの銀色に輝く長い長い髪の上に、ひとひら、またひとひらと降り積もっていく。

ユージーンは、彼女の髪の毛の上を滑り落ちていく一片の花びらに、思わずそつと指を伸ばした。

カロリーノはユージーンのその長い指先に視線を向けた。

ユージーンはつぶやくように口にした。

「……不思議だ、あなたにはかり花びらが降りかかるようで」

カロリーノはユージーン言葉に軽く首をかしげてみせたものの、すぐに言った。

「マクラランさんも、ホーソーンの花がお好き？」

ユージーンはその問いに、ふとはじかれたように指を戻した。

「ああ、これはやはりホーソーンか……ピラカンサスかなとも思ってたのだが、花の感じが」

この言葉にカロリーノは、いたずらを思いついた子供のような眼をして反応した。

そして、軽く笑い声を立てて、別の木の方へと歩いて行った。

それを見ながらユージーンは、自分でもまるで柄でもないなと思い

ながらも、フェアリーテールでお決まりの描写の『妖精のすべるような歩み』とは、おそらくこんな感じなのでは？ などと考えていた。

「マクラ克蘭さん、これがピラカンサスよ」

カロリーノはそう言くと、同じく五弁の白い花がこぼれるように咲いている木を指し示した。

「そして、こっちがホーソーン^{サンザシ}。花はそっくりだし、秋の実も色はよく似ているわ。でも……」

カロリーノはユージーンが近づいてくるのを待ってから続けた。

「ホーソーンの木は、冬に葉が落ちてしまうの。ピラカンサスは青いまま、ほら、葉の形がちがうでしょう？」

ユージーンは指し示す先をよく見ようと、カロリーノのそばに近づいた。

その時、風がわたり、薔薇に似たピラカンサスのむせかえるような香りがたちこめた。

「……レディ、お詳しいですね、ガバナス^{家庭教師}が、植物学に明るかったのかな」

ユージーンは間つなぎのように口にしたが、カロリーノはその言葉にふと目を伏せた。

「ガバナスがいたことはないの……」

しかし、すぐに顔をあげ、ユージーンの瞳を見つめて言った。

「でも、本で読みました。読書室には植物の分類の本がたくさんあるから」

ユージーンはその様子を見ながら、さつきから彼女の何が自分の心にかかっているのか、胸のざわつくような心持がするのか、ずっと思案していた。

だが、ほどなく気がついた。

それは、カロリーノが相手の目をまっすぐに見つめて話しているということだった。

ガバネスやシャペロンがいたならば、とりわけ名門の令嬢が、こんなに男性の顔を見つめて話しかける様子は、ずっと以前に注意されていたに違いなかった。

ユージーンも、年若いレディにこんな風にまっすぐに瞳を見詰められて話しかけられたことなど、あまり経験がなかったのだ。

「……ホーソンといえば、昔から知られる薬効がありますね」

ユージーンは話を植物それ自体に、再び引き戻した。

すると、この問いかけにカロリーノはまた微笑んでうなづいた。

「確か……心臓に良いのではなかったかしら？ マクラ克蘭さん」

「そう、実だけでなく葉をお茶にしたものも強心作用があります。

あとは健胃、つまり……消化です」

「そういえば、前にミセス・オーソンが言っていたわ……『女性はサンザシ茶を飲みすぎではいけない』って？」

ユージーンは、ああとつぶやくと軽くうなづいた。

「ホーソンには、その……失礼、子宮を収縮させる薬効もあるのです。特に身ごもっているご婦人には禁忌です」

カロリーノはユージーンのややぶしつけな表現については、まるで気にかけていないようだった。

それどころか、

「赤ちゃんが流れてしまうってことね？」

という、さらなるカロリーノの端的な問いかけには、ユージーンはただうなづくしかなかった。

ふと、彼女が手に持っているリボンにユージーンは気がついた。

「レディ？ 手に何を」

今度はカロリーノは恥ずかしそうに口ごもった。

「これで髪を束ねていたのだけれど……解けてしまったの。自分で結ぶのは得意じゃなくて」

ストラウドくらいの家の令嬢ならば、身支度のためのメイドくらいについているはずであろう。

ユージーンはまたもや、彼女の置かれている奇妙な状況に疑問を感じた。

ふと、カロリーノの手からリボンがすべり落ちた。

そして、それは風からめとられて飛ばされ、サンザシのこずえ高くに絡まった。

カロリーノは悲しげにそれを見上げて言った。

「ホーソーンもピラカンサスも、放っておくとどんどん茂ってしまう木だけれど、ここのはあんまりに高くなりすぎね……」

ユージーンは彼女の脇をすり抜け、そのサンザシのそばに歩みよった。

軽く背伸びをして手を伸ばすと、リボンの端に指が届いた。ユージーンはそのままりボンを引き抜いた。

「まあ……！ なんて……なんて背が高いんでしょう、マクラクランさん」

カロリーノのおかしくなるほど無邪気な感嘆に、ユージーンはこらえられずに噴き出した。

笑いこぼしているユージーンをさらに驚いて見つめているカロリーノに、ユージーンは言った。

「……まあ、ごくまれに、こういった風に役に立つこともあります

ね。背が高いと」

なんとか笑いをおさめたユージーンは、渡されたりボンを握りしめ自分を見つめているカロリーノに腕を差し出した。

「そろそろ、戻りましょうか？ レディ」

白い花の願い（4）

14

傾いていく陽差しの中、ユージーンはカロリーノを館へとエスコートした。

ユージーンにとって少々意外だったのは、ほとんど面識のなかったふたりの会話だというのに、途絶えるということがなかったことだった。

わずかな互いの共通項であるコーネリアスの話ですら、その他の話題につながる単なるきっかけに過ぎなかった。

レディ・カロリーノ・ウォーレンは博識な話し手で、良い聞き手でもあった。

とはいえ、時折の、いかにも他人との接触がなかったであろうと感じられる少々世の中とずれたような突拍子もない言葉は、ユージーンを心底、愉快がらせた。

「ええ、シェークスピアはどれも面白かったわ、マクラ克蘭さん」
ふたりの話題は物語から劇へと移っていった。

「ロンドンでは演劇をよくごらんになるの？」

カロリーノの好奇心溢れる問いかけに、ユージーンの答えにも自然、熱が入った。

「少し前までは、かなり頻繁に。最近は……そう言えばあまり、忙しくしていて」

「わたし、演劇を見てみたいわ。あとオペラも……」

ユージーンはふと初めて彼女と逢ったときのことを思い出した。

「そういえば、唄がお好きですか？ レディ。以前あなたが歌っているのを耳にしました」

カロリーノは目を伏せてうつむいたが、ふたたびユージーンの黒い瞳をのぞきこむように見上げると言った。

「……わたしのこと、泣いてばかりいる陰気な人間とお思いでしょう？ マクラ克蘭さん、お会いしたときが偶然そうただけなの」

ユージーンは話の先を促すために、彼女を励ますように答えた。

「とんでもない、今日のあなたをみて陰気だなんて思う人はいないでしょう、レディ」

カロリーノは安心したように、今日はもう何度目かの笑顔でユージーンに応じた。

「歌うのは好きよ、ねえマクラ克蘭さん、歌うのがきれいな方なんているのかしら？」

大まじめに尋ねられて、ユージーンは思わず苦笑しながら答えた。

「わたしは……きれいとは言いませんが、あまり得意ではなくて」

「得意かどうかと、好きかきれいかは関係あるの？」

カロリーノの問いは正鵠をいていた。

ユージーンは言葉につまりながらも、彼女の愛らしいような物言いに思わず微笑んだ。

「レディ、その……なんといえいいのか、あなたが歌っているのはとても不思議な光景でしたよ」

カロリーノは黙ったまま、ユージーンの瞳を覗き込んでいる。

「まるで……あなたの歌声に木々がこぞって耳をかたむけているように見えたというか。いずれにせよ、またあなたの唄を聴けたらと

思っています」

「まあ……マクラクランさん。では、きっとあなたは、笑わずに聞いて下さるわね」

カロリーノはぐつと真剣なまなざしになった。

「あのね、わたしには聞こえるような気がするの。特にあそこにいると……はつきりとした言葉じゃないけど『カロリーノ、歌って』って」

ユージーンはごく真面目に請け合った。

「ホーソーンの木々がそのように話しかけると？」

カロリーノは少しの間、言葉を探した。

「妖精や精霊がいるとか、そういうおとぎ話をしたいんじゃない、あ。あ。上手に伝えられないの」

ユージーンはカロリーノの瞳を見つめ返した。二つの色違いの瞳は何度見てもアンバランスで、あやうい魅力に富んでいた。

「ではレディ、今のところは、とりあえずあなたの伝えたいことが『わかった』と断言はしないことにしましょう。ただ、決して否定をするつもりはありません」

カロリーノはさらに言葉を重ねた。

「『呼びかけ』みたいなのは、はつきりとしたなにかじゃないわ、そうね……冬に、ふと日差しを浴びたときのような、そんなようなものかしら。歌うと木々や花は喜んでるように感じるの」

ユージーンは頷いた。

「事実、わたしにも喜んでるように見えましたが。それも理由があるかもしれない」

「理由？」

「たとえば、レディ、君の声だ。専門でないし詳しくはないのだが、歌唱法によっては、自分の声を体のさまざまな箇所に響かせて一人でハーモニーを作ることができるのか。君の歌声もそのようなものかな」

「……わからないわ、わたし。ただ、歌っているだけなの」
カロリーノは戸惑っていた。

「でも響き方にとっても特徴がある、そういった独特の音の周波数、響きが物や植物に物理的に影響をあたえていると言えないだろうか？」

「さあ、自分のことだけどよくわからないわ……そうなのかしら、不思議ね」

カロリーノは数回まばたきをしてみせた。

……そう、世界は謎に満ちているものだ。

ユージーンは心の中でつぶやいた。

だが、今、自分の心をひどくとらえ始めているのが、彼女という謎、カロリーノという存在であることにも、ユージーンは気が付いていた。

館のテラスに人影が見えた。

バーンズだった。

彼はユージーンとカロリーノの方に近づくと言った。

「旦那様が午後のお茶をおふたりと一緒にと。サンルームコンサバトリにご用意してございます」

ユージーンは思わずカロリーノに顔を向けた。

彼女もユージーンを見上げており、ふたりは顔を見合わせた。

バーンズに連れられてユージーンとカロリーノがコンサバトリに入

ると、コーネリアスは緑を背に、いつもながらの隙のない美しい姿勢で立っていた。

「やあ、なんだい……ふたり一緒かい？」

すると、紅茶の準備をしていたミセス・オーソンが、カロリーノに近づいて言った。

「嬢様……またお庭にいらしたんですね。まあまあ、こんなにサンザシの花をくつつけて」

ミセス・オーソンがカロリーノの髪や服から花びらを払った。

ユージーンも自分の上着にいくつか付いていた花をそっと払い落した。

しかし、その様子をコーネリアスに意味ありげな表情をして見詰められていることに気がつき、ユージーンは少し落ち着かない気分になった。

「さて、僭越ながら僕がお茶会のホステス女主人を勤めようかともおもったのだがね」

コーネリアスは、カロリーノとユージーンが席に着くのを待つてこう切り出した。

「さすがに荷が重そうなので、ミセス・オーソンに手伝いをお願いすることにしたら」

ミセス・オーソンはカップにお茶を注ぎながら、ユージーンに声をかけた。

「お砂糖はおいくつで？　ドクター、ああ、マクラクラン様……なんとお呼びしたら」

ユージーンはわずかに苦笑したが、すぐに答えた。

「どちらでも。お好きにどうぞ、ミセス・オーソン」

そこですかさずコーネリアスが口をはさんだ。

「君のように若くて魅力的な男性になら、ご婦人はむしろ、『ユージーン』と呼びかけたいのではないかな？」

ミセス・オーソンはポットを持った手を少し止めたが、コーネリアスのからかいなどには、ほとんど動じていなかった。

「そういう風にくだけるのがご婦人方に受けるコツかい？ さすが社交会の花形だな、コーネリアス。勉強になる」

ユージーンも皮肉たつぷりにやり返した。

「さあ、お茶を召し上げれ」

と一言発し、ミセス・オーソンがその場をひきとった。

この席においても、コーネリアスはいつもの調子で、肘でつつきあうようなひねた会話をユージーンに仕掛けてきた。

ユージーンはレディ・カロリーノが驚くのではと様子をうかがった。彼女はコーネリアスたちのやり取りを、ごく愉快そうに聞いているようだった。

さらに、レディ・カロリーノはお茶の席のレディにごくふさわしい礼儀以上の熱心さで、ミセス・オーソンに対し、出されているサンディッチやタルトの素晴らしさについて驚嘆の意を表明していた。その無邪気で心からの賞賛の言葉は、ミセス・オーソンの労に報いるとともに、彼女の自尊心に大いなる満足を与えていたようだった。

ふと、ユージーンはカロリーノの言葉に気を取られていて、コーネリアスからの問いかけを聞き逃してしまった。

ふたたび先ほどと同じ、意味ありげな視線をよこして、コーネリア

スは黙り込んだ。

コーネリアスがこの席で、自分の妹に全く話しかけていないことが、ユージーンにはずっと引つかかっていた。

「時にコーネリアス、わたしはそろそろここを立とうと思うんだ。レディもずいぶん回復しているし、そうだな、明日の朝にでも」

ユージーンがこう告げると、コーネリアスは眉をしかめてみせた。

「……まだ一週間と滞在していないじゃないか？ ロンドンの患者が死にそうなのかい」

ユージーンは苦笑いを浮かべたきり黙りこんだ。

ふとカロリーノが自分を見つめていることにユージーンは気がついた。

「帰ってしまわれるのね、マクラ克蘭さん。とても悲しいわ」

「レディ……」

「また、もっとお話をしたかったのに……」

すると、コーネリアスがつぶやくようにいった。

「……またもつと、ね」

その言葉に、微妙な棘のようなものが含まれていることは、コンサバトリに居合わせた皆が感じることができた。

ユージーンは気まずさを打ち消そうと口を開いた。

「レディ、わたしも名残り惜しい…… 今晚は夕食の席でお逢いできないのでしょうか」

その瞬間、ミセス・オーソンの手の中の茶器が音を立てた。

ベテランの女中頭としてはあり得ないほどのそんな不作法を引き起こした動揺ぶりに、ユージーンは驚きを禁じ得なかった。

コーネリアスもしばし、ミセス・オーソンの様子に注目していたが、

やがて気を取り直したように言った。

「君も忙しいなかを来てくれたんだ、ユージーン。あまりひきとめるのも気が引けるね……バーンズ！」

コンサバトリーの鉢植えに同化していたかのように存在を消して控えていた執事のバーンズが、素早く、主コーネリアスもとへと滑りよった。

「シェフに今晚は腕を振るうように伝えておいてくれ、ロード・ユージーンとの最後のディナーだ」

バーンズからの了解という目礼を受けて、コーネリアスはさらに言葉継いだ。

「……カノ、お前も同席するかい？　ロード・ユージーンと『もつと』話したいんだろ？」

コーネリアスの言葉に、カロリーノの耳元が見る見るうちに朱に染まった。

その大きな瞳に、みるみる涙があふれていく。

「……嬢様」

ミセス・オーソンがポットを置いて、うろたえ気味にカロリーノへと歩みよった。

こぼれおちた涙のつぶが、テーブルクロスにひとつ、ふたつと染みをつくった。

カロリーノは両手で顔を覆い、無言のままテラスから飛び出して行った。

ミセス・オーソンはどうしたらいいかと、その場に一瞬立ちすくんだが、すぐにコーネリアスを振り返ると、きつい口調で言った。

「コーネリアス坊ちやま、あんまりでございますよ……」

コーネリアスは露骨に不快さを表情に出しながら答えた。

「なにがだい？ ミセス・オーソン」

「あんな風に夕食へ来いなどとおっしゃるなんて……嬢様が、カトリノ様が行けるわけがないじゃないですか」

ユージーンはというと、ミセス・オーソンの言葉に困惑していた。

「ミセス・オーソン、ディナーに來れないって……なぜそんな」

ミセス・オーソンはユージーンにむかつては、表情を多少やわらげた。

「おお、ドクター……マクラ克蘭様、だって、嬢様は夜にお召しになるドレスなどお持ちではないですから、いいえ、昼間だってそうですよ」

ユージーンはミセス・オーソンの言っていることがほとんど理解できず、ただ彼女を見つめるだけだったが、ミセス・オーソンはさらに言いつのつた。

「亡くなった旦那様は、嬢様にドレスを仕立てることをお許しくださいませんでした、ひとつもです。なんどもお願いしたのですけれどね」

今度はコーネリアスが呆れ気味につぶやいた。

「父のつむじまがりも、まさか……そこまでとはね」

「ですから、カノ様はお客様の前にはお出になれなかったのですよ……お葬式にだって」

ミセス・オーソンの口調が恨みがましさを増した。いつの間にかバーンズが彼女のそばによっていて、そっといさめる

ように肩に手をおいた。

「ああ、すまない、知らなかったんだ……ミセス・オーソン」

コーネリアスはこう言い、ミセス・オーソンがふたたび口を開こうとする前に、すぐさま言い継いだ。

「そうさ、ミセス・オーソン。僕はこここのところこの屋敷にまったく寄り付かなかったし、妹をほったらかしにしていたよ」

コーネリアスは早口で言い終わると、紅茶のカップに口をつけた。席を立てて妹を追いかけるつもりはなさそうだった。

ユージーンはそんなコーネリアスの様子にしびれをきらして、立ち上がった。

「君がレディを追う気がないのなら、わたしがそうしよう、コーネリアス。知らなかったこととはいえ、彼女にひどい思いをさせてしまった」

そして、コーネリアスの返事も聞かず、コンサバトリを突っ切って、テラスから庭へと出て行った。

白い花の願い（5）

15

ひとり、コンサバトリーに取り残されたコーネリアスはしばらくの間、身じろぎもせず、席に座っていた。

ミセス・オーソンとバーンズは、そんな主のようすをどうしたものかと伺っていた。

ふと、コーネリアスが思いついたように口を開いた。

「今、カノが今着ている服はいつたいなんなの？　僕はあれを知っている……」

その問いに答えたのは、バーンズだった。

「奥様のティーガウンでございます。亡くなったレディ・ストラウドのご遺品ですので、旦那様にも見覚えがあるのかと」

コーネリアスは思わずバーンズを見上げた。

「母様の……？　『レディ・レティス』のか」

「……ティーガウンでしたら、多少寸法が合わなくても着ることができますから」

ミセス・オーソンがこう付け足した。

コーネリアスはただ一息、溜息でそれに答えた。

―緑の中、遠く灰青色のドレスが揺らめいている。

ユージーンは足を速めた。

ドレスには、大きく白いマグノリアの枝と花が彩られている。
ウェストをきつく絞ったピンク色のサッシュが揺れていた。

駆け出すまでもなかった。

ユージーンはレディ・カロリーノとの間隔をみるみるうちに詰めていった。

手を伸ばせばもうカロリーノの細い肩に手が届くところまで、ユージーンは追いついた。

「レディ……！」

ユージーンは背後から声をかけた。

カロリーノは呼びかけに振りかえりもせず、前に前にと進んでいった。

「……レディ・カロリーノ」

ユージーンはもう一度呼びかけてから、手を伸ばし、後ろからカロリーノの手首を掴んで引きとめた。

カロリーノはやっと立ち止まり、ユージーンを振り返った。
彼女は瞳にいつぱいに涙をため、息を切らしていた。

カロリーノの手首をつかんだまま、ユージーンはしばらくの間、彼女の顔を黙って見下ろした。

「……手を……離してください、マクラ克蘭さん」
カロリーノはやっとこれだけを口にした。

ユージーンは力をわずかに緩めはしたが、その手を放さなかった。
そして、跪いてカロリーノの手の甲に自分のくちびるを近づけた。

「先ほどの非礼をお詫びします、レディ・カロリーノ」

予想だになかったユージーンのふるまいに、カロリーノは目を大きく見開いて絶句した。

「……許すと、言ってくださいませんか？ レディ」
ユージーンの黒い瞳が、カロリーノを見つめている。

「非礼だなんてそんな、マクラ克蘭さん。だって……席を立った
のわたしの方だもの」

だが、ユージーンはまだ跪いていた。

「あの、マクラ克蘭さん。お願いします、お立ちになって」
カロリーノは困惑の声をあげた。

ユージーンは立ち上がるうとはしなかった。

「許すと、ひとこと言っていただければ」

カロリーノは途方にくれていたが、結局こう言わざるをえなくなっ
た。

「許しますから、マクラ克蘭さん。だからお願い……もう」

それを聞いてユージーンは、ゆっくりとカロリーノの手からくちびるを離し立ち上がった。

午後の陽はもう随分と傾いており、庭には宵の空気が漂い始めていた。

空の色が青から紫へと変わりつつあった。

ふたりが立っている庭のその場所には、大きな花壇がしつらえてあった。

そこには八重咲きの芍薬が、今が盛りと花開いている。

「ああ、これはもしかして……」

ユージーンはその白い芍薬を見てつぶやいた。

「あなたが、父君の墓前に供えられていたものですか？」

「……ええ、よく咲いているでしょう？ 庭師のご自慢なの」

ふと風が芍薬を揺らした。

五月の夕暮れとはいえ、風は日中に比べて、随分と冷たさを増していた。

薄手のティーガウン一枚のカロリーノを見て、ユージーンのなかで医師としての配慮の気持がわき起こった。

自分の上着を脱ぐと、ユージーンはカロリーノの肩に静かに掛けた。

彼女の頬には、まだ涙のあとがいく筋も残っていた。

思わず、ユージーンはカロリーノの頬に指を伸ばした。

すると彼女の目からはふたたび大粒の涙がこぼれだした。

ユージーンはカロリーノの耳元に自身の両の手のひらをすべりこませた。

そして彼女をひきよせると、そのくちびるに口づけをした。

カロリーノは、はつきりとはユージーンを拒まなかった。

彼女の手が戸惑いながら、ユージーンの手の上に重ねられる。

……やめなければ。

ユージーンは頭の片隅に響く声を聞きながらも、さらに彼女を引きよせ、もう一度、また一度とキスを重ねた。

何度目かのキスがあまりにも激しさを増し、カロリーノの口から、思わずかすかなうめき声が漏れた。

ユージーンはその声で我に返ると、やっと彼女から顔を離れた。それでもユージーンは、放心したように自分を見上げているカロリーノの美しい色石のような瞳からはしばらくの間、目をそらすことができないでいた。

「わたしはまた、あなたに逢いたい、あなたは？ レディ・カロリーノ」

「マクラランさん……」

カロリーノは一瞬言いよどんだが、心を決めたように言い継いだ。

「わたしもお逢いしたいわ……あなたの話を聞くのは楽しいもの、でも……あなたはなぜわたしに会いたいの？」

そう尋ねられて、ユージーンの心にえもいわれぬおかしさが込み上げてきた。

……なぜ？　だなんて。

そんなこと、決まってるじゃないか？

しかし、ユージーンはこう口にした。

「さて、どうしてでしょうね」

そして、かすかに笑みを浮かべた。

「そうだな……自分でもそれが何だか判らない。だからそれが楽しいのかな」

「じゃあ、判ったら？　そしたらもう逢ってくださいさらない？」

カロリーノが詰め寄るように問いかけた。

ユージーンはまた微笑むと答えた。

「どうだろう。それにね、レディ。それはそんなに簡単に判りそうなことだとも思えないのだが」

カロリーノは黙ったまま、ユージーンを見つめ続けていた。

やがて、ユージーンは彼女の肩にかけた上着で、彼女をさらに深く包み込むように言った。

「もちろん、ここを訪ねるのも素敵ですが。レディ、ロンドンに来

てみませんか？　コヴェント・ガーデンに一緒にしましょう」

カロリーノは色違いの両の目を星のようにきらめかせた。

「博物館にも、キュー植物園にも行ってみたいわ……！」

しまいには笑い出しながらも、ユージーンはこう力強く請け合った。

「いずこへでも、お供しましょう、レディ・カロリーノ。喜んで」

六月の夜（１）

16

「朝食をお持ちしました、マクラ克蘭様」

バーンズが滑るように部屋に入ってきた。

出発の朝。

食事はをどうするかと尋ねられ、ユージーンが「軽い物を部屋へ」と頼んだからであった。

トレイには、香りの良いコーヒーの入ったポット、卵とニシン、それにパイが載っていた。

ユージーンが口を開く前に、バーンズはひとこと言った。

「……ミセス・オーソンからでございます」

ユージーンが頷いて礼を言っても、バーンズはすぐに下がるうとしなかった。

「バーンズ？」

バーンズはユージーンの問いかけに、姿勢を正すと、すこし躊躇いながらも決然と口を開いた。

「マクラ克蘭様、お詫びしなければならณことがあります」

「なんだい、やぶからぼうに」

「お荷物のごとでございます……どうしてもお持ちになったトラックに、すべてを詰めることができませんで」

バーンズの視線の先には、いく日か前にシェスタベリ伯の屋敷のダニエルが持ってきたふたつのトランクの他に、もうひとつ小振りの

トランクが並べてあった。

「謝るほどのことではない、バーンズ。まあ、もちろんひとりで帰るにはトランクの数が少ないにこしたことはないのだが」

あの量をあれっぽつちのトランクに詰める。シエスタベリ伯の従僕、オーガスタの技だからこそできたことだ、ユーージンには十分わかっていた。

さすがの名執事バーンズといえども不可能はあろう。

「駅までお使いいただく馬車を準備して参ります」
そう言つてバーンズは退出した。

部屋で食事をすませたユーージンは、階下へと降りていった。馬車を待つ間、途中のホールに所狭しとかけられた肖像画を順に眺めていった。

見ても見ても、つきない。

さすがに歴史の古いストラウド侯の屋敷だけのことはあった。ふと、ユーージンはひとりの女性の肖像の前で立ち止まった。

後ろを振り返るようなポーズを取った、豊かな金色の髪を結い上げた若い女性だった。

深いスミレ色の瞳が、こちらを見つめている。

「ストラウド侯爵夫人、レティシア・ウォーレン様でございます」
ユーージンの背後から声をかけたのは、バーンズだった。

「コーネリアスの……」

「はい、母君であらせられます」
バーンズはごく短く返答をした。

「……美しい瞳だ」

ユージーンは誰にいうでもなく、思わず口にした。

「大変、お美しい方であらせられました……」

バーンズはそう言いつと、用件を切り出した。

「マクラクラン様、馬車の支度が調いました。お荷物も積み終わりました。どうぞこちらへ」

ユージーンが玄関につけられた馬車に乗り込もうとした瞬間、コーネリアスの声がした。

「ユージーン、もう行くのか？」

ユージーンはタラップにかけた足を止めて、口の端に皮肉めいた笑みを浮かべながら振り返った。

「やあ、コーネリアス。見送りに来こないと思ってたよ」

コーネリアスは腕を差し出しながら、ユージーンに近づいた。

「そんなわけないだろう？　ありがとう、ユージーン。訪ねてくれて」

ふたりはかたく握手を交わした。

「コーネリアス……君がお父上の逝去から、なにやらひどく取り込んでることくらいは、わたしにもわかる」

ユージーンはコーネリアスのエメラルド色の瞳を見据えながら言った。

「わたしは所詮、伯爵家の次男坊だ。^{スベア}無爵位だし、金銭的な頼りにも何もならない。だが体だけは空いている、自由だ」

コーネリアスは陽差しのまぶしさに目を細めるような表情を見せた。

ユージーンは友人に向って言葉を続けた。

「なにかできることがあれば、いつでも言ってくれ」

コーネリアスはユージーンの言葉をただ黙って聞いていた。

そして、そう滅多にはないことだが、ひとたび微笑めば、どんなに婦人方の心をも一度で溶かしてしまう、くだんのとびきりの笑顔を見せると、ユージーンに言った。

「ありがとう、ユージーン。大丈夫だ、すぐに片付いて落ち着くさ。遅くとも狩りのシーズンにはまた是非来たまえ。今度は退屈させない」

ほどなく、馬車は駅に向い出発した。

数日前には歩いて来た庭だ。

小径にそって、ユージーンを乗せた馬車が駆けていく。

窓の外を見るともなしに見ていたユージーンは、突然御者に向って大声を上げた。

「停めろ……！ 停めてくれ」

うねった径の途中で、馬車はひどく急に停まった。

ユージーンは御者がドアを開けるのも待たず、馬車を飛び降りた。

木々の間から、カロリーノが走り寄ってきた。

「……マクラランさん」

切れ切れの息の合間にカロリーノは、やっとのことで、そう呼びかけた。

ユージーンはふらつくレディ・カロリーノの肘を両手で掴むように

支えた。

「レディ……！ 一体、どうしたんです？」

かがみ込むようにカロリーノの顔を覗き込みながら、ユージーンは彼女に声をかけた。

カロリーノは無言でユージーンを見あげた。

そして、手にしていた芍薬のつぼみに、「ごめんね……」と声をかけると、花びらをむしり始めた。

あっけにとられて見つめているユージーンの上着に手をやり、カロリーノは花びらを何枚か取り去って小さくした花のつぼみを、そつとボタンホールに刺した。

少しの間、ふたりは無言で襟の芍薬を見つめていた。

しかし、じきに、カロリーノは片足を引き、ユージーンに向って優雅に挨拶をした。

「……ごきげんよう、マクラ克蘭さん」

ユージーンは静かに彼女の手を取り引き寄せ、その手にキスをした。
「ごきげんよう、レディ」

そして、ユージーンは御者が扉を開いて待っている馬車へと、ふたたび乗り込んだ。

六月の夜（1）（後書き）

こんにちは。

お読みいただきありがとうございます。

ハーレクインうにゆうにゅ、と言いつつも、やたら女子視点が少ないわ、脇キャラは男ばっかだわで、ロマンス小説と言うよりも「エドワーディアン調 男達の挽歌」のような様相であります。

それもこれも、ムーンライト（なろう別サイト <http://xmpage.syosetu.com/x3678b/>）のほうで特殊仕様物ばかり書いているからかも知れない……。

「ホーソーンの庭で」はあと大きく4部があって終わる予定です。どうぞもう暫くおつきあい下さいませ。

（やまもと）

六月の夜（2）

17

チャリング・クロス駅から馬車をつかまえるのに、ユージーンは、ほとほと苦勞させられた。とにかく時間が悪かった。夕方。一番間の悪い頃だ……。

ケンジントンにある父のタウンハウス『ザ・プレイス』についたのは、夜も大分遅くなってからだった。ユージーンは随分と消耗していた。

「おかえりなさいませ、ユージーン様」

ザ・プレイスで、まさきにユージーンを出迎えたのは、ホールボーリーのケニーだった。

ケニーに荷物を任せ、ユージーンは帽子を取り上着を脱ぎながら、エントランスホールを歩いて行った。

すると、ホールの奥からユージーンを呼ぶ声があった。

「帰ったのか？ ヤンガー」

夜会の予定でもあるのか、ブルーホワイトのウェストコートを洒落て着こなしているシエスタベリ伯爵だった。

「……やあ、父さん、久しぶり」

ユージーンはごく素っ気なく返事をした。

「確かに、久しく顔をみてなかったな。時にヤンガー、食事はすま

せたのか？」

シエスタベリ伯爵はポケットから時計を取り出すと、ユージーンの返事などかまうことなくこう続けた。

「ジェイン叔母と二十分後に夕食だ、遅れるな」

「悪いけど、今日はご勘弁願えますか？ 父さん」

ユージーンは足を止めず、階段に向って歩きながら答えた。

「ヤンガー、ジェイン叔母がお前が帰ってきたことを聞き逃すとも思ってるのか？ 無駄な抵抗はやめて、さっさと着替えてくるんだ」

シエスタベリ伯爵は階段を上っていくユージーンの背中向い、投げつけるように言い放った。

「遅れるなと言っただろう？ ヤンガー」

ウエストコートのボタンを外し、上着もタイも着けていないユージーンが、ザ・プレイスのダイニングに入った途端、シエスタベリ伯の声が響いた。

返事もせず、ユージーンは空いている席へと大股で歩いて行く。

「なんて格好です！ ユージーン」

今度はジェイン大叔母だった。

席に座ったユージーンは少々乱暴にナプキンを取って広げながら、つぶやいた。

「……ホワイト・タイにはもう、当分うんざりです」

「アレックス！ お前、ユージーンに甘すぎますよ」

ジェイン大叔母の怒りの矛先はシェスタベリ伯爵にも向った。折良くそこでスープが運ばれ、ジェイン大叔母の小言が中断された。ほっとしたのは、もちろんユージーンだけではなかった。

「ストラウド候は馬から落ちて野ざらしだったらしいな？」

シェスタベリ伯爵は好物の玉ネギのスープを口に運ぶ合間に、ずけずけとユージーンに尋ねた。

「……野ざらしだなんて。どこが出所の噂なんですか？ 家に運ばれたときにはまだ存命だったと聞きました」

「だが、お前がロード・ストラウドの息子と懇意だったとは、知らなかったな」

「そもそも。父さんがわたしについてなにかご存じのことがありましたか？」

その瞬間、まだたつぷりとスープの残った皿にスプーンを戻し、ジェイン大叔母はピリピリと声を上げた。

「お前達は。食事にふさわしい話題というものを選べないの？！」

そして、大げさな身振りで皿の上で手を振った。

慌てて飛ぶようにやってきた執事に「塩辛すぎます。それに玉ネギなんて！」と文句を付けるのも、ジェイン大叔母は忘れていなかった。

ジェイン大叔母のヒステリーなど、いまさらハエの羽音ほどにも感じていないシェスタベリ伯、アレックス・マクララン卿は、さかさず会話を続けた。

「ではあそこを継ぐのは、ヤンガー、お前とさほど年の変わらない

のになるわけだな」

「……それがなにか？」

ユージーンはスープの最後のひとさじを飲みこんだ。オニオン・スープはいつもどおり良いでえだった。

「ストラウドも、ここところはなにかと大変だとかいうようなことを耳にしたが」

父は何気なくそう口にしたが、ユージーンはストラウド滞在中のコーネリアスの落ち着かない様子を思い出した。

シエスタベリ伯は、ユージーンの沈黙を話題への興味の証と受け取った。

「亡くなったストラウド候は、地所の管理にかなり手こずっていたらしいからな……まあ、もともと一族は侯爵には協力的じゃなかったようだし」

「どういう意味です？ それは」

運ばれてきた白いソースのかかった鶏の胸肉はユージーンの好みの料理だった。

……バトラーはともかく、コックはストラウドのカントリーハウスよりも、『ザ・プレイス』の方が上だ。

「なんだ、知らんのか？ 友達なんだろう？ せがれの、ええっと、ヴェルマス子爵とは」

シエスタベリ伯はやや乱暴にナイフを使い胸肉を切り分けた。それは不作法とほぼ紙一重のところでありながら、優雅さを保ったものだった。

ユージーンはしばし父の食べる様子に目を奪われていた。

幾つになっても、こういったやんちゃぶりがシエスタベリ伯の『チャーム』となつていると言うことは、少々口惜しくもあるがユーージンも認めざるを得なかった。

「その件に興味があるなら、これから夜会について来い。チエイニー夫妻のこのだ。表向きは品がいいパーティーだが、あることないこと、えげつなく何でも聞ける」

「……せつかくですが、それは遠慮しますよ、ロード・シエスタベリ」

ユーージンははなはだ慇懃無礼に返答した。もちろん、父はユーージンの厭味など鼻にもかけていない。

ふと、ユーージンはさらに父に噛みついてみる気になった。

「そういえば、ストラウドで聞かれましたよ」

鶏の皿を下げさせ、ナプキンで口を拭ってから、シエスタベリ伯爵アレックス・マクラ克蘭はゆっくりと答えた。

「なにをだ？ ヤンガー」

「『ポーデーズ・アビー』の件です、ヘンリー兄さんが反対したことでやら、アメリカの成金に売りつけたことやら、さんざ噂になっているようですね」

ユーージンの皮肉などまったく意に介すことなく、シエスタベリ伯は明るい笑い声をたてながら言った。

「ああ、あれは良い売り時だった」

「別に売る必要などなかっただろうと、コーネリアス……ヴェルマス卿からも言われましたがね」

バトラーがブルー・チェシャーを持ってきた。ユージーンはやや大きめにカットさせた。

「だが、持っておく必要だつてなからう？」

そう言つて、グラスを置くとシエスタベリ伯はユージーンを見た。

「おや、お前もあのカントリーハウスに未練があつたのか、ヤンガー？」

そして、ロード・シエスタベリは席を立ちながら続けた。

「で？ お前は夜会には来んで、ここでチェシャーチーズを食い続けるつもりなんだな？ じゃあ、わしはこれで失礼する」
おざなりにジェイン大叔母の手の甲にキスをして、シエスタベリ伯はダイニングルームを出て行った。

ブルー・チェシャーの匂いをお気に召さないジェイン大叔母が、さつさとドロ잉グルームに退散してくれないかと期待していたユージーンだったが、大叔母に席を立つ気配はなかった。

「ユージーン」

ジェイン大叔母のぞつとするような呼びかけに、ユージーンは思わずチーズの塊を飲み込んだ。もう続きを口にしたいという食欲は失せていた。

「お前、今年いくつになるんだつたかね？」

「……二十七です」

ジェイン大叔母は、これみよがしに溜息をついて見せた。

ユージーンでなくとも、ダイニングに出入りしている使用人全員が、彼女が次に何を言い出すか完璧に想像がついていた。

「いくらお前がスぺアだからと言っても……そろそろ、結婚くらいはして良いと思うんだがね、私は」

ユージーンはジェイン大叔母の言葉が終わるか終わらないかのところで、いきなり立ち上がった。

「……ああ、そういえば父さんはチエイニー夫妻の夜会に行くんですね。わたしも顔を出す用事がありましたよ」

席に着いたときよりも、さらに早足でテーブルを回ると、ユージーンはジェイン大叔母の横にひざまずき、彼女の手を取った。

「お先に失礼します、大叔母さま」

「なんだ。結局来るのか、ヤンガー」

今にも屋敷から出発しようとするシエスタベリ伯の馬車に飛びつくように、ユージーンは乗り込んだ。

ユージーン同様、シエスタベリ伯も大柄だった。

馬車の中で二人は膝と膝がぶつからないように、足を奇妙に折り曲げている。

「ジェイン叔母の小言を見越して、せっかく助け船をだしてやったのを断るんだからな、お前は」

シエスタベリ伯はそれみたことかと言わんばかりに、ユージーンに当てこすった。

「いったい、今度はなにを思いついたんです、彼女は」

ユージーンはといえば致し方なく、厭味を甘受せざるを得なかった。

「『自分が生きていうちにユージーンの結婚式を見たいものだ』というのが、ジェイン叔母の最近お気に入りのお癖だな」

シエスタベリ伯は、口の端を思いつきり引き上げて見せた。

ユージーンは思わず深い溜息をついた。

「医者として言わせて頂けるなら、ジェイン大叔母はわたしより長生きしかねませんかね」

これにはシエスタベリ伯も大声を出して笑った。

「さてヤンガー、ついたようだぞ」

シエスタベリ卿の声とともに、馬車が止まった。

―夜会なんてどれくらいぶりだろう。

急いでいたせいで、少々きつく閉めすぎたタイの間に軽く指を入れながら、ユージーンはチェイニー卿の館のホールに足を踏み入れた。

彼の二歩ほど前を歩くシエスタベリ伯爵は、入った瞬間から座の注目を一身に集めていた。

夜会という夜会において、それはこの何十年と変ることのない風景だった。

ひっきりなしに父に挨拶に来る出席者をユージーンは見るともなしに見ていた。知った顔も、知らない顔もあった。

ふと気がつくと、父にはなくユージーンに意味ありげな笑みをよこす婦人の姿もいく人があった。かつて何らかの交際があった婦人もいたし、そうでないレディもいた。

シエスタベリ伯が何人かの出席者に請われてユージーンを紹介していると、ある婦人がユージーンの横に滑り込むようにしてあらわれた。

「おひさしぶりね、ロード・ユージン。夜会ではとお見かけしなくなっていたわ」

象牙と象眼の細工がすばらしい東洋風の扇をもった、風貌もどこかしらエキゾチックな婦人だ。

「……エミリア、レディ・エミリア・ウォシヨースク」
ユージンはそれきり言葉が継げなかった。

エミリアはシルクのオペラグローブを着けたほっそりとした手をユージンの腕に滑り込ませた。

「今夜は風が心地よくてよ。テラスでお話しませんか？」

「……よろしければ、ここで話しましょうレディ……ああ、君飲み物をこちらに」

ユージンはシャンパングラスを二つ手にした。

レディ・エミリアと連れだってテラスへ向うなどという、悪目立ちをやらかすほど、ユージンも世事に疎くなったわけではない。

エミリア・ウォシヨースクの一挙手一投足は、いつだって場の関心の的だ。

もちろんそれは、エミリアが尊敬されているからというわけではない。彼女はスキャンダルの権化だった。

「どうぞ……」

ユージンはグラスをエミリアに手渡した。「で、ご用件は？」

エミリアは上目遣いにユージンを見ながら、フルートグラスに口をつけた。

「ずいぶんなご挨拶なこと、ユージン、久しぶりにお会いできたのに。ちよっと見ないうちに随分男らしくなったのね」

彼女は一体何歳だろう？ 初めて彼女に会ったとき、もう十年は前に違いない。そのころと少しも変わっているように見えなかった。

ユージーンのを考えを読もうとでもするかのように、エミリアはその灰色の瞳でユージーンの目を覗き込んだ。

「少し、また背が伸びたのではなくって？ ユージーン」

エミリアは扇を開くとゆったりと仰ぎながら、声を立てて笑った。

「ユージーン、あなたがまた火遊びのために夜会に来たんじゃないってことくらい、わかっていてよ」

「……レディ」

ユージーンは少しとがめるような響きで言った。しかし、エミリアはまるで動じる様子はない。

「そうね……噂話を聞きにきたんじゃないくて？ 例えば……ストラウド侯爵とかヴェルマス子爵の」

ユージーンは、思わずエミリアの扇を持つ手首を掴んでいた。

エミリアは一瞬口をつぐんだが、すぐに妖艶な笑みを浮かべて続けた。

「驚いた？ ロード・ユージーン、でも、タネを知れば簡単なことよ」

……この女は本当に苦手だ。ユージーンは軽く眉間に皺をよせていた。

「あなたがストラウド侯のカントリーハウスにいらしていたこと、わたくし存じてましたの、それでよ」

エミリアは意味深に目配せをしてみた。

「ねえ、あなたの知りたい噂を聞くな、わたくしがうってつけだと思ひにならなくて？」

そう言うと、エミリアは軽く背伸びをしてユージーンの耳元でささやいた。

「ふたりだけでお話ししたいわ、以前のように」

その瞬間、彼女はユージーンの上着になにかを滑り込ませた。

そして、ユージーンから身体を離すやいなや、別の方向を振り返った。

「あら、マダム・ウインクル！ お久しぶりですわ」

そういうと、素早くユージーンのもとから立ち去った。

「よお！ マクラ克蘭」

突然背後から呼びかけられ、ユージーンは思わず手元のグラスからシャンパンを数滴こぼしてしまった。

振り返ると、そこにいたのは大学の知り合いで、今は生物学をやっているクラムリーだった。

「めずらしいな、こんなところで逢うとは」

クラムリーはこの邂逅を心から喜んでいるようであった。

「最近は医者の仕事ばかりしているようだな。なかなか付き合いの場に出てこないって噂だぜ？」

クラムリーはユージーンをソファアの部屋へと誘った。

「フェンシングのクラブにも顔を出していないっていうじゃないか、ジェファソンがばやいてたぞ」

ジェファソンはユージーンのフェンシング相手だ。たしか、クラムリーと同じクラブに出入りしている……。

ソファーに腰掛け、その背に腕を投げ出してユージーンはクラムリーに尋ねた。

「君、ジェファソンと同じクラブだったな、確か……」

「ああ、グローブ・クラブだ」

「地球儀グローブ・クラブねえ……そもそも何で集まってるクラブだい？」

「もとは古い世界地図や地球儀のコレクターが寄ってたんだけどね、今はあまりそれは関係ないね。単なる談話室さ」

クラムリーはクラレットのグラスを手にしている。

ユージーンはシェリーを頼んだ。

……古地図。

「グローブ・クラブにはもしかして、ストラウド侯爵が出入りしてなかったかな」

クラレットを一口飲み下して、クラムリーは頷いた。

「ああ、彼は古くからのクラブ員だったよ。気の毒なことだったねえ、ユージーン？ もちろん君は知ってるんだろう、侯爵が……」

ユージーンの目の前にシェリーの載った銀の盆が差し出された。

「亡くなったことは知っている」

ユージーンは、シェリーに口をつけた。

「しかし、君、侯爵とはどういう知り合いだい？ マクラ克蘭」

クラムリーはクラレットを飲み干した。

「彼の息子のヴェルマス卿は古い友人だ」

クラムリーはぐるりと目を天井にむけた。

「おいおい、君とあのコーネリアス・ウォーレンがかい？ 驚いた、知らなかったよ」

「……ストラウド侯爵のことでなにか、最近クラブで耳にしたことなんかはあるかい？」

ユージーンはこう口に出したものの、自分の物言いのしっくりこなさ加減には少々嫌気がさした。

もっと上手い訊き方があるだろうに。

だが、二杯目のクラレットを手にしたクラムリーは特段なにも感じてはいないようだった。

「うーん。僕とストラウド侯爵じゃあ、なんというか世代が違うしね。クラブの中でも特に親しくしたこともなかったからなあ……」

噂を嗅ぎ回るというのも、慣れないとなかなか難しいものだ。

ユージーンが場を切り上げようとした瞬間、クラムリーが質問を返してきた。

「そういえば、マクラ克蘭。君、カロリンスカから招聘があったって、本当かい？」

……なんてこった。ミイラ取りがミイラになる、とはこのことか。コーネリアスが言っていたように、どこぞのクラブで本当に話題にされていたとは。

「どうして、そんなこと知ってる？ クラムリー」

ユージーンは静かに、だが、わずかに不快感をにじませながら問い返した。

「そりゃ、知ってるさ。僕だって研究者の端くれだし、あのカロリンスカからポストの提示があるなんて願ってもないだろう？」

……なんだ、こいつがネタもとか？

クラムリーはさらに質問を続けた。

「それじゃあ、『蹴った』っていうのも本当なのかい？ ユージン」

ユージンは立ち上がりながら、ごく面倒そうに答えた。

「蹴ってもいないし、断ってもいない。今すぐにはいけないと言っただけだ」

立ち去ろうとするユージンに向かってクラムリーが、少々冗談めかしながらも真面目な口調で言った。

「確かに、スウェーデンは寒そうだがな……僕だったらすぐにでも飛んでいくがね」

クラムリーの言いたいことはわかる。

ヤツも子爵家の三男坊だ。生きるために働く必要があるのは自分と同じだ。

ウォーレンの一族については、何らの噂話も手に入れることができなかった。

夜会の方も、最高潮の時は過ぎつつあるようだ。

仕方がない……。

ユージンは上着のポケットに手を入れた。

小さなカードが入っていた。

今のところ、こちらの情報を当たってみるしかないようだった。……まったくもって、気は進まなかったのであるが。

六月の夜（3）

18

ユージーンがチェイニー夫妻の館を出たのは、10時過ぎだった。

父シエスタベリ伯の馬車は、とうになかった。

退屈して別の夜会に移ったのか、疲れて家に帰ったのか、クラブに流れたのか、誰かご夫人を伴って抜け出したのか、まあそんなところのどれかであろう。

もともとユージーンに馬車に乗る気はなく、馬車を呼ぼうかとチェイニーの館の使用人が問うたのを断って歩き出した。

……上着に滑り込まされていたカードには「10時」とあった。

ユージーンがカードに指定された路地に入ったところで、背後から二頭立ての洒落たキャリッジが近づいてきた。

ユージーンの真横で馬車が止まった瞬間、扉が開いた。

ユージーンはためらわずキャリッジのタラップに足をかけた。

彼の体が半身ほど中に入るやいなや、キャリッジはふたたび動き出した。

「来てくれると思ってたわ、ユージーン」

くだんの東洋風の扇を口元に近づけ、エミリア・ウォショースクが妖艶に微笑んだ。

エミリアはユージーンを見つめながら、ゆっくりと彼の膝の上に指

を滑らせた。

その手はユージーンの腿に沿って、上に上にと這いあがっていく。

そんなエミリアの手管をまるきり無視して、ユージーンは単刀直入に本題を切り出した。

「ストラウド侯爵とヴェルマス子爵の噂話とやらを聞かせてくれるのではなかったのかな？ レディ・ウォーショースク」

「もちろん、いろいろとお聞かせできることはあるわ……でも、時間はまだたっぷりあってよ」

エミリアはそう答えながらも、ユージーンの足の上に手を這わせ続けた。

突然、馬車の外に街の雑踏が響き、カーテンの隙間から鋭い光がいく筋か差し込んだ。

だが、光はすぐに途切れ、外は静まり、石畳に響く蹄の音と車輪の音しかしなくなった。

……さすがは、レディ・エミリア・ウォーショースクの御者だ。

ユージーンは皮肉めいた感想を抱いた。

馬車でのレディの逢いびき用に、ロンドン中のひと気のない道という道を心得ていると見える。

やがて、ユージーンの足のほとんど付け根近くまで、エミリアの指が滑りよってきた。

飛んできた埃でもつまみとるかのように、ユージーンはエミリアの手の甲の手袋の部分だけをつまみ、彼女の手を自分の腿から払いのけた。

「おふざけは結構だよ、レディ・ウォーショースク」

ユージーンにつままれたオペラグローブの皺をさすって伸ばすようにしながら、それでもエミリアは平然と言ったのけた。

「あら、今はそんな気分じゃないのかしら？ ユージーン」

「今だけじゃないさ」

エミリアに視線も合わせず、ユージーンは言い放った。

露骨に嫌悪感を示しているユージーンの横顔を眺め、エミリアはさも可笑しそうに声を立てて笑った。

「やっぱり、まだまだ可愛いわ、あなた。ねえ、わたくしの目を見て、もう一度いつてごらんないな、ユージーン」

……ばかばかしい、こんな女の挑発になど、いまさら乗るものか。

エミリアはさらに、甘ったるい声で続けた。

「あなたが大好きなやり方、わたくし、まだちゃんと覚えていてよ。だって、あなたにすべてを教えて差し上げたのは……」

ユージーンは不快でたまらなかった。今では馬車に乗り込んだことを、わずかに後悔する気になったほどだった。

エミリアの誘惑など、もはや別に何とも思いやしなかった。

だが、こうやって絡まれるのが、ただ面倒で面倒でたまらないのだ。

エミリアといえば、ユージーンのアマリの脈のなさに少しばかり苛立っていた。

そして、自分の扇をユージーンの顎に当てると、強引にその顔を自分の方に振り向かせた。

「あなたの知りたいことをいろいろお話してあげてもよくてよ。でも、その代りにあなたは何をしてくださるっていうの?！」

その言葉に、ユージーンは嘲笑と怒りをほんの一瞬だけあらわにした。

だが、次の瞬間には、レディ・ウォショースクの顎を乱暴に掴み、座席の背に彼女の頭を押し付けた。

そして、ユージーンは、エミリアに一声の悲鳴をあげる間も与えず、その毒々しく赤く彩られたくちびるを自分のくちびるでふさいだ。

いやらしいほど、甘ったるい匂いがユージーンの鼻孔を刺激する。

レディ・ウォショースクが好んでつける、麝香の香りの強い香水だった。

……この香りを官能的だと感じたことも、かつてはあったかもしれない。

若気の至り……。

そんな言葉がユージーンの頭の片隅によぎる。

しかし、この香水は、今はただ、くどくて吐き気をもよおすほど不快なだけだった。

ユージーンはエミリアから顔を離れたが、まだ手は彼女の顎に置き、エミリアの顔をきつく座席に押しつけたままにしていた。

エミリアの方は、ユージーンの荒々しいキスの余韻に目を固く閉じ、耳元を紅潮させて恍惚としている。

ふと街灯の明かりがキャリッジの中に差し込み、エミリアの首筋を照らした。

一瞬のことだったが、その鋭い光は、レディ・ウォショースクの老

いの兆候を暴きだしてしまった。

……夜会のシャンデリアの下と馬車の中でなら、もうしばらくは男を手玉に取れるだろうが。

たとえば……。

たとえば、あふれるような五月の陽射しの下では？

ユージーンは意地悪く考えを巡らせた。だがその後、エミリアに対し、ごくわずかばかりではあるが、哀れみを感じもした。

そして、ユージーンはエミリアの顎をつかんだまま、その顔を数回左右に揺さぶって言った。

「続きが欲しいか？ エミリア？ だが、そいつはお前の話の内容次第だな。おもしろい話をしてみる、あとはそれからだ」

六月の夜（４）

19

ザ・プレイスの二階にある自室に戻り、扉を後ろ手に閉めた。そして、ユージーンは深い溜息をついて、扉に寄り掛かった。

タイの端を引き、首からもぎ取るように外す。

扉から離れると、ユージーンはテールコートを脱いで椅子の背に投げ、カフスリンクを取り去るとサイドテーブルの上に置いた。

サイドテーブルには水の入ったグラスが置かれている。

ユージーンはソファアに身体を沈めると、グラスにさしてある一輪の白い芍薬の花びらにそっと人差し指で触れた。

それは今朝、レディ・カロリーノがユージーンのボタンホールにさしたものだった。

……そうだ、ストラウドを立ったのは、まだ今朝のことだったのだ。

カロリーノが上着の襟に添うようにと、何枚かを取り去っていたとはいえ、八重咲きの芍薬の花びらは、堅いつぼみの中にまだ溢れんばかりに詰まっている。

その白い花びらの数枚が、わずかにほころびだしていた。

ユージーンはグラスから芍薬を抜き取ると、その白い花にそっとくちびるを触れた。

滑るような花びらの感触を楽しむように、しばらくの間、くちびると舌先でもてあそんだ。

―あのあと、レディ・エミリア・ウォショースクはよく啼いた。
あることないこと、洗いざらい、ユージーンに向って喋り続けた。

「……ストラウド侯爵の財政事情？」

エミリアは馬車の座席の上で、身をよじるようにくねらせていた。
「もちろん殿方の間ではいくらか噂はあったようね……だって、あそこは領地のほとんどが農地なもの、おわかりになるでしょうユージーン？　ここ数年来の税制改革に農作物の輸入超過。一番打撃を受けるのはストラウド侯のようなところだわ」

「それが？」

ユージーンは冷たく先を促す。

「……もちろん、すぐにどうこうってことはないわよね、何と言ってもあれだけの家なもの、ただ」

そこで口をつぐみ、エミリアはユージーンの肩にしなだれかかった。しかし、すぐさまユージーンは肩からエミリアを邪険に払いのけた。

「どうもストラウド侯は亡くなるちよと前くらいから、なにかとシティの方に用向きがあったようよ……」

「シティに？」

ユージーンが怪訝そうに口になると、エミリアは軽く数回笑い声をたてた。

「そうね、その件についてだけは、わたくしよりあなたのお父上にうかがった方が、話が詳しいかもしれないわよ」

エミリアはふたたび口をつぐんだが、それはほんのわずかの間だった。

「……あと、そうね。そう言えばわたくし、亡くなったストラウド侯爵の親戚付き合いは、なんだか奇妙に思ったのよ……何度か侯爵のカントリーハウスを訪ねたことがあったのだけど」
彼女はドレスの襟元に手をやりながら続けた。

「あれだけの邸宅に大勢の客を呼んでいるのにね……ウォーレンの一族はほとんど顔を見せないの、え？理由までは……ウォーレン一族は口が硬いのよ。あら、もちろんあなたが知りたいのなら、あちこちに聞いてみてもよくつてよ？ ユージーン」

ここまで話し終わると、エミリアもさすがにじれてきたようだった。物欲しげに頬をよせてくるエミリアの首筋にユージーンは仕方なく、軽く舌を這わせた。

と、エミリアは一言、口を滑らせた。

「カントリーハウスと言えば、ねえ、ユージーン。結局、お父様は『ポードーズ・アビー』をアメリカ人にお売りになったんですって？ お兄様のエイルズフォード卿がそれ以来『ザ・プレイス』に寄りつかないっていうのは本当？」

これを聞くやいなや、ユージーンはエミリアの首からくちびるを離した。

そして、彼女の耳たぶをつまみ、きつく引っ張ると、この上なく不機嫌な口調で言った。

「……話の内容はなかなか悪くなかったが、レディ・ウォシヨースク。最後の一言はまったくの余計だったな」

―ユージーンは芍薬のつぼみをくちびるから離すと、静かにグラスに戻した。

その瞬間、花びらが一枚、テーブルの上に音もなく舞い落ちた。

すると、突然、部屋の扉が数回ノックされた。

「恐れ入ります、ユージーン様。階下にお電話が入っております」

それは、ザ・プレイスの執事^{バトラー}だった。

ユージーンが物心ついたときから、彼は「バトラー」だった。

今に至るまで、彼の他の呼び名は知らない。

父が、シエスタベリ伯爵が彼のことを「バトラー」としか呼んだことがないからだ。

ユージーンはすぐに彼に入るようにと告げた。

すかさず扉から滑り込んできたバトラーに、ユージーンは尋ねた。

「今時分、一体誰なんだ？」

「バートラム男爵家からでして。ご子息のアルバート・チェスタートン様之急にご体調を崩されたと」

「チェスタートン？ ……随分久しぶりに聞く名だな」

バートラム男爵の子息アルバート・チェスタートンは、コーネリアスとともにユージーンとパブリック・スクールの同輩だった男だ。

「どうしても、至急にと電話口で仰られまして……」

バトラーは電話を取りつがざるをえなかったことが、少々不本意そうにも見えた。

「分かった、とにかく電話に出よう」

ユージーンは短く答えると、ソファから立ち上がった。

……まったく、なんて一日だ。

ユージーンはふたたび自室を出て、ザ・プレイスの大階段を駆けるように降りていった。

六月の夜（5）

20

コーネリアスは椅子の背に身体を投げ出し、頭を大きくそらして目を閉じた。

父の死からずっと館中の書類のたぐいを、あらいざらいをひっくり返してきた。

それらはひどい混乱状態だった。

ただ、その中でコーネリアスに解ったことが、ひとつだけあった。

この数年来……。

特にこの三、四年の間、ストラウド候は、自身の財産について、ほとんど何の管理もできていなかったのだということだった。

由緒あるウォーレンの家は、領地の歴史が古い。

いくつかの爵位に応じた領地は、広大ではあったが、かなりの範囲に点在もしていた。

スコットランドにほど近い、ある領地については、コーネリアスが調べてみたところ、一番新しい書類の日付でさえも、六年も前のものであった。

コーネリアスは父の家令と、いくどか話し合いを持ったが、結局のところ、それはあまり役には立たなかった。

「……ロード・ヴェルマス。実をいうとわたくしはお父上から、ス

トラウド侯爵から、お暇を頂戴する予定だったのです、今月にも」
家令
ランド・スチュワートは、コーネリアスを前に淡々と口にした。
「もはや、わたくしがストラウド侯爵の手助けとなるようなことも
ございませんでしたので」

「どういうことだ？」

わずかにいらだちを見せながら、コーネリアスは尋ねた。

「旦那様はわたくしには、何もお任せになろうとしませんでしたから。わたくしの前任の者に対してもそうだったようでございますよ」

執事のバーンズは、ずっとこの屋敷に仕えてきてくれた。彼の父も、おそらく祖父もだ。

だが、家令は……。

確かに、コーネリアスが知っているだけでも、父の代で三人は人が交替していた。

「あれだけの領地の管理など、おひとりで行き届くわけもないのですが……」

家令は前の主への非難がましい口調を、もはやコーネリアスに隠す気もなさそうだった。

「わたくしはいえ、あちこちで問題がこじれたところへ行つて、何と言いますか……とりあえずの処置を取ってまわるといった具合でして、それも最近ではほとほと……」

コーネリアスは深い溜息をついた。

「……それで？」

「ええ、侯爵家の財産の全体的なことなどは、ほとんど存じ上げな

いのでございます」

「それで。辞めるつもりだという気は変わらないんだな？」

家令は多少恐縮した様子を見せはしたが、すぐにこう答えた。

「もう、次のお仕え先が決まっております。ええ、亡くなった旦那様にきちんと紹介状を持たせていただいたおかげでございます」

亡きストラウド候は、たったひとりで、ここを切りまわしていた。

そういう風に見えていた……。

だが、内実はどうだ？

古くからの契約に基づく一族への年金が出ていくだけで、地所からの収益はほとんど把握されていない。

……だいたい、ウォーレンの一族は何をやっているんだ？！

コーネリアスの胸の内に、突如、いら立ちが沸き起こった。

領地の近くに住まう家族だつて多くいるのに……。

いくら爵位は父が持っているからといって、金だけは、きちんきちんと受け取りながら、何の手も貸さないとは！

そこでふと、コーネリアスは思い当たった。

そもそも、この家に一族の者が訪れたことは、どれくらいあったろう？

このカントリー・ハウスで、従兄弟やおじやおば達と顔を合わせたことは、どれだけあったのか。

コーネリアスはしばしの間、記憶をたぐりよせた。

いくら自分がパブリック・スクールに入ってから、ここに寄りつかなくなっていたとはいっても……。
そつえば……。

葬儀の時に……彼らは、親戚筋は、カロリーノのことにして誰一人尋ねもしなかったではないか？

彼らが妹の存在を知らないはずはないのに。

コーネリアスは愕然とした。

すると、ノックもなく書斎の扉からバーンズが滑るように入ってきた。

屋敷の主の部屋へノックなく入ることは、仕えている執事だけが持つ特権である。

「なんだ？ バーンズ、呼んでいないが？」

コーネリアスは、そらせた頭を起しもせずと言った。

「ミー・ロード、飲み物をお持ちしました」

バーンズはいつものごとく、ほぼ無音でカップの準備を始める。注がれたのは、一見、ホットミルクのようだった。

「おいおい。バーンズ、僕はそんな仔犬が飲むようなものはいらないよ」

半ばあきれ気味に、コーネリアスは言い放った。

「こちらはミルクティーにございます、旦那様」

「お茶だって？」

「ミセス・オーソンがお持ちしてくれと、菩提樹とカミツレの」
バーンスは静かにコーネリアスの手元に、カップを置いた。

「いまだき魔女でもあるまいに、ミセス・オーソンの薬草好きにもあきれるね」

コーネリアスはカップをちらりと見やったが、手はつけなかった。

「……よく眠れるのだとか。ミセス・オーソンが言っていたことですが」

コーネリアスは伏せていた目線を上げ、バーンズの顔を軽く睨みつけた。

やつれてもなお、美青年であることには変わりなかったが、それでも、このところのコーネリアスの衰弱ぶりはひどかった。

眼窩は随分と落ちくぼみ、エメラルド色の目の下には、くまがができていた。

いつも美しくなでつけてあった金色の前髪も、わずかではあるが乱れている。

食事の量はいちじるしく減っていた。

コーネリアスの腕の肉はそげ落ち、以前よりもずっと筋張ってきていた。

口数は減り、夜もほとんど寝つけていないようだということは、バーンズやミセス・オーソンだけではなく、他の使用人も容易に見て取ることができたほどだった。

「お飲みいただけませんか？ ミー・ロード」

これは、バーンズにしてはめったにないことであった。

飲み物を強く勧めるなどとは……。

さすがのコーネリアスも面喰った。

「どうしたんだ？ バーンズ、らしくもない」

「わたくしはお飲みいただきたいのですよ、コーネリアス様」

父が亡くなってから、初めてのことだった。

バーンズがコーネリアスに、『ミー・ロード』ではなく、『コーネリアス様』と呼びかけたのは。

「ご自身のご体調が、おわかりでないのですか？ ひどい様子をなさっておいでです。一体、夜はいく日お休みになっていないのです、コーネリアス様?!」

コーネリアスは、すっかりバーンズの剣幕にのまれてしまった。

「ああ、わかった、わかったから、バーンズ。飲むよ、飲むから」そして、カップに手を伸ばすと、それに口をつけた。

中身はもうさほど熱くはなく、コーネリアスは一気にカップを空にした。

「……お味はいかがでしたか？」

バーンズがいつもの口調に戻って言った。

コーネリアスはやや皮肉めいてはいたものの、久しく他人にみせていなかった笑顔を浮かべながら答えた。

「そうだな……正直、たいして美味しいといえるものでもないようだ」

バーンズは静かにうなづき、ポットを手にした。

「さようでございますか、では……もう一杯どうぞ、コーネリアス様」

「バーンズ！」

今度はコーネリアスも、不快感をあらわにした。

「コーネリアス様、差し出がましいようですが……」

「ならば言っな！」

「いえ、言わせていただきます。一度、医師にお体の調子を診てもらっていたきたいのです。このままでは、遠からずお倒れになります」

「……バーンズ、いい加減にしないか！」

コーネリアスはふたたび鋭く言い放った。しかし、バーンズはそんな言葉には微動だにしなかった。

「マクラクラン様にご連絡さしあげて、よろしゅうございましょうか？」

「もうさがれ、バーンズ」

コーネリアスは、バーンズから完全に視線をそらしたまま言った。

「では、もう一杯お茶をお飲みください」

なおも平然と言い放つバーンズに、コーネリアスは根負けした。

「では、僕がこれを飲んだらさがれ。いいな、バーンズ、ユージーに連絡などする必要はない。すこし疲れただけで、僕はどこも悪くはないのだから」

コーネリアスはひどく不味そうな表情をして、カミツレと菩提樹の

ミルクティを飲み干した。

そして、ふと考えを巡らせるように空のカップを持った手を止めた。

「コーネリアス様？」

「……そうだ、忘れていた。バーンズ、ユージーンがカノにちゃんとした診察を受けさせるべきだと言っていたんだ。うっかりしていたな」

それはまるで独り言だった。

「ユージーンに手紙を書いてみよう、いや……いつそ電話の方がいいのかな、この間のこともあるからな。とにかく、バーンズ、覚えておいてくれ」

こういい終わると、コーネリアスはふらりと椅子から立ち上がった。思わず、バーンズが腕を伸ばしたが、コーネリアスは自分で机の上に手を付き身体を支えると、バーンズを押しとどめた。

「……よく効くハーブティのようだ」

小さく笑いながら、コーネリアスは言った。

「今日はもう休むよ。バーンズ、明かりの始末を頼む」

そして、コーネリアスは少しふらつきながら、書斎を出て行った。よろめくように階上へと上がっていくコーネリアスの背中を、バーンズはしばらくの間、見上げていた。

六月の夜（6）

21

その日、ユージーンはめずらしく早めに、とはいっても初夏の六月の日もすっかり落ちた後ではあったが、家に帰り着いた。

ドローイングルームでなにか軽く飲んでひと息つこうと、ユージーンがソファアーに腰を下ろしたところで、フットマンのダニエルが近づいてきた。

「おかえりなさいませ。ユージーン様、日中、こちらが届きました」
ダニエルは封書が載った銀の小盆を差し出した。

ユージーンは差し出された盆から封筒を取り上げると、裏返して差出人を見た。

ダニエルはその瞬間のユージーンの表情の変化を、正確にはそれはわずかな目の動きにすぎなかったが、それを見逃さなかった。

しかし、ダニエルがそのことに気がついたのは、屋敷の主の息子と使用人という立場の違いがあるにせよ、ユージーンと比較的近しい付き合い方をしていたからこそであった。

おそらく他の使用人は、ユージーンのこのような、ごくわずかの表情の変化など、まったく気がつかないに違いなかった。

ペーパーナイフを手にとったはいいが、ユージーンはすぐに封筒を開けようとはしなかった。

「……なにかお持ちしますか？ ユージーン様」

ダニエルがその声をかけると、ユージーンはナイフを封の隙間に差し込んだまま、顔を上げた。

「そうだな、クラレットを頼む、ダニエル」

ダニエルはワインを用意するため、部屋を出て行った。

ダニエルが見て取ったとおりだった。

実はユージーンは差出人の名を見て、少し驚いていた。

手紙は、レディ・カロリーノ・ウォーレンからだった。

ユージーンは封を切って、中身を取り出した。

すると、大きな白い花びらが、足下に滑り落ちた。

かすかだが、確かな甘い香りが広がる。

甘いと言ってもムスクのように突き刺すようなものではなく、もつとずっとまるやかな甘さだ。

ユージーンはその花びらを拾い上げた。

「おや？ これはなんだろう？ ああ、六月の香りですね」

クラレットを運んできたダニエルがつぶやいた。

彼のつぶやきは、いつもまるで歌うようだった。

ユージーンはダニエルの気の利いた物言いを聞くにつけて、彼になにか物を書かせることはできないかと考えるのが常だった。

ダニエルはユージーンが拾い上げた物に目をとめた。

クチナシ

「ガーデニアですか？ はなびらだけでも良い香りだ」

そういつて片えくぼをつくり、ダニエルは嬉しそうに笑って見せた。クラレットのグラスを置くと、ダニエルはユージーンから少し離れた暖炉と本棚の隙間に身を滑り込ませた。

ユージーンは手紙を開いた。

返事が来ることは、実のところさほど期待していなかった。

そう、ユージーンはカロリーノに手紙を書いていたのだった。

——親愛なるマクラ克蘭さん

まず、なによりも先に、お手紙をお送り下さったことにお礼を申し上げます。

でも、わたしがどれほどの感謝の気持ちを持っているか、きっとマクラ克蘭さんにお伝えしつくすことはできないのではないかしら、と思っっているのも本当の気持ちです。

おわかりになるかしら？ バーンズが部屋にやってきたときの、わたくしの驚きときたら。

「レディ・カロリーノにお手紙でございます」って。バーンズが言ったの。

それがどうかしたのか？ なんて思いにならないでください。だって、自分あての手紙を貰うなんて、はじめてだったのですもの。

コーネリアス兄さまは、学校にいらつしやるときも、わたしに手紙を下さったことはないの。

手紙を書くには、まだわたしがあまりにも小さすぎると思いになったのではないかしら、きつと。

ここまで読み進めたところで、ユージーンの口元に思わず笑みがこぼれた。

ええ、わたしは、とても元気です、ドクター。

でもご心配いただいて、本当にうれしいわ、ありがとうございます。

ただ、ごく正直に打ち明けてしまいます。

コーネリアス兄さまへのご心配については、自分のことと同じように請け合うことが難しいのです。

こういう風になんて、マクラランさんにご心配かけるようではいけないことだとは思っただけねど。

ミセス・オーソンもバーンズも、兄さまのお体を心配しています。

わたしには、なにもわからないのですが、家のことや領地のことが、とてもお忙しいようなの。

本当に、マクラランさんがロンドンにお帰りになってしまっただけから、兄さまとゆっくりお話しすることもほとんどないくらいです。

この手紙を書き始める前に、ちょうどホールで兄さまをおみかけしました。

コーネリアス兄さまの顔の色は、ひどく青くて、とてもお疲れに見えました。

ああ、こうやって文字にしまうと、どうしてこんなに、ますます不安になってしまふのでしょうか？

バーンズがマクラ克蘭さんに相談するようにと、兄さまに勧めたのだと、ミセス・オーソンが言っていました。

でもきつと兄さまは、マクラ克蘭さんにはなにも言っではないのでしょね。

たしかに、あれ以来、コーネリアスからユージーンにはなにも連絡はない。カロリーノのこの手紙からははつきりしないことも多いが、ユージーンもコーネリアスの容体が気になった。

サンザシの花も、もうあらかた盛りをすぎてしまいました。

時々、季節がめぐるのは、随分、早いと思うことがあります。

マクラ克蘭さんは、どうかしら？

次々に新しい花が開いては散っていきます。

そして、またサンザシの季節がやってくるのですね。

父さまと母さまが眠るあの場所は、今は新緑が日に日に濃さを増して、木漏れ日がとてもきれいです。

そういえば、マクラ克蘭さんをお見送りしたときは、芍薬をお渡ししましたね、そうじゃなかったかしら。

ユージーンの脳裏にあの白い花びらの滑らかな感触がよみがえった。

ロンドンのマクラランさんのお屋敷の庭には、今どんな花が咲いていますか？

今はこちらの庭では、ガーデニアが盛りです。

夕暮れ時に庭にでると、とろけるような香りで胸がいっぱいになるほど。

この香りをロンドンまでお伝えしたいと思って、はなびらを一枚、同封します。

では、ごきげんよう、マクラランさん。

素敵な六月でありますように。

敬意をこめて

カロリーノ

ユージーンは読み終わった便箋をしばらくの間、手にしたままでいた。

ごくかすかに、ほほ笑みを浮かべながら。

壁際に控えていたダニエルは、視界の端でその様子をみるともなく見ていた。

そして、ユージーンがゆつくりと、クラレットの最後のひとくちを飲み終わると、家具の隙間から滑りてた。

「もう一杯おもちしますか？ ユージーン様」

「いや、もういいよ、ダニエル」

ユージーンは封筒に手紙を収めながら、ダニエルを見上げて答えた。

しかし、ダニエルはまだユージーンを見つめている。

「ユージーン様、好奇心からお尋ねするのですが」

ユージーンは軽く首をかしげて見せた。

「なんだ、ダニエル、唐突に」

「どなたからの手紙だったのですか？ それは」

フットマンにそんなことを尋ねられれば気分を害するのが普通であろう。

だが、ユージーンにとってダニエルは、普通の使用人というわけではなかった。

「なぜそんなことを尋ねる？ ダニエル」

ダニエルもユージーンが特段に気分を害していないことは、十分理解していた。

「そんな顔は初めて見ましたから」

「……？」

腑に落ちないという顔で黙っているユージーンに、ダニエルはまた片えくぼの笑顔を見せて言った。

「いままで、何人ものレディからの手紙や招待状をお渡ししてきましたが、そんな表情をなさったことは、ついぞなかったように思いました」

「そんな表情って、どんな表情だい？」

ユージーンがさらに問うと、ダニエルは人差し指を立てて口元にもっていった。

そして、少しの間、視線を天井にさまよわせてから、ゆっくりと、言葉を選んだ。

「そうですね……『嬉しそうな』でしょうか、いえ。違いますね、もっと……。ああ、そうだ。『優しい』だ。優しい表情ですよ」

腑に落ちたようにダニエルは、ひとりうなづき、ユージーンにもう一度尋ねた。

「で、どなたからだったのですか？ ユージーン様」

満ちる月欠ける月（1）

22

カロリーノが庭から戻り、テラスから自室に入ると、そこにはバーンズが待っていた。

庭では、白のホリ^{立葉}―ホックが、こぼれるように次々と花を咲かせ始めていた。

カロリーノは、今朝はそれをストラウド侯爵夫妻の墓前に手向けてきたところだった。

驚いてバーンズを見つめているカロリーノの前に、バーンズはいつもと全く変わらぬ無表情だった。

「旦那様が、朝食を一緒に。モーニングルームでお待ちです」

……兄さまが？

カロリーノの顔には、今度は驚きよりも喜びの表情が浮かんだ。

自分がレディ・カロリーノの笑顔を見て、釣り込まれるように口元をほころばせそうになっていることに気がつき、思わずバーンズはドアの方に顔を背けた。

「おはよう、カノ」

カロリーノがモーニングルームに入ると、張り出し窓の棧に腕をかけて庭を見やっていたコーネリアスが振り返った。

逆光の中、カロリーノには兄の顔をうかがうことは難しかった。

……お声は、少しはお元気そうだ。
カロリーノはそう思いながら、窓辺のコーネリアスに近づいて、膝を屈めた。

「コーネリアス兄さま。おはようございます」

そして、カロリーノは兄の顔を見上げた。
コーネリアスの頬の肉は随分とそげ落ち、顔色も青かったが、表情の方はだいぶ穏やかだった。
カロリーノはそのおかげで、兄の様子について、ひどく不安にならず、過ぎることからだけは救われた気がした。

「卓につこうか」

そういつてコーネリアスはカロリーノの手を取った。

だが、その手はあまりにも冷たかった。

……兄さまは、本当に病気になってしまう。
カロリーノの心に、またしても不安が影を落とした。

そんな妹の心配をよそに、食事中的コーネリアスは、口調だけどこか空々しいほどに明るかった。

彼はナプキンを膝から取り上げ、軽く口を拭ってテーブルの上に置き、立ち上がりながら言った。

「ちよつとロンドンに行こうと思っているんだ。家のことでいろいろと用事もあるし、カノ」

「はい？ コーネリアス兄さま」

「以前、ユージーンから言われていたんだが……お前の身体の調子

のことだ。きちんと調べたほうがいいからと」

「わたし……今はちつとも何ともないわ、兄さま？」

体のことなら、兄さまの方が。

心の中ではそう口答えをしたものの、カロリーノは口に出すことはしなかった。

「それならそれでいい。だが、とにかくロンドンに一緒についてきなさい、いいね」

ロンドンに、わたしが？

驚きで返事もできないカロリーノの横で、ミセス・オーソンが口を開きかけた。

コーネリアスは、それをうなづきで押しとどめて言葉を継いだ。

「ああ、いろいろと必要なものがあるだろうから、すまないが。ミセス・オーソン」

「はい、ミー・ロード」

ミセス・オーソンはそれ以上は口をつぐみ、コーネリアスの言葉を待った。

「……女中頭^{レイズ・メイド}に頼む仕事ではないことは分かっている。だが、今はここには侍女^{レイズ・メイド}がいらないからね。ともかくカノに細かいものも含めて揃えてやってくれないか？ 服も必要なだけ作らせるとよい。カノの準備ができれば出かけよう」

コーネリアスはそういって、一瞬笑顔を浮かべて見せた。

しかし、それはごく形だけの笑みに見えた。

そして、コーネリアスはカロリーノを置いて、先にモーニング・ル

ームを出て行った。

突然のことに、カロリーノはもちろんのこと、ミセス・オーソンもすっかり面食らってしまっていた。

「まあまあ、これは忙しくなりますねえ。ええ。分かっておりますしたとも、コーネリアス坊ちゃん、カノ様のことをいろいろ、ちゃんあんと考えてくださってるってね」

早口でまくしたてるミセス・オーソンの後ろで、バーンズがカロリーノの方を見つめていた。

カロリーノには、バーンズの目に浮かんた、ごくかすかだが物いいたげな表情を読み取ることができた。

「バーンズ」

カロリーノはミセス・オーソンの話の切れ目をとらえて、そつと呼びかけた。

「分かっているわ。兄さまのことね、マクラ克蘭さんをお願いするわ、きつと」

バーンズは黙ったままだった。

しかし、しっかりとカロリーノの瞳を見つめ返し、そして、深く頭を下げた。

朝食を済ませて、部屋に引きとったカロリーノは、そのまままっすぐに小さな書き物机へと向かった。

つる草の浮彫が可憐な、華奢なつくりの机。

レディ・レティシア・ウォーレンが愛用していたものだった。

カロリーノは、すぐに引出しから便箋をとりだした。

……マクラランさんに手紙を書こう。

数日前に、ユージーンからの数度目の手紙が届いていた。

本当はカロリーノは、すぐにもユージーンに返事を出したくてたまらなかったのだった。

館から出ることもない日々。

そんな中で、何を書くことがあるのか？

そういう風に思われるかもしれないが、カロリーノには、ユージーンに書き届けたいことはたくさんあった。
毎日なにかしらの発見や喜びがある。

父に構われず、友人もおらず……。

でも、それで寂しく思う事はあっても、カロリーノは、人生に失望はしていなかった。けっして。

読んだ本のこと、新しく咲き出した花のこと。

テラスの窓から迷い込んできた蝶の羽の色が、どんなに美しい瑠璃色だったか。

そして、その蝶の名前を調べるのに、随分と骨がおれたこと。

喜びは、いろんな場所に見つけ出すことができた。

確かに、それらはカロリーノにとっては、大切な日常のきらめきであるかもしれない。

でも、そんな他愛もないようなことは、はたして、忙しい華やかな

場所にいるユージーンには、どういう風に思われるだろう？

そんなことを不安に思い、考えを巡らせる分別くらいは、カロリー
ノも持ち合わせていた。

すぐにでも書き始めたい手紙の返事を彼女にためらわせるのは、そ
ういう考えのせいだった。

——親愛なるマクラランさん

カロリーノは、先のユージーンからの手紙に書かれていたダニエル
の話を思い出しながら、筆を進めた。

ガーデニアを「六月の香り」だなんて、わたしもとても素敵な言
い方だと思いました。

ダニエルは木々や花が好きなのかしら。

それに彼は、一度ここに來たことがあるなんて？

忙しく帰ってしまったのでは、きっとこの庭も見られなかった
ことでしょう。

そういえば、マクラランさんは唄のことも訊いていた……。

そう思いつくと、カロリーノはまた続きを書きすすめた。

わたしが歌っていた唄の名前をお尋ねでしたね？

お答えできないのが、とても残念に思います。

わたしも名前を知らないのです。

あの曲を教えてくれたのは、兄さまだったのですけれど、コーネ
リアス兄さまも唄の名前はご存じないのではないかしら。

でも、あれは母さまがお好きだった歌なのですって。教わったと
き、そう聞きました。

ずいぶん前のことです。

まだ、わたしはほんの小さな子供で、兄さまがパブリック・スクールに行ってしまう前の。

その頃は、今の兄さまとは全然違っていた……。

カロリーノは、昔のコーネリアスのことを思い出していた。

家庭教師
ガバナスも付けてもらえなかった自分に、コーネリアスが読み書きを教えてくれた。

庭を歩き、木々を指差し、名前を覚えてくれた。

暗いホールを通り抜けるのを怖がるわたしと手をつなぎ、一緒に歩いてくれた。

古い肖像画の顔におびえると、ひとりひとりを指しておもしろい作り話をして笑わせてくれた。

兄さまの話は、本当におもしろかった……。

写真と肖像画でしかない、母さまのことを覚えてくれたのも、コーネリアス兄さまだったのに。

しらず気持ちが落ち込みそうになり、カロリーノはふたたび手紙の内容に頭を切り替えようとした。

……そういえば、マクラランさんは唄は得意ではないって、そうおっしゃっていたわ。

庭を歩きながら、マクラランさんとおしゃべりしたのは、なんて楽しかったんでしょう。

兄さまがロンドンからあまりお戻りにならなくなってから、あんな風に誰かとお話することなんてなかった。

いけない、また……。

カロリーノは軽く首を振って、暗い思いを振り払おうとした。

オペラをよく観に行くと、そうもおっしゃってた。

カロリーノはごく低い、ユージーンの声思い出していた。

……あんなに低い声なら、一体、何の役がいいかしら？

ヴェルディーのアリアなら、グラモフォンで聴いたことがある。

そうね、ドン・カルロ？

ううん、フェリペイエ世がいいわ。

そこまで考えたところで、カロリーノはふと頬が熱くなるのを感じた。

午後の日が傾くところに、思い出さずにはいられないあの出来事が。今、突然に彼女の胸に湧き上がってきた。

芍薬の咲く夕暮れに、ユージーンがくちづけをしてくれた……。

頬に触れた手は大きくてあたたかかった。

そして……。

カロリーノの身体が一番内側の部分が、熱を帯びてくる。

溜息がこぼれた。

……本では読んだことがあった。

こつという風に、身体が熱くなることがどういうことなのかは。

確かに、カロリーノは誰にもかまわれなかったが、それは、誰にも監督されることがなかったということでもあった。

見とがめられなければ、読むことだけは自由だった。

……でも、こんなに簡単に、こんな風に感じるものなの？
たった一度か二度お話をして、それだけなのに。

わたしは少しおかしいのかも知れない。

こんなに、あのことを思い出すなんて。

他の女の子たちは、どうなのかしら。

それとも、あんな風にくちびるを奪われるなんて、みっともないこと？

「また逢いたい」

そうマクラクランさんは言ってくれた。

それは、わたしが感じている、この気持ちと同じなのかしら？

ロンドンに連れて行くと、コーネリアス兄さまに言われたとき、とても嬉しかった。

でも、ロンドンに行くこと自体が望みなのではない。

ただ、マクラクランさんに、また逢えると。そう思っ

また逢って。逢って？ どうなの。わたしは。

……そう。ただ、そばにいて、二人だけで。

そして、彼の、あの綺麗な黒い瞳を見つめていたいんだわ。

身体の内側の熱が、うずきに変っていく。

……やっぱり、いけないわ。こんな事ばかり考えるのって。

カロリーノの考えは、ここでまたコーネリアスのことに戻っていった。

ともかく、兄さまのことは。マクラクランさんに相談するしかない。

ああ、兄さまの、あの冷たい手……。

さっきもテーブルでフォークとナイフを動かしていたものの、コーネリアスが、ほとんど何も口に運びはしていなかったことに、カロリーノはちゃんと気付いていた。

夏が近づいていますね？ マクラランさん。

八重のホリーホックの花が、次々に開いています。

そういえば、ホリーホックも白い花だね。芍薬と同じ。

……サンザシと同じ。

コーネリアスは、今朝はひどく饒舌だった。

「うちの庭は白い花だらけだろう？ カロリーノ」

突然にコーネリアスがそんなことを言った。

「バーンズは理由を知っているな？」

今日、コーネリアス兄さまが、母さまの話をしてくれました。

兄さまが、母さまの話をしてくれるなんて、とても久しぶり。

母さまは、白い花がお好きだったんですって。それでこの庭には白い花が、どの季節にも咲いているのだと。

ロンドン行きのことを、どう書いたらいいだろう？

兄の不調の様子を文字にするのは、辛かった。

カロリーノは考えた末に、こう手紙を締めくくった。

コーネリアス兄さまは、近々ロンドンに行くことを予定しています。

わたしも一緒に来るようにと、今朝兄さまに言われました。マクラ克蘭さん、どうかその時に、兄さまの様子を診て頂けないでしょうか？ コーネリアス兄さまは決して先生に掛かるうとはしないんです。

身体の調子は、ちっとも良さそうには見えないのに。

日がどんどん長くなります。

このあたりの夏の夜は、きっとロンドンよりも短いのではないかしら。

だって、ロンドンはここよりもずっと南にありますものね？

ごきげんよう、マクラ克蘭さん。

敬意をこめて カロリーノ

追伸

兄さまが、正式にストラウド侯爵を名のようにになりました。だから、マクラ克蘭さん。

これからは、もうわたしを「レディ」なんてお呼びにならなくてもいいのです。

ーケンジントンの『ザ・プレイス』に郵便が届く時間は、大抵決まっていた。

配達夫から手紙を受け取ったダニエルは、仕分けをし、伯爵宛のものをバトラーに渡した。

ユージーン宛にも、いくつか手紙が届いていた。

ユージーンの部屋に運ぼうとホールを歩いていたダニエルは、出かけようと階段を下りてくるユージーンに行きあった。

「例の『誰かさん』から手紙が届いていますよ、ユージーン様」

ダニエルは、ユージーンに近づき小声で言うと、盆にのった郵便物の中からその封筒を取り出して見せた。

「のこりは、部屋に運んでおきましょう」

ダニエルはそういつて、手に取った封筒だけをユージーンに手渡した。

ユージーンはダニエルの言葉には特に答えず、ただ頷いてそれを受け取った。

「……どうしても教えてくれないんですね、ユージーン様」

ユージーンは、ダニエルの言葉に軽く口の端を引き上げたが、やはり何も言わなかった。

「『手紙の相手がどなたか』をですよ？」

「ダニエル……相手が実際にだれかなんて、いまさらお前にとって意味がないことが解らないのか？」

「は？」

ダニエルは、突然のユージーンの言葉に少し当惑した。

「この手紙を、わたしが楽しみにしているのだということそれ自体が、一番重要な秘密だというのに？ お前はいつとう最初から、それに勘づいていただろう」

ユージーンはこう言って苦笑いを見ると、手にした封筒で、軽くダニエルの頭を小突いてみせた。

満ちる月欠ける月（2）

23

しばらくの間迷ったが、ユージーンは、出がけにダニエルが気を利かせて渡してくれたカロリーノからの手紙をポケットに入れた。すぐにでも中を読みたい気持ちと、一日の終わりにゆっくりと楽しみたいような気持ちの両方が、葛藤していたのだった。

ユージーンは馬車に乗り込むと、「シテイへ」と行き先を告げた。

実際のところ、ユージーンのパブリックスクール時代からの友人、バートラム男爵子息のアルバート・チェスタートンの容態は思わしくなかった。

——ストラウドの屋敷から帰ってきた途端、チェイニーの夜会へと足を運んだあの日。

真夜中近くに、バートラム男爵宅からかかってきた電話の様子はただ事ではなかった。

ユージーンは、電話の後、結局そのまま、バートラム男爵宅へと診察に赴いた。

ユージーンが男爵宅についた時、チェスタートンは長いすに横たわりながらも、表情を作り、ユージーンを迎え入れるくらいの落ち着いたき取り戻していた。

「マクラ克蘭……すまないこんな時間に。家の者が大げさで」

だが、顔色と冷汗の様子から、それがチェスタートンの気丈な性格だからこそ気を張って、かろうじて保つことができている態度にすぎないということを、ユージーンには見て取った。

「……医者にとってはまだ胃の口だ、チェスタートン、どこが痛む？」

チェスタートンは返事の代わりに、鋭いうめき声を上げた。

「背中か？」

ユージーンは、チェスタートンの肩胛骨の下あたりに手を伸ばした。

チェスタートンは、ふたたび押し殺すことができなくなったのか、うめき声を漏らした。

「痛みが強いようだな、チェスタートン、これまでになにか気になる事は？ 血尿とか」

チェスタートンは歯を食いしばって、ただ頭を振った。

「……結石じゃない……？ まさか。」

その日は結局、あまりのチェスタートンの痛みの強さに、ユージーンはモルヒネを投与するしかなかった。

ユージーンの初診時の不安は、当たっていた。

病院での細かな診察を終えて、最終的にユージーンがチェスタートンに下した診断は、膵臓がんだった。

それも末期の。

チェスタートンにどう結果を伝えるか、ユージーンは迷った。

しかし、彼はユージーンが何も切り出す前に、自分の病状がかなり思わしくないことを悟っていた。

「なあ、マクラ克蘭。俺は後どれくらいなんだ？」

第一声でこう切り出され、さすがのユージーンの医師としてのポーカーフェイスにも動揺が走った。

「嘘はつくなよ？ マクラ克蘭」

チエスタートンはなおも念を押した。ユージーンも、真実を話さざるを得なかった。

「痛みさえなければ、しばらく不自由はなさそうだ、なあ、マクラ克蘭。俺が仕事を続けられるように薬をつつてくれ、この間のように」

チエスタートンは自らこう希望した。彼はシティーのディーラーだった。

——そして、今日もユージーンはシティにあるチエスタートンの勤めるバークレーズへと向っていたのだった。

ここ最近、しばしば往診に訪れることから、バークレーズのチエスタートンの部屋にもすんなりと通されるようになっていた。

「調子はどうだ？」

ユージーンはカバンを開けながら、努めて明るくチエスタートンに声をかけた。

チエスタートンはデスクの椅子から立ち上がり、長いすの方へと移ると横たわった。

「ああ、まあ良くも悪くもないね、マクラ克蘭」

チエスタートンは、相変わらぬ気丈な口調だったが、ユージーンは、彼が大分やせてきていることに気がつかないではいられなかった。

「ものは、食べられているのか？ チェスタートン」

チェスタートンは自分シャツの袖をまくり上げながら答えた。

「そうだな……飲み込むのが難しいこともあるかな」

ユージーンは、モルヒネの分量を考えていた。

これ以上投与すれば、おそらくチェスタートンは仕事がおぼつかないであろう。だが、量が足りなければ痛みも押さえられない。

「チェスタートン。言いにくい……これから薬の量を増やさざるを得なくなるだろう、そうなる」と

チェスタートンはユージーンが言い終わる前に、口を挟んだ。

「ああ、そうなると仕事が出来なくなると言いたいんだな？ マクラ克蘭」

ユージーンは同意の印にチェスタートンの目をしっかりと見据えた。

「解っている、今はもういろいろとキリをつけるための後始末をやっているだけだ、いつ死んでもいいようにな」

「チェスタートン……！」

ユージーンは思わず声を鋭くした。

チェスタートンは微かに笑い声をたてて、ユージーンをなだめるように言った。

「俺はなあ、マクラ克蘭。男爵家の五番目だ。自分の力だけで生きていかなければならないってことは、父親からはたたき込まれてきたさ。何がどう間違えたって俺に爵位は回ってこないからな」

ユージーンが注射を終えるまで、しばらく口をつぐんでから、チェスタートンは続けた。

「ディーラーは随分と俺に向いた仕事だと思っていたよ。実入りもいい……ただきつい仕事だ。そのうち小さなカントリーハウスを買

うくらいに金を貯めたら、これは辞めようと思ってたところだったんだ」

ユージーンが注射跡を押さえ、処置をしている間に、さらにチェスタートンは言った。

「嫁さんを貰って、子供も作って。夏は釣りをする……良い考えだろう？」

「……そうだな」

「結局、自分の家も家族も持てなかったな。何のための金儲けだったのか、疲れたよ……」

「チェスタートン……」

ユージーンは言葉がなかった。

「帰りたいんだ……子供の頃に住んでいたコーンウォールのカントリハウスに。マクラ克蘭、最近はそのことばかり考えている、今時分は柳の下で……鱒を釣って」

チェスタートンはうとうとと、意識をなくし始めた。

……薬が多かったか？

ユージーンはチェスタートンの脈を取りながら、聴診器を彼の胸に当て、しばらくの間、容態を注視した。

やがて、チェスタートンは目を開けた。

「チェスタートン、大丈夫か？」

ユージーンの問いかけに、チェスタートンはしっかりと頷いて見せた。

そして、寝椅子からゆっくりと身体を起こして、チェスタートンはふと言った。

「そつえば、コーネリアスのことだが……どうやら正式にストラ

ウド侯爵を継いだようだな」

「……そうなのか？」

ユージーンには初耳だった。

「まあ、こういう場所は情報が早いからな……」

チェスタートンはやや自嘲気味に付け足した。

ユージーンはふと、レディ・エミリア・ウォーショースクの言葉を思い出した。「どうもストラウド侯は亡くなるちよと前くらいからなにかとシテイの方に用向きがあったようよ……」

「チェスタートン、亡くなったストラウド侯爵が、最近シテイになにかと出入りがあったとい話を……」

ユージーンがそう口にした途端、チェスタートンの身体が一瞬痙攣した。

それは、体調の方が急変したのではないかとすら思うほどの、あまりの動揺ぶりだった。

「チェスタートン？」

「あ、ああ。マクラ克蘭。悪いが、顧客の情報というのは口外できない物なんだ」

……「顧客」？

ユージーンはすぐにチェスタートンの言葉に疑問を感じた。彼は明らかに普段とは違う様子だ。

「……ストラウド侯爵は、『君の』顧客だったのかい？」

チェスタートンは、自身が明らかに失言したことに気がついたようだった。

「悪いが、この話はもういいだろう？ ドクター・マクラ克蘭、今日はありがとう」

こう言われては、ユージーンはチェスタートンの部屋から退出せざるを得なかった。

部屋を出る前に、ユージーンは医師として、チェスタートンにこう言い残した。

「食べ物が喉を通りにくいようなら、半熟卵を試すといい。チェスタートン、ただ、ゆでるのはごく短くだ。それだと喉を通るはずだから、いいね」

それは、どうにもならない最期の患者に、死の直前まで栄養を取らせる方法のひとつだった。

ユージーンはチェスタートンの部屋のドアを閉めた。

満ちる月欠ける月（3）

24

家に戻った時、ユージーン気分は最低だった。

その日に限って、バークレーズのチェスタートンのオフィスへの往診の後、病院に顔を出したところ、容体の悪い急患が引きも切らなかったのだ。

結局、ユージーンは夕食をとることもできないまま、真夜中過ぎにやっとケンジントンの『ザ・プレイス』に帰りついた。

ユージーンがぐったりと自室のソファアに身体を寄りかかせていると、ノックがあつた。

ダニエルだった。音でわかる。

「入れ、ダニエル」

ユージーンは顔も上げずに、それだけ言った。

ダニエルは、ソファアの背もたれの後ろまでやってきて言った。

「お帰りなさいませ、ユージーン様。そのご様子では、午後のお茶も夕食もお召し上がりでないようですね」

返事をするのも億劫なほど消耗していたユージーンは、首を曲げて、顔だけをダニエルの方に向けた。

「……コーヒーと何か、食べるものを持ってきてくれ、ダニエル」
こう言うと、ユージーンはまたソファアの背に頭を預けた。

「コーヒーですって？ ユージーン様、この時間から！ ひよつと

して眠らないおつもりですか」

今度は、ユージーンは目だけをダニエルに向けた。

「……そういうつもりはないが、何かまずいかな？　ダニエル」

返事の代わりに、ダニエルは溜息をついた。

「上着をお脱ぎしないと、皺になりますよ、ユージーン様」

ダニエルはユージーンの身体から黒のフロックコートをひきはがしにかかった。

「まったく、誰がアイロン掛けすると思ってるんです？」

ユージーンは靴を蹴るように脱ぎ捨てると、ソファアのひじ掛けに両足首を載せた。

「上着は、皺のままでなんでもいいから……。とにかく、食うものと飲み物を頼むよ、ダニエル」

ユージーンはそのまま、目を閉じてうたたねをし始めた。

「……ユージーン様、風邪をお召しになりますよ！　まったく！」

ダニエルの声で、ユージーンは目を覚ました。

ダニエルは、サイドテーブルにカップと皿を並べ始めた。

ユージーンが手渡されたのは、ホットミルクだった。

「……仔犬じゃあるまいし、なんだってこんなもの持ってきたんだ？　ダニエル」

おまけに皿に載っていたのは、ビスケットだった。

ダニエルは、ユージーンをにらみつけるように見てから言った。

「寝る前にはこういうものがないんです。これを召しあがったら、さっさとお休みください、朝食はたくさん用意するよう、コックには伝えておきますから！」

「……一体、なんでそんなに突っかかるんだ、ダニエル？」
ユージーンはビスケットをかじりながら尋ねた。

ダニエルは、またもやいらだたしげに溜息をついた。

「そういう働き方をしていると、今にお体を壊しますよ、ユージーン様。医者が病気になってどうするんです？」

「ダニエル、それは心配しているのか？ それとも小言を言ってるのか、どっちだ？」

ユージーンはカップのホットミルクも飲み干した。

ダニエルは、やっと自分がむやみと苛立っていることに気が付いたようだった。

ユージーンのカップにホットミルクを注ぎながら、ダニエルはいつものように片えくぼの笑みを浮かべてこう続けた。

「ユージーン様、考えてもごらんなさいませ。病気の医者にかかりたい患者なんていますか？」

そして、日中、ユージーンの机の上に置いておいた郵便物を取り上げると、ソファアのユージーンに手渡した。

「今、ナイフをお持ちします」

「ユージーン様、いいですね。ちゃんとベットで寝るんですよ！」
念押しをしながら、ダニエルは部屋を出て行った。

ユージーンはいくつかある封筒の差出人をチェックした。

ふと、手が止まる。

差出人の名前に、ストラウド侯爵とあった。

もちろん亡くなった方であるわけがない。

コーネリアスからだ。

そこでユージーンは、はたと思いだした。
カロリーノからの手紙……！

そう、上着のポケットに。

ソファアを立つて部屋を見渡したが、今日来ていた上着は見当たらない。

おそらくダニエルが、手入れのために持って出たのだろう。

今、一番読みたい手紙だというのに……。

とはいえ、この時間から、またダニエルを呼び戻すのは、さすがに気の毒だった。

フットマンの一日がどれほど長くて忙しいものが、ユージーンにはよく分かっていた。

ユージーンはコーネリアスからの手紙を開いた。

内容はひどく簡潔なものだった。というより、そっけないとでもいう方が適切なほどだった。

侯爵家の用向きで、来月にはロンドンへ行くこと、チェルシーのタウンハウスに滞在すること。

……社交目的がメインではなさそうだ。

コーネリアスは、六月のロイヤルアスコットにも顔を出していない。もちろん、ユージーンだって行ったわけではなかったが、患者のレディ達の口の端には、しばしば六月の社交イベントへのコーネリアスの不在がのぼっていたのだ。

やはり、まだまだ片付かないことが多いのだろうか？

……今日のチェスタートンの様子も気になった。

故ストラウド候が、チェスタートンの顧客だった？

ごく短い手紙の最後に、カロリーノの名を見つけ、ユージーンはほんの一瞬だが自分が動揺したことに気がついた。

診察を受けさせるため、ロンドンに同行させると。

別に、コーネリアスに対して何も後ろめたいところはない。
彼女について、何も……。

手紙のやり取りが数回。それだけのこと。

……いや。

ユージーンは、その言い訳を自分で否定した。

それだけではなかった、自分自身については、そうではない。

カロリーノはどうかは、わからないが……。

レディ・エミリア・ウォーショースクの手管には動じなかったが、

あの日から、ユージーンの男性としての気持は高ぶらされたままだった。

そして、その気持ちは、カロリーノへと向かっていた。

……なぜ？！

自分でも軽率な自身の行為に苛立ってしまうほどだ。

なぜ、彼女に、カロリーノにキスなどしてしまったのか。

カロリーノの髪、頬のやわらかな感触。

それらの記憶が、しばしばユージーンの胸に込み上げて、激しい欲望に火をつけた。

時には、ユージーンは夢の中で欲情に身を任せ、キス以上にカロリーノに触れた。

だが……。

彼女からの手紙は、そんなユージーンの罪悪感に満ちた猛りを、不思議と鎮めてくれるのだった。

その手紙によつて、ユージーンはカロリーノへ、別の意味での思慕を高めていった。

それは、彼女との肉体に対するのとは、まったく違った気持ちだった。

美辞麗句に飾られた、礼儀を重んずるうわべだけの手紙。

これまでユージーンが女性から受け取ってきたのは、しょせん、そんな手紙だった。

しかし、彼女からの、カロリーノからの手紙は違った。

読んだ本についての率直な感想――ああ、彼女はおそろしく多読だ。瞠目させられるような分析も、しばしばあった。

美しいストラウドの庭を描写する彼女の感性のきらめきには、いつも感心させられた。

人いきれのする慌ただしいロンドンで、仕事に追われるユージーンにとつて、カロリーノの手紙にある木々や生き物たちの表現は、心を洗うようなものだった。

ダニエルの言葉を聞いても、よく思う。

カロリーノもダニエルも、自分にはないものを持っていると。

それはきつと生まれついてのものなんだろう。ものを見て、そしてそれを表現する力。

ならば……。

また、カロリーノと逢って話をする事ができたなら。

その時に、自分の中の彼女への欲情の部分を、きれいに洗い流すことはできないだろうか？

ユージーンは、そうであって欲しいと思いつつも、別の危惧も持っていた。

……それは。

彼女に逢うことによって、逆に、男としての欲望に火をつけてしまう可能性だってあるのだということだ。

満ちる月欠ける月（4）

25

翌朝、ユージーンがモーニングルームに降りていくと、シエスタベリ伯もちょうど朝食をしたためているところだった。

「パブリック・スクールから休暇で帰ってきた子供向けじゃあるまいに、今朝はすごい量だ」

シエスタベリ伯は、ユージーンを見るなり言った。

「おはようございます、父さん」

ユージーンは父の言葉には答えず、席に着いた。

シエスタベリ伯爵の給仕をしていたバトラーが、ユージーンのカップにコーヒートを注ぐ。

「おおかた、ヤンガーが、夕べ晩飯を食いはぐれたってとこなんだろうが？」

シエスタベリ伯はユージーンに向かってではなく、バトラーに向けてこう言った。

……解っているなら、いちいち言うな。

という言葉を、胸の中でつぶやいてから、ユージーンはコーヒを口にした。

「ときに、ヤンガー」

ユージーンがスコーンにかけすぎた蜂蜜に苦戦しながら、口に運んでいると、シエスタベリ伯、アレックス・マクララン卿が唐突に言った。

「医者というのは、随分儲かるものなのか？」

ユージーンのスコーンから、クロテッドクリームが、ぼとりと皿に落ちた。

「朝っぱらから、いきなり。なんです？　ロード・シェスタベリ」
シェスタベリ伯爵は、ユージーンの反応など、またしてもまるでお構いなく話を続けた。

「昨日、お前がバークレーズに入っていくのを見たものでな、あんなところに用事ができるほど潤っているのやらと思つてな」

ユージーンは汚れた指をナプキンでぬぐいながら、少しいらだたしげに父に答えた。

「……往診ですよ、一体、何を考えてるんです」

「ああ、そういうことか、まあそんなところだな、なるほど」

―その件についてだけは、わたくしよりあなたのお父上にかがった方が、話が詳しいかもしれないよ……

ユージーンの脳裏に、エミリア・ウォーショースクの言葉がよみがえった。

「父さん、故ストラウド侯爵が、最近シティに出入りしていたという話を耳にしました」

ユージーンはこれとばかりに、切りだした。

「ほう？　それで」

シェスタベリ伯は、のらりくらりとかわしている。

「何かそれについてご存じじゃないかと思ひまして」
ユージーンは端的に尋ねるしかなかった。

「なんだ、結局わからんのか、何も」

とシェスタベリ伯は突き放すように笑つて見せたが、ふと真剣な表

情に戻って言った。

「まあ、どうやって耳にしたかは知らんが、シティの件を嗅ぎ出したところまでは、お前にしてはなかなかの出来だな、ヤンガー。やつらが絡むとみな口が堅くなるから」

「父さん……それで」

ユージーンは話を先へ進めようとしたのを、シエスタベリ伯は大きく手を振り、きっぱりと遮った。

「わしにも、それ以上はわからんな、ヤンガー、候が具体的に誰とつるんでたのかすらわからん。せいぜい、候がバークレーズに出入りしていたことくらいだな、わしが知っているのは」

……バークレーズ、やはり、コーネリアスの父親はチエスタートンの顧客だったのか。

「ところで、ヤンガー。お前はバークレーズのどこへ往診にいったんだ？」

シエスタベリ伯は、突然話を差し替えた。

「ひょっとしてご存じないのかもしれませんが……患者のことを、医者が話して回るわけにはいかないんですよ、父さん」

ユージーンはこの上なく、皮肉めいた口調で言い返した。

……銀行屋が『顧客』のことを話せないのと同じようにね。

「やはり、『ギャンブラー』チエスタートンが健康を害しているという噂は、本当だったのだな。おやおや、チエスタートンは、ヤンガーお前と同じくらいの年かさじゃないか。ヤツもお前の学友かな、ヴェルマス子爵と同じで。いやいや今はもうストラウド侯爵と呼ぶべきか」

……やられた。

「医者というのは、それほど儲かるものなのか？」なんて。あんなこれ見よがしにカマをかけられていたっていうのに。うっかりしすぎだ。

いまさら否定しても何の役にも立つまい。

ユージーンはむっとり黙りこむしかなかった。

しかし、もうこの話が出てしまったのなら、訊けることはとりあえず、シエスタベリ伯に訊いたっていいじゃないのか？

ユージーンは気を取り直した。

「ところで父さん。『ギャンブラー』チェスタートン、って、一体なんですか？」

シエスタベリ伯は、紅茶のカップにたつぷりとミルクを注ぎながらではあるが、この質問にはすぐに答えた。

「あの界限での、アルバート・チェスタートンの二つ名だ。始めたばかりの頃は、あれでもヤツは堅実なところもあったがな。もうこのところは……あれでは、すっかりばくち打ちだ」

「……父さんは「ばくち」がお好きかと思ってましたが？」

ユージーンがつぶやくように言うと、シエスタベリ伯は、ミルクテイを飲みこんでから、眉を大きく吊り上げた。

「おいおい、ヤンガー。お前は本当に物がわかつとらんな。わしはギャンブルはしない。犯さなくていいリスクは絶対に犯さないんだから、大きな儲け一つに入れ込んだりしない。土地も、株も債権もどれも、どこかが行き詰まってもあせって大勝負に出なければな

らないようなことにだけはならんようにしてある。それが信条だ」

「ストラウド侯爵は、大勝負に出ていたんですか？」

ユージーンはここぞとばかりに、父をつついた。

シエスタベリ伯爵の返事は、存外あっさりとしていた。

「さてね、詳しいことは知らんが、おそらくそうだろう。様子からいって、負けの込んだポーカーで、素人のやりそうなことだからな」
「父さんはチェスタートンの『顧客』になったことは？」

シエスタベリ伯は、嘆かわしいとでも言わんばかりに大きくかぶりを振った。

「ありえんな。さっきも言ったが、わしはばくちは好まん。『ギャンブラー』チェスタートン自身、最近は首が回らんようだぞ」

「どういふことです」

「ヤツは自分でも相場を張っているからな、それこそ、負けの込んだ勝負で後がないんだ。見境なく危なっかしい勝負に出とる」

……なんてことだ。

ユージーンは昨日のチェスタートンの言葉を思い出していた。

コーンウォールのカントリーハウスに帰りたいたと。

黙り込んだユージーンに一度ちらりと視線を向けて、シエスタベリ伯爵は朝食の卓を立った。

モーニングルームを出ようと歩き出しながら、シエスタベリ伯は、ふと思いついたように口にした。

「なるほど、ストラウド侯爵がつるんでいたのは、『ギャンブラー』チェスタートンだったわけだな？」

…… 本当に、殺しても死にそうにない男だ。

わが父ながら、何とも小憎らしい。

今日は、朝っぱらから、ユージーンは完全に父にしてやられたわけだった。

シェスタベリ伯はユージーンの後ろに回ると、肩を軽く三回叩いて言った。

「昔からのお前の悪い癖だがな、ヤンガー。脇が甘いぞ、脇が」

朝食のテーブルでひとり、放心しているユージーンのもとに、ダニエルが近寄ってきた。

「果物はいかがです？ ユージーン様」

「ほっといてくれ、ダニエル」

ユージーンはダニエルに八つ当たりのように冷たく言った。

ダニエルはそんなユージーンの言葉など、まるで意に介していないといった様子で続けた。

「では、こちらはいかがです？」

ユージーンの目の前に、封筒をはさんだダニエルの右手の人差指と中指が差し出された。

「……ダニエル」

ユージーンがそれをつまみとろうとした瞬間、ダニエルは封筒を素早く引き揚げた。

「読まなかったんですね。ダメじゃないですか？ 大事なものを忘れたりして」

ダニエルは、例の「してやったり」の表情を浮かべている。

「小さい頃はわたしも、好きなものは後に残しておいたものでしたがね、ユージーン様」

封筒を手にしたまま、ダニエルは嬉しそうに続けた。

「今は違いますよ。うちは貧しかったですし、ぼやぼやしていると上の者たちに好いものはみんな取られてしまいますから。好きなものは、なにはなくとも、まっさきに口にいられますね」

そして、ユージーンの上着に封筒を滑らせて、ユージーンの肩を軽く三回ほど叩いてから言った。

「脇が甘いですよ、ユージン様。脇が」

満ちる月欠ける月（5）

26

「ロンドンにはどれくらいご滞在なさるご予定で？」

バーンズは、コーネリアスのカップに紅茶を注ぎ入れながら尋ねた。

「そうだな、ひと月、どうかすると秋口になるかもしれない」

コーネリアスはカップを手に取り、口に運ぶ。

「いろいろと顔を出さざるをえない集まりもあるしな……」

しかし、コーネリアスが本当に気になっているのは、社交のことはなかった。

父の取り散らかした、ウォーレンの家の財産管理……。

ここところ、急にシティがらみのやり取りのやり取りが増えていたようだった。

祖父の頃から、ロイズのネームであった以外、ストラウド侯爵家はあまり金融には縁がなかったはずだったのに。

とはいえ、実のところは、現在の家の状況が次第に明らかになるにつれ、社交の方の重要性も増しているとは言えなくもなかったのだ。コーネリアスとの結婚を望む相手は、今のところ事欠かない。

ウォーレン家、ストラウド侯爵は名門である。財産も多いと思われるはずだ。

今のところは……。

しかし、コーネリアスはこれからの展望には暗澹たる思いであった。状況は、今自分が把握しているよりも、ずっと悪いかもしれない。少し前までは、縁談などあわてて飛び付く気もまるでなかったコー

ネリアスであつたが、このところはストラウドにとって有益となる自分の縁談を急ぐ必要性を感じつつあつたのだ。

……それこそ、アメリカの富豪の娘でも見つけてこなければならぬのか。

コーネリアスは思わず自嘲した。

バーンズがコーネリアスの顔を怪訝そうにのぞきこんでいる。

そこではじめて、コーネリアスは自分が実際に笑い声を洩らしていたことに気がついた。

コーネリアスは、バーンズに軽く頷いて見せ、彼を書斎から下がらせた。

コーネリアスは紅茶のカップを脇に押しやると、書きかけていたユージーンへの手紙を取り上げた。

内容は、主としてカロリーノの診察についてだ。

ユージーンが、父の弔問のため、ここに訪ねてきたとき……。

高熱を出したカロリーノの診察のあと、ユージーンはカロリーノの体調に気になる点があると言った、あのとき。

コーネリアスの頭に浮かんだのは、亡くなった母親の、レディ・レティスのことだった。

彼女もしばしば、熱を出していた。

レディ・レティスはカロリーノの出産の際に亡くなったので、結局、母の日頃の不調に何かはつきりした原因があるのかどうかは、解らないままだった。

カロリーノはレディ・レティスに似すぎている。

だから、カロリーノの体にどこが悪いところがあるとするなら、それは、もしか母ゆずりなのではないか。

コーネリアスは、そう考えていた。

長い付き合いだが、これまでコーネリアスは、ユージーンに手紙を書いたことなどほとんどなかった。

学校が終わってから、互いに顔を合わせる機会も随分と少なくなつたが、それでもそういうことはしなかった。

あえて、手紙でいろいろと知らせたり、無理に逢つたりするのは、不思議と、なんとはなく不自然なような気がしていたからだ。

ひさかたぶりで、偶然、どこかの夜会で顔を合わせたとしても、互いに何も変わらずうなづきあえる。

そう、寄宿舎の廊下で、ふとすれ違った時とまるで同じように。だから、二人の間にはそんなことはあえて、必要ないのだと。

先だつて、ロンドンに行きを知らせる手紙をユージーン宛に書いたときは、コーネリアスの手が、何度も止まつた。

……書きたいことがないわけじゃない、あるのだ、僕には本当に書きたいことが……。

コーネリアスは手を止めたまま考えていた。

しかし、どう書けばいいのか。いや、そもそも、自分は本当は何を書きたいのだろう？

結局のところ、書き終えた手紙は、要件の羅列、箇条書きに毛が生えた程度の簡単なものにすぎなかった。

コーネリアスは、今もまた、その時と同じことを繰り返していた。

今、書きあぐねているようなことは、おそらく、自分の心にある心配事や得体の知れない不安等なのだろうが……。

……そんなことは、ロンドンで、ユージーンと顔を合わせて、おいおい、口にして、話をすればいいだけのことだ。

そう自分を納得させて、コーネリアスは、またもや、ごくそつけない内容となつた手紙を封筒に入れて封をした。

ふと、軽いめまいが押し寄せてくるのを、コーネリアスは感じた。最近、いつものことだった。

……少し、庭でも歩こうか。

コーネリアスは封筒を手に、書斎を出た。

コーネリアスが階段を降り、グレートホールを歩いていると、回廊を突っ切って歩いて行くバーンズの背中が見えた。ちょうどよい。

手にしていた封筒を預けようと、その背中にコーネリアスは声をかけようとした。

しかし、バーンズは銀の小盆を手にまっすぐと館の奥へと向かっていた。

……手紙？

誰宛てだというのか？ コーネリアスは訝った。

父もいない今、自分以外にバーンズが手紙をあやって運ぶなんて……。

そこまで考えて、コーネリアスの心にはひどい自己嫌悪の気持が湧き上がってきた。

これでは、まるで自分も、父親と同じではないか？！

あの奥にあるのは、カロリーノの部屋だ。

いや、カロリーノの、妹の存在を忘れようとしているわけではない。決してそうではないのだ。

しかし、カノに対して、一体誰が手紙なんかよこすというのだろうか？
そういえば……。

僕は一度もカロリーノに手紙を書いたことはなかった。

コーネリアスは沈んだ気持ちで、バーンズの後を追った。

レディ・カロリーノは部屋にはいなかった。

バーンズは、つる草の浮彫の小さな書き物机の上に、カロリーノ宛ての手紙の載った銀の盆を置いた。

静かにカロリーノの部屋を出て、扉を閉めて振り返ったところで、バーンズはひどく驚いた。

もちろん、そのようなことは表にはまったく表しはしなかったが……。

驚いたのは、そこにコーネリアスが立っていたからだった。

カロリーノ様に手紙をお届けしたところで、なにも後ろめたいことなどないはずだ。

……わたしは、なぜ驚いたりするのだ？

バーンズは思った。しかし、自分でもその理由に、うすうす気がつかないでもなかった。

……手紙の主が、マクラ克蘭様だからだと。

コーネリアスは手にしていた封筒を、すかさずバーンズに差し出した。

「これを出しておいてくれ、バーンズ」

「かしこまりました」

バーンズは、ごく無表情にそれを受け取った。

バーンズに向かって、「一体誰からの手紙を運んできたのだ？」と問いただすのを、コーネリアスはすんでのところで思いとどまった。

と、バーンズの後ろの扉の向こうで物音がした。
おそらく庭にでもいたのであろう。テラスを通って、カロリーノが部屋に戻ってきたのだ。

コーネリアスは、バーンズを押しつけるようにして、扉をノックした。

自分でもノックの音が、かなりぞんざいで乱暴であることに、コーネリアスも気がつかないではなかった。

そして、部屋の主の返事も待たず、コーネリアスは慌ただしく扉を開けた。

扉を開けたコーネリアスが最初に目にしたのは、テラスのそばの書き物机の脇に立って、封筒を手にしている妹の姿だった。

ここ数年の流行である、ヒップを後ろに突き出すS字型のシルエットのコルセットをつけ、全体的にほっそりと仕立てたドレスを身につけている。

長い銀色の髪は、ごく簡単に巻き上げただけでアップにしてあるが、長く白いうなじが露わになっていて、まるで、それまでとは別人のように大人びて、洗練されて見えた。

「コーネリアス兄さま？ どうなさったの、突然？」

ただ、そうコーネリアスに問いかける様子は、これまでと何も変わるころはなかった。

カロリーノが、コーネリアスの瞳を真っ直ぐに覗き込む。

コーネリアスと同じエメラルドの瞳、だが、もう片方は亡き母の瞳の色。ヴァイオレット。

そして、やや首をかしげるようにするカロリーノのしぐさが、コーネリアスの目の中で、ありし日の母の姿とだぶった。

部屋に飛び込んでみたは良いが、特に用事があつたわけでもない。コーネリアスは、なにか適当に思いつきを答えようとカロリーノに歩み寄った。

その時、コーネリアスは気がついた。

カロリーノが両手でそつと胸に押し当てるように持っている封筒。封筒の封蝋には、見覚えがあつた。

はつきりとは読めなかつたものの、その差出人の筆跡にも。

どちらも、さつき自分が返事を書いた相手、旧友のロード・ユーージン・マクラ克蘭が自分に寄こした手紙と同じものであつた。

その瞬間、コーネリアスはカロリーノに対し、なにか適当に返事をすることも忘れた。

そして、軽くひとこえ乾いた笑い声をたてると、踵を返し、ややあつけにとられているバーンズと、不思議そうな表情を浮かべているカロリーノに背を向けると、彼女の部屋から出て行つた。

……ユーージンが、カロリーノ宛に、直接手紙を出しているなんて僕への手紙になにかことづてをするのではなく？

別に気分を害するようなことじゃないじゃないか……？

ユーージンの中の冷静さを保った声は、もう一方の憤怒に駆られた、そつ、怒っていると言つてもいいような激情をたぎらせている、もう一方の自分に呼びかけていた。

それにしても、なぜこんなに苛立たしいんだろう？

カロリーノとユージーンが、二人ともサンザシの花びらをつけて、コンサバトリに現れた、あの五月の午後のことを、コーネリアスは思い出していた。

まあ、いい。

ふたりが親しくなったからといって、僕がこんなに腹を立てる必要が、どこにあるという？

コーネリアスは闇雲に屋敷の廊下を歩きながら、また自分に問いかけていた。

そして、肖像画の掛かったホールまで来たところで、コーネリアスは急に立ち止まった。

……裏切られたような気持ちだったのだ。ユージーンに。

自分は、ユージーンにに話したいことがあるのに、聞いてほしいこともあるのに。

何も手紙にしたためることが出来ない。

それなのに、ユージーンは妹とは手紙を？

手紙をやり取りしているなんて。

「母さま……」

ユージーンは母の、レディ・レティスの肖像画を見上げ、力なくつぶやいた。

夏の嵐（１）

27

チエルシーのタウンハウスを留守にしていたのは、ほんの一、二ヶ月の間だったというのに、コーネリアスには、それが随分と、遠い昔のように感じられてしかたなかった。

タウンハウスの執事は、コーネリアスが連れてきたカロリーノを見て、驚きの表情を隠そうともしなかった。もともと、ここはコーネリアスひとりが使っていた館だ。

カロリーノが滞在するにあたり、女性の身の回りことを手伝えるようなメイドが必要だったから、前もって執事には、その旨を報せておいたのだ。

彼女の来訪は、驚くに当たらないはずなのに……。

父の死の報せを受け、ストラウドのカントリーハウスに赴くまで、コーネリアスにとって「自分」の執事というのは、ストラウドのバインズではなく、ここチエルシーの館の執事だった。そう、ほんの少し前までは……。

しかし、バインズの水際だった采配ぶりに、すっかり慣れてしまったコーネリアスにとっては、チエルシーの執事の、ほんのわずかの粗相やゆき届かなささえも、気に障る。

「妹を連れてくることは、報せてあったな？」

コーネリアスは、不機嫌さを露骨に声ににじませた。

「……はっ、カロリーノ様のお部屋の用意は調べてございます」

執事は表情をこわばらせながら、あわてて頭を下げた。

そのうしろでは、数人のフットマンが、コーネリアスとその側にいるカロリーノを盗み見るようにしながら、互いに耳打ちをしあっている。

コーネリアスの不快感は、さらに強まった。

「兄さま……」

コーネリアスの背後から、カロリーノが声をかける。

ふと、コーネリアスは、自分があまりにも否定的な感情にとらわれていることに思い至った。

妹の方を振り返り軽くうなづいてみせると、コーネリアスは、今度はやや落ち着いた口調で、執事に命じた。

「カロリーノを部屋へ、彼女は疲れている」

「疲れてはいないわ、兄さま。大丈夫」

カロリーノはすぐにこう言うと、こぼれるように微笑んだ。先ほどまで、主の不機嫌そうな言動に身を硬くしていた執事も、その微笑みに、思わず我を忘れて見とれている。

たしかに、今、カロリーノの頬はうつすらとバラ色を帯びており、スミレ色とエメラルド色の瞳はかすかに潤んで、きらめいている。だが、それは彼女が、旅の疲れを感じる余裕もないほど、興奮していたからだということが、コーネリアスには解っていた。

……初めて。

生まれて初めて、ストラウドの館を出て、初めて鉄道に乗り、そして、生まれて初めてロンドンの、チャリング・クロスの雑踏を目にして、カロリーノ・ウォーレンは好奇心で胸がはち切れんばかりだったのだらう。

だからこそ、コーネリアスは、妹を早く休ませたかった。
疲れにも気付かないような、その興奮ぶりが、とても危なっかく感じられたのだ。

いや……

実際のところ。疲れていたのは、自分の方だった。

コーネリアスにとっては、ロンドンからストラウドの館までの移動などというものでもないはずなのに。

……このたまらなく不機嫌な気持ちは、このひどい疲労感からきているのかもしれない。

カロリーノが心配げな表情で、まだ自分を見つめ続けていることに気がつき、コーネリアスは、思わず漏れそうになった溜息を押しとどめた。

「とにかく夕食まで、少し休みなさい……」

コーネリアスは妹に言うてから、執事に「シェリーを」と命じ、書斎へと向っていった。

研究室の机の上に、行儀悪く足をのせ、ユージーンは目を閉じて、深く溜息をついた。

このところ、秋に出席するパリの学会で発表する論文の執筆に、根を詰めることが多くなっていた。

目頭を押さえていた指を離して瞼を開くと、ユージーンは机の上の封筒を手にとった。

そして、カノからの手紙を封筒から取り出しすと、目を落とした。

彼女の手紙には、コーネリアスの体調が相変わらず、すぐれない様子が綴られている。

一方、コーネリアス本人からといえば、用件のみの素っ気な手紙しか届かず、何ともはつきりしたことは解らないのだった。

「僕は君のその、他人の評価を歯牙にもかけないところに、ひどくいらだつし、それ以上に羨ましく思うよ」

寄宿学校時代、突然コーネリアスが、まったく何の脈絡もなく、ひどく険しい表情でこの言葉を自分に投げつけた時のことを、ユージーンは思い出した。

名門の長男らしい、七割の愛想の良さと三割の冷淡さ。

高慢な光を帯びた美しい緑色の瞳の上の眉を、微かに動かすこともめったにない。

ソツのない物腰のコーネリアスが、唐突に感情をぶつけるように言い放った瞬間だった。

その時くらいなものだった。ユージーンに対してでさえ、コーネリアスが、そのプライドの高い態度を崩すようなことがあったのは。

当時から、ユージーンはコーネリアスが他人の目に映る自分のあるべき姿というものに、少し縛られすぎていないかと思うことが、たびたびあった。

彼の爵位を継ぐ嫡男であるという立場が、そうさせていたのかもしれない。

はなから、何も背負うことを期待されていないユージーンとは違う。

そんなコーネリアスが、本人にその気がない以上、自分の診察など受けっこない。

ユージーンには、容易に想像が付いた。
さて、どうやってコーネリアスをなだめすかかだ……。

ユージーンは、ポケットから取り出した時計に目をやった。

そろそろ『ザ・プレイス』に戻らなくてはならない。着替えが必要だった。

今晚は夜会へ出る予定があったからだ。

バークレーズのアルバート・チエスタートンとストラウド侯爵の件については、父のシエスタベリ伯爵に上前をはねられたような形になってからこつち、何の情報も得ることはできていなかったし、ガラにもなく社交の場に出かけていって噂話を嗅ぎ回るようなこともしていなかった。

だが、そんなユージーンの耳にすら、一、二週間前からロンドンの社交界に久々舞い戻ってきた、若きストラウド侯爵、かつてのヴェルマス子爵のことは届いていた。

チエルシーのタウンハウスに戻ってきているコーネリアスは、ロンドンに到着してからずっと、非常に忙しくしており、ユージーンはいまだ旧友に逢うチャンスに恵まれていなかったのだ。

月に二回ほど決まって催される金曜日のソーンヒル男爵の夜会に、めずらしくもユージーンが立ち寄る気になったのは、コーネリアスが来るらしいと聞いたからである。

……もちろん。

花形のヴェルマス卿が、今はストラウド候だが、久しぶりにロンドンのレディ達に迎え入れられていることも、社交界の近々の話題ではあった。

だが。

それよりも人々の口の端に上っていたのは、ストラウド侯爵、コーネリアス・ウォーレン卿が伴っているレディ。

これまで、誰も知らなかった彼の妹のことであった。

今や、カロリーノ・ウォーレン嬢の美しさについての噂話を聞いたことがない者など、見当たるまい。

ユージーンは、カロリーノからの手紙を封筒に戻した。

今ではもう、ユージーンにとって随分となじみとなった、彼女の美しい筆跡……。

ストラウドの館を出発する前に、カロリーノがユージーンに宛てた手紙には、初めて経験するであろう、これからのあらゆる出来事に対する彼女の期待が、いつも以上にきらめく言葉の数々で綴られていた。

さて……。

レディ・カロリーノは鉄道に乗り、ロンドンを見て、一体何を感じたのだろうか？

ユージーンは、彼女の感想を知りたかった。

コーネリアスの顔を見る、それが今日の夜会に出かける理由だ……

しかし、彼の胸は期待にざわめいていた。

カロリーノにふたたび逢えるという期待に。

コーネリアスに逢うことと同じくらい、いや、それ以上に、カロリーノに逢いたくてたまらないのだということを、ユージーンは、自分でも認めざるを得なかった。

夏の嵐（２）

28

ソーンヒル男爵の館にユージーンが到着したときには、すでに場は随分と賑わっていた。

ユージーンは、父の知り合いや、挨拶程度の付き合いにすぎない知人の退屈な世間話に、曖昧な相槌をうちながら、周囲の噂話に耳をそばだてていた。

コーネリアスが久方ぶりにロンドンに戻ってきたことは、ここでも話題となっているようだ。

だが、どうやら実際のところ、コーネリアスは、さほど度々社交の場に顔を見せているわけでもなさそうだった。

コーネリアスに逢えたわずかのご婦人達が、自慢げにその時の様子を話しているといった感じだったからだ。

当然、噂話に花を咲かせる彼女達はコーネリアスが、今晚ここを訪れる予定であることを織り込み済みで、夜会にきているというわけだった。

入口の方で、なにかの気配がしたかと思うと、その一瞬、ホールに静寂が広がった。

しかし、それはほんの一瞬だった。人々は、まるでそんな沈黙などどこにも存在しなかったようなふりをして、ふたたび各自の会話に戻った。

だが、皆の意識は依然として、その静寂の原因となったホールの入口近くに、正確に言うといつ今しがたホールに入ってきた人物に、

向けられたままであった。

夜会の主であるソーンヒル男爵と夫人が、真っ先にその人物を出迎えている。

人々の合間を縫って、その人物の声がユージーンの耳に届いた。

……コーネリアスの声だった。

ユージーンは、周囲の人々のように見せかけだけでも憤みある態度を保とうと、努力はしてみた。

しかし、コーネリアスの方に視線が向くのを押さえることは、どうしても難しかった。

人々の頭ごし、ユージーンには、コーネリアスの後姿を見て取ることができた。

男爵と夫人に挨拶を終えたコーネリアスが、ふとユージーンの方を振りむいた。

ユージーンとコーネリアスの間には、かなりの距離がありはしたが、二人は互いが互いの存在に気づいていることを察していた。

ユージーンが見たところ、コーネリアスの表情、その如才ない態度は、いつもどおりの隙のない、涼やかなものではあった。

しかし、たとえ夜会のシャンデリアの下であつても、ユージーンは、コーネリアスの顔ににじみ出ている疲労の色を見逃すことはなかった。

……大分、痩せたな。

ユージーンがコーネリアスを一目見て思ったのは、まずそのことだった。

コーネリアスが、別の紳士に声をかけられ、さらに奥へと歩みを進めた。

その時、ちょうどコーネリアスの陰になっていて見えていなかった女性の姿に、ユージーンは気がついた。

……クレマチスだろうか。

耳の後ろに八重に咲いた紫の花を一輪だけさしている。

銀色の髪に良く映える色だ。

長い髪を結び上げて、見違えるほど大人びた様子ではあったが、その女性は、カロリーノ・ウォーレンだった。

そのほっそりとした身体を包んでいるのは、クリームがかった白のサテンと刺繍レースのイブニングドレスだ。

カロリーノのドレスは、金糸や銀糸の派手な刺繍に、あちこちを膨らませられるだけ膨らませた他のご婦人方のドレスと比べれば、少々素っ気ないと思われかねないほど、すっきりとしたものだと言えるかもしれない。

だが、そんな過剰な装飾など、彼女には必要なかった。

貴婦人達のドレスのきらめきも、カロリーノの見事な銀髪の輝きに勝るものではなく、婦人達のデコルテを飾る、どんなきらびやかな宝石も、彼女のアメジストとエメラルドを思わせる両の瞳の輝きには及ばない……。

今、自分がどれほど不躰な視線をコーネリアス達に、いや、カロリーノに投げかけているのか……。

そのことについての自覚は、ありすぎるほどではあったが、ユージーンは、それでも彼女から目を離すことが出来ずにいた。

……不意に、ソーンヒル男爵に肩を叩かれるまでは。

「めずらしい方が来て下さったようですね、ユージーン・マクラ克蘭卿。お父上にはあちこちでお目に掛かることはあるのですがね？」

男爵に声をかけられ、ユージーンは慌てて、館の主へ返礼をしめした。

「ぜひ、もっと度々いらして頂きたいですわ、ロード・ユージーン！」

男爵夫人も脇から口を挟んだ。

そして、夫人は一步ユージーンに近づくと、手にした扇を軽く立て、背伸びをするように彼の耳元に顔を近づけた。

「……すてきなレディから、お目が離せないご様子ね」

ユージーンはとっさの返事が出来ず、微かに苦笑いを浮かべただけだった。

そんなユージーンの様子を見て、ソーンヒル男爵夫人は大満足といった様子を見せた。

「もちろん、あなたもご存じじゃないでしょうけれど？ 社交の場にお出になるのは、まるで初めてのレディですものね。そうそうストラウド侯爵はご存じね、ロード・ユージーン？」

ユージーンはとりあえず、夫人に曖昧に頷いて見せた。男爵夫人はますます得意げに話を続けた。

「あの銀色の髪、ストラウド侯爵がお連れのレディはね、ロード・

ユージーン、侯爵の妹さんなんですよ。本当に、驚くじやありませんこと！ ロード・ユージーン？」

そして、ユージーン相槌も待たず、さらに夫人は続けた。

「亡くなつた侯爵ときたら、なんて秘密主義だつたんでしょう？ あんな可愛らしい方をわたくしたちから隠しておくなんて！ そう思いませんか？ ロード・ユージーン。あら、嫌だわ、わたくしったら、飲み物もおすすめしないで」

そう言いながらも、ソーンヒル男爵夫人の話は止まらなかった。

「……そうそう、お名前はね、レディ・カロリーノ・ウォーレンですわ。ああ、お兄様が爵位を継がれましたけどね、そう呼びしても差し支えありませんわよね？ もちろん」

そして、もう一度ユージーンの方に背伸びしてみせると、わざとらしく声を抑えてこう付け足した。

「ねえ、ロード・ユージーン。もし、そうお望みならなんですけれどね。わたくしがレディ・カロリーノにご紹介してさしあげてよ、いかが？」

ユージーンが、夫人に答えを返そうと口を開こうとした、その時だった。

「……マクラ克蘭さん？ ああ、そうだわ。なんて嬉しいのかしら。今日お目にかかれるなんて、思っていなかったんですもの」

カロリーノの声だった。

彼女は、男爵夫人の隣に立って、ユージーンを見上げていた。

「……レディ、お久しぶりです」

男爵夫人は、ユージーンがカロリーノに答えるのを聞くやいなや、「あらっ?!」と皮肉っぽく一声上げ、軽く目を見開いて見せた。そして、ユージーンとカロリーノに「ごゆっくり」と声をかけると、なんとも意味ありげな微笑みを浮かべて、その場を去っていった。

……やれやれ、なんとも間が悪い。

ソーンヒル男爵夫人は、これからホールのあちらこちらで、今の出来事をどれほど噂のタネにすることだろうか。

ユージーンは、少々先が思いやられる気持ちになった。

しかし、夜会になど、まだ数えるほど足踏み入れたことがないのである。カロリーノに、そんなことが解るうはずもない。

周囲の人々が、自らの会話に没頭するふりをしながらも、ユージーンとカノの話に耳をそばだてている、今のこの場の気配さえも……。

「マクラ克蘭さん？」

カロリーノが、ユージーンの瞳を覗き込むようにして声をかけた。

そう、ストラウドの庭でもそうだった……。彼女はこうやって、じっと目を見つめて話すのだ。

「よく、わたしに気がつきましたね？ レディ・カロリーノ」

ユージーンが、ふとこう漏らすと、カロリーノは目を見開いてみせた。

「誰だって気がつくと思うわ。だって、マクラ克蘭さん、ここにいる誰よりも背が高いんですもの。違って？」

カロリーノのこの言葉には、ユージーンの方が思わず笑ってしまった。

……それはそうだ、まったく……そのとおり。

苦笑するユージーン顔をみつめながら、カロリーノがさらに言葉を続けた。

「マクラランさんの背が高いことで、わたしは随分、得をした気がするの」

カロリーノが何の話をしているのか、ユージーンにはとっさには解りかねた。

「……リボンを取って頂いたとき、マクラランさん仰ったわ。こういった風に役に立つこともあるって、背が高いと」

「……ああ。確かに言ったが」

ユージーンがこう応じると、カロリーノは軽く首をかしげて微笑んだ。

「それに今日は、背が高いから、わたし、マクラランさんをすぐに見つけることができたもの」

またしても、カロリーノの不思議な、色違いの瞳にみつめられ、ユージーンは胸にざわつくものを感じ始めた。

まいったな……。

ユージーンは心の中で、小さく溜息をつくような気持ちだった。

「……レディ、ロンドンへの旅はどうでした、お疲れでは？」

ユージーンは努めて、当たり前障りなく会話を続けようとした。

……あまりカロリーノを見つめないようにと、できるだけの注意を

払って。

「疲れてなんて、全然。毎日が新しいことでいっぱい、驚いてばかりなの、マクラランさん」

カロリーノは瞳をきらめかせて微笑んだ。

甘いクレマチスの香りが、微かにユージーンの鼻先をかすめた。

ユージーンがカロリーノへの次の言葉を探し、ほんの一瞬、二人の会話に間が空いた、その時だった。

「『疲れてない』だって？」

カロリーノの背後から声をかけたのは、コーネリアス・ウォーレン卿、ストラウド侯爵だった。

「おや、チェルシーについてすぐに、部屋で倒れたのは、どこの誰だっただろう？ カロリーノ」

コーネリアスの言葉を聞いて、ユージーンは、思わずカロリーノに視線を向けた。

「兄さま、そんなこと……だってすぐに気がついてしょう？ ……なんでもなかったわ」

カロリーノは、おずおずとした口調ではあったが、兄に向ってこう言い返した。

「すぐに気がつかなかったら、大変なことだ……今頃は生きてはいない」

すかさず、ユージーンが厳しい声で口を挟んだ。

一瞬、コーネリアスとカロリーノは息をのんだが、コーネリアスと

いえば、すぐに笑い出した。

しばらくの間、コーネリアスは笑いで言葉が継げない様子だったが、やつのことでこう続けた。

「……まあ、その通りではあるけどね、ドクター。ああ、君は相変わらずだな、ユージーン」

「では、引き続きドクターとして言わせてもらおうが……」

ユージーンは、決まり悪さを打ち消すように、軽く咳払いをした。

「コーネリアス、五月に逢ったときより随分痩せたようだ。食事はとっているのか？」

すると、片方の口の端だけ皮肉っぽく上げ、斜め下からユージーンを見上げるようにして、コーネリアスは言った。

「こんな場でいきなり診察のまねごとなんて、君にしたって少々不粋すぎないかな？ ユージーン」

……しまった。

手始めから、コーネリアスのプライドを傷つけてしまったようだ。

ユージーンは、自分の社交能力のなさに、ほとほとあきれ果てる思いだった。

すると、カロリーノがさかさず兄のテールコートの袖を握った。

それに気がついたコーネリアスは、皮肉げに引き上げた口元を緩め、黙り込んだ旧友ユージーンに向って言葉を和らげた。

「ロンドンについてから、すぐにでも君に逢いたかったんだがね、ユージーン。色々とかたづけ物があった」

「ああ、ずっと忙しくしているようだな？　コーネリアス、家のことか？」

ユージーンは懸命に言葉を選んだ。

コーネリアスに彼の噂を嗅ぎ回るような真似をしていたことが知られてもしたら、機嫌をそこねるところか絶交でもされかねないに決まっている。

だが、これでは、何もコーネリアスの悩みの核心に踏み込むことはできない。

ユージーンは、自分が齒がゆく、苛立たしくてたまらない気持ちになった。

コーネリアスといえば、黙ったままだった。

しばらくの間の気詰まりな沈黙の後、コーネリアスは人付き合いでいつも使う、あの如才ない涼しげな笑みを浮かべて見せた。

「カロリーノのために、時間を割いてもらって悪いね？　ドクター。その日は、他に予定があるのかい？　ユージーン」

唐突に話を変えられ、ユージーンは若干面食らったが、特段予定はないと、コーネリアスに答えた。

「では、その日は少しゆっくり話をしようじゃないか。うちに夕食に来てくれ、ユージーン。約束したよ」

コーネリアスはそれだけ言い置くと、カロリーノの手を取り、ユージーンの元を離れてホールの人なみに分け入っていった。

夏の嵐(3)

29

「ウォーレン卿、ロンドンにはいつまでご滞在で？」

何度目だろう？ この問いは。

今晚ソーンヒル男爵の夜会に来てからでさえ、数え切れないほど尋ねられている。

ロンドンに来てからだったら、天文学的数字だろう。

コーネリアス・ウォーレン卿は、うんざりした表情を隠すように、タイを軽く指で引くふりをして俯いた。

「水曜日の午後に、うちで音楽会を開きますのよ、ええ、ごく小さいものです……」

別のご婦人が、すかさず話に割ってはいる。

「ぜひ、ストラウド侯爵にご紹介したい方がいますのよ……」

男爵の嫡子の娘だとか、公爵の直系の妹の娘だとか……。

茶会や音楽会にかこつけて、年頃の娘の品評会が開催されるわけだ。そのすべてに顔を出していたら、自分の換えが、あと1ダースほど必要だろう。

常日頃ならば、コーネリアスは、夜会の会話の途中に溜息をつくというような不調法をやらかすなどということは考えられない人間だったが、このところは自分を強く律しなければ、思わず吐息を漏らしそうなことが多くなっていた。

父が晩年、あれこれとシティがらみの投機に手を出していた事態を何とか収拾することが、今回のロンドン訪問の主な目的だった。

とはいっても実際のところ、現在でも、その結果がどうなっているのか、父が誰とどんな取引をしていたのかすら、明確でない点もまだ多い。

とりあえずのところ、これまでウォーレンの家とはまったく取引がなかったバークレーズに、父が出入りしていたことまでは、突き止めていた。

しかし、父が顧客となっていたディーラーのアルバート・チエスタートンに面会することが、なかなかできないでいたのだった。

コーネリアスにとって、アルバートはユージンとともに古い学友だ。面会が困難な訳はないと考えていた。

しかし、アルバートは体調不良を理由にコーネリアスの面会を断り続けていた。

コーネリアスは、自分の前途に多難なものを感じずにはいらなかった。

そんな中、コーネリアスは、絶え間ない社交への誘いの言葉が、自分だけではなく同伴の妹、カロリーノにも数多く向けられていることに、はたと気がついた。

夜会のホス^{女主人}テスであるソーンヒル男爵夫人が、先ほどからひっきりなしに、様々な男性をカノに引き合わせていた。

それも当然と言えば当然だろう。

久しぶりのロンドンにおいても、コーネリアスは社交の場で、いまだカロリーノよりも美しい女性を見ていなかった。

そして、カロリーノはその美しさにたがわず、これまで一度たりとも館から出たことがなかったとは思えないほど優雅な振る舞いを見

せていた。

最終的に、細かなところを決めたのはカロリーノ本人だったが、ドレスは、コーネリアスが見立ててやったものだった。

コーネリアスの趣味の良さは、そのソツのない立ち居振る舞いとともに社交界では評判だった。

コーネリアスの好みで、ごくすつきりとした、形の美しいものを仕立てさせてはいたものの、できあがったドレスのあまりのシンプルさに、コーネリアス自身も、もう少し華やかさがあっても良かったかと危惧したほどだった。

しかし、それは杞憂であつた。

カロリーノのすつきりとした着こなしの前では、今のご婦人の流行が「オーバードレスド」に見えるほど、その姿は洗練されていた。

男爵夫人が、また別の男性をカロリーノの側に連れてきたようだ。鼻が赤い、テールコートの着こなしが今ひとつの男だ。

……レントン男爵の嫡子？

カロリーノとは、格が違いすぎる。

レディ・ソーンヒルも、紹介する相手を選んでほしいものだ？

コーネリアスは冷やややかな愛想笑いの裏で、レントン男爵子息のみつともない鼻を嘲笑していた。

アメリカで成功しただって？ ああ、そう言えば聞いたことがある。確かニューヨークの銀行家だとか。

なるほど、名誉か金かで、夫人は夫人なりにラインを引いてくれているらしい。

しかし、あの鼻は……ありえない！

カロリーノに視線を向けてみると、ソーンヒル夫人のひっきりなしのお喋りに対して、色違いの瞳それぞれに困惑の色を浮かべている。妹は、大分疲れてもいるようだった。

……そろそろ、引き上げる潮時のようだ。
コーネリアスはそう判断した。

チエルシーのタウンハウスに戻り、部屋で着替え終わったカロリーノは、小さく溜息を漏らした。
ドレスを脱いだり、髪を下ろしたり、夜会から帰ってきて一仕事なのだ。

ロンドンには、カロリーノのために侍女がふたり用意されていたが、彼女たちとのやりとりも、カロリーノにとっては少々気詰まりなものだった。

歳の頃はあまりかわらないくらいの侍女は、ベッツィーと言った。同じ年頃の少女に会うことなどまづなかったカロリーノは、嬉しく思い、何かと彼女に話しかけてみた。

しかし、ベッツィーはカロリーノの問いかけには、何も答えることなく、ただただ俯いてかきこまるばかりだった。

もちろん、ベッツィーにしてみれば、それは無理からぬことだ。相手は、侯爵令嬢で、ここのご主人の妹君である。とても自分ごときが何かをお答えできる相手ではない。

自分のメイドというものを持ったことがなかったカロリーノには、

そうだったことは、まだよく分らなかったのだ。

もうひとりの、コーディネートや髪型を取り仕切っている年かさの方は、ミセス・ポーラーだ。

以前はどこかの伯爵夫人のレディ・メイドをしていたらしく、かなり派手で古風なセンスの持ち主だった。

カロリーノは、ミセス・ポーラーがともすれば、こりに凝って髪を結い上げようとするのを押しとどめるのが常であったが、腕前は確かだったので、その点は頼もしく思っていた。

しかし、ミセス・ポーラーは、自分の提案を受け入れない新しい女主人、そう呼ぶにはまだ歳の若すぎるカロリーノのことをこころよく思っていないのか、彼女はとにかく愛想のかけらもなかった。

カロリーノは窓辺に置かれた長椅子に寄り掛かった。

かなり初期のビクトリアンだったが、張り地の色合いがすばらしくカロリーノは、とても気に入っていた。

きつと、兄さまがお好きで手に入れたのね……。

尋ねて見たことはなかったが、カロリーノはそう考えていた。

窓の下は、いまはクレマチスが盛りの中庭だった。

窓を開け、夜風の中に軽く身を乗り出すようにして、カロリーノは暗い庭を眺めた。

ロンドンに来たときから、いや、来る前から、カロリーノはユーージンとの再会を心待ちにしてきた。

……今日、夜会でユーージンの姿を見つけたときには、カロリーノは本当に驚いた。

これまで何回か、夜会や晩餐会に連れ出された。

カロリーノは、そのたびにユージーンがいるかもしれないと微かな期待を抱き続けていた。

しかし、それはずっと裏切られ続けていて、今夜はそんな期待はまったくといいほど持っていなかったからだ。

最初に見たのは、後ろ姿だった。

夜会服の背中、青みがかって見えるほどに黒い髪が人よりも少し高いところに見えた。

カロリーノは、それがもしかしたらユージーン・マクラ克蘭卿ではないかということに、すぐ気がついた。

ソーンヒル男爵夫人が背伸びをするように話しかけると、少し身を屈める。

その仕草はユージーンのものに間違いなかった。

何通、手紙を書いたかしら……。

手紙の上でなら、どんな些細なこともつづってきた。

お逢いしたら、言いたいことも聞きたいこともたくさんあったのに、マクラ克蘭さんの顔を見た途端、一体自分がお話したかったのか分からなくなってしまった。

今夜見たユージーンの姿を思い浮かべると、カロリーノは、ふと何かを、自分でもそれが具体的に何なのかは分からないようなことを、彼に伝えたくてたまらなくなった。

カロリーノは長椅子から立ち上がると、机に向かい、ペンを取った。しかし、カロリーノは手を止めた。

……同じロンドンにいるのに？ 手紙を書くだなんて。それにもう

少ししたら、またお逢いできるのに？

カロリーノはペンを置き、机に出してあるロンドン市内の地図を開いた。

もうこれまでに数え切れないほど見た地図だ。

すっかり覚えてしまったユージーン・ケンジントンの住所は、地図の上ですぐに見つけられた。

……ここがチエルシー。

この道を通って、ここを曲がる。

……マクラ克蘭さんの住所までは、ここからこんなに近いのに。

彼は覚えていてくれるかしら……。

一緒にオペラに、コヴェント・ガーデンに行こうと言ってくれたことを。

あのときは、庭の芍薬が盛りだった。

カロリーノは地図を閉じた。

地図を見るのは、好きだった、ごく小さな頃から。

コーネリアスには、父に似たのだろうかなどと評されたこともある。

植物の本と同じで、地図帳はストラウドの館に数多くあった。

故ストラウド侯爵は、古地図や地球儀の蒐集家として名をはせていたが、もちろん地図そのものについての興味も持ち合わせていた。

候は、新しい地図も常に買い求めており、カロリーノはどんな紀行文学を読むときでも、参照する地図に困るとうことはなかったのだ。

ゲートの描く18世紀のローマやシチリアの地図も、ビーグル号の航路を辿る地球儀も……。

コーネリアスの言うように、自分が地図に魅せられていることが、父親譲りの性質からくるものなのかどうか？

おそらく、そういう理由からではないと、カロリーノは思っていた。館から出ることのなかった自分にとっては、それ外界と繋がる数少ない糸であり、閉じ込められた身体から想像力を羽ばたかせるのに、最も役立つ魔法の道具の一つだったからだった。

開け放った窓からの夜の冷氣に、ふと肩が震えた。

カロリーノは慌てて窓を閉めた。

ガウンの前をかき合わせ、今度は兄の、コーネリアスのことに思いをはせた。

……マクラランさんと、今夜お会いしたとき。

兄さまはひどく不機嫌になっていた。

思えばロンドンについたときからそうだった。ごく些細なことで、腹を立てることが多くなっている。

マクラランさんが身体の心配をしてくれた途端、あんなにいらだつなんて……。

あれほど兄さまを追い詰めているものが、何かあるのに。わたしにはどうすることもできない。

兄さまは、誰にも心を見せようとしない……。

カロリーノは、ふたたび、小さな溜息をついた。

それでも、他の誰でもなくユージーンにだったら、コーネリアス兄さまも、心の中を打ち明けることができるではないか。

カロリーノの心は他にすぎるものがないような気持ちでいっぱいだった。

夏の嵐（４）

30

見慣れぬ、古風な筆跡で宛名が書かれた封筒だった。

午後遅くに出先から戻ったコーネリアスは、書斎に運ばれていたその手紙に目をとめた。

それは、アニックに居を構えるコーネリアスの大叔父からの便りだった。

高齢の大叔父はもう随分以前から、どんな理由にせよ居城のあるアニックを出ることはなくなっていた。

コーネリアスも生まれてから、おそらく一度もこの大叔父の顔を見たことがなかった。

……父の葬儀の日までは。

大叔父の名もまた、コーネリアス・ウォーレンであった。

喪主であるコーネリアスの体面をおもんばかったのか、はたまた、同じ名ということで、若干の親近感でも持ったのであろうか。

気難しさでは一族随一、という噂に違わぬ難物ぶり大叔父ではあったが、葬儀の際には、コーネリアスにだけは、わずか数語にすぎなかったとはいえ、会話を許していた。

そのことを思い出したコーネリアスは、葬儀への出席の礼状かたがた、この大叔父に亡父とウォーレンの一族との関係について、遠回しに質問を投げかける手紙を書いていたのだった。

返事は、もとより期待していなかった。

コーネリアスは驚きを持って、筆跡だけではなく紙自体もそうとうな年代物である封筒を、銀盆から取り上げた。

大叔父にしてみれば、おそらく手紙を書くようなことすら、絶えて久しかったのであろう。昔のレターセットを引出しから取り出してきたに違いなかった。

まず、手紙は、父を亡くしたコーネリアスとカロリーノに対して、二人の事を案じた記述から始まっていた。

それは、儀礼的な文言の域を出るような書きぶりではなかったものの、コーネリアスは、そんな形ばかりの気遣いにさえも、思わず胸が熱くなり、何かこみあげてくるものを感じずにはいられなかった。そもそも、たとえ形式的なものであったとしても、このようないたわりの気持ちを書いて寄こすような身内は、考えてみれば父の死後、これまで一人もなかったのだ。

だからこそ、堅苦しいほどのそっけなさではあるものの大叔父の気遣いの言葉が、ひどく弱っているコーネリアスの心に響いた。

その後の手紙の記載は、至極、簡潔な物だった。

長くアニックに引きこもっている自分には、ストラウド侯爵領の詳細については、なにも知るところはないこと。

しかしながら、一族の他の者が侯爵領の運営に関わっている可能性については、薄いと推察する。

これらが、手紙の内容のすべてのようだった。

コーネリアスは、苛立たし気な吐息をはき出し、便箋を荒々しく机に投げた。

そこでふと、まだ読んでいない部分の存在に気がついた。

レティシアもジョージも亡くなった今、あえて書き送るかどうか、しばしの間迷いはしたが……

そんな文面が目飛び込んできた。

コーネリアスは、机の上に散らばった手紙をふたたび手に取った。

大叔父の手紙を最後まで読み終わったコーネリアスは、随分と長い間、そのままの姿勢で机の横に立ち尽くしていた。

オールドチャーチの鐘の音で、コーネリアスが我に返ったときには、書斎の中はもう薄暗くなっていた。

崩れ落ちるように椅子に座り込んだコーネリアスは、両手に顔をうずめ、暗くなっていく部屋の中で身じろぎもしなかった。
やがて、ゆっくりと顔を上げるとマッチを取り出した。

暗い部屋に火花が散り、マッチに火が付いた。

コーネリアスは、手にした大叔父からの手紙を炎に近づけた。

しばらくマッチの火を見つめていたが、コーネリアスは手紙に火を付けることが出来なかった。

火は、マッチを持っていたコーネリアスの指先で尽きた。

コーネリアスはマッチの燃え残りを床に投げ捨て、ふたたび両手の中に深く顔を埋めた。

もし、誰かが今のコーネリアスを見たら、泣いているのだろうかと思っ
思うに違いなかった。

コーネリアス本人ですら、今、自分の目から涙がこぼれ落ちてくれ
ば、どれだけ救われるだろうかと願わずにはいられないほどであっ

ただ。

しかし、コーネリアスは、一筋の涙すらこぼすことはできなかった。こんなに辛くても、なぜか泣くことができない。

レディ・レティスが死んだときも、コーネリアスは泣かなかった。

いや、泣けなかったのだ。

……涙を流すことが、自分にとってはなぜこんなにも難しいのだろうか。

日は落ち、視界は暗闇に溶けていく。

自分もいつそのまま闇に沈んでしまえたら、どれほど楽に違いないだろうか、コーネリアスはまるで祈るように考え続けていた。

ウェストミンスターの大鐘が、六回鳴った。

コージンは、明日のレディ・カロリーノの診察のための準備を、ちょうど終えたところだった。

コーネリアスに釘を刺されていたから、明日はカロリーノの診察以外は予定を入れていなかった。チエルシーのコーネリアスの家に夕食に呼ばれていたのだ。

コージンは、ふと帰り支度の手を止め、ストラウドのカントリーハウスで、カロリーノとかわした会話を思い出した。

…… ロンドンに来たら、どこに案内するだとか、そんなようなことを話したはずだ。

できれば、彼女が興味のありそうな場所に連れ出してやりたかった。コーネリアスに、妹をあちこちに案内して回るような余裕が、今あるようには見えない。

しかし、正直なところコーネリアスがそれを、ユージーンがカロリーノを連れ出すことをどう思うだろうか……。

それがユージーンを躊躇わせていた。

ユージーンには妹がいなかったから、何ともいえないところではあるが、カロリーノの話と手紙の内容から察するにつけても、コーネリアスとカロノとの関係は、少し普通の兄弟とは違うのではないかと感じていた。

もちろん、故ストラウド侯の娘に対する態度が常軌を逸していたことは確かだ。

しかし、それにしてもコーネリアスの妹に対する態度はさらにユージーンを戸惑わせた。

葬儀にも出られなかった妹に対し、父親同様の無関心な態度を取ったかと思うと、血相をかえんばかりに、彼女の身体をひどく気遣う。

せめて、今がもし普通の状態だったら。

つまり、例えばコーネリアスがまだヴェルマス卿で……父親を亡くしておらず、ストラウド侯爵を継承して……あんなにやつれ果てるような、なんらかの精神的な重荷を抱えていないときであったならば。

ストラウド侯爵令嬢に、伯爵家の次男スベアごときの自分が釣り合うかどうかはともかく、コーネリアスに対して、自分がレディ・カロリーノに対して抱いている好意を明らかにすることなど、何ら躊躇いはしなかっただろう。

……好意。

そう、ユージーンは、自分がカロリーノへ特別な気持ちを抱いていることを、いまや疑わなかった。

逆に、彼女と二人で逢うようなことがあれば。

今度こそ、カロリーノを求める男としての激しい気持ちに流されてしまうのではないかと恐れを抱くほどだった。

今朝も、夏の早い夜明けのまどろみの中、カロリーノの細い顎を引き寄せ、むさぼるようにくちづけをかわす夢を見た。

あの五月の宵と同じように、彼女がキスに耐えきれず微かな喘ぎを漏らすと、そこで目覚める。

このところは、いつもそうだった。夢の中でさえも、それ以上は、自分で押さえようとしているのだろうか？

自分が知らず親指の先でくちびるに軽く触れていたことに気がつき、ユージーンは我に返った。

コーネリアスの悩みにどう切り込んでいくべきか、彼の体調をどう診察すべきかを解決すること。

……それがまず、なにより先決であった。

夏の嵐(5)

31

予想はしていたことであつたが、レディ・カロリーノの診察は、かなり手間取つた。

結果として、彼女の呼吸器系の問題は、先天的な心疾患に端を發しているという線が濃厚だつた。

そして、それはユージーンの当初の見立てと、ストラウドのカントリーハウスで初めてカロリーノを診察したときに、予想したものと大筋で齟齬はなかつた。

先天的に心臓に問題がある場合、例えば、心房の欠損は、一般的に欠損が軽微であれば成長に従つて、自然に閉鎖するということが分かつてきている。

その様な場合、幼いうちには症状がはつきりとしていないことも多い。

欠損が重大であれば、幼いうちに、確実に命を失う。

しかし、そのどちらでもない患者については、その予後をひとくくりにすることは、かなり困難だ。

患者の体力の問題もある。置かれている状況もまた、寿命に影響を与える。

きつい作業に従事していれば、肺への負担が増え、生命の危機は高まると考えられるが、一方で、欠損を抱えながらも、かなり長い間、生きる者もいるのだ。

今となつては確実なことは分らないが、ユージーンは、コーネリアスとカロリーノの亡き母、レディ・レティシア・ウォーレンも、同様の疾患を抱えていた可能性があつたとみていた。

心疾患は、遺伝的な要素が大きいというのが、経験論にすぎないとはいえ、昨今の臨床医の共通した見解だ。

現在のところ、レディ・カロリーノには、まだはっきりと判断できるほどの心房や心室の拡大はないようだった。

だが、恒常的ではなくとも、呼吸音の異常が認められ、心臓の異常が身体に与えているであろう悪影響が看過できない状態であることも事実だった。

とはいっても、有効な治療として、今、ユージーンが積極的に提示できることも何もなかったのだ。

無理をしないで、体に負担をかけず……。言えるのは、そんなことだけだ。

コーネリアスには、カロリーノの診察の結果は日を改めて話すと伝えてあった。

たとえ、それがどんな結果であっても、ディナーをともにすることとなっている相手に、その直前にしておきたいような話ではない。

ユージーンは、コーネリアスの家のディナーに出向くための用意のため、病院から『ザ・プレイス』に急ぎ戻った。

「気が進みませんか？ ユージーン様」

フットマンのダニエルが、ユージーンにタイを手渡しながら言った。

ユージーンのタイを取る手が止まる。

「何がだ？ ダニエル」

「お出かけが、ですよ」

ダニエルは、微笑んで軽く片えくぼをつくった。

「館にお帰りになってからこつち、ずっと暗い顔をしていらつしやいますよ？ ユージーン様」

ダニエルにこう言われ、自分の口元と眉間が固くこわばっていることに気がついたユージーンは、心の中で苦笑いをせずにはおれなかった。

『ザ・プレイス』から、コーネリアスのタウンハウスへは、実際、歩いてでも行けるほどの距離だったが、ユージーンがそこを訪問したことは、これまで一度もなかった。

ユージーンが赴くのはそんな近場ではあったものの、気を利かせたダニエルが、父の馬車を用意してくれていた。

それはダンディで名をはせている父シエスタベリ伯爵のものらしい、洒落てはいるが決して気取りすぎでもない、一頭立てのブルームだった。

とはいえ、ユージーンがそれに乗ったのは、ほんの数分程度のことだった。

ブルームは、コーネリアスの館の車寄せでピタリと停まった。

ユージーンは馬車を降り、ホールへと歩みを進める。

さすがに、名門ストラウド侯の由緒ある館だけあって、比較的こじんまりとしたづくりの昨今のタウンハウスとは、一線を画していた。エントランスホールも、ロンドンにあるタウンハウスにしては、かなりゆったりとしたものであった。

その、やや縦に長いホールのつきあたりに、階段の手すりにもたれるようにして、コーネリアスが立っていた。

「ユージーン、よくきてくれた」

コーネリアスが足早に近づいてくる。

バトラーがユージーンのハットとグローブを預かりに来るタイミングが、ほんの少しばかり遅かった。

コーネリアスが手を差し伸べた時、ユージンは、外したグローブを手渡すために、ちょうどバトラーの方を向いていたところだった。

コーネリアスの不興は、露骨にその態度に示された。

失態を演じたバトラーは、ただ視線を落とし、館の主の冷たく刺すような視線を避けるしか、すべを持たないようであった。

……屋敷に足を踏み入れた第一歩から、この調子では何とも気が滅入る。

ユージーンは、到着早々、先の思いやられるような心持ちになった。

しかし、コーネリアスの、この奇妙なほどの偏屈ぶりは一体、どうしたことだろう？

確かに、それは決して心からの朗らかさとは言っわけでもなく、気位の高い慇懃さと冷淡さが粉砂糖のようにまぶされた愛想の良さであったとはいえ、スカラリーメイド相手ですら、その紳士的な表情を崩すことなどない男のはずだったのに。

「マクラ克蘭さん、今、お着きになつて？」

階段の踊り場から差し込む、ロンドンの長い夏の夕暮れの光とともに、レディ・カロリーノの声が降り注いできた。

その瞬間、ユージーンの心にまさに覆い被さるうとしていた憂鬱のカーテンが、払いのけられた。

先ほどまで、俯いていた執事までも、思わず口元に微笑を浮かべて階段を下りてくるカロリーノを見上げている。

カロリーノは、日中身につけていた、ラベンダーのサッシュと緩いドレープのかかったわすれな草の色のドレスから、シェルピンクのドレスに着替えていた。

華奢な両肩が露わになっている。

コーネリアスも、妹を見上げている間に、いらだちにこわばったその表情を緩め、最後の数段を降りてくるカロリーノに手をさしのべてエスコートをした。

兄に手を取られたまま、ユージーンの前に歩み寄ったカロリーノは、長手袋白いオペラグローブに包まれた腕を、ユージーンに差し出した。

彼女の手を取り、挨拶をするユージーンに、カロリーノはごく一般的にレディが来客の紳士に与えるにしては、あまりにも素直な、慎みが足りないとても批判され兼ねないほどの笑顔で応じた。

しかし、館の執事は、単に世間知らずなだけのカロリーノのそんな様子を、違った風に邪推でもしているようだった。

執事がmごく一瞬ではあったが、自分に対して詮索めいた視線を投げかけたのに、ユージーンは気がついていていた。

そして、コーネリアスはその緑色の瞳に灰色の光を宿しながら、ホールでのそんな様子を見つめていた。

挨拶から引き続き、レディ・カロリーノのエスコートを続けながら、ユージーンはなんとも複雑な思いを噛みしめずにはいらなかった。コーネリアスの酷い不機嫌さ。

それに、好奇心を隠しきれない使用人達の少々不躰な視線。

ユージーンにとっては、それらがうつとうしく気詰まりに感じられてならなかった。

この場に対して自分が感じる、このような煩わしさについて、ユージーンは自問した。

ユージーンは、ふとカロリーノの方に視線を動かした。

視線が合った途端、カロリーノはヴァイオレットとエメラルドの両の大きな目を瞬かせた。

それは、まるでおどけているようにも、なにか物問いたげであるようにも見えた。

カロリーノの瞳を見つめた一瞬に、ユージーンは自身の心の中の靄が晴れるのを感じた。

そう、合点がいったのだ。

自分はただ、ゆっくり話がしたいだけなのだと。

カロリーノと……。

鉄道の旅をどんな風にしたのか？

ロンドンの社交界については、愛らしくも斬新な論評が聞けるかもしれない。

別に話題は何でもよかった。

他愛ない事でかまわない。

ゆっくりと、コーネリアスの意味深な緑色の瞳も、執事の詮索じみた視線もないところで、彼女と話ができるのだったら。

ふたりだけで……。

新月の晩に（１）

32

食事は比較的すぐに始まった。

今夜の客はユージーンだけだったから、時間通りに揃わぬゲストを待つために、招待主が、食前酒と歓談を長引かせて、晚餐開始を遅らせる必要もなかった。

指定の時間を見計らい、完璧なタイミングでできあがっていた料理が冷めていくにつれ腹立ちを募らせるコックを必死でなだめすかすバトラーと、そんな厨房の緊急事態など、まるで理解していないホスト^主がいざこざを起こすなどというような、晩餐会ではしばしば生じがちなトラブルも起こりえかったからだ。

タウンハウスのダイニングルームも、玄関ホールに勝るとも劣らぬ豪華さであった。

もちろん、それは、あのいつ果てるともないディナーが催されたストラウドのダイニングルームほどに、寒々とだだっ広いものではなかった。

あのカントリーハウスの、あの列車の車両一つ分はあろうかという長いダイニングテーブルときたら……。

ユージーンは苦々しく思い出す。

だが、館の広さよりも何よりも、チェルシーでのディナーが、ユージーンにそこまでの寒々しさを感じさせなかった理由は別にあった。テーブルに着いているのが、コーネリアスとユージンだけではなか

ったということ……。

それは、レディ・カロリーノの存在のためだと、ユージーンには気がついていた。

会食自体は、愉快に進んだとは言いにくいものだった。

コーネリアスの不機嫌は続き、給仕をしている執事に対する態度は、シニカルを通り過ぎて、招かれている客のほうに、ぞっとさせられるようなあり様だったからだ。

正直、このチェルシーの館のバトラーの采配が、ストラウドのカントリーハウスとは比べものにならないということは、ユージーンにすら感じられた。

ストラウドのバーンズの給仕の手際を知っては、細かな手落ちに目端がいつてしまいがちだった。

とはいえ、これまで、あの華やかなりしヴェルマス子爵コーネリアス・ウォーレン卿の社交を取り仕切ってきたほどの執事である。

ここの館を去ったとて、行く先はひくてもあまたであろうと思われる程度には優秀なのである。

こんな兄の態度に、カロリーノの食事を取る手も止まりがちになっているようだった。

ストラウドのカントリーハウスで……。

そう、コンサバトリでのアフタヌーンティでも、カロリーノの口数は決して多くはなかった。

しかし、あときには、常にくちびるに浮かんでいた微笑みも、今晚はすっかり消えている。

不安げに瞬きをするカロリーノのエメラルドとアメジストの瞳が、

キャンドルの揺らめきを映して、まるで潤んでいるように輝く。

兄の無表情な、石膏像のような横顔に視線を向けては、困惑したように視線をテーブルに落とす。

そんなカロリーノの様子を、ユージーンは切ないような心持ちで見ている。

ときおり、ほんの時折、カロリーノのその切なげな視線が、ユージーンに向けられ、ふたりの目と目が合う。

そのたび、カロリーノの横に座っているコーネリアスが、テーブルの向こうからユージーンに意味ありげに、その緑色の目を向ける。

……いつまで続くのだろう。

やりきれないな、これでは。

ユージーンが心の中で溜息を、何度目かにはき出したとき、バトラーが緊張ただならぬといった様子で主に近づいていった。

給仕中だというのに、ナプキンもワインもどこかに置き、銀の小盆を両手にかかっていた。

「お前は……何を考えている。自分が、わたしと来客との大事なデイナーの給仕をしていることすら忘れてしまったのか?！」

コーネリアスの執事に対する、怒りに皮肉をたっぷりとまぶした物言いには、ユージーンの方が、首筋から冷水を浴びせられたような気持ちにさせられた。

「……お許し下さいませ、ミ^{旦那様}ロード。どうしても、旦那様に急ぎ届けて欲しいという言つてでした。今すぐにと」

コーネリアスは一声、苛立たしげな溜息をついて、ナプキンをテーブルに置くと立ち上がった

「少し、失礼するよ、ユージーン」

そう言い置いて、バトラーから受け取った封筒を手に、コーネリアスはダイニングルームを後にした。

ユージーンの張り詰めていた緊張の糸が、ふとゆるむ。

カロリーノがユージーンを見つめていた。

ユージーンがその瞳を見つめ返すと、カロリーノは視線をそらす。しかし、すぐに視線を上げると、ユージーンを見て桜色のくちびるをほころばせた。

つられて微笑みながら、ユージーンは言った。

「……旅はいかがでしたか？ レディ」

カロリーノの色違いの瞳が、輝きを増した。

「マクラ克蘭さん、ああ、本当に。あんなだなんて……本に書いてあるとおりなんかじゃ、全然なかったわ」

頬がドレスと同じ桜色に染まる。

「どう？ なにが違いましたか？ レディ・カロリーノ」

……ああ。

こんなに微笑みを浮かべては、レディに対して、あまりにも失礼ではなかるうか？

そう思いながらも、カロリーノの微笑につりこまれ、ユージーンはさらに表情を明るくした。

「そうね……。いいえ、違っではないなかったわ。違っではないの、でも。マクラ克蘭さん？　書いてあることを本当に体験すると、なんといったらいいかしら……。その通りじゃないけれど、でもその人の言いたかったこともなんだか解るような、不思議な気分になるものだわ」

白い指をそつと絡め合わせ、カロリーノはユージーンの目をじっと見上げた。

「そういえばね、マクラ克蘭さん？　車窓の景色というものは、どうやって眺めていたらいいのかしら、だって、見ている側から後ろに流れていってしまうでしょう？」

不覚にも、ユージーンはここで吹き出してしまった。

主人と執事が戻るまで、新しい料理を出してよいのやら思案しながら壁の一部のようにダイニングルームの隅に控えていたフットマンが、思わずユージーンに不躰な視線を向けた。

こみ上げる笑いをかみ殺しながら、ユージーンが言葉を接こうとしたとき、ダイニングルームのドアのところでコーネリアスの声がした。

「まったく……。失礼にもほどがある、こちらからの度重なる問い合わせには答えず……。！　いますぐ出向いてこいとは。しかもこんな時間に」

コーネリアスがこれほどまでに声を荒らげるのを見ることは、そうめったにはない。

ごく親しい友人とはいえ、ユージーンという客人の前にもかかわらず、コーネリアスは引き続きバトラーに怒声を浴びせながらダイニングルームに入ってきた。

カロリーノの口元からは、再び微笑が消える。

「……すまない、ユージーン。気の利かない執事だ」

コーネリアスは自分に向けられた友人の視線に気がつき、やっと冷静さを取り戻した。

「なにか問題があるなら……わたしはこれで」

ユージーンは椅子から立ち上がった。

儀礼でも厭味でも、そのどちらでもなく、本気だった。

それに、この調子で、あと何皿も食事を続けるのはいたたまれない。

「いいんだ！」

コーネリアスは鋭い声を短く発し、それを遮った。

「食事を続けよう、バトラー。次を」

執事の引いた椅子に再度座りながら、コーネリアスはナプキンを手にした。

一息、溜息をつき、ユージーンもゆっくりと席に戻る。

コーネリアスはユージーンから視線をそらし、つぶやく様に口にした。

「招待しておいて……何とも君に不愉快な思いをさせているな、僕は」

エメラルドの瞳は灰色を帯び、ひどい疲れと憂鬱さをにじませてい

る。

「まったくだ。今晚ときたら、なかなかやりきれない思いをさせられるよ」

皮肉っぽく口元を歪めて、ユージーンは軽く笑い声をたててみせた。

この答えに反応して、コーネリアスは素早く顔をユージーンに戻した。

表情を硬くして、自分を見つめているコーネリアスに、ユージーンは皮肉めいた笑顔のまま言った。

「すまないと思っているなら、これからしばらくは、わたしの話に付き合って貰いたいね」

そして、明るい声で付け足す。

「癩癩は、なしにしてもらうからな」

コーネリアスは、すっかりいつものあの、やや傲慢で如才ない涼しげな表情に戻り、冷たい愛想の良さをにじませながらユージーンに頷いた。

新月の晩に（２）

33

「では、君の話を拝聴しようか？　ロード・ユージーン」
そういつてグラスを空けたコーネリアスに、デキャンタを持ったフットマンが近づいた。

……接待での失態を盾に取るようにして、コーネリアスが答えたがらないことを訊く。

結局、ユージーンは、気位の高いコーネリアスに意に染まないことをさせるために、こんな恩を売るような方法を取ることにしたのだった。

コーネリアスが抱えていると思われる様々な問題、健康上の問題も含めて、プライドが邪魔をしように口に出せないような弱みを、どうにかして吐露させたい。

ももとの計画だったわけではないが、今晚のような、客に対する度重なるもてなしの不首尾がコーネリアスの高い自尊心を傷つけていないはずはなかった。

コーネリアスの先のつぶやきを聞いて、ユージーンはふと思いついたというわけだ。

……こうでもしなければ、いつまでも堂々めぐりだ、と。

「先だつての夜会では、君の気分を随分損ねてしまったが、ストラ

ウド侯爵。また尋ねさせてもらう。君は随分痩せた、コーネリアス」

ユージーンは早速、切り出した。

コーネリアスはその緑の瞳にふたたび不機嫌の色を走らせたが、彼の自尊心が、かろうじてその癪癢の手綱を引いた。

「もちろん、そんなことは医者でなくとも誰が見ても解ることだ、コーネリアス。食事がとれないようだな？ 見れば先ほだから、君はディナーの皿をつつき回しているだけで、ほとんどフォークを口に運んでいない」

手にしたカトラリーから、わざとらしくぞんざいに手を離し、コーネリアスは肩をすくめて見せた。

「大領主の父が急死したんだ。さすがに、毎日優雅に楽しく過ごすというわけにも行かないのでね……だれだって少しばかりは疲れるだろうさ？ ユージーン」

「……そうだな、『少しばかりは』な」

ユージーンは口元を皮肉げに歪めた。

そして、フットマンが椅子を引きに飛び出す間もなかったほど、唐突に席を立った。

ダイニングテーブルを回り、コーネリアスの所に歩み寄る。

ユージーンの様子には、カロリーノもすっかり面食らってしまったていた。

ただ、息を飲んで、まばたきを繰り返す。

コーネリアスは、顔を上げて、自分の席までやってきたユージーンを見つめた。

不機嫌だった表情は、いまや驚きに満ちたものとなっており、微かにだが、その瞳には恐怖の色まで浮かんでいるようにも見えた。テーブルの上のコーネリアスの手は、神経質そうに握りしめられており、筋張って関節が白く浮き上がっている。

ユージーンは出し抜けにコーネリアスの手を取り、カフをたくし上げた。

そして、ポケットから時計を取り出すと、コーネリアス・ウォーレンの脈を取り始めた。

コーネリアスはダイニングチェアに座ったまま身じろぎもせず、自分の手首をつかんでいるユージーンが、まるでこの世で最も唾棄すべき者でもあるかのように、軽蔑に満ちた目で見上げている。

ユージーンはコーネリアスの視線など、まったく無視して、目を伏せて秒針を見つめていた。

ユージーンの黒い長い睫毛が、頬に影を落としている。

ユージーンがその長い指をコーネリアスの手首から離れた。

コーネリアスは掴まれていた手を、これ見よがしにナプキンで拭う。

しかし、ユージーンはそのまま、コーネリアスの顎を掴むと、軽く上に引き上げた。

そして、コーネリアスの下まぶたを親指で軽くひき、覗き込む。

コーネリアスの耳朵が憤りと羞恥でバラ色に染まった。

ちょうど、次の料理であるローストをのせた大きな皿を抱えて、ダ

イニングルームに入ってきた執事は、その場から動くこともできずに、そんな主と客人の様子を見つめていた。

ユージーンは肩越しに執事に顔を向けていたコーネリアスは、怒りで声も出せず、ただ刺すような視線を彼に投げかけるだけだった。それが待てということなのか、料理を運べということなのか、執事には判断もつかず、ただただ銀の皿を持って固まったように立ち尽くしている。

ユージーンはコーネリアスの手の爪を調べ始めた。

そこで、コーネリアスはやっと、執事に向かって声を絞り出した。「どうして、さっさととりわけない?! 料理が冷めてしまう!」

執事は弾かれたようにダイニングテーブルへと歩き出した。

「コーネリアス、夜は眠れるのか?」

席に戻り、ユージーンは質問を続けた。

コーネリアスは皿に手もつけず両腕を組んで、挑むようにユージーンを見据えている。

「眠れているように見えるかい? ドクター」

「寝つけないのか? それとも、寝いっても途中で目覚めてしまうのか? 日中はどうだ、眠気はあるか」

コーネリアスは、嘆かわしげに首を振って見せた。

「なにか違いがあるのか? その二種類の質問には」

ユージーンはフォークをフォークに指してから、コーネリアスに視線を向けた。

「大ありだ」

「寝つけない時もあれば、早くに目覚めるときもある。時には誰だってそんなこともあるだろう？ ドクター・マクラ克蘭」
云い捨てるように口にして、コーネリアスは冷笑した。

「熱っばかったり、寒気を感じたりは？ たえば足が冷たいとか、顔が火照るとか。身体の部分によって感じ方が違ったりは？」
ユージーンはさらに質問を続けた。

「さあ、特には」

コーネリアスはさも面倒そうに言い放つ。

「手はかなり冷たかったな。食事が取れなければ手足が冷える」
ユージーンの言葉に、今度はコーネリアスはあざけりに近いほどの冷笑を浮かべた。

「……昔から、よく御婦人たちには『冷たい手の男は情も薄い』とからかわれるんだ、ロード・ユージーン」

コーネリアスのかなりきわどい軽口に、ユージーンは同席しているカロリーノの存在に思い至った。

レディ・カロリーノは先ほどから、じっとユージーンを見つめていた。

あの色違いの両の目に、シャンデリアの光が移りこんで揺らめいている。そこに何らかの嫌悪の色があるのかどうかは、判然としないだが、エメラルドとヴァイオレットの瞳のアンバランスなあやうさに、ユージーンの気持が吸い込まれそうになる。

コーネリアスは、先ほどの自分の軽口で自分で笑ってみせた。そして、言葉を続けた。

「それにしても、いろんなことを尋ねるのだな、さつきから。爪や目や暑い寒い、眠れないことと、一体何の関係があるというのだ」

コーネリアスの口調に、いつも旧友ユージーンと話すときの、ぶっきらぼうなような皮肉交じりのそれでも親しみのある色彩が戻ってきた。

「……コーネリアス、人間の体はあらゆるものと関係の上になリたっている」

ユージーンも、やっと口元をゆるめて微笑した。

「近年、解明にいとまがない人体の複雑さには、僕だつて敬意を払っているよ」

コーネリアスは両手を軽く上げて、首をかしげて見せる。

「そう、身体は複雑だ。いま、医学は複雑な身体の部分をどんどん細かくして検分する方向に進んでいる。しかし、すべからず物事というのがそうであるように、部分と部分の関係が全体に及ぼす影響というのは、個別の部品だけ見ても判らない事も多いのだ」

「つまりは？ ユージーン」

「そうだな、つまりはバランスだよ、部分と部分の、それに部分と全体の。それに身体の中にある物だけの話をしているのでもない、人と外界との関係だつてある」

「ユージーン、僕には論点が見えづらくなつてきた」

「そうだな、コーネリアス。では、物の見方の問題という風に言ったらどうだろうか」

「君のいうことはえらく神秘主義的にも聞こえるな、ユージーン、科学的でないような」

コーネリアスは手にしていたフォークをやつと口に運んだ。

「それは誤解だ、コーネリアス。付け加えるならば、真つ向から神秘的経験を否定するつもりもない。もちろん、もてはやされているのは、たいがい底の浅いインチキであることも認めるが」

コーネリアスは微笑した。

「君の持論だったな、『決めつけるな』」

「あらゆる可能性を、最初から否定しては何も判らない。……ところで、レディ・カロリーノ」

ユージーンは、ふと話を中断した。

「先ほどから、あなたをひどく退屈させているのでなければいいのですが、レディ」

カロリーノはその細い首を振って見せた。

「退屈だなんて、ドクター。お続けになつてください、とてもおもしろいんですもの」

「『おもしろい』かい？ カノ？」

コーネリアスは皮肉っぽく口にしたが、ユージーンには、それがカロリーノが本心から発している言葉だと確信できた。

「ならば……話を戻そうか、コーネリアス。要は、人間の体を見る

ときの視点を変えろという話だよ。例えば、東洋的な診察はこうだ。『あらゆる体の状態』の方から、不調の原因を探していく……」

ユージーンがこう続けると、コーネリアスも、グラスを手にしたまま軽く身を乗り出して応じた。

「ほう。それはごく経験主義的にも聞こえるがね？　そうだとすれば、逆に非常にアングロサクソンのにも思えるが」

「コーネリアス、いま君はわたしの言葉のうわべだけを解釈しているようだ。具体的に中国の診察はこんな感じた。皮膚の手触り、温度、湿り具合、目の色、爪の色、髪の手触り、舌の状態などを診る。しかし、それらの結果から、不調を判断する場合は、単に要素を組み合わせるだけじゃない」

「『形態』と『機能』の違いという話かい」

コーネリアスが言葉を挟んだ。

「というよりも生物の状態は、実はつねに変化を続けていると考えるてくれ。そして、その変化の途中における均衡を探り、そこに状態を近づけるのが治療だということだ。不変で唯一無二の肉体の理想が存在しているわけではないんだ」

ユージーンはカトラリーから手を離し、長い指を動かして見せた。

「だが、それでは、ウイルスや細菌等という物の発見はできないだろう？　『複雑な身体の部分をどんどん細かくして検分する』からこそ判明することじゃないか。……ああ、だから君はカロリンスカでの研究に興味が持てなかったとでも？」

コーネリアスが美しい緑の瞳に、傲慢な無邪気さをきらめかせて口にする。

「いや、そうではない。それは生物学の一つでもあり、すなわち生理学だ。そもそもの医学の大前提だよ。非常に重要な研究だ」

最後の厭味が通じず、コーネリアスは肩をすくめて苦笑して見せた。
「ユージーン、どうやらこの話題を理解するのは、僕の手には余るようだ」

「わたしにとつても手に余るさ、コーネリアス……君に説明を試み
てはいるが、自分にも判らない事だらけだよ。それだからこそ、医
者を続けているんだけどね」

ユージーンは手をフォークとナイフに戻し、少しはにかんだ様に笑
みを漏らした。

「ああ……。今日は実に君らしい言葉を聞いたな、ユージーン。こ
ういうのは久しぶりじゃないか？」

コーネリアスはこう言って、本当に久しぶりに破顔して見せた。

すると、フットマンの動きが少々あわただしくなった。

ドアのところに執事が呼び戻される。

せつかくうまくまわりだしたディナーに今度は何の横やりが入るの
だろうと、執事は思わずため息を漏らした。

「シエスタベリ伯宅のホールボーイが、どうしても今すぐにロード・
ユージーン・マクラ克蘭にお取次ぎを願わなければならないと……」

執事はマクラ克蘭のもとに近づき、自身の主にも聞こえるほどの
絶妙の音量で、こつ耳打ちをした。

「ケニーが？ わざわざこんなところまで今時分に……」

今度はユージーンの眉間に軽く皺がよる番だった。

またしても不機嫌の虫に取りつかれるかと思われたコーネリアス・ウォーレンは、意外なことに再び破顔一笑した。

「おやおや、ロード・ユージン、これでさっきの僕の非礼もおあいこということでいいんだろっかね？」

そして、バトラーに向かってこう続けた。

「『ザ・プレイス』からの使いを、ここへ」

新月の晩に(3)

34

ケニーはまさか、ダイニングルームにまで上がり込み、言づてを伝えるはめになるとは思っていなかったようだった。

執事に誘われてダイニングに入ってきたときの、ケニーの恐縮ぶりときたら、まったくなかった。

ユージーンの側までやってきたが、ケニーは自分がどうしてよいやらまるで解らずに、ただ口をつぐんで、頭を低くしているだけである。

「ロード・ユージーンに急用だそうだが、見ての通り、彼は僕との会話で今、手が離せなくてね」

ケニーを一瞥することもなく、コーネリアスはこう言い放った。

表向きだけは明るいが、実際にはとてつもなく冷淡な、このコーネリアスの物言いに、ケニーはすっかり泡をくってしまい、そのまま踵を返し『ザ・プレイス』に取って返しかねないありさまだった。

……まったく、妙なところが底意地の悪い。

ユージーンは心の中で、溜息混じりに独りごちた。

もちろん、これはさっきまでのユージーンのコーネリアスに対する仕打ちへの仕返しなのだ。

とんだとばっちりのケニーに、ユージーンは心底、同情を覚えた。

「ケニー。こんな不躰な訪問をするほどの用件だったのだな？」

ユージーンはケニーに静かに声をかける。

「は、ハイ。ユージーン様。つい先ほど『ザ・プレイス』にユージーン様宛の電話がございまして、ダニエルが、ユ、ユージーン様の代わりに応対したのでございます、あ、あの、それで……」

ケニーが口ごもって黙り込んだところで、ユージーンは席を立った。そして、コーネリアスを振り返って言った。

「すまないが、席を外させてもらって、伝言を聞きたいのだが。コーネリアス」

だが、腕組みをして首を捻り、コーネリアスは目をすがめて見せた。「おや、僕と妹が邪魔ということだな？ ユージーン」

ケニーがぎゅつと瞼をつぶって、一口つばを飲み込んだ。

「兄さま……！」

カロリーノが、たまらず兄に声をかけた。

ケニーとユージーンを見つめる彼女の色違いの両の瞳は、さきほどから切なげに揺らめいている。

コーネリアスは氷の刃のような鋭く冷たい視線を隣席の妹に向けた。それ以上、ひと言たりとも口を挟むことを許しはしないという気迫をにじませながら。

ユージーンは、ひとつ大きな吐息をはいた。そして、コーネリアスの灰緑色に光る目を見据えながら、こう告げた。

「ならば構わないさ、ここで。では、ケニー、ダニエルは一体誰からの電話を受けたと？」

ケニーはユージーンに呼びかけられるまでの間、カロリーノに目を奪われていたようだった。

そのおかげでコーネリアスのおそろしいほどの厭味から、少しの間心が解放されていたに違いはない……。

「あ、ハイ、ユージーン様。お電話はバートラム男爵のお宅からで……。ご子息のアルバート様のご容態が急変したと」

「チェスタートンが？」

そう遠くはないことだと、医師としての経験から予想はしていたが……。
もう少し持ってくれるのではないかと思っていた。

……だが。
もう、なのか。

黙り込んだユージーンに、ケニーはおずおずと言葉を続けた。

「あ、あの。絶対にユージーン様を呼びもととしてこなければならないと、ダニエルがわたしをここへ寄こしたのでございます、ユージーン様」

自分と同じ歳の友人が、今、まさに召されようとしている……。
ユージーンは思わず、固く目を閉じ天を仰いだ。

しかし、すぐにその脳裏には医師としての使命感と責任感がよみが

えった。

「大変失敬なのは承知の上だが、コーネリアス。わたしは行かなければならない」

ユージーンが再び視線を向けたとき、コーネリアスもまた、席から立ち上がっていた。

コーネリアスは放心しきっていて、あの先ほどまでの、冷笑と皮肉に満ちていた表情が、呆然としたものへと変わり果てている。

「……コーネリアス？」

ユージーンが呼びかけると、コーネリアスはと我に返った。

「ロード・ユージーン……。その患者というのは、アルバート・チエスタートンなのか？」

ユージーンは同意の印に、軽く肩をすくめて見せた。

「ああ、そうだ。コーネリアス、君も覚えていたか。パブリックスクルの。あのチエスタートンだ……」

コーネリアスはそんなユージーンのことを聞いているのかいないのか、ひとり「なんてことだ」とつぶやいて、両手で頭を抱える。

「ロード・ストラウド！」

ユージーンが再び鋭くコーネリアスに呼びかける。

その声に、コーネリアスはユージーンを振り返った。

「ユージーン、僕も行く。どうしてもチエスタートンに会わなければならんだ、彼が生きているうちに……！」

ユージーンは拒絶の言葉を口にしかけたが、コーネリアスのただならぬ様子に気圧された。

「男爵家が、こちらに馬車を回すとのことでした。ユージーン様」

ケニーが、おずおずとユージーンをドアへと誘う。

「……同乗させてもらう」

きつぱりと言うと、コーネリアスはダイニングテーブルを回り、ユージーン達を追い抜いてダイニングルームのドアへと向った。

そして、唐突に振り返ると、驚くような大声で執事を叱咤した。

「何をやっている！ バトラー！！ 出かける準備だ」

コーネリアスは執事を連れて、つむじ風のような勢いで、ダイニングルームを出て行った。

ダイニングルームのフットマン達は、突然の事態に、ただただ困惑の表情で立ち尽くしている。

ユージーンの帰り支度を手伝うということに気を回す余裕がある者は、誰も居ないようであった。

ユージーンはテーブル越しにカロリーノに目礼をし、急ぎ足でクロークルームへと向った。

ケニーには外で馬車を待つように言いつけ、クロークルームへと入っていく。

かけてあるハットとグローブを自分で取り、部屋を出ようとしてユージーンが振り返ると、クロークのドアのそばに、カロリーノが佇んでいた。

「……マクラ克蘭さん」

カロリーノは、やっとひと言だけ口にした。

「レディ、こんな訪問になってしまつて……」

ユージーンは、カロリーノに近づいた。

「バートラム男爵のお宅の方は……。ひどく悪いの？」
ためらいがちにカロリーノは尋ねる。

ユージーンはただ、静かに頷いて見せた。

「兄さまとマクラ克蘭さんの、お友達でいらっしゃるのね……」
カロリーノは噛みしめるように続けた。

ユージーンはカロリーノの目の前まで歩み寄り、そこで立ち止まった。

すると、カロリーノは目を伏せ、胸の前で白い指を固く組みあわせてつぶやいた。

「……ああ、神様」

——何人の患者を看取ってきただろうか。

ユージーンはいつだって、患者の寿命を神に祈ったことはなかった。

それは、けっして、ニヒリスティックな感情からでも、尊大な心持ちからでもない。

ただ、自己のなせることをなし、そしてその結果を自分が引き受けていく。

そうやって、人生を積み上げる。生きていくと言っことはそうするしかないことなのだという信念からだった。

そして、神を信じていないわけでも、決してなかった。

言うなれば、スピノザ的な神の存在を、ユージーンは信じていたのだ。

しかし、いま目の前で、神の名を呼ぶ少女を見て、ユージーンは、心の奥を強く捕まれたような痛みとせつなさを感じていた。

どのような神がいて、誰に祈るか。

そんなことは問題ではなかった……。

彼女の祈りの、ただただ透明な真っ直ぐさに、心が強く動かされた。

ユージーンの胸の中で、何かが堰を切ってあふれ出した。

ユージーンは、カロリーノを細い腕を掴んで、強く引き寄せ、もう片方の手でクロークルームの扉を閉めた。

よろめいたカロリーノをきつく抱き留める。

そして、シェルピンクのドレスからのぞく、細い肩を両手で掴み、カロリーノの背中を壁に押し当てた。

「……マクラクラ……」

カロリーノが戸惑いの声を上げた瞬間。

ユージーンはカロリーノの片方の手首を掴み、引き上げた。

そして、透けるように白い肘の内側にくちびるを押し当てた。
そのまま、彼女の腕の付け根へとくちびるを這わせる。

カロリーノは自由な方の手の甲を、自分のくちびるに強く押し当てて、息を殺した。首筋、そして、耳の付け根が火が付いたように熱く燃える。

ユージーンのかちびるがカロリーノの肩に触れ、長い黒い睫毛が首筋に触れた。

――膝が震える。

熱いめまいが訪れて、もうとても立ってられない。

カロリーノの頭の中が真っ白になった。

カロリーノの手首から自分の手を離すと、ユージーンは再び、両腕で強く彼女を抱きすくめた。

そして、ゆっくりと、カロリーノの銀色の髪に顔を埋めていく。

その甘やかな香りに、こらえきれずユージーンのかちびるから溜息がもれた。

カロリーノの耳元に、ユージーンの熱い吐息がかかる。

やがて、その吐息は低い声へとかわった。

「……カノ」

呼びかけに答え、カロリーノはその細い両腕を、ユージーンの広い背中に懸命に回した。

前の時よりも何倍も激しく、カロリーノのかちびると舌は、ユージーンに絡め取られた。

カロリーノが気を失ってしまいそうなほど長いキスをして、ユー
ジンはやっと彼女のくちびるを解放した。

そして、身体を屈め、カロリーノの細い顎から、首筋、そして、胸
元へとキスを続けていく。

……ユージン。

カロリーノがその名を口にしようとした瞬間、クロークルームの外
で、コーネリアスの鋭い声がした。

「ユージン！ どこだ？」

キスを続けていたユージンの動きが、ドレスの胸元で止まった。
カロリーノを抱きしめていた腕の力が、ゆっくりとゆるむ。

「外なのか？ ユージン？！」

足音とともに、コーネリアスの声が遠ざかっていった。

ユージンは深い溜息をひとつつき、床に落ちたハットとグローブ
を拾った。

そして、ドアへと歩きだした。

「マクラランさん……」

その背中へと呼びかけたカロリーノの声は、喘ぐようにかすれてい
た。

ひと息、息を飲み込むようにして、カロリーノは続けた。

「兄さまを……マクラランさん兄さまのことを。どうか」

ユージーンはカロリーノを振り返った。

そして、彼女のエメラルドとアメジストの瞳を見つめ返し、ゆっくりと頷いてみせた。

カロリーノを残し、ユージーンは静かにクロークルームを後にした。

新月の晩に（４）

34

ユージーンが車寄せの方に歩いて行くと、すでにそこで待っていたコーネリアスが、ものすごい剣幕で声を上げた。

「どこにいたんだ、ユージーン！！ もう馬車が来ているというのに！」

ユージーンは無言で、コーネリアスの前を通り過ぎ、ケニーが扉を開いて待っているキャリッジに乗り込んだ。

一瞬、不快そうに顔をしかめたコーネリアスも続いて乗り込む。

「ケンジントンに……『ザ・プレイス』に立ち寄ってくれ」
乗り込むなり、御者にそう言って、ユージーンは口をつぐんだ。

しばらくの間、馬車の中に気詰まりな沈黙が続いた。

コーネリアスがその沈黙を破る。

「チェスタートンは、実際どうなんだ？ ヤツは一体……」

ユージーンは相変わらず口をつぐんでいた。

「……ああ、そうだったことは『部外者』には言えないのかな？
ドクター」

コーネリアスは声を抑えながらも、皮肉げに付け足す。

ユージーンはさし向いで座っている旧友の目を見つめた。

暗い馬車の中で、その瞳は緑というよりは、むしろ銀色にも見えた。

「アルバート・チェスタートンは末期の膀胱ガンだ。わたしが診たときには、すでに手遅れだった」

コーネリアスの目を見据えながらユージーンがこう応じると、コーネリアスは驚いて目を見開いた。

「……もう、時間の問題だった。おそらく、今晚がヤマだろう」

ユージーンの言葉に、コーネリアスはひと息溜息をつき、頭を両手で抱えた。

ユージーンはコーネリアスをじっと見つめている。

やがて、コーネリアスはゆっくりと腕を下ろし、ユージーンの顔を見上げた。

「あのストラウドの屋敷は……広さの割には使用人が少なすぎとは思わなかったかい？ ユージーン」

突然、コーネリアスがこう切り出した。

「僕のチェルシーの館にだって、あのくらいの人数がいても、おかしくないくらいだからね」

コーネリアスは、軽く肩をすくめて見せた。

ユージーンはなにも答えず、ただじっとコーネリアスの瞳を見つめた。

「父は……故ストラウド侯は締めり屋だったさ。おまけに仕切りたがりだね。ランド・スチュワードに任せるようなことまで自分でやらなきゃ気が済まない。働いてばかりいるおかしい貴族だったよ」
コーネリアスも、じっとユージーンの黒い瞳を見つめ返した。

「だから、父がいなければ判らないことが、存外多くてね」

ユージーンはコーネリアスの問わず語りに、ただじつと耳を傾けていた。

「……少々手こずっている。正直なところ」

コーネリアスがふたたび溜息を着いたところで、馬車は『ザ・プレイス』の玄関につき、止まった。

キャリッジの後部ドアが外から開けられる。
ダニエルだった。

「ユージーン様、こちら。いつも通りに……」
ダニエルはユージーンのドクターズバッグをキャリッジの中へと持ち上げる。

ユージーンはバッグを開け、中身をざっとあらためた。

「……大丈夫だ、ダニエル」

ユージーンはダニエルに目をやった。

ダニエルはユージーンに固く頷き返す。そのチョコレート色の目は、真っ直ぐにユージーンを見つめていた。

馬車はすぐに『ザ・プレイス』の車寄せから滑り出した。

「急いでくれ！……できるだけ」

言わずもがなであったが、ユージーンは御者にひと言、そう口にし

ないではいられなかった。

コーネリアスは、少しの間、口を閉ざしていた。しかし、ふと、何かに気付いた様に話の続きを始めた。

「父は死ぬ直前、なにかとシティに出入りをしていたようなんだ……。かなりの金額の金と共にね」

ユージーンは黙ったまま、コーネリアスの言葉に耳を傾ける。

「もう解っただろう？ ユージーン。僕が、チェスタートンに会わなければならない理由って言うのは」

コーネリアスは、苦々しく笑い声をたてた。

「その件に関係していたのが、バークレーズ……チェスタートンらしくてね」

荒々しい蹄の音を立てて、馬車はバートラム男爵の館の門をなだれ込むようにくぐった。

新月の晩に（５）

36

バートラムの館は不自然なほどの静かだった。

だが、それは物音がしないというだけであって、空気は張りつめ、落ち着かなげな雰囲気、屋敷中にみち満ちていた。

臨終の患者の家に、いつも漂っているたぐいの緊張感だ……。

ユージーンは待ち構えていた執事に案内され、チェスタートンの寝室へと向かった。

そう、ストラウドの屋敷から帰ったその夜に、往診に呼び出されたあの部屋だ。

ユージーンの後ろを、コーネリアスがぴたりとついて歩く。

執事は急ぎ足ながらも、コーネリアスの存在をいぶかしみ、怪訝そうな視線を向けた。

灰緑色のコーネリアスの瞳が、執事の視線をしっかりと捉えた。

「僕はストラウド侯コーネリアス・ウォーレンだ。アルバートの古い友人だ」

男爵家の執事ごときには、それ以上の口を挟ませない高慢さのにじみでた物言いだった。

執事は、ただ黙ってコーネリアスから視線を逸らした。

アルバート・チェスタートンの瀕死の呼吸は、まだ彼の寝室に入る前から聞こえてきた。

……ガンの激痛は、鼓動が止まるまで彼を苦しめるだろう。

これほどまでの苦痛にあつても、二十代の若い男であるチェスタートンの心臓は、他の者よりも持ちこたえるかもしれない。だがそれは、苦しみが引き伸ばされるだけの効果しかない……。

部屋に入るなり、ユージーンはテールコートを脱ぎ棄てた。

ただおろおろと立ち尽くし、男爵子息の苦しみを見ていた一人のメイドが、慌ててそれを拾い上げる。

カフのボタンをはずし、袖をまくりげ、バッグを開く。

ユージーンは聴診器を取り出し首にかけ、続いて、アンプルと注射器を取り出した。

チェスタートンはベッドから転がり落ちかねないほど激しく、苦痛に身体をよじらせていた。

呼吸は悲鳴交じりの悲痛なものだった。

のたうちまわるチェスタートンの脈を取るために、ユージーンは全身を使って彼の身体を抑えつけないならなかった。

この激痛を抑えるためには、かなり多量のモルヒネを打つしかない。だが、そうすれば、痛みを抑えるだけにとどまらず、チェスタートンの意識は混濁し、すぐに心臓が停止するであろう。

これが、最後の投薬になる……。

ユージーンは暴れるチェスタートンの両肩をしっかりと掴み、その耳元に顔を近づけた。

「チェスタートン！ マクラ克蘭だ。聞こえるか？ 今から薬で痛みを取る」

チェスタートンは僅かに瞼を開き、ユージーンへと視線を向けた。

「ただ、これが最後だ。痛みが取れたら、数十分で意識がなくなる……アル、それでいいか？」

ユージーンがこう言うと、部屋の奥の肘掛椅子に座っていた婦人が声をあげて泣き始めた。

おそらく、バートラム男爵夫人であろう。

チェスタートンは、ユージーンの問いかけに、顔を縦に振った。僅かな動きだったが、それははっきりと明確なものだった。

コーネリアスが突然、ベッドに近付いてきた。

「チェスタートン！ コーネリアス・ウォーレンだ。判るか？ 君にどうしても訊いておきたいことがある」

部屋の者たちは、このコーネリアスのぶしつけな言動に一様に驚きを隠さなかった。

だが、ユージーンはこの際とばかりに、コーネリアスに「アルを押さえている」と命じ、薬の準備を始めた。

コーネリアスは、再び苦痛にのたうちまわり始めたチェスタートンを、必死にベッドに押しつけながら言った。

「故ストラウド侯爵のことだ、バークレーでの取引についてだ」

チェスタートンはうめき声の合間に、切れ切れではあるが、コーネリアスに向かって何かを語りかけようとしている。

ユージーンがチェスタートンのナイトウェアの袖を引き上げた。指で触って確かめるが、注射痕が無数に硬く盛り上がっており、もうどこにも針をさせるような場所はなかった。続いて、左腕の袖を引き上げる。

いくつかの場所に念入りに触れて確かめながら、ユージーンは、やっと針を打つ場所を定めた。

「コーネリアス、しっかり押さえている」

ユージーンは、チェスタートンの腕に、モルヒネを注射した。

なにかがほどけていくように、チェスタートンの身体のこわばり、苦痛の呻きが消えていく。

ユージーンは、チェスタートンのナイトウェアの胸元をはだけて、チェストピースを当てた。

「……チェスタートン？」

耳から聴診器をはずし、ユージーンはチェスタートンの顔を軽く揺さぶった。

やがて、チェスタートンが再び、うつすらと目を開けた。そこへ、コーネリアスが身を乗り出す。

「アル、話せるか？ ストラウド侯爵との、父との取引の話だ！」

そして、チェスタートンの返事も待たず、コーネリアスは部屋の者に「席をはずしていただきたい!」と、ぞんざいに口にした。

男爵夫人を含めた、その場の全ての者は露骨な嫌悪と不快感をあらわにした。

しかし、コーネリアスの剣幕に気押され、皆、おずおずとドアへと向かって行く。

「ユージーン、君もだ」

コーネリアスは、ユージーンの黒い瞳を見上げて言い放つ。

「……いいかげんにしないか!! コーネリアス!」
ユージーンが、ついに声を張り上げた。

そのようなユージーンの大声は、コーネリアスですらめつたに聞いたことはなかった。

コーネリアスは、言葉を継ぐことができずに黙した。

そこに、ユージーンがさらにたたみかけた。

「医者に向かつて、こんな状態の患者から、離れると?! お前こそ場所柄をわきまえろ!」

「……いいんだ……マクラ克蘭」
ベッドから小さな声がした。

チェスタートンは、ユージーンに何とか視線を向けながら続けた。

「はずしてくれないか、済まない。皆も……」

ユージーンは、鋭くため息を吐きだした。

「分かった……だが、コーネリアス、チェスタートンに何かあった

らすぐに呼べ。だが五分だけだ……話が終わるうが終わるまいが、五分後には、わたしはここに戻るからな」

ユージーンはコーネリアスに、こう言い渡した。

他の者を先に通し、ユージーンはしんがりに部屋を出る。

寢室の扉を閉めながら振り返ると、コーネリアスはチェスタートンに覆いかぶさるようになして、詰問を始めていた。

新月の晩に（6）

37

ユージーンはポケットから時計を取り出した。

五分。

それが限度だ。

コーネリアスの必死の様子は尋常ではなかった。
ああまでして臨終の床の旧友に問いたださなければならぬことは、
は、一体……。

父シエスタベリ伯の言うところの「ギャンブラー」・チエスタートンの『顧客』であつた故ストラウド候の残したトラブルの大きさが、
門外漢のユージーンにもうかがい知れた。

先ほどの馬車の中で、コーネリアスはわずかだが心を開き、彼の抱える事情を説明しようとしていたようにみえた……。

コーネリアスの頑なさをほぐしたいと願っていたユージーンにとって、それは一縷の望みが見えたように感じていたのだ。

だが、コーネリアスはチエスタートンとの会話をユージーンに聞かせるつもりではないのだ……。

正直なところ、ユージーンは、チエスタートンの臨終には、かなりの衝撃を受けていた。

医者としての何年かのキャリアを過ごし、人の死を見慣れているといつても、過言ではないほどにはなっていたユージーンではあるが、

やはり、同じ歳の友人の死を看取ることは辛い。

……誰にでも、いつ何が起こるか解らない。

頭ではそれを理解していたし、言うなればそれは、諦念のようにユージーンの心の中に存在し続けていた理解ではあったというのに、やはり、実際に起きてみれば、精神的なダメージは大きかった。

時計に目をやる。

三分と三十秒がすぎた。

「……ユージーン」

突然、扉の中から聞えたのは、コーネリアスの声だった。

ユージーンは、反射的に部屋の中へと飛び込んだ。

チェスタートンの枕元に立っていたコーネリアスは、自分の方もどうにかなくなってしまふのではないかというくらい青ざめていた。

そして、ふらつくようにベッドから歩み去り、壁に寄り掛かり片手を額にあて、俯いた。

「チェスタートン！」

ユージーンが呼びかけたが、ベッドの上の病人は動かなかった。手首をとる。脈はほとんど感じ取れないほどの弱さだった。

ユージーンがもう一度、呼びかけると、チェスタートンはうつすらと瞼を開いた。

ほんの一瞬、チェスタートンのうつろな瞳に光が宿って、ユージーンの黒い瞳を見つめた。

だが、すぐにその目は閉じられた。

そして、それは二度と開くことはなかった。

ユージーンの後が続いて、男爵夫人や執事も寝室に戻ってきた。ユージーンはしばらくの間、チェスタートンの手首をとり、チェストピースを胸に当てていた。だが、やがてゆっくりとチェスタートンの手を彼の胸へと置き、耳から聴診器を外した。

ユージーンは、今一度、チェスタートンの顔を静かに見つめた。

そして、ポケットから時計を取り出し、文字盤に目をやった。ユージーンはゆっくりと男爵夫人と執事の方に視線を向けた。

「……午後十時八分」

その瞬間、大きく見開かれた男爵夫人の目から涙がこぼれ落ちた。

「残念ですが……」

ユージーンはそう言って、夫人から視線を外し、チェスタートンの枕元から離れた。

母親の慟哭を背中を受けながら、ユージーンはゆっくりとドアの方へと歩き出した。メイドがユージーンの脱ぎ捨てたテールコートを持って追いかけてくる。

寢室を振り返ると、まだ放心したままのコーネリアスが、壁に寄り掛かって立ち尽くしていた。

「コーネリアス……」

ユージーンは低い声で友人を呼び寄せた。

見送りもないまま、ユージーンとコーネリアスはバートラム男爵の館を後にした。

新月の晩だった。

夏の長い陽ももう落ちている。外はすっかり暗闇に沈んでいた。

「^{辻馬車}キャブを捕まえようか……」

ユージーンが往来へと足を進める。

折良く通りかかった一台を呼び止めた。コーネリアスの表情は未だうつろだった。

ユージーンとコーネリアスは、狭いハンサムの座席に横並びに腰掛けた。

キャブが動き出す。

車はピカデリーにさしかかり、進むごとに往来は賑やかさを増していった。

「コーネリアス、大丈夫か？」

沈黙を破ったのは、今度はユージーンだった。

父親の死からも間もないのに、今度は友人の臨終に立合うとは。ユージーンが心配したのはまず、その点だった。

すると、コーネリアスは押し殺すような嗚咽を数回漏らしたかと思いきや、急に声を立てて笑い出した。

「……コーネリアス？」

ひとしきり、ヒステリックなほどの笑い声を立て、コーネリアスはやっと落ち着いていた。

「……ああ、すまない、すまないね・ユージーン」
コーネリアスは言葉を続けた。

「友人が亡くなったというのに、ひどく不謹慎ですまない。気が動転してしまってね、いや。チェスタートンが死んだのが悲しくてではないよ。ああ。何という不義理な人間なんだろうな、僕は」

こう言つてコーネリアスは含み笑いをした。

「チェスタートンのヤツ。父にとんでもない博打をそそのかして……。死ぬ前に息も絶え絶えに謝られたって！！ 一体、どうすれば……」

「コーネリアス、少し落ち着くんだ？」

ユージーンはコーネリアスの肩に手を置き、軽く揺さぶった。

ふと夜風が冷たさを増した。

ユージーンは手に持ったままだったテールコートに気がついた。

「失敬」

ひとこと断ると、狭いキャブの中でユージーンは身体を曲げ、テールコートに袖を通し始めた。

その瞬間、コーネリアスの表情が、ふたたび激変した。

コーネリアスはもやは笑うこともせず、ただ人形のように表情を凍らせてしまった。

そして、それきり一度も口を開こうとしなかった。

『ザ・プレイス』のホールに足を踏み入れたユージーンは、バッグを床に置くと、大階段の前で立ち尽くした。

とてつもなく消耗した気分だった。

ひどいめまいがして、階段を上って階上の自室に戻る気力も出ないありさまだった。

そこへ、厨房の方向から、ダニエルが歩み寄ってきた。

「……ユージーン様、お帰りなさいませ」

ダニエルは床に置かれたバッグを持ち上げた。

ユージーンは無言のまま、額に左手を当てて、ただじっと俯いたままだった。

「なんて顔色です、ユージーン様」

ダニエルはユージーンの腕を取った。

「こちらへ、さあ。腰掛けて」

ユージーンはダニエルに手を引かれるまま、モーニングルームへ入っていった。

派手な模様のダマスク織の張り地の寝椅子に腰を下ろす。ジェイン大叔母のお気に入りだ。

普段なら、ユージーンはおろかシエスタベリ伯すら腰掛けることはない。

ユージーンは、ふと思いついたようにホワイトタイの結び目に指を入れた。

タイは上手くほどけず、ユージーンは力任せにタイの端を引っ張った。

そこへ、飲み物を用意してきたダニエルが現れた。

「ユージーン様」

ダニエルはユージーンの脇に跪き、タイの結び目に手をやった。タイを丁寧にはどく間、ダニエルは無言だった。

ユージーンは、絡まったタイから解放された首もとのボタンを外し、寝椅子の背に身体をもたれかけた。

ダニエルはそっとユージーンの肩に手を回し、ジャケットを脱がせる。

テールコートを手にして歩み去ろうとした瞬間、ダニエルはふとつばやきを漏らした。

「……おや、懐かしい匂いがしますね」

その言葉に、ユージーンは気怠げに顔を上げた。

「何だつて？ ダニエル」

「これは『六月の匂い』ですよ、ああ、このジャケットかな？」

ユージーンを『ザ・プレイス』で下ろした後、コーネリアスは、ひとりキャブでチェルシーの館へと戻った。

コーネリアスの頭の中は、混乱でめちゃくちゃだった。

いまわの際のチェスタートンの告白は、ひどい内容だった……。

農地からの収入の減少が、この十年くらいの侯爵領の財政を圧迫していた。

父の故ストラウド侯は、それを挽回するために、あらゆる方法をとったのだろう。

だが、すべてが雪崩を打って、上手く回らなくなっていった……。

最後に頼るのは、株。

そしてロイスのネームとして、極端に上がりが大きいが、リスクも莫大な保険のアンダーテイカーとなること……。

チエスタートンの仕切った株取引の方は、数ヶ月前の暴落の影響をすべて被っていた……。

チエスタートンの口から聞いた、その損害額のあまりの大きさにコーネリアスの頭はまっ白になっていた。

たとえば、ユージーンに相談したところで、どうしようもないことなのだが、これは、自分一人で抱え込むには、あまりにも重荷すぎた。ユージーンに事態の切迫度を話して、少しでも自分の冷静さを取り戻せるなら……。

そう思っていたところだったのだ。

だが……。

キャブで、ユージーンがテールコートに袖を通そうとした時。

ごく微かだが、ジャケットからはっきりと、覚えのある香りがするというのに、コーネリアスは気付いたのだった。

社交界随一のセンスの良さが、ご婦人達に評判のコーネリアスである。

それはドレスやアクセサリーだけにはとどまらなかった。

コーネリアスの気入りには、サンタマリア・ノヴェッラのコロンがあった。

多忙で妹にロンドンを案内することもままならなかったコーネリアスではあったが、このフィレンツェの名店の品を取り扱っている行きつけの店には、カロリーノと足を運んでいた。

妹が選んだのは、アクア・コロニア・ガーデニア。クチナシの
コロン水……。

ユージーンのテールコートの移り香は、まさにサンタマリア・ノ
ヴェッラのガーデニアだった。

……そうなのだ。

コーネリアスは見ていた。
クロークルームの扉が閉まるのを。

ドアの隙間から、一瞬、カロリーノのシェルピンクのイブニング
ドレスが垣間見えた。

カロリーノの向こう側。
部屋の奥には、誰が居たのか……？

コーネリアスは、思わず、クロークルームの扉の前に立ち止まり
そうになった。

しかし、立ち聞きの様な真似は、かりにも由緒あるストラウド侯爵
たる自分にとって、とてもではないが、出来ることではない。

そして、コーネリアスは、急ぎその場を離れたのだった。

ユージーンは「僕の」親友なのだ。
僕の……！！

クロークルームの扉を閉めて、その香りがテールコートの移るまで、
カロリーノと。

一体、何を……？

喻えようもないほどの孤独感が、コーネリアスの胸の中に充ち満ちる。

僕は、独りだ……。

……ひとりなんだ。

コーネリアスの混乱しきった頭の中では、くつきりと明確な形をなしていたのは、ただ、このことだけだった。

ダニエルの用意したブランデー入りのチョコレートを読み下し、ユージーンはやっと階上の自室へと上がる気力が沸いた。

しかし、着替えをするまでの力は戻らなかった。

ユージーンは、ウェストコートとドレスシャツやつのことで自分の身体からむしり取り、ソファアーへと投げ捨てた。

そして、スラックスを穿いたまま、ベッドへ身体を投げ出した。

身体はくたくただったが、神経は非常に逆立って、張り詰めている。

新月の闇夜に、眠りの邪魔をする光はない。

固く目を閉じるが、眠気は一向に訪れなかった。

……カノ。

ユージーンの身体の一番奥の方で、熱いものが疼く。

滑らかな肌、細い腰。

手の中に感触がよみがえった。

甘い髪の香りと、柔らかく、とろけるようなくちびるの感触を反芻し、ユージーンの身体の火照りは引くことがなかった。

幾度も寝返りを打ち、欲望を抑えようとしたが、みだらな情念はとどまることなく、ユージーンの身体に熱い刺激を与えた。

そして、ユージーンがほとんど眠れぬ間に、白い朝日が夏の短夜を奪い取るように終わらせていった。

登場人物（まとめ（1））

（これまでの登場人物）

*マクラ克蘭家（爵位：シェスタベリ伯爵、エイルズフォード子爵）

ユージーン・マクラ克蘭

シェスタベリ伯の第2子。エイルズフォード子爵ヘンリー・マクラ克蘭の弟。

コーネリアス・ウォーレンの友人。医師。父からは「ヤンガー」と呼ばれる。

長身、黒髪、黒い瞳の持ち主。

<ザ・プレイス（ケンジントン（ロンドン）のタウンハウス）>

シェスタベリ伯爵 アレクサンダー・マクラ克蘭卿

エイルズフォード子爵ヘンリー及びユージーンの父。

ジェイン大叔母

シェスタベリ伯爵の叔母。

夫の生前はデヴォンジャアの地所に住んでいたが、未亡人となつてからは、

ケンジントンの『ザ・プレイス』に移り住み、館で采配を振るい「マダム」と呼ばれるように。

バトラー 『ザ・プレイス』のバトラー

ダニエル 『ザ・プレイス』のフットマン、ユージーンの面倒を見る。

ケニー 『ザ・プレイス』のホールボーイ。粗忽者

オーガスタ シェスタベリ伯爵のヴァレット、パッキングにかけては天才的。

<エイルズフォード・ハウス（ホルボーン（ロンドン）のタウンハウス）>

ヘンリー・マクラ克蘭

エイルズフォード子爵、ユージーンの兄。

シェスタベリ伯爵の後継者。

夫人と二人の子と共に

ロンドンのタウンハウス『エイルズフォード・ハウス』に住む。

『ポーデーズ・アビー』を売却した父、シェスタベリ伯爵とは以後疎遠に。

*ウォーレン家（爵位：ストラウド侯爵、ヴェルマス子爵ほか）

コーネリアス・ウォーレン卿

ヴェルマス子爵。父の死後はストラウド侯爵。ユージーンの親友。社交界の花形。

カロリーノ・ウォーレンの兄。父と同じ金髪に深緑色の瞳を持つ。

<ストラウドのカントリーハウス>

レディ・カロリーノ・ウォーレン

故ストラウド侯爵及び故ストラウド侯爵夫人レティシア・ウォーレンの娘。

ヴェルマス子爵コーネリアス・ウォーレンの妹。心臓に先天的な疾患を持つ。

銀髪にエメラルド色とアメジスト色のヘテロクロミア
母レティシアに生き写しであるとも言われる。

父に疎んじられ、館から出たことがない。読書家。カノとも呼ばれる。

ストラウド侯爵 ジョージ・ウォーレン卿

コーネリアスとカロリーノの父。乗馬が趣味。落馬で急逝。カロリーノを疎んじる。

ウォーレン家の財産管理に失敗している。

ストラウド侯爵夫人 レディ・レティシア・ウォーレン

コーネリアスとカロリーノの母。病弱でありカロリーノを出産直後死亡。

スミレ色の瞳に銀色の髪を持つ。

バーンズ

ストラウドのカントリーハウスのバトラー。

父、祖父の代からストラウド侯爵家に使える。

優秀な執事。

ミセス・オーソン

ストラウドのタウンハウスの女中頭。
館の生き字引。

コーネリアスとカロリーノを幼い頃から世話。

パイ焼きの名手。

<チエルシー（ロンドン）のタウンハウス>

バトラー ヴェルマス子爵時代からのタウンハウスにおけるコーネリアスの執事

ミセス・ポラー

カリリーノのために新たに雇い入れられたレディ・メイド（侍女）

前職は某伯爵夫人の侍女

ベッツィー カリリーノのために新たに雇い入れられたメイド。

<アニック>

コーネリアス・ウォーレン
ストラウド候コーネリアス・ウォーレンの大叔父。
アニックの居城に隠居中。一族の謎を知る人物。

*その他

レディ・エミリア・ウォショースク
上流社会に出入りのあるミステリアスな女性。年齢不詳。
ユージーンとかつて深い関係にあった。

アルバート・チェスタートン
バートラム男爵の子息（ただし嫡子ではない）。
ユージーンとコーネリアスのパブリックスクール時代の友人。

シティの投資会社バークレーズのディーラー。脾臓がんで死亡。

クラムリー

ユージーンの大学時代からの友人。生物学者。子爵家の三男坊。故ストラウド侯爵と同じ「グローブ・クラブ」のメンバー

葉蜂の産卵（１）

38

バートラム男爵の館から帰ってきた後、コーネリアスの様子は、それまでとはまったく変わってしまった。

バトラーや使用人に対するひどい癪癢は、すっかり鳴りを潜めた。

カロリーノの目から見ても、その様子の変化は明らかだった。

疲れている、いらだっている……。

そういった、今までの兄の様子とはまったく異質だった。

コーネリアスの目は、うつろだった。

エメラルド色の瞳は、まるでうち捨て、忘れられた冬の庭にある池のようで、なんの光も通さないようだった。

友人の急逝に衝撃を受けているのだろうか……。

そうカロリーノは思いを巡らせていた。

そう、コーネリアスはふさぎこんでもいた。

バトラーが毎日のように運んでくる手紙。

そのトレイには、手が着けられることなく、手紙は机の上にくつもの山をなし、放置されているだけだった。

困り果てたバトラーは、こちらは何某男爵夫人から、こちらは何某卿から、と差出人を見ながら、コーネリアスに声をかける始末だった。

「差しでがましい」と主の怒りを買ったことを覚悟した執事の苦心の策だったが、コーネリアスはそんなことにもまるで無反応だった。

「ロード・ユージーン・マクラランから、また、お手紙が届いておりますが……」

バトラーのその言葉に鼓動が激しくなったのは、たまたまそこに同席していたカロリーノの方であった。

コーネリアスは、その名前にもまるで反応を見せない。

マクラクンさんは、どうなさっているのだろう……。

あれきり。

ここにディナーにいらしたあの晩。

バートラム男爵のご子息の往診に呼び出されて、食事の途中でお帰りになってしまったあの日以来。

お目にかかることがないままで……。

カロリーノは兄のさまざまな苦しみに対する自分の無力さを、なさけなく思っていた。

そして、あわせてユージーン的心中を考えるにつけ、さらにやるせない思いが胸にこみ上げてくるのだった。

ここを去るときのユージーンのふるまいが、カロリーノの心をさらに混乱させていた。

あれは……。

マクラ克蘭さんは、きつと、ひどく動揺なさっていたのだ……。ひどく容態の悪い友人のもとへ、呼び出されたのも。

腕に……髪に……。

燃えるようなくちびるの感触。

「カノ……」

しばしば、ユージーンの吐息まじりの囁きが思い出され、カロリーノに熱いめまいを呼び覚ました。そのたびに、胸の詰まるような息苦しさに襲われる。

コーネリアスの様子が心配でならないというのに、折に触れ、思い出してしまうユージーンのカスが、思考のすべてをおし流してしまう。

これまで、ユージーンを唯一の頼りと思ってきたカロリーノだったが、そこまで彼にすがっていいのだろうかという懸念も起き始めていた。

兄さまがこれほどまでに、ショックを受けている。

……医師としての立場があるとはいえ、古いお友達を亡くした気持ち、兄さまと同じはず。

そう。

マクラ克蘭さんだって、日々さまざまな思いを抱えいらっしやるはずなのに……。

カロリーノはユージーンの医師という仕事の負う物の大きさに、あ

の晩、あらためて思い至ったのだった。

そんな心の重荷を階間見せることもない、ユージーンの静かな黒い瞳……。

それを思うと、また、カロリーノの胸は切なさにも乱れる。

なにを考えたらいいいのか。

自分の心がばらばらに千切れそうに苦しい。

いつそのこと、この胸をかきむしって、粉々に引き裂いてしまいたい……。

カロリーノは、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

コーネリアスは手元に置かれた封筒にもペーパーナイフにも、視線をやることなく、長いすの肘掛けについた腕に頭を持たれさせている。

……ともかく、マクラ克蘭さんに手紙を書こう。

兄さまのご様子が、一体なにがどうなっているのか、わたしにもまるで解らないけれど。

あれほど何度もお手紙を頂いているというのに、兄さまからまったくくなくにも知らされないのでは、マクラ克蘭さんも、不安に思っているに違いないもの。

もし兄さまに知られたら。

わたしが直接、マクラ克蘭さんに手紙を出すだなんて、知れたら。……出過ぎたことだと、コーネリアス兄さまは怒るだろうか？

それは、ストラウドの館にいた頃は、カロリーノには、まったく思いつかなかったことだった。

しかし、いま、そんな考えがふと頭をよぎる。

なぜ？

……うしろめたい？

そう……兄さまに対して。

コーネリアス兄さまに対して、うしろめたいの……？

この気持ちって、いったい？

階段を上がりながら、カロリーノは自分の心の奥を覗き込んだ。

マクラ克蘭さんは、ドアを閉めた……。

誰にも、見られないように。

わたしに、キスをするために……。

ストラウドの庭でのくちづけとは、まるで違っていた。

あのまま……。

きつく、マクラ克蘭さんに抱きしめられて。

自分のすべてがマクラ克蘭さんの身体の中に、包まれてしまえばよかった。

彼の身体の一部のように、とりこまれてしまいたかった。

指も、髪も、もう、わたしがわたしではなくて、マクラ克蘭さんのものであれば。

そうであつたら、こんなに引き裂かれるような心の痛みを味あわなくてすむに違いない。

引き裂かれる……。

そう……。ひとつでいたい。

マクラ克蘭さんと、心がいつも寄り添っていられたなら……。

カロリーノは自室に入り、後ろ手でドアを閉めた。

耳元に、ユージーンの熱い息づかいがよみがえった。

肩が震え、カロリーノは自分の両手でそれをきつく抱きしめた。知らず、吐息が漏れる。

「……ユージーン」

ひとこと、声にした途端、膝から力が抜ける。

カロリーノは、そのままベッドの上に崩れ落ちた。

葉蜂の産卵（2）

39

「旦那様、旦那様……」
ミー・ロイド

執事は二度呼びかけた。

一度目に、主に無視されたならば、それ以上は呼びかけない。
ここ何年か、チエルシーのバトラーとは、暗黙のうちの了解となっていたことだった。

バトラーのこのような呼びかけに、コーネリアスはいらだつというよりは奇妙な印象を抱いて、目線を上げた。

「ロイド卿の奥様から、お使いでございます。是非ともこちらのお手紙にお目を通し頂いて、ご返答を頂きたいと」

……ロイド卿の夫人。
はて。

夫人のあまりにも不躰な申し出への腹立ちよりも先に、ユージーンの脳裏には、その名の意外性に疑問がわき起こった。

彼女と大した付き合いがあったという記憶もないのだが……。

ぼんやりとしたまま、コーネリアスは執事の差し出す銀のトレイから封筒を手にとった。

字体も封の部分の箔押しの模様も、いずれもあまりよい趣味ではない……。

たびたび、お便りした上に重ねてこのようなお誘いをするご無礼を

どうぞお許し下さい。

是非、今夕の当家の音楽会にご参加いただきたく、不躰ながらお願いを申し上げる次第でございます。

……ああ。

コーネリアスはやつと思ひ当たった。ソーンヒル男爵のパーティでそんな誘いがあった。

たしか、カロリーノ目当ての……。

「いかようにお返事申し上げましょう、ミー・ロード?」「バトラーがおずおずと口を挟む。

「使いは、いま僕の返答を待っているのか?」

コーネリアスは、ペーパーナイフを執事に手渡しながら言った。

「はい、卿の奥様のコンパニオンが。こちらを直接お持ちになりまして」

「これをか、コンパニオンにわざわざ持ってこさせたって?」

凄じ執念だ……。

コーネリアスは、思わず苦笑をもらた。
なるほど。

ホールボーイを寄こすのとはワケが違って、そうそうに返事もせず
に追い返しにくい。

意地でもカロリーノを会に呼びたいらしい。

まったく。

どうあってもカノに引き合わせねばならないような、よほど義理の
あるゲストでも招いているのか……？

「……では、そのご婦人をドロ잉グルームにお通しして、飲み
物を差し上げる、僕も身支度をすませて行く」

そう言つて、コーネリアスはゆっくりと長いすから立ち上がった。

数分後には、コーネリアスの姿はドロ잉グルームにあった。

黄金に輝く髪は、彼の美しい額が一番映える位置に完璧になでつけ
られていた。

昼の光の中においては、自身の緑色の瞳と白い膚がもつとも魅力的
に映える漆黒の上着を身につけ、それに純白のシャツを合せていた。
コロンは、もちろん気に入りのフランジパーネだった。

ロイド夫人のコンパニオンは、ドロ잉グルームの椅子に座り、
ごく緊張気味にウェッジウッドのティーカップを前にしていた。
だが、ドロ잉グルームの扉からコーネリアスが入ってくるなり、
その目はコーネリアスの姿に釘付けになった。

……なんという美男子！

ロイド夫人のコンパニオンは息を飲んだ。

彫刻のように整った額、鼻筋。

エメラルドの輝きの瞳。

白い膚に、均衡のとれたスラリとした体つき。

完璧なまでの美しさだった。

そしてその中で、くちびるだけが、わずかばかりゆがみ、皮肉めいた色をたたえていた。

アークエンジェルのように完璧すぎるせいで、美しさが非人間的であるとする思えるようなのコーネリアスの容貌の中で、その一点だけが非常に生き生きとした魅力を備えており、性的で官能的ですらあった。

まさに、聞きしに勝るとはこのこと……。

コーネリアス・ウォーレン卿の美しさはたいそう有名で、彼女もしばしばそれを耳にしてはいた。

だが、こうやって間近に見るのは、今が初めてのことだった。

ロイド夫人のコンパニオンは、年の頃三十過ぎ。

コーネリアスはそんな彼女の様子を、その深緑色の目でつぶさに観察していた。

御しやすいそうなご婦人だ、と。

「ずいぶんとお待たせしたのではないでしょうか？ ミス……？」
コーネリアスは、彼女の目をじっと見据えて語りかけた。

「……ア、アン・ヘイローですわ、ロード・ストラウド」
アンは見つめられる気まずさに、しどろもどろになりながらも、コーネリアスから目を離せずにいる。

「ミス・ヘイロー、僕はロイド卿夫人には大変失礼をしてしまったようですね？ ですが、このところひどく慌ただしくしていて、お返事を出すことができずにいたのですよ。五月に急に父を亡くしまして、その後もいろいろと」

「ええ、ええ。それは存じております。ロード。大変なご不幸で……」

コーネリアスは美しすぎるエメラルドの目を軽く細め、人差し指をたて、そっと自分のくちびるにあててみせた。

「ミス・ヘイロー、あなたがその先に言おうとしているような言葉は、僕はすっかり聞き飽きているのですよ」
ユージーンはささやくようにこう言つと、口元をわずかにほころばせみせた。

アン・ヘイローは、魅入られてしまったようにただ、ユージーンの顔を見つめている。
息をすることすら、忘れてしまいそうな様子だった。

「ミス……おや、お茶が冷めてしまったのでは？ 入れ替えさせましょう」

コーネリアスがアンの前のウェッジウッドに手を伸ばした瞬間、そ

れを遠慮しようとカップにおいた彼女の手が軽く触れあつた。

アンのあまり血色がいいと言ひ難かつた頬は、見る間に朱に染まつた。

「……このたびのロイド夫人のお誘ひは大変魅力的なものですがね？ アン」

コーネリアスはさりげなく、アン・ヘイローのファーストネームを口にした。

アンは、コーネリアスから視線をそらすのに精一杯で、ひと言も口がきけなかつた。

「先ほども申し上げた様に、僕はあまり時間がとれなくて。妹をエスコートすることが難しいのですよ……」

コーネリアスは本題を切り出した。

だが、アンはその言葉に、自分の使命をかううじて思い出した様だつた。

「ああ、ロード・ストラウド。もちろんですわ。そうでしょうとも……！ ですから、わたくし、こうやってお迎えにあがつたんですの、ロイド卿夫人に頼まれましたの」

「……？」

コーネリアスとしては、少々予想外の展開だつた。

「音楽会は、それほど日の落ちないうちに終わりますわ。レディ・カロリーノの付き添ひはわたくしがきちんといたします。ストラウド侯爵様がご心配をする暇もないうちに、わたくしがレディをチェルシーのこちらまで、お送りいたしますし……ね？ レディに、ぜ

ひ、お出ましく下さいとお伝えくださいな」

なんとも、用意周到な。

ロイド夫人は、なんとしてでもカロリーノを連れ出そうというのだ！

「……それは、なんとも親切なことだロイド卿夫人は……。ところで」

コーネリアスはいまいちど、アン・ヘイローの瞳を見つめて言った。
「今日の『音楽会』にはどういった方達がお集まりということだったでしょうか？ アン」

アンは、ふたたびユージーンの天使のような美しい顔に引き込まれた。その魅力にはあらがいがたく、悪魔的でした。あつた。

「……コーネリアス様、ええ、ごく小さな集まりですよ。夫人のごくお親しいお友達ばかり。きちんとした方ばかりですわ」

アン・ヘイローは、熱に浮かされでもしたかのように続けた。

「そう、ロイド卿のお知り合いで、アメリカからいらしたお客様を、ロンドンの皆様にご紹介するというのも目的ですの……」

「アメリカ？」

コーネリアスが、ひとこと尋ねる。

「ええ。アメリカで大きな炭鉱をお持ちなんですの。ロイド卿の仕事のお知り合いとか。そうそう、その方はい先だってブリテンでカントリーハウスをお求めになったんですのよ」

……カントリーハウス。

コーネリアスは、はっとした。

「アン。そのアメリカ人が買ったのは、『ポードーズ・アビー』ではないでしょうね？」

アン・ヘイローはコーネリアスの深緑色の目から視線を離せないまま、答えた。

「そうですね、ストラウド侯爵。たしか……そう。以前はシエスタベリ伯爵の地所でしたわね？」

なるほど。

コーネリアスは合点がいった。

ロイド夫人は、その『音楽会』とやらで、『ポードーズ・アビー』を買ったアメリカの石炭成金にカロリーノを引き合わせようというのだ。

どうせ、夫の商売のためとでもいうのが、裏にある事情とでもいったところに違いない。

金持ちね……。

コーネリアスの中に、自嘲とともに、ひどく残忍な気持ちがわき起こった。

カロリーノが大金持ちと結婚でもすれば、いまかかえている、さまざまな面倒など、簡単に解決するのではないか？

……クロークルームの扉が閉まる音と、ユージーンのテールコート

から微かにただよった、ガーデニアの香り。
コーネリアスの脳裏に、その二つがよぎる。

妹とユージーンに感じていたわだかまりが、憎しみのようなものへと、あいまいながらも形を変えていく。

「コーネリアス様……？」

アン・ヘイローがいぶかしんで声をかけた。

コーネリアスは、アンをみて微笑んだ。

これまで、それを見せた相手という相手を、すべて虜にしてきた蠱惑的な微笑だった。

「ロンドンにまで呼び寄せた妹を、この屋敷に閉じ込めっぱなしにしていることは、僕も常々心ぐるしく思っていたのですよ、アン」

「……コーネリアスさま」

「カロリーノをロンドンの気持ちのよい皆様にご紹介して、より親しくして頂きたいものだね。しかし、アン、きちんとしたロイド夫人の下にいらっしゃるあなたのような方なら、きつとおわかり頂けると思いますが……。ストラウド侯爵令嬢たる妹を、そう軽々しく表に出すわけにも行かないのですよ。常に僕がカロリーノをエスコート出来れば、もちろん、それが一番よいのですが……」

「ああ、勿論ですわ、ロード・コーネリアス・ウォーレン、ストラウド侯爵として、お忙しいお体でいらっしゃいますもの……。ですから、もし、わたくしでお役にたてるのであれば、レディ・カロリーノのお付き添いをさせていただきたいと思っておりますのよ、心から。あんなに愛らしい方を、このお屋敷に隠しっぱなしではいけ

ませんことよ、ロード」

コーネリアスはしばらく逡巡して見せてから、こう口にした。

「妹は、カロリーノは身体も丈夫ではないし……なによりもロンドンにはまだまだ不慣れなのですよ、アン。僕は心配なんです」

「いいえ、ご心配には及びませんわ。レディ・カロリーノを疲れさせるようなことなど、けっして。わたくしが、きちんとレディに付き添わせて頂くことを誓いますわ、コーネリアス様。それに今日の集まりには本当に、夫人のお親しい方しかいらっしやいませんか、保証しますわ」

アン・ヘイローは一気に巻くし立てた。

ここで、コーネリアスは、アンに向って穏やかに微笑んで見せた。

「アン、あなたはしっかりとしたご婦人だ、あなたを信じますよ。カロリーノにすぐ、支度するように言いましょう」

コーネリアスはアンの手を取り、その甲に軽く口づけをした。

そして、陶然とした表情を浮かべて身動きもとれないアンを残し、コーネリアスはドローイングルームを後にした。

葉蜂の産卵（3）

39

ノックするやいなや、コーネリアスはカロリーノの部屋のドアを開けた。

ペンを手にしていたカロリーノは、便箋を前にいま、ちょうどユー・ジーンへの手紙を書き始めようとしていたところだった。

驚いて振り返ったカロリーノが席を立つ間もなく、コーネリアスは急ぎ足で妹の元へと近づいてきた。

「カノ、すぐに支度を。アン・ヘイローが下で待っている」

突然の兄の言葉は、カロリーノにはまったく意味が分からないものだった。

「兄さま……？ どなたなの？ その、ミス……」

……そもそも、何の支度を？

「『ヘイロー』だ。ロイド卿夫人のコンパニオンだよ」
コーネリアスはせわしなく付け足した。

いまだに面食らって返事もできないカロリーノのことなど、まるでお構いなしに、コーネリアスは続けた。

「さあ、カノ、急いで。ミセス……、ミセス・ポーラー！」

コーネリアスが手を打って呼ばわると、向いの衣装室でかたづけも^{レディメイド}をしていた侍女のミセス・ポーラーとベッツィが、すぐさま戸口に現れた。

「レディ・カロリーノはこれから、ロイド夫人の音楽会にお出かけだ。すぐに支度を」

こう言い捨てると、コーネリアスは踵を返して部屋を出ていった。

ミセス・ポーラーは、ものすごい勢いでカロリーノの髪を上げ始めた。

そして、その作業のあいまいまには、ベッツィーへとミセス・ポーラーからの氷のように冷淡で皮肉めいた叱責が容赦なく飛んだ。

出かける前に、すでに疲れ切ってしまった気持ちで、カロリーノは階下へと降りていった。

バトラーに連れられドローイングルームに入ると、コーネリアスと女性の姿があった。

その婦人は、いまだ世事に疎いカロリーノの目から見ても、かなり流行遅れのボンネットのような帽子を被っており、その目は、コーネリアスに釘付けになっていた。

しかし、彼女はカロリーノが部屋へと入っていくと席から立ち上がり、いそいそと近づいてきた。

そして、非常に親しげに、しかも懇慫に挨拶を始めた。

「レディ・カロリーノ、ごきげんよう。わたくし、ロイド卿夫人のコンパニオンを務めておりますアン・ヘイローと申しますの。お兄

様の、ストラウド侯爵様のおゆるしが頂けまして、大変嬉しく思いますわ……。まあ、そろそろ当方にいらして頂かなくては、演奏がはじまってしまいますもの」

そういつて、アン・ヘイローはコーネリアスに向って、いまいちど恭しくお辞儀をした。

「……コーネリアス兄さま？」

やはり、今ひとつ事情を飲み込めないカロリーノが懇願するようにコーネリアスに問いかけた。

「兄さま？ 兄さまも一緒にいらっしゃるのよね？」

コーネリアスは、カロリーノの手を取って自分へと軽く引き寄せて言った。

「僕は行けないよカロリーノ、悪いが……。ミス・ヘイローがお前に付き添ってくれる、心配はない。音楽を楽しんでおいで」

そして、頬にキスをしながら、「大丈夫。彼女がついていてくれるから」とささやくと、すぐさま、妹の手を離れた。

アン・ヘイローと共に、ロイド卿の馬車に乗り込んでからも、カロリーノには事の次第がつかめないままだった。

アンはカロリーノの話を形だけは聞こうとするのだが、すぐさま話題を自分の事に変えてしまう。

ロイド夫人についても音楽会とやらについても、何度尋ねても話がすぐ、どこかへ飛んでしまうのだった。

そして、アンのお話はもっぱらコーネリアスについてだった。

「そうですね、レディ・カロリーノ。ロイド夫人は多趣味でいらっしやるの、音楽も大変お好きで、あら、レディ、わたくしのことはただ、アンとおよびになつて。……ああ、今日はお兄様が、ロード・コーネリアス・ウォーレンがお許しくださつてようございましたわ。もちろん、侯爵様がごいつしよだつたらもつとよかつたんですのよでも、仕方ありませんわね、お忙しくていらつしやるんですもの……それにしても、まあ、なんてすてきなお兄様をお持ちなんでしょうね、レディ・カロリーノ」

さすがにカロリーノも、アン・ヘイローの独善的なおしゃべりに疲れ果て、口を挟むことを諦めてしまった。

ひどいむなしさと、コーネリアスがなぜ自分をひとりきりで、こんな人と共に外出させるのかと言う疑問が胸一杯に広がった。

切ない思いに、どうかするとカロリーノの目から涙がこぼれてしまひそうになつたところで、馬車はロイド卿の館に辿り着いた。

葉蜂の産卵（4）

40

……もつとゆつくり家を出るべきだったわね。

エミリア・ウォショースクは閉じた扇で口元を隠しながら、あくびをかみ殺した。

こういう会にはありがちなことだったが、時間をかなり過ぎているというのに演奏は、一向に始まらなかった。

「内輪の集まり」という前置きがされただけあって、今日のロイド卿夫人の音楽会には、大した人数の客は招かれていなかった。

エミリアは、一通りの興味のある噂話は、興味のある人物を相手に、すっかり終えてしまっていた。

……あとは。

あとはそう。あの『ポードーズ・アビー』を買ったアメリカの大富豪。

彼だけだ……。

ロイド卿夫人が側から離さない、あの男性。

彼と話をしたいのは、一座の誰もが同じだった。

所詮は、新大陸の石炭成金……。

表向きには、愛想のよい表情を浮かべてはいるものの、この場の誰もが、彼を内心では下に見ていた。

だが、そうは言ったところで、彼の財産ときたら、それはもう途方もなかった。

そもそもだ。

いまや、商売もなにも、アメリカを抜きに語ることはいできない、もはやそんな時代なのだ。

家柄や爵位、ジェントルマンとしての品格。

表向きはここに集っている『上流階級』にとって、それらは最も重要な価値観だったが、実際には、それももう、建前に過ぎない物になりつつあった。

まだ、エミリアは、そのアメリカの大富豪に近づくことが出来ていなかった。

ロイド夫人の友人達が、彼を取り囲み、独占していたのだ。

エミリアはロイド夫人の知り合いではなかった。

だから、直接、ロイド卿夫人の前に出て行って、紹介を請うことが難しかったのだ。

「夜会の華」とうたわれる、レディ・エミリア・ウォショースク……。

しかし、それは紳士諸君の間だけの評判だった。

紳士方の手前、どこの出と分らないエミリアに社交界への出入りを黙認してきた上流のご婦人方だったが、それも夜だけ、形ばかりのこと……。

陽の高いうちのこんなお集まりに顔を出すことは、エミリアにはあまりないことだった。

大抵の場合、こんな場所はシャンデリアの下で殿方にちやほやとさ

れるほどには、エミリアにとって居心地のいいものではなかった。

エミリアがここに来れたのも、とある子爵のつてで、ロイド夫人に口をきいて貰ったからだった。

もちろん、そのめあては大富豪だ。

彼と何かしらお近づきになる糸口が欲しくて、わざわざここまで出向いてきたのだ。

これまで彼はロンドンの社交界に「精力的」に参加することはなく、聞えてくるのは、ただうわさばかり。

彼が精力的なのは、もっぱら「経済」活動だけのようなのだ。

エミリアがかぎつけた、数少ないチャンス。

それが今日のロイド夫人の『音楽会』だった。

……それに。

その石炭成金はシエスタベリ伯爵の『ポーズ・アビー』を買ったというのだから。

なんとも、そそられるではないか？

ユージーン・マクラ克蘭に会ったのは、何年ぶりだったか……。

チエイニー夫妻の夜会で、彼が、ユージーンが居ることはすぐに判った。

周囲の人間から頭一つ分飛び出す長身。

青みがかって見えるほどの、あの見事な黒髪を、かつて、幾度もこの手で愛撫した。

そう、知り合った頃から、もう彼は背が高かった。
でも、初めてユージーンに抱かれたとき、彼の腕はあれほどに逞しくはなかった……。

あこのころのユージーンは、まだパブリックスクールに通っていた歳だった。

佳い男……。

数々の男性遍歴を重ねてきたエミリアではあったが、最初の一夜から、ユージーンに対する評価は「佳い男」だった。

勘がよく、そして、なにか底知れない、闇のような静けさをたたえている。

その時のユージーンは女もろくに知らない、まだ少年と言っているほどの年齢だったにも関わらず、エミリアは、すぐさまそれを見抜いた。

チエイニーの夜会で。

柄にもなく、ストラウド侯爵のゴシップを知りたがっていた、ユージーン。

こちらの誘いに乗って、夜半近くに私の馬車に乗り込んでおきながら……。

……私の手管には、一切、なびくそぶりも見せないなんて。

ああ、あの乱暴なキス。

エミリアは黒檀の扇で隠した口元を、淫靡にゆがませる。

あんなに荒っぽいのも、嫌いではないけれど……。

私の身体に火をつけておいて！ そのまま、私を捨て置くなんて。

まったく、いつの間に、あんないやらしい真似が出来るようになったのかしら、ユージーン坊や……。

いいえ、このままでは済ませるものですか。

ユージーンには、もう一度、私の愛撫の下で、身も世もないような喘ぎ声を立てさせてあげる……そう、絶対に。

忘我の境地に陥って、悦楽の最中、何度も私に許しを請うがいいわ……ユージーン。

そう考えながら、エミリアは固く瞼を閉じ、頭の中で何度も何度もユージーンを辱めた。

葉蜂の産卵（４）（後書き）

こんにちは、山本です。

えー。エミリア。

Mっ気満点に（Sっ気もばりばりか？）再登場です。

なんだか脇道にばかりそれているようですが、なんのなんの、話はこれでも着々と（？）進んでおります。

以下、まったく、本筋とは関係ない駄話なのですが。

この『ホーソンの庭で』には、わたしがとっても大好きな様々なお話が色々と入っております。

まず、くだんの「ドMなエミリア」（^^；

これは、波津彬子先生の「うるわしの英国シリーズ」コーネリアス・エヴァディーン物の『中国の鳥^{チャイナ}』に出てくるミスティアスな社交界の花形が直接のイメージです。エスニックで高級な扇を持っている所等々。

ただし、波津先生のマンガでは、主人公のレディはとてもチャームングな方で、決してエミリアのようなみだらで毒々しい年増ではありません。

もちろん、コーネリアス・ウォーレンのコーネリアスは、「うるわしシリーズ」の主人公コーネリアスと繋がります。

しかし、性格は当社のコーネリアスの方が、病みまくりです……。

アニックのコーネリアス大叔父さんの名前も「コーネリアス」というのも、「うるわしシリーズ」で、「コーネリアスが一族にうじゃ

うじゃ」というところと被っております。

「うるわしシリーズ」も、さまざまな英文学へのオマージュがたっぷり感じられる作りで、おそらくソノ方面にお詳しい方はひとつぶで何度も美味しいことでしょうねえ……。

コーネリアス・ウォーレンの「ウォーレン」は、言わずと知れた坂田靖子先生の『バジル氏の優雅な生活』の主人公、バジル・ウォーレン卿から。（このバジル、すてきなつばさんです。）

しかし、このバジル氏、爵位がなにか、作中では一切わからないという……。

このバジルもどこからきているのでしょうか。『バジル』という小説もあるようですし。それともやはり『ドリアン・グレイ』からかしら。というか、バジルって当時そんなに良くある名前だったのかな？（勉強不足）

そう言えば、『バジル氏……』に出てくるヴィクトリア・ランバイン公爵令嬢と「うるわしシリーズ」に出てくるクレア・リントン嬢。凄くかさなります。どちらも、とてもチャーミングな女性ですよ。

ユージーンは、自分が好きな名前。

それだけです。ハイ。

マクラ克蘭は、カナダのシンガーソングライターのサラ・マクラ克蘭から。

イングランドの貴族で“Mc” 付く名前ってのも、どうかなあ？とは思いましたが。

まあ、シエスタベリ伯爵が比較的新参者という設定もあり。まあ、「なにが何して色々あれば、あり得なくもないかな」ってことで、適当に押し切ります……（すいません）

ユージーンのパパ
シエスタベリ伯爵のヴァレット、オーガスタ。

これは勿論！ P・G・ウッドハウス「ジーヴスシリーズ」のジーヴスです！！

シエスタベリ伯爵はひとたらしなので、佳い使用人が集まってくるのです（という設定）。

えっと。

長々と、どうでもいい話でした。

（や）

葉蜂の産卵（5）

41

カロリーノとアン・ヘイローを乗せた馬車が、ロイド卿の館へと辿り着いた。

アンの独りよがりなおしゃべりに付き合わされるやりきれなさや心細さなどで、思わず涙をこぼしそうになっていたカロリーノではあったが、門を通ったところで、館の庭のすばらしさに、思わず目を奪われた。

ロンドンの中心部から、若干離れたところに建てられているロイド卿の館は、ロンドン近郊のものとしては、非常に充実した敷地と庭を有することでも有名であった。

カロリーノの関知するところではなかったが、実は、ロイド卿はプランツハンターとして、なかなか名の知れた人物でもあった。

馬車の窓に張り付くようして、カロリーノは庭へと視線を走らせる。

「……まあ、あれは。温室だわ、なんて大きいのかしら」

淡い珊瑚色のカロリーノのくちびるから、知らず独り言が漏れる。

あちらの東屋の奥の茂みは？　ヘザーかしら……。

館の敷地自体は、おそらくストラウドのカントリーハウスと比べれば、大した広さではないはずだった。

しかしながら、庭はまるで郊外の丘のようにみえた。

館のヘッド・ガーデナーによる遠近法を駆使した巧みな設計により、計算し尽くされた上で、しつらえられていたからだった。

ほんのひと月かそこいら……。

ストラウドの館を離れてから、それくらいしか経っていないというのに。

カロリーノの胸の中には、彼の地への、あふれるほどの懐かしさがこみ上げてくる。

庭に心を奪われているうちに、馬車は車寄せへと滑り入っていった。すぐに扉が開けられ、控えていたフットマンが、カロリーノを馬車から降ろした。

続いて降りてきたアン・ヘイローに、カロリーノはたまらずこう頼み込んだ。

「ミス・ヘイロー……ええっと、アン？ わたしロイド卿のお庭を、ぜひゆつくり拝見させて頂きたいの……だめかしら」

アン・ヘイローは降りた途端、フットマンから何事かを耳打ちされ、その途端に表情を険しくした。しかし、カロリーノのこの懇願を聞くと、すぐにとってつけたような愛想笑いを顔に貼り付けた。

「……庭、ああ。ええ、ええ。もちろんですわ、レディ・カロリーノ。ぜひ御覧になってくださいな。さあさあ、すこしお急ぎ下さいましね、夫人とみなさんが、すっかりお待ちですよ」

アン・ヘイローのこの言い草には、カロリーノもすっかり意気消沈

してしまつた。

これまでの道中でさんざん耳にした、例の「うわべだけ」といった口調の受け答えだったからだ。

アン・ヘイローとフットマンに連れられ、カロリーノは館の奥へと歩を進めた。

ホールの扉が開いた瞬間、ロイド卿夫人とそのすぐ側に座を占めていた取り巻き達の視線が、一斉にそちらへと向けられた。

それは、おっとりとした上流夫人の振るまいを信条としている、彼女たちにはめつたないような、あからさまな反応だった。

エミリア・ウオショースクも、場のムードを感じ取り、扇の隙間から、すぐさま扉の方に視線を走らせた。

やぼつたい三十女、おそらく、だれかのコンパニオンだろう……が、せかせかとホールに入ってくる。

女は、レディをひとり連れていた。

……ああ！

たとえば実際に見るのが今、初めてのことであったとはいえ、社交界の事情通であるエミリアには、すぐに、そのレディが誰であるのか見当が付いた。

夜会の席でも、紳士諸君の間でこのところ話題に上らないということはない……。

故ストラウド侯爵の娘。

社交界随一の美男子、コーネリアス・ウォーレン卿の妹である、レディ・カロリーノ・ウォーレンだということが。

ホステス

会の女主人だというのに、随分先から、どつかりと腰を下ろしたきり、動こうともしなかったロイド夫人が、すつくと立ち上がったかと思うと、いそいそと扉の方へ歩み寄り始めた。

それも、両手を開いて、満面の笑みをたたえながら。

「まあ、いらしてただけて、なんて嬉しいんでしょう？ レディ・カロリーノ、今日はお兄様、侯爵様は？ ええ、そうでしょうねえ、お忙しくしていらっしゃるんでしょうとも。ともかく、レディ、あなたにいらして頂けてよかったわ、さあ、さあ。こちらへ」

なるほどね。

なんのために、こんな中途半端な『音楽会』とやらを、ロイド夫人が開いたのか。

ここにきて、やっとエミリアにも事の背景にあるものについて、合点がいった。

……こんなところに、のこのこやってきた自分もよい面の皮なこと？
もちろん、他の皆もだけれど。

ロイド卿と商売上近い間柄の石炭成金を、ストラウド侯爵令嬢と引き合わせるための、単なるお膳立てに過ぎないわけだ。この音楽会とやらは。

内心は、ばかばかしさと腹立たしさで、心が千々に乱れているエミリアではあったが、そんなことは、おくびにも出さなかった。

そして、ロイド夫人にエスコートされるレディ・カロリーノを開いた扇の陰から、つぶさに観察し始めた。

ミルクのように白く、それでいて透き通るような膚の色をしている。気品があつて、かといって気取りすぎたところのない鼻の形、顎のライン。

顔立ちは完璧だった。

背丈は、やや小柄。

そのせいもあつてか、ぱつと見た感じはやや幼げな印象をうけるが、ラベンダー色の午後のドレスに包まれたレディ・カロリーノの肢体は、やや華奢すぎるとはいえ、すでに男の手で愛されるのに十分なほど成熟していた。

ああ。それにしても、あの腰と来たら。

あの細さ、ユージーンだったら、きっと片手でつかめるのではないかしら。

……ドレスを選んだのは、コーネリアスだろうか？

さすが、センスの良さでは右に出る物がないと言われるだけのことはある。

彼女に似合うものが、本当によく分かっているのだろう。

何色といったらいいのか……。あの銀色に近いブロンド。

ごく小さい子供の髪の色だ。見事なまでのトウヘッド。

そして、なによりも印象的なのは、あのオッドアイに違いない。

スマイレ色の瞳というだけでも、大層珍しいというのに、片方は深緑色なのだ。

そう、亡くなったストラウド侯爵と兄のコーネリアスと同じ色の。

目に見えない光のようなものが、レディ・カロリーノを包んでいるのが、エミリアには判った。

それをあえて言葉にすれば、「若さ」とでも言えいいのか？

……それはエミリアには、もう先から、なくなってしまうているものだった。

ストラウド侯爵の死後、カントリーハウスに駆けつけたユージーン。ウォーレン家の内情を気にしていた……。

どうして……。

どうしてユージーンが、あるとき私を抱こうとしなかったのか。

エミリアは気がついた。

ユージーンは、あの女に惹かれているのだ。

根拠などない。だが、これはいうなれば、女の勘というものだった。そして、それはエミリアにとって、確信となった。

葉蜂の産卵（6）

42

ロイド夫人に手を引かれるがまに、カロリーノは部屋の奥へと歩みを進める。

数人の婦人が立ち上がってカロリーノを迎えた。

「ストラウド侯爵はお見えにならないのね、残念だわ」
一人の婦人が口火を切った。

「……お忙しくていらっしやるのよ、だって何度ご招待のお手紙を出しても、とうとう今日までお返事が頂けなかったんですものねえ」
ゆったりとした口調で、ロイド夫人が答えた。

ロイド夫人の言葉は、兄の無礼に対するちょっとした皮肉なのではないかということは、カロリーノにも察しがついた。
だが、まだまだ場慣れないカロリーノは、それに何と応じていいものか分からないのだった。

とはいっても、カロリーノの答えなど、まるでなから期待されていないようだった。

婦人たちは勝手きままに、互いに互いの言いたいことだけを言い合っている。

ロイド夫人が、それぞれの婦人を紹介してくれたが、カロリーノには誰がだれなのか、さっぱり見分けがつかない。

とびきり豪華だが、似たり寄ったりなデザイン、似たり寄ったりな色のドレス。

似たり寄ったりな髪型。

似たり寄ったりな、少し気取った笑い声。

やがて、ロイド夫人が会話の途切れ目をとらえて口を開いた。
雑談に費やす時間を計算したかのような、わざとらしさだった。

「レディ・カロリーノ、こちら良人の友人で、ミスター・フレデリック・ブラッドショーですの、アメリカからいらしたのよ」

フレッド・ブラッドショーはロイド夫人がいつ自分に話題を向けてくれるのかと、今か今かと待ち望んでいたところだった。

カロリーノが部屋に入ってきたときから、ブラッドショーの眼は、彼女に釘付けになってしまっていたからだ。

ロイド夫人から聞いてはいた。

とてつもなく美しい少女だとは……。

……ええ、どなたをご紹介しようかと、ずっと迷っていましたのよ。
ミスタ・ブラッドショー、でも、この方しかいないと、わたくし確信しましたの。

ディナーの席で、ロイド夫人がおつとりとこう言い出した時。

正直、ブラッドショーは、あまり気がそそれなかった。

移民として、いわば身ひとつでアメリカに渡り、思わぬ成功を手にしたものの、根は順真素朴なフレッド・ブラッドショーだった。

勤勉さという美德は、富を手に入れてからも失われることはなく、そのおかげで、彼はさらに豊かになった。

経済的には……。

もう、今では、富が生み出す富だけで、とてつもない金額だった。

やってみたいと思った贅沢は、かたはしから試した。

でも、それもつかの間のこと。あつという間に、それも尽きてしまふ。

今のブラッドショーには、もう欲しいものなど、なにも思いつかなかった。

したいこともみつからない。

『ポードーズ・アビー』も、周囲の者が「英国一すばらしいカントリーハウスだ」と口をそろえて言うから手に入れてみただけだった。

富み栄えるにつれ、いつしか周囲の人間は、ブラッドショー自身ではなくその富だけを見るようになった。

成金。

金満。

そして、ただ金をもっているというだけで、フレッドを傲慢だと言う者もいた。

勤勉で、純朴な本当のフレッドを見てくれる者は、もうどこにもいない。

そう。

ブラッドショーには、使っても使い切れないほど金があった。

でも、どんな贅沢もむなしい。

時折ブラッドショーは、自分がニューヨーク行きの3等船室にうずくまっている夢を見て、夜半に羽布団のベッドで目を覚ます。

彼は孤独だった。

しかし、今は違った。

カロリーノに出会った今は。

こんなに美しいものを見たのは、生まれて初めてだと、ブラッドシヨ一の心は震えた。

鉤脈を見つけたとき以来の胸の高鳴り、心の躍り。

いや、あるとき以上かもしれない。

……まるで、妖精のようだ。

さほど教養のある育ちといえないブラッドシヨ一には、他にカロリーノを喻える言葉が思いつかない。

もし、この美しいものを、手に入れることができるのなら……。全財産をなげうったとしても、構わないではないか？

ブラッドシヨ一の気持ちは、それほどまでに高まっていた。

このようにして、ロード・ウォーレンの妹、レディ・カロリーノがロイド夫人のとりまきと、石炭成金フレッド・ブラッドシヨ一に引き合わされてから、ロイド夫人の演奏会は、やっと始まったのだった。

……音楽会ですって！　これが？

エミリアは、いらいらと扇を広げ、閉じ、また広げて閉じた。演奏者はたった2、3人。

シューマンのピアノが数曲にモーツアルトのソナタ、それと短いアンサンブルだけという、まるで気抜けするようなものだった。

退屈といらだちで、エミリアは溜息を押し殺すのに、ほんと苦労した。

ロイド卿のお宅ともあろうものが。

形ばかりの演奏会といえど、随分、貧相じゃなくって？

夜に客を呼ばなかったというのも、そういうことかもしれない。これなら料理も酒も必要ないもの。

随分と費用が浮いたでしょうよ……。

退屈のあまり、さっさと帰りたいのは山々だったが、エミリアは、レディ・カロリーノとあの石炭成金の様子も気になっていた。

……彼女の、レディ・カロリーノの話をちらかせれば、ユーージン・マクラ克蘭は飛びついてくるに違いないもの。

エミリアのユーージンに対する思いは、いまや憤怒が入り交じったものになっていた。

……あの女に気持ちがあるから、柄にもなくストラウド侯爵の噂話など仕入れようとしていたのだわ、ユーージンは！

しかも、わたしを利用して、話を聞き出すだけ聞き出したら、あんな仕打ちを……。

ええ、お仕置きをして上げなくては、気が済まない。

さて……。

どうやって痛めつけてやるのかしら、ユージン。

それに。

……あの小娘も。

エミリア・ウォショースク黒檀の扇の陰で、黒い瞳を残酷にきらめかせた。

ふと、エミリアは自分に、ちらと視線をよこす顔見知りの紳士に気がついた。

見ると、彼は退屈に取り殺されそうな顔をしている。

ちよつとしたお遊びをする時間くらいはありそうね……。

エミリアが小さく音を立てて、扇を閉じる。

その小さな合図を聞き逃すことなく、紳士は煙が立ち上るように席を立った。

ピアノソナタが終わり、拍手がまばらに響く中、エミリアも静かに部屋を出た。

葉蜂の産卵（7）

43

音楽を聴くよりも何よりも。

たちこめる香水の匂いにカロリーノは息がつまりそうだった。

ロイド夫人を筆頭に、周囲をぐるりとかこむ御婦人方の香水だ。

それに、どうしてわたしが、このアメリカの紳士の隣に座らなければならぬのかしら……。

カロリーノはそれも落ち着かなかった。

ブラッドショーが頻繁によこす視線は、カロリーノにとってあまりにも不躰に感じられた。

ブラッドショーはカロリーノに夢中になりすぎていた。

レディに対する礼儀など、彼の頭の中からは消し飛んでいたのだ。

……あのお庭に出られたら、どれほど心地よいかしら。

カロリーノは、新鮮な空気を吸いたくてたまらなくなった。

とうとう、意を決して、隣のアン・ヘイローに声をかける。

「……ごめんなさい、すぐに戻りますわ」

アン・ヘイローは「いわゆるところのレディの用事」であろうと察したのか、黙ってカロリーノの退席を許した。

廊下に出ると、カロリーノの口から、思わずため息が漏れた。

つきあたりにはヴェランダがある。

飾りにガーゴイルがついている柱に近づいてみた。

下をのぞくと、庭に飛び降りられそうな高さだった。

左右を見回し、カロリーノはそつと芝生に飛び降りた。

緑のにおいとやわらかい土の感触が伝わってくる。

ふと、カロリーノが視線を上げると、木々の隙間から、何かがきrameいていた。

温室のガラスのようだ。

……勝手に入ったりしては、庭師に叱られるわね。

そうは思ったが、カロリーノは好奇心にかられ、温室へと近寄ってみる。

外から少しのぞいただけでも、中にある植物がどれもめずらしいものばかりだと察しがついた。

カロリーノは目の前にあるドアが、かすかに開いていることに気づいた。

ガーデナーが手入れでもしているの……？

頼んだら中を見せてもらえないかしら。

カロリーノはそつと扉を開いて、中に足を踏み入れてみた。

夏の午後、庭もかなり暖かったが、温室の中はもつと暖かく、空気も湿り気を帯びていた。

見慣れない葉を大きく茂らせる木々が、アーチを作っている。
はつきりとした色合いの花がそこで開いていて、地面にはシダ
が生えていた。

あまりのエキゾチックさに、カロリーノは息をのんだ。
周囲の植物にすっかり心を奪われて、中にいるかもしれない庭師に
声をかけるのも忘れてしまった。

あちこちに視線をさまよわせながら、カロリーノは奥へと進んでい
く。

すると、目の前の茂みがかすかに揺れた。

男の低い呻き声と女の忍び笑い。

カロリーノの踏み出した足が止まる。

茂みの奥では無帽の紳士が、黒い扇で顔を覆った女性の胸に顔を埋
めていた。

ふたりは気配を察し、カロリーノの方を振り返る。

なんとも露骨な場面に出くわし、カロリーノは声も出なかった。

当のふたりときたらすれたもので、踵を返すことも、顔を背けるこ
とさえも出来ずに立ち尽くすカロリーノに向って、微笑みさえ浮か
べてみせた。

そして、紳士はそつと場を立ち去った。

……ごきげんようレディ・エミリア、と言い残して。

黒檀の扇を手にした婦人は、なんとも言えない雰囲気を漂わせていた。

白い膚に黒い髪。

くつきりと目を強調する化粧。

蜂のようにウエストを締め付けたドレスの胸は、昼用のものだといふのに、大きくえぐられている。

以前ほどは、化粧がとやかくいわれることはなかったとはいえ、カロリーノには、レディ・エミリアと呼ばれたこの女性のメイクアップはひどく妖艶に見えた。

……若いのか、それともそうではないのかしら。

一体、この女性^{ひと}は、何歳なの？

「ごきげんよう？ レディ・カロリーノ・ウォーレン。はじめまして、わたくしエミリア・ウォショースクと申します」

カロリーノに数歩近づいて、彼女は恭しくお辞儀をして見せた。

甘い、そして突き刺すような香りがカロリーノの鼻をかすめた。

近づく女のくちびるは、まるで傷口の血をなすりつけたかのように赤かった。

どうしてわたしの名を知っているの……？

湿った温室の空気の中、カロリーノの横の葉に、屋根のガラスからひとつぶ、水滴が落ちてはねた。

「レディ……エミリア。わたし……」

エミリア・ウォショースクにどう言葉を継いでいいのか、困惑して

口ごもった。

……お邪魔をするつもりなんて。

そんな言葉を口にするのは、とてもではないが、はばかれた。

すると、エミリアは真紅に塗られたくちびるを、ほころばせてこう言った。

「わたくし、ストラウドのカントリーハウスにはお邪魔したことがありますの。もちろん、ストラウド侯のご存命の頃ですわ……そう、あなたのお父様のね」

エミリアは、カロリーノに息が掛かりそうなほど近くへと歩み寄っていた。

カロリーノは足に鋏が打たれてしまったかのように、その場から動けない。

「あら、でも変ですわね？ その時はあなたにはお逢いできなかったと思うわ。だって、あなたのような可愛らしい方を見て、覚えていないなんてことありえないもの」

エミリアのその言葉に、カロリーノは思わず息を詰めた。

そう、ロンドンには父様のお知り合いや、ストラウドに呼ばれていた人々がいるのだってことを、想像していなかったわけじゃない……。

わたしが、なぜそんな場にいなかったのかということ。

それが、みなに関心を引きかねないということを、おそらくコーネリアス兄さまが、とても気になさっている。

エミリアはカロリーノの様子をしばらく黙って見つめた。

なにも言えず、ただ青ざめて口をつぐんでいる小娘を心ゆくまで眺め回す。

「父とお知り合いでしたの？ …… ミス・ウォシヨースク」

手袋で隠されていないエミリアの左手に指輪がないことを、カロリーノは見取った。あえて、レディではなくミスと呼びかける。

このそこはかとなく淫靡な婦人にそう呼びかけたのは、彼女の言葉の端々に見え隠れする底意地の悪さ、悪意のようなものを感じ取ったからかも知れないし、もしかしたら、カロリーノのストラウド侯爵令嬢としてのプライドのようなものが刺激されたのかも知れなかった。

エミリアは、カロリーノが垣間見せた微かな、まだ敵意と呼ぶにはあまりにも曖昧な、その言葉のとがりを、軽い微笑みで受け流した。「いいえ、お父様とは直接は。ヴェルマス卿に、今のストラウド侯爵にお招きいただいたんですよ」

「コーネリアス兄さまに？」

カロリーノの表情が戸惑いに変る。

エミリアはそれを見逃すことはなかった。そして、さらにこう続けた。

「ああ、もう少し正確に申し上げると。コーネリアス・ウォーレン卿のご友人のロード・ユージーン・マクラ克蘭とご一緒させて頂いたんですよ。ええ、シエスタベリ伯のご子息ですわね」

これは嘘だった。

ストラウドのカントリーハウスに行ったとき。

エミリアをエスコートしたのは、別の貴族だった。

……ユージーンの名前を出したら、この小娘はどんな表情かおをするかしら……？

エミリアはわざと、偽りを話したのだ。

胸の中に、なにか熱い塊のような物ができあがっていくのを、カロリーノは感じていた。

いくら世事に疎いカロリーノとはいえ、エミリア言葉の内にあるトゲに気付かないほど聡くないというわけではなかった。

……彼女の言いたいことは分かる。

マクラ克蘭さんと、ごく親しい間柄だと、そう言いたいのだ。

ミス・ウォショースクは……。

でも。

どうして、それをわざわざわたしに？

温室の空気の中、湿り気を帯びてきたドレスのスカートを、カロリーノは固く握りしめた。

ふと、エミリアが声音と話題を変えた。

「きょうはロード・コーネリアスはどうなさったの？ お兄様はいらしていないのね、レディ・カロリーノ」

カロリーノは答えなかった。

「お兄様も、ずいぶん薄情なお人ではなくなつて？ こんな席にあなたを一人で寄こすなんて」

エミリアの声は急に同情に溢れた色に変わる。

「……？」

「だって……」

エミリアはこう言つて、少しの間、忍び笑いを漏らした。

「ロイド夫人のお目当ては、あなたをあのアメリカ人に、ミスタ・ブラッドショーに引き合わせることであったのではなくって？ そんな席にあなたを一人きりでやるなんて……ね？」

エミリアの忍び笑いが、はつきりとした笑い声に変わった。

「ねえ？ ミスタ・ブラッドショーは、一瞬たりともあなたから目を離そうとしなかったじゃないの？ レディ・カロリーノ」

カロリーノは声を出すことが出来なかった。

それは戸惑いのためだけではなく……エミリアに対する憤りのようなもののせいでもあった。

「ほんとうに、あなたってお噂通り、いいえそれ以上に愛らしいわレディ。なんて綺麗な目なのかしら」

エミリアがさらに一歩、カロリーノに近づき、麝香の香りが、カロリーノの鼻孔を刺激した。

カロリーノは瞳の色のことを言われるのは嫌いだった。いつからそう思うようになったのか。

……ただ、ぼんやりと思ひ出せるのは、幼い頃に父から、ストラウド侯爵から言われた言葉。

「あら、どうかなさって？ なにかお気に障ったかしら」

エミリアがまた口を開く。

……自分では口にすらしたくないくらい、気にしていることだってあるのだ。

バーンズもミセス・オーソンもコーネリアス兄さまも、わたしに目のことなど言ったことはない。
マクラ克蘭さんだって……。

「レディ・カロリーノ、ねえ？ ミスタ・ブラッドショーが炭鉱を見つけたのは、とても幸運だったと思いませんか？」

突然に話が変わり、カロリーノは少し面食らう。

「そう、幸運……あなたがそんなに綺麗な髪をして、そんなに美しい瞳を持って、名門の家に生まれついたのと同じだわ。そうね、あなたの今持っているのは、全部生まれながらに得ているものね……」

エミリアは数回忍び笑いをもらした。

「でも、ブラッドショーのその後のことは、すべて彼自身の力で得たことだわ。努力、才覚……そんな言葉で言えばいいのかしら？」

カロリーノはやつとのこと口を開いた。

「いったい……何がおっしゃりたいの、ミス・ウォショースク」

「では、家柄がなければ、名誉がなければ、どうやってら手に入られる？ そう、富があればいいわ。今はそれで欲しい物はほとんど手に入る。では、富を手に入れるためにはどうすればいいのかしら。それを探して実行するだけ、そのために自分が持っているものを、最大限に利用する。そういうことじゃないかしら」

エミリアは、バチリと音を立てて扇を閉じた。

「自分が持っていないものを嘆くより、もっているものを利用する……なんでも利用するのよ」

……この女はヒトいったい。

何の話をしてるんだろう。

カロリーノはぐるぐると思いを巡らせた。

まず、エミリアが暗に示してるのは、ミスタ・ブラッドショーが家柄を富で手に入れようとしているっていうこと。

ロイド夫人の目当てが、わたしをミスタ・ブラッドショーに引き合わせることだと言っていた。

つまり、ブラッドショーは、わたしと結婚して、ストラウドの親戚となる名誉をお金で買いたいのだということなのだ。

なんでも。

持てるものは利用するのだ。それも最大限に。

エミリアは心の中で繰り返す。

わたしには何もなかった。

富も名誉も。家も。

わたしが持っていたのは、この身体だけ。

このエキゾチックな美貌。

そして、それを上手く利用するだけの才覚を。

「まあまあ、レディ・カロリーノ！　こんな所にいらしたのね」

アン・ヘイローが、温室の入口で声を上げた。
悲鳴に近い声だった。

「ほんとうに、館中探しましてよ。さあ、ホールに戻りましょう？」
言葉じりは丁寧だった、

しかし、アンがカロリーノの手を掴む様子は、まるでだっ子の手を引く下町の母親のような乱暴さだった。
強い力でカロリーノを引っ張り、温室を出ていこうとする。

「『あんな方』が、今日いらしてるなんて……！」
歩きながらアン・ヘイローは、なかば聞こえよがしのように口にした。

「……あんな方って？」
カロリーノは、アンの様子に戸惑った。

「エミリア・ウォシヨースクですわ！ レディ・カロリーノ。誓って申しますが、ロイド夫人はあの方とは、一切お親しくはないんですのよ」

アンはそれまでになく、ひどくきつい調子で口にした。

そして、そんなアンとカロリーノの様子を、エミリアは温室の中に佇み、扇の隙間から見送っていた。

カデイスの羽化（１）

44

帰りの馬車でのアン・ヘイローの話は、二割がブラッドショーのこと。

残りはすべてコーネリアスのことだった。

なんの演奏を聴いたかすら思い出せないくらい、カロリーノは、ほととうんざりとした気持ちだった。

コーネリアスと何回か出かけた社交の催し物のなかでも、これほど気分が疲れ果てたものはなかった。

自分を見つめ続けるブラッドショーの不躰な視線には、カロリーノも、じきに慣れてしまった。相変わらず、気分の良いものではなかったのだが。

でも、エミリア・ウォシヨースクの温室での言葉が。

そのひと言ひと言が、頭の中で思い返され、そのたびに、言葉の端々に仕込まれたトゲに、カロリーノの心は傷つけられた。

チエルシーに着くまでの時間は、カロリーノにとって永遠のように思われた。

馬車が館の車寄せで止まったとき、拷問からの解放に安堵し、カロリーノは深々とした溜息をついてしまった。

カロリーノとアンが、ホールで執事の出迎えを受けていると、奥の階段からコーネリアスが下りてきた。

コーネリアスは、ゆったりと、優雅に歩み寄ってくる。
アン・ヘイローは、半ばくちびるを開き、瞬きも忘れて、それに見入っていた。

「おかえり、カノ。音楽は楽しめかい」

コーネリアスはカロリーノの手を取り、自分に引き寄せた。

カロリーノは黙ったまま、目を伏せた。

コーネリアスの笑顔も優しい言葉も、なぜかひどくカロリーノの心をいらだたせる。

コーネリアスは、くだんの蠱惑的な微笑みをうかべると、アンの方を向いて見せた。

「アン、あなたが僕との約束を守ってくださったことは、これっぽっちも疑っていませんよ」

「そうですよ。わたくし、レディのおそばを離れませんでしたことよ。ロード・コーネリアス……。ご心配には及びませんわ、ロイド夫人とお親しいご婦人方だけで、ゆっくり音楽を楽しんだだけですもの。そうそう、ロイド卿のご友人のミスタ・ブラッドショーもお仕事を忘れて、おくつろぎ頂けて」

コーネリアスは、アンが最後に挙げた名前に、軽く眉を上げて反応した。

しかし、すぐにアンの手を取って手袋に接吻をし、こう続けた。

「カロリーノを皆さん方のお仲間にいれて頂けて、お礼を申し上げますよ、アン……」

コーネリアスのキスで、アンの顔は眉の上まで朱に染まった。

「こういった催しには、ぜひ『また』お誘い頂けると嬉しいですね。ロイド夫人にも『そう』お伝え下さい」

アンの手を離しながら、コーネリアスは言い添えた。

コーネリアスの背後で、この言葉を聞いていたカロリーノの頬が一瞬にしてバラ色に染まった。

それは激しい憤怒のせいだった。

兄の言葉の真意は、カロリーノにもすぐに察せられた。

『こういった催し』というのが、何を意味するのか。

……ブラッドショーとわたしを、また逢わせてもいい、ということなのだ。

アン・ヘイローに別れの挨拶もしないまま、カロリーノはホールの奥に向って歩き出した。

階段を駆け上がるようにしてのぼる。

背後で兄がアンに語りかける口調に、カロリーノはなんともいえない、いやらしさを覚えた。

……コーネリアス兄さまに対してこんなこと。

いままで一度だっと思ったことなかった。

こんな風を感じたことはなかったのに。

どうして？ 腹立たしい。

カロリーノの体中が熱を帯びた。

頭がズキズキと痛む。

そして、なにかを大声で叫び出したいような衝動が、喉元にこみ上

げてきた。

そんな感情のうねりを押さえこもうと、カロリーノは懸命に強く両手を握りしめた。

……ひどい！

カロリーノの心の中の、得体のしれない燃えたぎる思いの中から、この言葉がはつきりと形を取って現れた。

……兄さまは、ミスタ・ブラッドショーに会ったこともないくせに、そんな人とわたしを、また逢わせてもいいと言うの？

そして、エミリア・ウォショースクの言葉が、またカロリーノの頭をめぐる。

……家柄がなければ、名誉がなければ、どうやったら手に入れられるかしらね？ そう、富があればいいわ……。

ロード・ユージーン・マクラ克蘭とご一緒させて頂いたんですよ……。

温室の茂みで、エミリアのドレスの胸に顔を埋める紳士……。

頭を上げてこちらを向いたその顔が、ユージーン・マクラ克蘭の顔にかわる。

「……あ」

カロリーノの口から、小さな悲鳴がもれる。

それ以上声を上げないよう、カロリーノは強く歯をくいしばった。

寝室に飛び込むと、カロリーノは身体をベッドに投げ出した。

息が苦しい……。

……これは嫉妬なんだわ。

カロリーノは固く目を閉じた。

あの、エミリア・ウオシヨースクに。

わたしは、嫉妬している。

カロリーノのこらえきれなくなった叫びが、嗚咽にかわった。

と、その瞬間、部屋の奥で何かが動いた。

ベッドの上のカロリーノは、思わず顔を上げて、そちらを見やった。

ドレスとブラシを持ったベツツイーが、困惑した表情で立ち尽くしていた。

「ああ、レディ。お許しを……」

カロリーノは、ベツツイーが奥で片付けものをしていたことにも気付かないほど、気持ちを高ぶらせていたのだった。

不意をつかれ、カロリーノは頬に涙のあとをつけたままベツツイーを、ただ黙ってみつめることしか出来なかった。

ベツツイーはというとレディのただならぬ様子に、どう自分の身を処して良いか分からず、ただただ狼狽するだけだった。

あの、まるで人形のようなレディが……こんなに取り乱されるなんて？

ベツツイーは、目の前のカロリーノの様子に驚くばかりだった。

……そう、まるで神様のおつくりになった完璧なお人形。
ベッツィーはカロリーノを見るたびに、そう感じていた。
静かで……。

か細く。

ときおり微かに、ほえまれるだけ。

美しすぎて、生きている人だなんて思えないほどだ、と。

しかし、ベッツィーの頭の中にはすぐに、自分がここにいてはならないということだけは浮かんた。

……早く、お部屋から出なくては。

ベッツィーはドレスを手にしたまま、もつれるような足取りで歩き出した。

だが、手にしたドレスに足を取られ、ベッツィーは書き物机にしたかに身体をぶつけてしまった。

その拍子に、蓋の開いていたインク瓶が倒れた。

手紙を書くとしていたカロリーノは、コーネリアスに突然外出を命じられ、準備をせかされるあまり、ついすっかりとしていたのだった。

こぼれたインクがベッツィーの方に流れる。

ベッツィーの手にしていた、シエルピンクのイブニングドレスに黒い液体が飛び散った。

コージーンが夕食にきた晩に、カロリーノが身につけていたものだった。

淡いピンクのシルクの上に、まがまがしく浮かび上がるインクのシ

ミを見て、ベッツィーの顔から血の気が引いていった。

……ミセス・ポーラーの罵倒、叱責。

首を言い渡されるのだろうか。

何日くらいの猶予がいただけるのか。

紹介状はきつと頂けないにちがいない……。

ここを追い出されたら、次はどうしたらいいのか。

さまざまなことが、ベッツィーの頭の中に、つぎつぎと浮かび上がる。

カロリーノは、ベッツィーの顔に浮かび上がる恐怖の表情を見て、ふと我に返った。

そして、ゆつくりとベッドからおり、書き物机の方に近づいた。

ベッツィーは、近づいて来るカロリーノにさらに恐怖をかき立てられ、涙をこぼし始めた。

カロリーノは机の上の倒れたインク瓶を戻し、蓋を閉めてから、ベッツィーの前にかがみ込んだ。

「どこも痛くない？ ベッツィー」

涙がかすむベッツィーの視界に、女主人の顔が現われる。

不思議なほどに美しい色違いの両の瞳が、ベッツィーの目を覗き込んでいた。

こんなに近くで、こんなにじつくりとレディの顔を見るなんて……。

ベッツィーには初めてのことだった。

金色の睫毛が、心配そうに震えている。

……ふっくらとした珊瑚色のくちびる。

思わず見とれてしまいそうになり、ベッツィは、はたと自分の置かれた状況を思い出した。

「申し訳ございません、レディ。申し訳ございません」

ほかに何を口にしていいのか、ベッツィーには思いつかない。

固く目を閉じて、何度も謝罪の言葉を口にした。

カロリーノの白い手が、そっとベッツィーの頬に触れた。

「大丈夫よ、ベッツィー。心配しないで、しかられたりしないから」

ベッツィーがふたたび目を開けると、カロリーノのエメラルドとアメジストの瞳は、まだベッツィーの顔を優しく見つめていた。

「これはわたしがごぼしたの。ね？ だから大丈夫。ベッツィー」

「レディ・カロリーノ、でも……」

ベッツィーは口ごもる。

「さあ、ベッツィー。これはここにおいて、お行きなさい」

カロリーノはベッツィーの手から、ドレスを引き取った。

ベッツィーは泣き顔のまま、立ち上がり、ころがるようにカロリーノの寝室を出て行った。

その場に座り込んだまま、カロリーノはシミのついたイブニングド

レスを眺めた。

そして、そつとドレスに顔を埋める。

キスを。

ユージーンのキスを思い返す。

髪に。

腕に。首筋に。

身体の芯が熱くなり、吐息が漏れる。

ユージーンのテールコートの感触と、その香りが脳裏によみがえり、体を突き抜けるような痺れが走った。

「……ユージーン、ユージーン」

瞼を閉じて床に身体を投げ出し、カロリーノは何度もその名を口にした。

ふと、甘い刺すような香りを感じて、カロリーノは目を開ける。

血のように赤いくちびるが。

タイをほどいたユージーン・マクラ克蘭の、あらわになった首筋を這う。

そのくちびるに耳朵を絡め取られるユージーンが、低いうめき声を上げた。

……エミリア、と。

カロリーノの心は、大きなかぎ爪でつかまれ、引き裂かれるようだった。

痛い。

胸が痛い。

……どうして、こんな思いをしなければならないの？
わたしは一体、どうしてしまったの？

誰か……。

誰か助けて。

カロリーノはドレスを握りしめ、床に身を投げ出したまま、ただ静かに涙を流し続けた。

カデイスの羽化（２）

45

ユージーン・マクラ克蘭は、送話器から顔を離し、受話器をフックに戻した。

なんと連絡を取ろうとしてもらちがあかなかった。

コーネリアスは電話にも出ない。

レディ・カロリーノの診察結果については、直接顔を合せて話をしたかった。

チェスタートンの館からの帰りの馬車以来……。

ユージーンは、あれきりコーネリアスとはまったく話が出来ていなかった。

コーネリアス自身の様子も、ひどく気になった。

彼の体調と精神の消耗具合は、あの晩に見た限りでも、医者であるユージーンの不安を十分にかき立てるものであったのだ。

しかし、ユージーンはじきに、パリの学会に向わなければならなかった。

出発までには、それほど時間がない。

カロリーノの診断内容について、ユージーンはコーネリアスあてに手紙をしたためていた。

今日、コーネリアスに電話に出てもらえなければ、とりあえずそれを送る心づもりでいたのだった。

案の定、コーネリアスへの取り次ぎはかなわなかった。

ユージーンは、コーネリアスのチエルシーの館のバトラーに、主の妹に関する重要な手紙を送る旨を、強く念押しして通話を終えたところだった。

あとは、本人、レディ・カロリーノにも、結果を伝える必要がある。そう、それは彼女自身の身体の問題なのだから……。

あのディナー以来、ユージーンは何度か彼女に手紙を書こうとし、そのたびに思いとどまっていた。

カロリーノからは、なんの便りもなかった。

ユージーンは、ひとつ溜息をつき、引出しからレターセットを取り出した。

——コーネリアスに連絡が付かないのなら仕方あるまい？
レディ・カロリーノに直接、都合を聞こうじゃないか。

チエルシーの館に配達夫がやってきた。

バトラーはいつものごとく、主宛の郵便物を仕分け始めた。

先だつてのユージーンからの電話で念押しがあつたとおり、昨日、分厚い封筒がコーネリアス宛に届いていた。

重要な用件の手紙だということだからと、バトラーはコーネリアスに注意を促したが、今朝になつても、主がそれに手をつけた様子はなかった。

今日の郵便物にも、お手をつけられることはないだろう……。

バトラーは、立場にあるまじき事だが、深い溜息をついた。

ふと、仕分けをするその手が止まる。

レディ・カロリーノあての封筒があった。

バトラーは思わず、差出人の名に目を走らせた。

……ロード・ユージーン・マクラ克蘭から？

バトラーはさらに職務にあるまじき事に、自身の好奇心が沸き立つのを感じた。

カロリーノ・ウォーレンは、数日前から高熱を出して、床についていた。

熱はだいぶ引いていたものの、カロリーノはまだベッドから起き上がれる状態ではなかった。

倒れたのは、ロイド卿夫人の音楽会に出向いた次の日だった。

ロンドンでの社交の疲れが出たのだろうと、コーネリアスは医者を呼んでカロリーノをいたわった。

……ユージーンではない医者を。

カロリーノは兄の優しさを、素直に受け取れない気持ちのままだった。

熱っばさに身体をもてあまし、時折訪れる微睡みに安堵し、身を任

せる。

そして目が覚めると、今度は心がふさいで、涙が止まらない。そんな様子で、カロリーノは、なかなかベッドから離れることが出来ないでいたのだった。

寝室のドアがノックされた時、カロリーノは午後の微睡みの中にあつた。

バトラーが入ってくる。

「レディ、お手紙が届いておりますが」
枕元に銀の盆が置かれた。

カロリーノは、物憂げにバトラーの方に目をやった。

トレイの上の封筒……。

その筆跡は。

間違えようもなかった。

マクラ克蘭さんからだわ……！

カロリーノの瞳が、にわかに喜びにきらめいた。

「いま、お読みになりますか？」

バトラーがすかさずペーパーナイフを差し出す。

「ありがとうございます」

カロリーノはバトラーに言うと、すぐさま封筒にナイフの刃を差し入れた。

さすがにバトラーも、それ以上カロリーノの寝室にとどまる事も出来なかった。

カロリーノが封筒から手紙を取り出す音を背中で聞きながら、バトラーは部屋を出て、ドアを閉めた。

ユージーンの手紙は、招かれたディナーを中座したことについての謝罪から始まっていた。

そして、カロリーノの体調を案ずる言葉が続く。

さらに、診察の結果を話したいが、コーネリアスと連絡が付かないと記されていた。

カロリーノの表情が曇った。

……コーネリアス兄さまは、やっぱりマクラランさんのことも遠ざけているのだ。

ストラウドで……。

バーンズと約束したのに。

兄さまのことを、マクラランさんをお願いすると。

カロリーノの心には、そんな自責の念も渦巻き始めていた。

……でも、どうしたらいいの？

また、涙がこぼれそうになった。

カロリーノは手紙の続きに目を走らせた。

カロリーノ自身の身体のことだから、本人にもきちんと話をしたい。近々、逢える日はないか、という内容が続いていた。

……自分の身体がどんな具合かだなんて、カロリーノにはもうどうでもいいことのように思えた。ユージーンにさえ逢えれば。

どんな理由でもかまわない。

逢いたい。

マクラ克蘭さんにお逢いしたい。

カロリーノは手紙をしっかりと胸に押し当てた。

逢いたい。

逢いたい。

胸の内から、その言葉だけがあふれ出した。

もう、その思いは止められなかった。

コーネリアス兄さまがなんと仰っても。

わたしひとりでも、マクラ克蘭さんに逢いに行く……。

手紙の最後には、四日後にコヴェントガーデンでと、記されていた。

芍薬の花の側で、話したときのことを覚えていて下さったの？

オペラを見に行こうと……。

植物園に行こうと。

カロリーノの胸に、暖かいものが広がっていく。

……初めてわたしにくちづけをしてくれた時のことを。
覚えていて下さったんだ、マクラ克蘭さんは。

その日のケンジントンの『ザ・プレイス』の夕食には、めずらしく
ジェイン大叔母の姿はなかった。

遠縁の結婚式によばれ、数日前からデヴォンジャーへと立っていた
いたからだった。

うるさがたの大叔母が留守となり、しばしの開放感を味わっていた
のは、もちろん使用人達だけではなかった。

その日のディナーは、シエスタベリ伯爵お気に入りのオニオンスー
プから始まった。

いつもにまして、ふんだんにこがね色の玉ネギが使われている。

「『ギャンブラー』・チエスタートンが死んだそうだな？ ヤンガ
ー」

スプーンを乱暴に、そして優雅に口に運びながら、持ち前のあけす
けな口調でシエスタベリ伯爵は口火を切った。

「お前が看取ったのか？」

「だから、なんなんですか 父さん」

ユーージン・マクラ克蘭は、これもまたぞんざいな口調で、父親
に応じて見せた。

「ずいぶんな若死にだな？ ガンだったと訊いたが」

ユーージンは無言でスープを飲み込んだ。
シエスタベリ伯爵は、さらに話を続けた。

「ヤツが、方をつけられなかった『博打^{取引}』の負けを取り立てそびれ

た連中がな、ヤンガー。一時期バークレースに詰めかけて大変だったらしい。シティーではずいぶん醜聞だったと聞いたが」

ユージーンは心の中で、溜息をついた。

……チェスタートンも、もう少し頑張れるつもりでいたのだ、おそらくは。

最期の病状の進行は、ユージーンが予想していたよりも早かった。

ユージーンの沈んだ表情に、さすがのシェスタベリ伯も口調を緩めた。

「お前さんの知り合いのことを、あまり悪くいうのも良くはなかったな、ヤンガー？」

ユージーンは、その言葉にも沈黙で応じた。

やがて、テーブルに今年初めての雉肉が運ばれてきた。

「ときに、ヤンガー。話は変わるが。あの、馬から落ちたストラウド侯爵の娘が、うちの『ポードーズ・アビー』を買ったアメリカ人と見合いをしたらしいな」

ユージーンは口元まで運んだフォークを、そのままゆっくりと皿に戻した。

そして、眉間に皺をよせると、父親の顔をはたと見据えた。

「おや、初耳か？ ヤンガー。お前の友達の妹だろう？ いま夜会で一番の話題なんだがな」

ぜひ『また』お誘い頂けると嬉しい……。

アン・ヘイローに伝えられたコーネリアスの言葉を言質にして、ロイド夫人がカロリーノとブラッドショーのことを、あちこちに吹聴して回っていた結果だった。

コーネリアス・ウォーレン卿も、この話にたいそう乗り気であると。そして、その噂に、こっそりと尾ひれをつけているのは、レディ・ウォーショースクに他ならなかった。

……レディ・カロリーノに縁談？

ユージーンは動揺を隠せなかった。

それはまったく、ユージーンらしくないことではあった。

「そういえばヤンガー、今晩はめずらしく洒落たなりをしているじゃないか？　これから出かけるのか」

何気ない口ぶりだったが、シエスタベリ伯は、いつもそうやって本質に切り込んでくるのだ。

そこへダニエルが近づいてきた。

「車のご準備が出来ました、ユージーン様。いつでも出せますよ、コヴェントガーデンまででよろしかったですね」

「ほう、コヴェントガーデンね……」

シエスタベリ伯は、雉肉をさつさと片付けて、ナプキンで口を拭いた。

「もうそんなシーズンなのだな？　おやおや、まさかひとりで見に行くわけでもなかるうな？　オペラなぞ」

ユージーンは父親の言葉など、ほとんど耳に入っていなかった。

……アメリカ人との縁談。

これからその噂の当人と、カロリーノと、自分は出かけるのだ。
人目のあるオペラへ。

そんな噂のあるレディとふたりでいるなんて……。
さらに、おもしろ可笑しい噂のタネにされるに違いない。

……自分はかまわない。
だが、レディ・カロリーノをそんな醜聞に巻き込むのはたまらなかつた。

今日は逢わない方がいいのかもしれない……。
ユージーンの心に、いまさらながらそんな考えが浮かんだ。

しかし……。

コーネリアスは、一体どういうつもりなのだ？！
あのプライドの高いコーネリアスが、いくら途方もない財産家だからといって、まるで身分も釣り合わない、しかもアメリカ人の男に、ストラウド侯爵令嬢たる自分の妹を嫁がせる？

コーネリアスにそんな気があるとは、ユージーンにはとても思えなかった。

しかし、チェスタートンが死んだ夜。

コーネリアスの、あの取り乱しように思い出すと、ストラウド侯爵家の内情がどれほどのことになっているのか……。

そこまでのことを、コーネリアスに考えさせるような事態に陥っているとしてもいうのだろうか。

ユージーンの心に漠然とした不安がよぎった。

そして、それ以上に心の中には、嫉妬の炎がわき起こり始めた。

……兄ほどポードーズ・アビーに入れ込んでいたわけではなかった。しかし、ユージーンにとっても、あのカントリーハウスは思い出の場所だったのだ。

幼い頃に失った母とのわずかな思い出は、みなあの家に結びついていた。

ユージーンは、本心ではあの家を奪った男に対して、さほどいい思いは抱いていなかったのだ。

『ポードーズ・アビー』だけでなく……。

カロリーノまで、金で買おうとするのか？

あのアメリカ人は。

ユージーンは、手にしていたカトラリーをテーブルに置いた。

そして、心を決めた。

……彼女は来ると返事を寄こしたのだ。

はつきりと、手紙で。

もしかしたら、コーネリアスは彼女を、カロリーノを館を出させないかもしれない。

そんなことは考えたって仕方あるまい？

どうなるか判らないことだ……。

カロリーノが来るのか来ないのか。

ユージーンは、なかば賭をするような気持ちになっていた。

カデイスの羽化（3）

46

キャリッジのドアをダニエルが開く。

ユージーンは、黙って中に乗り込んだ。

ダニエルはすぐに扉を閉めず、片えくぼの笑顔でユージーンを見つめている。

「どうした？ ダニエル」

ユージーンの問いに、ダニエルはいたずらっぽく目を輝かせた。

「もしや、今宵お逢いになられるのは、あの手紙の方でしょうか？
六月の香りの」

ユージーンの沈黙を、ダニエルは肯定だと受け取った。

「最近、手紙がこないかと、気になっていたのですが……よかった
さて、これでよかったのかどうか……」。

ダニエルの言葉に、ユージーンはただ黙ってくちびるを噛みしめた。
さすがに、ダニエルもユージーンの様子に疑問を感じたようだった。

「なにか、乗り気でないことでも？ ユージーン様」

ユージーンはやはり口をつぐんだままだった。

ダニエルはそれ以上の詮索はしなかった。
そのかわりに、そつとユージーンの襟に白い花をさした。

「ボタンホールをあまりお好みでないことは、存じてますよ。ユー
ジーン様」

ダニエルはまた片えくぼを作って見せた。

「でもこの花は、今日届いた中でも一番綺麗だと思ったので……。
早咲きのカメラリアです」

ユージーンはダニエルのこの言葉に、やっと口元を緩めて見せた。
「ああ、綺麗だな……ありがとう、ダニエル」

ユージーンの礼の言葉に、ひとつ頷いて見せてから、ダニエルはキ
ヤリッジのドアを閉めた。

馬車は『ザ・プレイス』の玄関から滑るように走り出した。

「レディ、こちらに……！」

おどおどと、周囲を見回すカロリーノに小さいが鋭い声が飛ぶ。

館から少し離れたところに、馬車が用意してあった。

カロリーノを外に出してくれたのは、ベッツィーだった。

結局、カロリーノはコーネリアスにユージーンと出かけたいとい
うことを伝えられないままだった。

けっして、最初から黙って館を出る気ではなかったのだ。

相変わらずの無気力、無関心の兄の様子は、カロリーノがベッドから起き上がるようになった時にも変わっておらず、カロリーノが何を話しかけても、上の空だった。

ただ、ひとたびカロリーノの口から、ユージーン・マクラ克蘭の名前があがると、ぞっとするような不機嫌な様子を見せるのだ。

バトラーや他の者の口からその名が漏れても、どうということはないというのに。

なぜか、カロリーノが口にするとそうなのだった。

カロリーノは、兄の許しをもらうのは諦めた。

そもそも。

そんなものがあってもなくても、カロリーノは行くつもりだった。ユージーンに逢いに。

出かけるといっても、そうたやすいことではなかった。

馬車も手配しなければならない。

身支度もしなければならぬ。

レディ・メイド

侍女のミセス・ポラーが、なによりも兄の、コーネリアスの機嫌を損ねることを気にしているということは、カロリーノにも分かっていた。

兄に内緒の外出の身支度を、彼女に手伝わせるとするのは、危険きわまりないことだった。

なんとか独りでできるだろう……。
だって、ストラウドにいた頃は、そうだったのだから。

ストラウドのハウスキーパーのミセス・オーソンが、なにかと氣にかけてくれていたとはいえ、彼女は館のメイドのとりまとめ役。そんなにつききりで、カロリーノそばにいてくれたわけでもない。

そう考えたカロリーノが、こっそりとドレスの準備のため衣装室に入った時に現われたのが、ベッツィーだった。

ベッツィーに、なんといって切り抜けよう……。

カロリーノが懸命にいいわけを考えようとした時であった。ベッツィーは静かに衣装室の扉を閉め、鍵をかけた。みると、ベッツィーは手に化粧道具を持っていた。

「……どこへいらつしやるかはおたずねしません、お嬢様」
ベッツィーはささやいた。

「さあ、早く準備をしてしましましょう、レディ」

ベッツィーの整髪や身支度の手はずは、なかなかにすばらしい手際だった。

いつもミセス・ポラーの剣突に、おびえたにも似た表情をみせる彼女からは、想像もつかなかった。

誰と一緒にいるかで……ひとは、こんなにも出せる力が変わるものなのだ。

カロリーノはきびきびと背筋を伸ばしているベッツィーを見て、ぼんやりとそんなことを考えていた。

……ミセス・ポーラーと一緒にいることは、この子にとっては、ちつともいいことではないのかもしれないわ。

グルームにどうやって話をつけたのか、ベッツイーは馬車まで用意してくれていた。

このことでベッツイーが叱責されるようなことになってはと、心配にはなったが、今のカロリーノには、ただただ、コヴェントガーデンに出向くことしか考えられなかった。

周りのことも、自分のことも。

この後のことさえも。

……館に戻ってきた時のことなど、もうどうでもいいとすら思っていた。

……マクラ克蘭さんに逢いたい。

今はそのこと以外、考えられない……。

カロリーノの強い思いを乗せて、これ以上ないほど静かに馬車はチエルシーから走り出した。

「マクラ克蘭だが、わたし宛てに何かメッセージは？」
コヴェントガーデンに着くなり、ユージーンはボーイに尋ねた。

「とくには承っておりません、マクラ克蘭様」

その答えを聞き、ユージーンはホールをぐるりと見回した。

コヴェントガーデンはさほど広い場所ではない。
カロリーノはまだ来ていないようだった。

ざっと見たところ、見知った顔はいない。

とはいえ、こちらが知らずとも、相手が知っている場合もある。
もちろん、レディ・カロリーノのことも……。

ずっとオペラを見たがっていた彼女には気の毒なことかも知れないが。

落ち合えたら、人目を引かないうちに、ここを出た方がいいかもしれない……。

ユージーンは出入口の方に引き返した。

カデイスの羽化（４）

47

たったひとりで馬車に乗ったのは、カロリーノにとってはこれが初めてのことだった。

しかも、一度も行ったことのない場所へ。

まだ、病み上がりといっていい体調だった。

……行く先に、マクラ克蘭さんがいる。

ただ、その思いだけを支えに、氣力を持ちこたえさせていた。
しかし、次第にカロリーノの心細さは募っていった。

ベツツイーが、ひとはけ、頬に紅をさしてくれていた。

しかし、もうそれでも隠しきれなくらいに、カロリーノの顔色は青ざめていた。

このまま、氣を失ってしまうかもしれない……。

そう、カロリーノが思った時、馬車はやっとコヴェントガーデンに辿り着いた。

カロリーノは、懸命に呼吸を整える。

馬車の扉が開かれた。

まばゆいシャンデリアの光と、人々のざわめきがカロリーノの前に広がる。

ふらつかないように、懸命に気を張って、カロリーノは馬車を降りた。

どこへ向って歩いて行けばいいのか……。

それすらも分からないまま、カロリーノはここに降り立ったのだった。

……マクラ克蘭さんは、どこにいらっしゃるのかしら。

カロリーノは視線をさまよわせる。

きらびやかな淑女のドレスと、人混みに特有な蜂の羽音にも似たうなり。

カロリーノは、自分の視界がかすみゆくのを感じた。

その刹那、カロリーノは誰かに強く手首を取られた。

見上げる視線の先にあったのは、ユージーンの黒い瞳だった。

「レディ、到着して早々、不躰なのは承知の上ですが。ここを出ませんか」

疑問形を口にはしたものの、ユージーンの言葉は提案というよりは、なかば命令だった。

ひと言も返事をする間もなく、驚くほどの強い力でユージーンはカロリーノの手を引いた。

ユージーンはウォーレンの家の馬車を返させ、何の説明もないままに、カロリーノを自分の馬車へと乗せる。

カロリーノは、ひと言も口をきけずにいた。

こんな強い口調のユージーンを見たのは初めてのことだった。
そして、こんなに乱暴に扱われたことも……。

必死の思いでここまでたどり着いたカロリーノの気力は、すっかり
と萎えてしまっていた。

不安と悲しみと、わずかの怒りが、カロリーノの胸に渦巻く。

オペラが見られないことが、それほど悲しいわけではない……。
だって、わたしが逢いたかったのは、マクラ克蘭さんなのだから。

でも、やっとお逢いできたのに。
いきなり、こんな風な態度を取られるのはどうして……？

カロリーノには、ユージーンが、何かに憤っているようにすら見え
た。

一方、ユージーンはカロリーノと馬車に乗り込み、オペラハウスを
離れることができ、やっと安堵した気持ちだった。

カロリーノが来るのかどうか……。

ひどく気をもみながら、ユージーンはコヴェント・ガーデンのホー
ルで入口を注視していた。

ホールに入ってくる客の中に、幾人かのやかいそうな噂好きの顔
を見つける……。

カロリーノが現われたら、出来る限り早くこの場を離れるのが得策
だと、ユージーンには思えた。

馬車からカロリーノが降り立ったのを見て、ユージーンの心に激しい喜びとともに、焦りがわき起こった。

彼女の到着を待ち望んでいたユージーンでなくとも、カロリーノの美しさに、一瞬にして周囲の者が視線を奪われていたからだった。

……急がなければ。

ユージーンの頭からは、礼儀もなにも消し飛んでしまった。気がつくと、カロリーノの手を取り、引き立てるようにホールから歩み去っていた。

ユージーンとカロリーノを乗せた馬車が動き出して、しばらくの間、キャリッジの中には気詰まりな沈黙が漂っていた。

「レディ……」

ユージーンは、事情を話そうとカロリーノに目をやった。

薄暗い車の中であつたが、冷静さを取り戻したユージーンには、カロリーノの顔色がひどく青ざめていることが分かった。

ユージーンは、あらためて、さきほどまでの自身のひどい取り乱しように思い至った。

思わず、深い溜息が出る。

それは、自嘲の溜息であつた。

しかし、その吐息は、カロリーノの弱った気持ちに氷の刃の如く突き刺さった。

……マクラ克蘭さんは、怒っているの？

どうして？

なにがいけなかったの……。

どれほど考えを巡らせても、何も思いつかなかった。

カロリーノの気持ちの糸は、とうとうぷつぷつと切れてしまった。

深緑と紫の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちる。

一粒、また一粒と……。

涙はクリーム色の美しいタフタのドレスにこぼれ落ち、小さなシミがぼつり、ぼつりと広がった。

普段の落着きを取り戻した今となつては、カロリーノにどれほど心細い思いをさせていたのか、それが分からないようなユージーンではなかった。

ユージーンは罪悪感とせつなさで、胸が詰まった。

「すまない、レディ・カロリーノ……」

ユージーンはいつもの静かな声で、低くカロリーノに語りかけた。

カロリーノはユージーンの顔を見上げた。

ユージーンの黒い瞳には、いつもの穏やかな光が戻っていた。

わずかだが、カロリーノは心が落ち着くを感じた。

「……マクラランさんの前で、泣いたりしなくなかったのに。ごめんなさい」

カロリーノは涙をこらえた。

「人目につかない方がよいと思って。レディ、あなたに縁談があることを知らずに。こんなに目立つ場所で、軽率な約束を……」

ユージーンが静かに続けた。

「縁談？」

カロリーノはうつすらと涙をためた瞳のまま、ユージーンを見上げた。

「そう聞いたが、アメリカ人と」

カロリーノの青ざめた頬に、朱がさした。

ロイド夫人の「音楽会」。

あのこと？

「……そんな。どうして？ そんな風に」

羞恥と怒りで、カロリーノは目が回るような気分だった。

……マクラ克蘭さんに、そんな風に思われている？

「レディ、あなたにはそのつもりはないと？ コーネリアスが乗り気だとも耳にしている」

ユージーンの発した言葉が、カロリーノの頭を回った。

そして、あの温室での、エミリア・ウォシヨースクのまがましい言葉も……。

「コーネリアス兄さまが、何を考えていらっしゃるのか。わたしには全然分らない……」

こらえ切れなくなった涙が、ふたたびカロリーノの目からこぼれおちた。

「マクラ克蘭さん、わたしは……」
言葉がつまって続かなかった。

ユージーンの黒い瞳が、じっと自分を見つめている。
カロリーノはその視線を感じ、身体が熱くなった。

「わたし、自分が嫌になってしまっただけ。マクラ克蘭さんが誰とお親しくても、わたしが色々考えることじゃないのに……」

カロリーノの頭の中には、エミリアの言葉が何度もこだましていた。

「レディ・カロリーノ。いったい何の話？」

ユージーンが戸惑いの色を見せる。

「この間、ミス・ウォシヨースクにお目に掛ったの。マクラ克蘭さんと御一緒に、ストラウドのカントリーハウスにいらしたことがあるって……そうおっしゃってた」

ユージーンの顔に、何とも言えない嫌悪の表情が浮かんだ。

そのあまりの険しさに、カロリーノの心は、ふたたび不安にとらわれる。

しかし、ユージーンはすぐに、カロリーノの気持ちをみてとり、表情を和らげた。

「……たしかに、とても昔に彼女と親しくしていた。だがレディ、昔のことだ。彼女とはもう何の関係もない」

ユージーンはまっすぐにカロリーノの瞳を見つめて言った。

「それに……ストラウドのカントリーハウスを訪ねたのは、この五月が初めてのことだ。エミリアと足を運んだことなど、一度たりともない」

ユージーンはきっぱりと言いきった。

「マクラ克蘭さん、あの人と、ミスタ・ブラッドショーとわたし
が結婚するなんて、皆がそう思っているの？」

カロリーノはか細い声で訊ねた。

「……そんなの嫌。そんなことしたくない、だって」

カロリーノの目から、大粒の涙が次々とこぼれ落ちる。

「だって……好きなの」

カロリーノの指がユージーンのテールコートの襟に、白いカメリア
の花にかすかに触れた。

「好きなの……ずっと好きなの……マクラ克蘭さん」

ユージーンは驚きで息をのんだ。

しかし、すぐに自分の胸元に僅かにふれるカロリーノの指に手を伸
ばし、それをしっかりと握った。

そして、また深い吐息を吐きだし、ユージーンは軽く首を振った。

「レディ、こんなことをあなたから言わせるなんて……」

「……マクラ克蘭さん？」

「カロリーノ、いつもあなたのことばかり考えている……コーネリ
アスがああじゃなかったら。もっと早く、自分の気持ちをあなたに
伝えていたのに」

ユージーンはカロリーノの指から手を離し、彼女の耳元へと両手を
滑らせた。

「だが、もう言葉よりも先に……愛していると伝えるよりも先に。
わたしは、何度もあなたに触れてしまっている」

ユージーンの指が、カロリーノの涙でぬれた頬を撫でる。

「わたしは不埒な男だ……自分を抑えられずに」

カロリーノの目からまた涙がこぼれ、ユージーンの指先を濡らした。

「カノ……泣き止むことはできるか？」

ユージーンは、低い声で言葉を続けた。

「できればそうしてくれないだろうか？ 泣き顔を見ていると……
キスしたくてたまらなくなるから」

カロリーノは、懸命に涙をこらえようとした。

ユージーンが頼むことだったら、何でも聞き入れたいと……。

ただ、そう思った。

しかし、それは上手くいかなかった。

またしても涙がこぼれおちる。

思わずカロリーノは、両手の甲で自分の顔を覆い隠した。

ユージーンがその手首を取った。
ゆっくりと、カロリーノの手をその顔からほどかせる。

「……ユージーン」

こらえ切れずに、カロリーノはユージーンの名を呼んだ。

「ユージーン、ユージーン」

「呼ぶな……頼むから」

ユージーンはカロリーノの手首を持つ力を強めた。

「名前を呼ばないでくれ……カノ、自分を抑えられなくなる」

ユージーンはカロリーノの両手を解放した。

そして、ゆっくりとカロリーノから身体を離す。

すると、カロリーノの両手がユージーンの頬に添えられた。

カロリーノのくちびるが、かすかにユージーンの頬をかすった。

ユージーンは、親指でカロリーノの珊瑚色のくちびるに触れた。

何度も何度も、そのやわらかなくちびるを弄ぶ。

そして、ユージーンの指は、少しずつカロリーノのくちびるをこじ開け、やがてその真珠色の歯に触れた。

「あ……」

思わずカロリーノが溜息をもらした刹那、ユージーンの親指がさら奥へと入り込んだ。

カロリーノの舌と口腔を指で舐りながら、ユージーンは朱に染まっ

た彼女の耳に激しいキスをする。

激しく熱い戦慄が、カロリーノの背筋を走り抜けていった。

カロリーノが初めて感じたその快感は、恐怖と紙一重のものだった。

ユージーンの手がくちびるから胸元に動く。

「……いや。ユージーン、だめ、怖い……怖い」

カロリーノの声に、ユージーンは首筋へのキスを止め、顔を上げた。

「お願い……怖い」

おびえて震えるカロリーノから、ユージーンはそつと手を離れた。

そして、自分の肉体の叫びを鎮めようと、数回深い呼吸をした。

カロリーノは固く瞼を閉じ、苦しげな呼吸を続けている。

「カノ？」

ユージーンはカロリーノの首筋をそつと指で触れた。

熱い……。

それが官能のせいだけではないことは、医師であるユージーンにはすぐに分かった。

「カノ、もしかして。体調が優れないのに、無理に出てきたのか？」
ユージーンはカロリーノを抱きとめ、自分と座席にしっかりと寄りかかせた。

「いいえ……いいえ、なんでもないの。もう熱が下がってからずいぶん経つもの」

カロリーノは声を絞り出したが、めまいが次第にひどくなるのを感じていた。

「館に送る」

ユージーンは御者に合図をして、小窓を開けさせた。

「ケンジントンに、『ザ・プレイス』に寄ってくれ、それからチエルシーへ」

「……ユージーン。わたし、兄さまに……」

黙って出てきたのに、ユージーンと家に戻ったりしたら……。

カロリーノは、コーネリアスがどういう態度をとるか想像もつかず、身ぶるいするような気持ちになった。

カロリーノの言わんとすることは、ユージーンにも察せられた。ユージーンは、カロリーノを抱きとめる腕に力を込めた。

「……わたし自身コーネリアスと向かい合うことを、もうこれ以上避けることはできない、カノ」

コーネリアス自身の問題についても、自分のカノに対する気持ちに ついても……。

たとえ断絶を前提にしても、すべてをぶつけあわなければ。これ以上、進むことも退くこともできないのだから……。自分も、カノもそして、コーネリアスも。

その時にユージーンの心は、
きっぱりと決まった。

カティスの羽化（5）

48

チエルシーの館の車寄せに、馬車が滑り込んだ。

フットマンがドアを開ける来る前に、ユージーンは自ら扉を開き、カロリーノを抱きかかえて、チエルシーのホールに歩み入った。

バトラーたちが慌てて奥から飛び出してくる。

宵もかなり遅い時刻、突然のユージーンの訪問に、コーネリアスの使用人達は驚きに目を白黒させるばかりだった。

しかも、ロード・ユージーンは、レディ・カロリーノを腕に抱き抱えているではないか！

しかし、バトラーだけは、すぐさま落ち着きを取り戻し、館の秩序を取り戻すべくユージーンに近づいた。

「マクラ克蘭様、こんな突然に。驚かせないで頂きとう存じます。それに、一体……レディは、カロリーノ様はどうしたというのです」

ユージーンはバトラーの問いかけなど、一顧だにしない調子で言葉を返した。

「レディの寝室はどこだ？　すぐにタオル熱湯の準備を整えてくれ」

自分の発言を、あっさりと無視され、バトラーは多少感情を害したようだった。

「困ります……！　勝手にお入りになられては、お前達、早く旦那様をお呼びしてこないか！」

「コーネリアスに取り次ぎなど必要ない」

ユージーンはきっぱりと言い捨てると、階段を上り始めた。

やがて、騒ぎを聞きつけたコーネリアスが、ホールへと現われた。

ユージーンは、顔にこそ出さなかったが、コーネリアスのやつれぶりに、内きぎよつとする思いだった。

美しかったあの白い膚は青ざめ、眼窩はますます落ちくぼんでいる。そして、コーネリアスのエメラルドの瞳は、なんとも異様な光を宿していた。

「何の真似だ、ロード・ユージーン。こんな時間に……それに、君はなぜ妹を抱いているんだ？」

「コーネリアス。見ての通りレディ・カロリーノはひどく具合が悪い、君のつまらない質問に答えるのは後にさせてもらおう」

ユージーンは冷たく言い捨てて、ふたたび階段を上り始めた。

「……今晚、カノとふたりで出かけることなど、僕は許した覚えはないが！」

コーネリアスのぞつとするような皮肉な物言いに、バトラーを始めその場の者たちは、胃をぎゅっと握りつぶされたような心持ちになった。

しかし、ユージーンは、コーネリアスのそんな言葉など齒牙にもかけなかった。

「……最初から、お前に許しをもらおうという気もなかったさ、ロード・ストラウド」

裏階段だけでは間に合わないのか、メイド達がユージーンの手を抜けて階上へと湯を運んでいく。

「だがコーネリアス、わたしはお前に話がある。また後で」

ユージーンは、階下のコーネリアスを見下ろしてこう言い捨てると、そのまま真っ直ぐカリノーの寝室へと向って行った。

階上の使用人達の慌ただしい様子を、コーネリアスは階下の書斎で、頼杖をつきながら聞くともなく聞いていた。

やがて、家人たちの動きが静まっていった。

ほどなく、案内もなくノックもせず、ユージーンが書斎へと入ってきた。

コーネリアスは、ユージーンに視線を向けるでもなく、ただ、じつと頼杖のまま、あらぬ方向を見つめているだけだった。

ユージーンは、異様に取り散らかって、封も開けられていない手紙が散乱している机に、手にした自分の手袋をぞんざいに投げ置いた。

コーネリアスは、そこでやっと視線をユージーンへと向けた。

ユージーンは手近の椅子を引き寄せて、コーネリアスの真正面に座った。

「コーネリアス、わたしからの手紙は読んでいるのか？」

コーネリアスは、無言のまま、微かにくちびるを歪めた。

「……読んでいないのだな」

ユージーンは、コーネリアスのエメラルド色の瞳を鋭い目線で見つめ続ける。

「そうか……いまは、何をする気もおきないか、そうだろうか？　コーネリアス」

彼の机の上の、おそろしいほどの取り散らかりよう。

昔から、コーネリアスの人となりを知るユージーンは、彼の神経のようすが尋常ではないということを感じずにはいらなかった。

しかも、コーネリアスは、もう幾日も一睡もしていないに違いなかった。

「つまらない診察みたいなことは、よしてくれ！」

コーネリアスは、ひどく唐突に声を荒げた。

「ユージーン、君に話したいことなど僕には何もない……この館から出て行け、いますぐにだ！」

「君にはなくとも、わたしにはある。コーネリアス」

ユージーンはごく静かに、淡々と言葉を返した。

すると、突然、コーネリアスの瞳から、激しい怒りの色がかき消えた。

そして、口元に微笑さえ浮かべてみせた。

「……僕に話したいこと？ ああ、僕の目を盗んで妹と逢い引きをしていたと言うことか？ そんなこと、今に始まったことじゃないんだろう？」

こう言い終えると、コーネリアスはこらえきれなくなったように、含み笑いを漏らしはじめた。

「そうじゃない、彼女にも君にも逢って、きちん説明をしたかっただけだ。コーネリアス、君はわたしを避け続けていたじゃないか。なぜだ？」

「『なぜ』……？ なぜだつて？ ユージン、そんなことを、よくも……」

コーネリアスの目に、ふたたび狂気の光が宿り始める。

ユージンはさらに注意深く、声を落として話を続けた。

「いいさ、君が手紙を読んでいないのなら、今説明しよう、レディ・カロリーノの診察結果のことだ。彼女には先天的な心疾患が認められた、呼吸器系の不調が多いのは、そのせいだ」

…… 今晚のように。

ユージンは心の中だけで、こう付け足した。

「ほう？ で……どうすればいいと？ ドクター」

コーネリアスはまるで人ごとのような反応を示した。

ユージンはこのコーネリアスの態度に、ひどいちぐはぐさを感じないではいられなかった。

…… 五月にストラウドを訪ねたとき。

カノに細かい検査を受けさせるよう勧めたあの時は。

コーネリアスは、過敏なほどに反応を示していたというのに？

「それで、カノには何か効果的な治療が可能なのかい？　ドクター・マクラ克蘭」

コーネリアスは半ば、小馬鹿にするような口調だった。

それでもユージーンは、コーネリアスの言葉に冷静に受け答えた。

「……根本的に打てる手はない。だが、理由が分った以上、なるべく心臓に負担をかけることを避けるよう、気をつけることはできるだろう？」

「なんだ、結局は同じじゃないか、チエスタートンの時と。つまり、君は何もできないということなのだろう？　ユージーン」

このコーネリアスの痛烈な皮肉は、さすがのユージーンの心をも深く々と貫いた。

ユージーンほどの若さでは、医師の無力を責める言葉には、まだまだ、ひどく堪えるものだった。

しかし、ユージーンはすぐに冷静さを取り戻し、コーネリアスに説明を続けた。

「こんな風に熱を出させるようなことは、なるべく避けなければ。身体に無理がかかることや精神的な負担も……」

「なるほど……」

コーネリアスは、さも感に堪えないといった面持ちで相槌を打つてみせる。

「では、父がカロリーノにしていた仕打ちは、結果、理にかなって

いたというわけだな、ユージーン？ では、またストラウドの屋敷に閉じ込めて、誰とも合わせずに、人形のように大事に仕舞っておくか？」

コーネリアスは、可笑しそうに声を上げて笑った

「そういうことを言っているのではない！」

ユージーンは、思わず机に自分の拳を強くたたきつけた。

「だったら、カノは結婚もできないか？ だって、子どもも産めないだろう、違うか？ ユージーン」

コーネリアスは緑色の瞳に残酷な光をきらめかせた。

「そうそう、結婚と言えば。いま、カロリーノに『いい話』が来ていてね……」

奇妙に涼しげに、コーネリアスは口にした。

「フレデリック・ブラッドショーという男がカロリーノを気に入っているそうだ。ロイド卿の取引相手らしい。アメリカ人だが構うまい？ 今どきの流行りだろう。そうそう、彼は君のころの『ポードーズ・アビー』を買ったそうだな」

ユージーンは、もうコーネリアスの挑発には乗らなかった。

……そう何度も同じ手に乗せられるものか。

「コーネリアス、お前のことについても話したい」

ユージーンは、冷静な口調に戻って言った。

「よしてくれ、僕には、もう話したいことなどない、ロード・ユージーン・マクラ克蘭」

コーネリアスは顔の前で、片手をぞんざいに振って見せた。

ユージーンは、ゆっくりと、そして深く溜息をついてから言った。

「コーネリアス……君は眠らなければいけない」

そして、ユージーンは、やにわにコーネリアスの手首を掴んだ。

「……何をするんだ！ ユージーン?!」

暴れるコーネリアスの手を、ユージーンは片手で力一杯、机に押しつける。

もう片方の手では注射器を握りしめ、狙いを定めてそれをコーネリアスの二の腕に突き立てた。

コーネリアスのエメラルド色の瞳が、何かを問いかけるようにユージーンを見上げる。

しかし、その瞳孔は拡散し、続いてすぐに瞼が閉じた。

そして、コーネリアスは、ユージーンの腕の中にくずおれるように倒れ込んだ。

結実への軌跡（１）

49

「ユージーン様、そろそろ下へ。ドーバー行きの汽車に間に合わなくなります」

寢室の半開きのドアをノックをしながら、ダニエルが中のユージーンに声をかける。

ユージーンは手にしていた手紙をゆっくりと折りたたんだ。もう幾度も目を通した手紙だった。

あの夜以来、カロリーノから手紙が来たのは、この一通だけだった。

短い手紙だった。

いつもに比べれば……。

自分の体調は大丈夫であること。

そして、コーネリアスが、ユージーンの置いていった薬を飲んでいく形跡がないこと。

そのようなことがつづられている。

コーネリアスには、もう一切の連絡がとれなくなっていた。

見かねたユージーンが、無理に薬を打ってコーネリアスを眠らせた、あの晩以来ずっと。

あんな仕打ちが、誇り高いコーネリアスの自尊心を徹底的にたたき

壊してしまうであろうことは、ユージーンにだって解っていた。

決して後悔することはない、そう思っていた。
他に方法があっただろうか？

手をこまねいて、直接の関わりを避け続けたところで、いずれ訪れるのは断絶だったかも知れない……。

自分の取った行動について、その結果の善し悪しに関わらず、ユージーンはこれまで一度たりとも後悔などしたことがなかった。
それは、もちろん尊大な気持ちからなどではない。

悔やんだとて仕方のないこと。

その結果は、すべて自分が引き受けていくまで……。
そういう諦念にも似た気持ちからのことだった。

しかし、今回のことに関しては、少し違っていた。
ユージーンの心は乱れていた。

おそらく、今、カロリーノが感じているであろう兄への心配を。
彼女の心にかかる重荷を、どうにかして軽くしてやるような方法が、他になかったのだろうか……。

ユージーンの中に、時折、自分を責める気持ちがわき起こった。

——カノの家族は今やコーネリアスだけなのだ。
その兄が、あのような状態にある……。

カロリーノの心労と、それが彼女の身体に与える負担を思うと、ユージーンはたまらなかった。

それに……。

コーネリアスが、あの尋常ならざる精神状態でストラウド侯爵としての判断をどのように行っていくのか。

果して、アメリカの大富豪ブラッドショーとカロリーノとの縁談を、本気で進めるつもりなのだろうか。

そのことも、ユージーンの心に重くのしかかる不安のひとつであった。

いつもよりもずっと短い、このカロリーノからの手紙には、最後にこれまで一度も書かれたことのない言葉が記されていた。

——ユージーン。

いつもあなたの側にあるうとするわたしの心をどうか感じ取って下さい、どこにいても。

愛しています。

口に出してあなたに伝えられる時がくるまで、もう待てないのです。あなたを愛しています。

ユージーンは手にした便箋を胸に押し当てた。

そして、それを封筒に入れ、フロックコートの内ポケットにしまった。

ダニエルがそつと背後からユージーンに近づく。

「もし、『ガーデニアの君』からお手紙が届いたら、パリにお知らせしますか？ ユージーン様」

ユージーンが振り返ると、ダニエルはいつもの片えくぼの笑顔だっ

た。

差出人の名を見ることなど、いつでも出来るくせに、ダニエルはカロリーノからの手紙を、いつのころから「『ガーデニアの君』から」と呼ぶようになっていた。

「その必要はない、ダニエル。三週間足らずで戻るのだから」
ユージーンはドクターズバックを手にして、部屋を後にした。

学会に出席するとはいえ、これを持たずに出かけるのは落ち着かない気分になる。

ダニエルがユージーンの手からそつとバックを引き取った。
そして、ふたりは『ザ・プレイス』の大階段を下りていった。

不躰にもフレッド・ブラッドショーは直接誘われてもいないのに、アン・ヘイローと連れだってストラウド侯爵のチエルシーのタウンハウスを訪れていた。

だが、実はコーネリアスには解っていたのだ。

アン・ヘイローを誘えば、勘の良いロイド卿夫人が、ブラッドショーに声をかけるに違いないと。

ティータイムには、まだ早い時間だった。

そつ、婦人達がコルセットを外し、ティーガウンに着替える時間だ。

コーネリアスは、それとなくアンを庭へと連れ出した。
もちろん、わざとだった。

カロリーノとブラッドショーをふたりきりにするためにだ。

アン・ヘイローの前では、コーネリアスはいつもとかわらぬ美しい姿を見せていた。

不眠と食欲不振に悩まされ、ひどくやつれきっている姿は、整った衣装と身支度で上手く隠しおおせていた。

少し疲れの見えるその表情は、逆に美しいかげりとなってコーネリアスの男ぶりを引き立たせている。

アン・ヘイローはただただ、コーネリアスのエメラルド色の瞳の虜となっていた。

カロリーノは、もうせんから兄のコーネリアスとアン・ヘイローが姿を見せなくなっていることに気がついていていた。

ドロイングルームに、ブラッドショーとふたりきりで取り残されていることに……。

ブラッドショーが決して悪意のある人間ではないことくらい、聡いカロリーノは、すでに気がついていていた。

……正直で、優しい人なのだろうと。

そして、おそらくわたしに好意を抱いている……。

そのことが、カロリーノをひどく困惑させていた。

この人がわたしを好きになるようには、わたしはこの人を好きになる事など出来ない……。

カロリーノはそう確信していた。

だって、わたしが愛しているのは、ユージーンだから。

そのことに、わたしは気がついてしまった……。

あの身体が引き裂かれる様な、恐怖にも似た激しく熱い戦慄。
ユージーンの指が、くちびるが。

その感触を思い返すと、カロリーノは体中が総毛立つような感覚に襲われる。

ふとカロリーノが気がつくと、ブラッドショーが長椅子のすぐ横に腰掛けていた。

腕を椅子の背から回し、いまにもカロリーノの肩に触れようとしている。

カロリーノは思わず椅子から腰を浮かせた。

「……ミスタ・ブラッドショー」

カロリーノの呼びかけは、小声ではあったが、明白に非難の色にじん でいた。

しかし、ブラッドショーは、そのようなカロリーノの様子になどまるで頓着しなかった。

臆面もなく、ブラッドショーはカロリーノの手を取り、自分の両手で握りしめる。

「レディ・カロリーノ、わたしと結婚して頂きたい」

唐突にそう口にする、ブラッドショーはカロリーノの手をさらに強く引き寄せた。

ブラッドショーの顔が近づき、カロリーノは小さく悲鳴を上げた。

と、その時。

テラスのフランス窓が開いた。

「……レディ？」

アン・ヘイローが部屋の中へと声をかける。

ブラッドショーの手の力がゆるんだ。

カロリーノは、すかさずその手をふりほどいた。

ブラッドショーは何かを取り繕いながら、アンに近づいていく。その向こうでは、開け放たれたフランス窓に手について、コーネリアスが部屋の中を眺めていた。

コーネリアスは無言で窓枠にもたれている。

カロリーノは兄の深いグリーンの瞳に視線を向けた。

コーネリアスは微笑していた。

皮肉げにくちびるを歪めた笑顔を浮かべて、黙ったまま部屋の中を見ていた。

その瞬間、カロリーノはすべてを悟った。

ずっと見ていたのだ……兄さまは！

わたしに対するブラッドショーの不躰で不埒な振る舞いを。

ずっと眺めながら、ああやって笑っていたのだ……。

コーネリアスの美しく悪魔のように冷酷な微笑みに、カロリーノは背筋にぞっと冷たいものを浴びせられた様な心持ちがしていた。

結実への軌跡（2）

50

父の、故ストラウド侯爵の打った最期の大博打。

それは、海難保険の引受人となることだった。

ブローカーがアンダーテイカーを探しまわるが、そのとてつもない内容に、まともなシンジケートだったら、まるで相手にしないような類の保険だ……。

年内の契約が終われば、配当が入る。

……莫大な金額の配当が。

そう。何事もなければ。

十二月までなにごとも。

もし、この引き札がジョーカーだったなら……。

コーネリアスは、自らを、そして世界を嘲るかのようにくちびるを歪める。

——カノがどんな大金持ちと一緒にあったとしても、この家は終わるのだ。

いや、これが知れば、あのフレッド・ブラッドショーだって、カノとの結婚に二の足を踏むかも知れない。

もし、最悪の事態が起きれば、ストラウド侯爵家は全財産を使って無限の責任を負わなければならないのだ、1ペニー残らず。そのあと、この家に残るのものといえば、爵位だけだ。

チェスタートンに、この事実を聞いてから……。

コーネリアスは、一日一日が、一步一步薄氷の上を歩くような気分だった。

鼓動のたびに、心臓がすり切れていくような……。

数々のシティでの損失に対する窮余の策として、自分がブローカーと渡りをつけたのだと。

虫の息のチェスタートンから、その言葉を聞いたときの衝撃は、時間が経てば経つほど、コーネリアスの中で大きくなる。

そして、チェスタートンの死んだあの晩。

続けざまに別のショックがコーネリアスを打ちのめした。

親友だと思っていた男の……ユージーンの裏切りだった。

ユージーンのテールコートの移り香。

ガーデニアの香りが脳裏によみがえり、コーネリアスのいらだちの炎に油を注ぐ。

さらに……僕の目を盗んで。

僕に何の断りもなく、ふたりだけで外で逢っていたなんて！

そそのかしたのは、おそらくユージーンなのだ。

カロリーノに、家を抜け出すようにと。

そして、とうとう、ユージーンは臆面もなくカロリーノを抱き抱えて、この家に入ってきた。

僕を完全に無視したあの振る舞いには、もう我慢がならない。

加えて、書斎にまで入り込んで、ユージーンが僕にしたことといっ

たら。

もう、思い出すことすら屈辱だ。

ひどく喉が渴く。

胸の奥の方から、乾きが広がる……。
引きつるような痛みだ。

苦しい……苦しい。

ユージーン。

……なぜ僕を裏切る？

学会でのユージーンの発表は、かなりの好評を持って迎え入れられた。

学会という物の例にもれず、やつかみに近い言いがかりのような反論や論点をまったく見誤った愚かしい指摘が、有益なディスカッションを時折、妨げはした。

だが、それもユージーンの我慢が可能な範囲にとどまっていた。

しかし、ユージーンが参加者に与えた知的刺激と同じくらい、ユージーンにそれを享受させるような発表は、ほとんどなかった。
そこが物足りなくもあったが、ともかく、自分の発表がスムーズに行ったことは、ユージーンの気分を、随分と軽くしていた。

パリの街は比較的自動車が多く、その空気の汚さと言ったら真冬のロンドンに匹敵する。

しかし、さすがはその美しさを褒めそやされてきた都、パリである。ユージーンも、魅力的な街角にふと目をとめることがままあった。

そんな風にして、その日、ユージーンはヴァンドーム広場の、とある飾り窓に引き寄せられた。

斬新なデザインで人気を博し、このところ、とみに名を聞く一流の店だ。

こんなところで足を止めるなんて……？、

自分からは、最も縁遠い存在である宝飾店。

そのショーウィンドウで立ち止まったことを、ユージーンは自分でもいぶかしく思った。

きらびやかウィンドーを覗き込む。ふと、不思議な宝石に目が留まった。

イヤリングだった。

一対の楕円の石の周りを、小さなダイヤモンドが控えめに取り囲んでいる。

このところ、また流行していた昔風の色石や真珠をちりばめた豪華なアクセサリーとは、まるで違う。ずっと小ぶりでシンプルなデザインだった。

しかし、ユージーンが不思議だと感じたのには、別のわけがあった。

その石は、光の加減で色が、紫から緑に変わるのだ。

ユージーンがそれに気付いたのは、ほんの偶然のことだった。

すると、ユージーンに向って、店の中の老店員が手招きをした。随分な歳のように、顔の皺の中に灰色の瞳が半ば埋もれている。その店員は、じっとユージーンを見つめていた。

思わず、ユージーンは店に足を踏み入れる。

店員がユージーンに話しかけてきた。

最初はなまりの強い英語だったが、ユージーンがフランス語で応じてからは、すぐにフランス語に切り替わった。

「今日はなにをお探しで？ ムツスシウ」

慇懃な物腰で老店員は言った。厭味な感じや気取った感じはなかった。

「わたしが、ここの品物を買えるような客に見えるかい？」

ユージーンはこう口にした。だが、それは特段、卑屈な気持ちからはなかった。

宝飾店の者に呼び止められるなど、これまであまり経験したことはない出来事だ。

逆に奇妙な好奇心がわき起こってくる。

老店員はユージーンの問いに、微笑のみで答え、続けてこう言った。「あの耳飾りに目をおとめになったようで……さあ、お近くで御覧ください」

老人特有のゆっくりとした、慎重な仕草で、店員は飾り窓からイヤリングを取り出す。

「……めずらしい石のようだが？」

出されたイヤリングを手にとり、光にかざしながら、ユージーンは言った

「そのとおり、大変にめずらしい物です、ムッスシウ……」
店員は数回頷いて見せた。

「名前はアレクサンドライト。もう、お気づきでいらっしゃいますな？ ……部屋の明かりの下と太陽の下では、色を変えるのです。外に出るとエメラルド色に、部屋の中ではバイオレットに」

ユージーンは、カロリーノの瞳を思い出さずにはいられなかった。

「……何系の鉱物になるのだろう」
つぶやくように、ユージーンは口にした。

「この店のお客様で、石の組成をお尋ねになる方は珍しゅうございますな」
老店員は、しっかりとユージーンのつぶやきを聞いていたようだった。

「それはどうも……見ての通り、無粋なイギリス人でね」
ユージーンは老店員の言葉の意味をはかりかね、冗談めかした軽口を叩いた。

ユージーンの言葉に、店員はふたたび穏やかな微笑みを浮かべてみせただけだった。そして、彼は続けてユージーンに尋ねた。

「失礼なことをお伺いしますが……ムッスシウは、何かのご研究を？」

「そんなところだ」

ユージーンもつられて微笑する。

「これは金緑石の一種で、1800年代にロシアで採掘が始まりました。ごく限られた地域でしか産出されないのです」

ユージーンは石を光にかざし、向きを変えながら尋ねた。

「キャッツアイ猫目石の一種のようにも見えるが？　ほら、石の上に光のスジが

……」

「一般に猫目石と称されるのは、クリソベリルでシャトヤンシーがあるものでございますが、同じような効果を示す石が、他にないわけではありません……」

老店員はここまで言うてから、ユージーンの方をじっと見つめる。

続きをどうぞ？　とユージーンは無言のまま、軽く肩をすくめてみせる。

店員が説明を続ける。

「コランダム鉱石、つまりサファイアのことでございますが、これにも色変わりする石があります。とは申しましてアレクサンドライトほどには、はっきりとしたものではないのです」

ユージーンは老店員の説明に、ゆっくりと頷いて見せた。

「なるほど……このイヤリングの宝石は、色変わりの性質もあり、その上、シャトヤンシーでもあるというわけだ。ずいぶん希少度なだろう」

「その通りです。しかし、何よりも本当に美しい石でございますよう？　まるで少女の潤んだ瞳のような……」

いかにもフランス人らしい老店員のロマンティックな物言いに、ユージーンは思わず苦笑する。

だが、イヤリングを見てからずっと、ユージーンの脳裏に浮かんでいたのは、同じ色の瞳を持つカロリーノのことだった。そんな、自分の考えを見透かされたようでもあり、ユージーン的笑いは、さらに苦々しいものとなる。

「アレクサンドライトは、赤と緑に色変わりする物が最も好まれます。しかし、なんといっても、こちらの耳飾りの特徴は、大きさも色味も同じアレクサンドライトが一對揃っておること、しかもそれがキャッツアイだいうことにつきましよう……それに、アメジストのような紫への色変りも、これはこれとして、大変美しいと思われませんか、ムッスシウ」

ユージーンは、手にしていたイヤリングを濃紺のビロードが張られたトレイに戻した。

「貴重な物を拝見させて貰った。ありがとう」

老店員は笑顔で頷いた。

「いかがでございました。お気に召されましたか？」

ユージーンは、ふたたび苦笑を禁じ得なかった。

「申し訳ないが……気に入るかどうか以前の問題のようだよ？」

——いくらするのは知らないが、こんな店でイヤリングを買いえる経済的身分ではない。

ユージーンの言いたいことは、こうであった。

すると、老店員は目を細めた。

顔の皺に埋もれてしまい、どこに目があるのか解らなくなってしまうほどだった。

「石の構成をお尋ねの方は珍しいと、先ほど申し上げましたが、し

かし……」

「なんだい？」

ユージーンはいぶかしげに老店員に視線を向ける。

「送りたい女性のことを思い浮かべながら、石を御覧になるときの
お顔は、どの殿方も大抵同じでいらつしゃいます……この耳飾りは、
今思い浮かべておいでの方に、さぞかしお似合いでしょう」

老店員のこの言葉に、ユージーンは息をのんだ。

それにしても。

あてずっぽうにせよ、随分と上手いことを言うものだ……。

ユージーンは心底、感心してした。

「そんなことが、分るのかい？」

訊ね返すユージーンに、老店員はしっかりとうなづいて見せる。

「ですので、ぜひ貴方様にお売りしたく思います……さて、いくら
でしたらお求め頂けますでしょうか？」

さらに、老店員が口にする。

ユージーンといえば、ほとほと面喰ってしまった。

「無理なことを言わないでくれ！ わたしは宝飾品の相場など知ら
ない」

とつさにこういい返しはしたが、ユージーンはすぐ、普段の落ち着
きをとりもどした。

そして、自分を見つめる店員の細い灰色の瞳の、その奥にあるもの
を見極めようとした。

「……ならば逆に尋ねよう。いくらだったら売る気だ？ わたしは伯爵の次男。財産も爵位もない……」

老店員は、黙ってユージーンの話に耳を傾けているようだ。

「医学を研究していて医者でもある。だが、裕福な患者ばかりを診ているわけでもなく、法外な治療費で懐が潤っているわけでもない。伯爵家からは特段の援助も得ていないが、自分が暮らして幾分くらいには不自由しない程度の身分だ……さて、どう値をつける？」

ユージーンの間いかけに、老店員は、おもむろにペンと紋章が箔で型押しされた伝票とを、引出しから取り出した。

そして、伝票に一筆、幾ばくかの数字を書き込むと、ユージーンの方に向けて滑らせた。

ユージーンは、その数字に視線を落とす。

決断までに要した時間は、数秒程度だった。

「では、貰おう」

ユージーンは、一言答えた。

とてもじゃないが買うことができない、という値段ではなかった。しかし、とてつもなく苦勞しなければ、ひねり出せない程度には高額だった。

まったく、商売人というのは。

なんて値段を付けてくるんだか……。

ユージーンは、ひといき深いため息を吐きだした。

さてどうやって不渡りにさせずに済まそう？ という高額の小切手を切ってから、ユージーンはすばらしい小箱に収められたイヤリン

グを手を持ち、その店を出て歩きだした。

すると、不意に背後から声をかけられた。

「あんな店で買い物かい？ マクラ克蘭、もちろん御婦人への贈物だろうな？ 君も隅に置けない」

同じく学会に出席するため、パリに来ていた生理学者のクラムリーだった。

どうやら、店から出てきたところから、ユージーンのことを見ていたようだ。

ユージーンとしては、何とも言いわけのしようもなかった。

クラムリーはそれきり黙って、ニヤニヤとした笑いを、顔中に浮かべている。

気まずさに耐えかね、口を開いたのはユージーンだった。

「クラムリー……お前がどんな顔の男だったか忘れてしまっても、その笑い顔だけは忘れられなくなりそうだ」

「おいおい、マクラ克蘭！ 俺の顔を忘れる気なのかい？」

クラムリーは明るくおどけて見せた。

ユージーンとクラムリーは、ゆっくりと歩きながらヴァンドームを離れていく。

「今回の学会、生理学の方はどんな感じだ？」

ユージーンがクラムリーに訊ねた。

専門は違えど、クラムリーとは大学時代の友人だ。

買い物をはからわれるのも、そういった気が知れた関係だったからだ。

「そうだな、アブストラクトを見る限り、今回は凡庸だね……とはいえ、僕はなにも発表しないんだがね」

クラムリーはそう言って、短く笑って見せた。

「そうそう、マクラ克蘭。君の今回の発表はちょっとしたセンセーションだったそうじゃないか？」

口調こそ軽かったが、クラムリーの視線は真剣だった。

「ひょっとして、これを終わらせるまで、カロリンス力を先延ばしにしていたのかい？」

ユージンは、クラムリーの問いには、あえて答えなかった。

だが、クラムリーは、さも納得がいったとも言つように、ひとつ頷いて見せた。

「よし、では散財した貧乏学者殿に、ひとつ夕食でも奢ってやろう」
こう言つとクラムリーは、ユージンの背中を叩いた。

結実への軌跡(3)

51

「それはお前が決める事ではない、カロリーノ！」

コーネリアス・ウォレンは、声を荒げた。

父の死後、すっかり日常のようになった癪癢ではあったが、今回のものは、いつもにましてひどかった。

カロリーノ・ウォレンは、コーネリアスの尋常ならざる剣幕に言葉を詰まらせたものの、これも滅多にあることではなかったが、気丈にも、兄に向って言葉を返した。

「いいえ……いいえ、兄さま。それだけは絶対にイヤです……ミス・ブラッドショーと結婚なんて」

この言葉を聞くやいなや、コーネリアスは手にしていたエインズレイのティーカップを壁に投げつけた。

金の縁取りがふんだんに施された豪華で華奢なカップが、粉々に碎けて飛び散る。

カップの割れる音に、カロリーノは思わず顔を覆いソファアの上で身を縮めた。

家具の隙間に控えていたフットマンも、ただ唾を飲み込んで硬直している。

コーネリアスは、額にかかる金髪を払いのけるように首をひと振りすると、カップを持っていた右手を見つめた。

そして、カロリーノに一切、視線を向けることなく言った。

「僕が良いと言うまで、自分の部屋から出るな、カロリーノ。外から鍵をかけてバトラーに持たせておく」

カロリーノは顔から手を下ろし、呆然とした表情でコーネリアスを見上げる。

コーネリアスはドアの所まで歩き、そこで立ち止まると、やっとカロリーノの方を振り返った。

「何をぐずぐずしているんだ？ カロリーノ、早く立って、自分の部屋に行かないか」

妹を見るコーネリアスの目は、暗く深い沼のように底知れない色を帯びていた。

深い溜息をつきながら、コーネリアスは書斎の椅子に背をもたせかけた。

ひどい目眩がした。

まるで椅子の中に沈みこんでしまいそうだった。

あんな大声で怒鳴ったりしたからか……。

コーネリアスは先ほどの自分の愚かしい行動を、おぞましい気持ちで振り返る。

——どうかしている、僕はどうかしている。

コーネリアスは自問する。

もし……？

もし、「どうかしている」ということ自体が、自分でも解らなくなっってしまったら……？

ふと、ひと息笑い声を漏らし、コーネリアスは考える。

それこそ、本当に「どうかして」しまったことになるな。いつそ、その方がいいのかもしれない。そうすればもう、苦しまずにすむ……。

書斎に執事が入ってきた。
先にノックがあった。

これまでは、執事としての権限で、主人の書斎にはノックなく自由に出入りしていた。

しかし、このところは、いつコーネリアスの逆鱗にふれるかもしれない。彼は注意深くになっていた。

「……カノは部屋に戻ったか？」

コーネリアスがつぶやくように口にした。

「はい、仰せの通り。お部屋のドアに鍵をかけましたが……」

バトラーは鍵を一つ、コーネリアスの前のデスクの上に置いた。

コーネリアスは、それに目もやらなかった。

「お前が持っている。何か必要な物があるようなら、持って行つてやってくれ。だが、絶対にカロリーノを部屋から出すな」

「かしこまりました。ただ、わたくしはスピアの鍵をもっておりま

すので、これは旦那様に……」

そういつて、バトラーが鍵を置いたまま下がろうとすると、コーネリアスが思いついたように、ふたたび声をかけた。

「さつきから、厩舎の方が慌ただしいようだが？ 使用人達は何を騒いでいる」

バトラーは主の癩癧の発作を恐れ、わずかに身を固くした。

「申し訳ございません。色々と家むきの使いに出していた者達が街から戻ったのでしよう。すぐ静かにさせますので……」

こう言い終わるか終わらぬかの内に、バトラーはコーネリアスの書斎を急ぎ足で出て行った。

コーネリアスは、大きな息をひとつ吐き出すと、指で両目の目頭を押さえた。

瞼を閉じる。

目眩と共に、かすかな微睡みが訪れる。

それも、ほんのわずかの間だった。

十分もしないうちに、今度はノックなしでバトラーが書斎に飛び込んできたからだ。

コーネリアスは、はっと目を覚ました。

バトラーはコーネリアスがひと言も発する前に、主の机の前までやってきた。

「旦那様、もしやご興味がありませんか……先ほど帰ってきた者達が、これを街で手に入れたと」

バトラーが手にしていたのは、号外だった。

ユージーンは、黙ってそれを受け取る。

「オリアナ号という客船が消息不明になったそうで……」

ユージーンは紙面に踊る巨大な活字の見出しを、ぼんやりと眺めていた。

「フランスに寄港した後、大西洋の方に向い、ポルトガル沖でバトラーが付け加える。」

号外には、乗客は二百人程度で、安否等詳細は不明とのが書かれていた。

貴族や著名人の乗船があったようで、乗船名簿から名前が挙げられている……。

それに加えて、最もセンセーショナルに取り上げられていたのが、積荷のことだった。

「あの『カナンの肖像』が積まれていたとか……」
バトラーが思わず、横から口を挟む。

十八世紀末にドイツ人画家が描いたとされるその絵は、バトラーにさえ、こう言わしめるほど有名であった。

処刑された伝説の魔女カナンを描いたとされるその絵は、所有すれば必ず恐ろしい災いに見舞われると、もっぱらの噂だったからだ。それは呪われたダイヤモンド、ホープ・ブルーさながらの言い伝えだった。

『カナンの肖像』はフランスのカレーに寄港した際に、オリアナ号

に積まれたのだという。

もし、消息不明のオリアナ号が沈没しているとするならば。

『カナン』の血ぬられた伝説に、また黒い１ページがつけ加わることになる、というのが話題の中心だった。

しかし、コーネリアスにとって重要なのは、『カナン』にまつわるゴシップなどではなかった。

オリアナ号の海難事故保険……。

乗船していた貴族たちの私物も相当の金額となろうし、その他の積荷も価値の高いものがあるかもしれない。
だが、なによりも莫大だと思われるのは『カナンの肖像』にかかけられた保険だ……。

『カナン』の金銭的価値は天文学的だった。
それほど恐ろしいいい伝えがあるにもかかわらず、『カナン』を見た者は、誰もがそれを手に入れたがる……。
それも絵にまつわる伝説の一つだった。

号外を持つコーネリアスの手が激しく震えた。
バトラーは主の様子に、驚いて息をのむ。

「……結局、オリアナは沈んだのか？ どうなんだ！ これでは何も判らないじゃないか！」

コーネリアスは、悲鳴に近い声を上げた。

「シテイに……ロイズにいかねば」

コーネリアスはゆらりと立ち上がった。

血の気の引いたコーネリアスの顔の中で、深緑色の瞳だけが異様な光を帯びていた。

「……ユージーン！」

ホールを出たところで、ユージーン・マクラ克蘭は、旧友のクラムリーから声をかけられた。
いつもの朗らかなクラムリーとは、少しばかり様子が違う。

「ユージーン、まだニュースを知らないのか？ ああ、中で発表を聴いていたのか」

息せききっている友人に、ユージーンはいぶかしげに問いかけた。

「どうした？ クラムリー、そんな顔をして」

「客船のオリアナ号が、消息不明になっただけ。アゾーレス諸島の沖あたりだ……」

クラムリーはここまで言うと、いったん息を継いだ。

「積荷に『カナンの肖像』があっただけだが、もっぱらの評判なのだが、ああ、それはともかくだ」

「クラムリー、クラムリー。頼むから落ち着いて話してくれないか」
話取りが取りちらかっている友人に対し、ユージーンがやっとのことで、言葉を挟んだ。

「ああ、すまない。ユージーン。そのオリアナ号の乗客名簿に、エ

イルズフォード子爵とその家族の名前があっただらしいんだ」

「……なんだって」

ユージーンは、ひとこと呟くように口にした。

クラムリーが囁んで含めるように、話を続ける。

「だからヘンリー・マクラ克蘭卿の一家が、君の兄さんと家族が、オリアナに乗ってたらしいんだよ」

……落ち着かなければ。

ユージーンは心の中で自分に何度もそう言い聞かせなければならぬほど、冷静さを失っていた。

クラムリーがユージーンの肩に手を置く。

「ユージーン？」

ユージーンは一度固く瞼を閉じ、そしてゆっくりと開く。

僅かずつではあったが、ユージーンは日頃の冷静さを取り戻しつつあった。

「クラムリー、わたしは宿に戻ってみる……何かケンジントンから連絡が入っているかもしれない」

「よし、待つてろ、馬車を捕まえてくる」

ユージーンに向かってうなづいて見せると、クラムリーは往来へ向かって走り出した。

結実への軌跡(3) (後書き)

オリアナ号と「カナンの肖像」は、佐伯かよの氏の『?姫』というお話に出てきます。

たしか、『?姫』中では、1945年に沈没したこととなっていたと記憶しています。

最後の持ち主がヒットラーだったとか何とか。

(もちろん、カナンもオリアナも、両方ともフィクションです)

結実への軌跡（４）

52

チエルシーのタウンハウスでは、午後に出て行ったきり帰宅しない主、ストラウド侯爵の帰りを、執事が待ちかねていた。もう深夜二時をとうに回っている。

——シティにいくとおっしゃっていたが、こんな時間まで、一体どこに？

疲れのあまり居眠りをしかけた時、車寄せに蹄の音が響いた。椅子から飛びあがり、執事は急ぎ玄関へと向かった。

その日の午後、コーネリアスがシティに足を踏み入れた時、ロイズの「ルーティンベル」の音が鳴り響いていた。ちょうどその時「オリアナ号の沈没が確実視」との一報が、寄せられたのであった。

その鐘の音が、コーネリアスにとって、まさしく破滅へ合図となった。

その後は、何がどうなったのか。自分がどこへ行き、誰と会ったのか。

コーネリアスは、もう何も思い出せなかった。ただ、今言えることは、したたかに酒を飲んだ後、辻馬車に揺られ、

家路についているところであるということだけだ。

ふらつきながら、コーネリアスはバトラーの出迎えを受ける。
身体を支えようとするバトラーを振り払い、コーネリアスはホールの階段に座り込んだ。

執事は辻馬車を返し、玄関の扉を閉めた。
そして、コーネリアスのもとへと駆け寄った。

「ミイロード、しっかりなさってください」
旦那様

どれだけ飲んでも……。

身体はふらつき、吐き気と頭痛が激しさを増し、いま自分がどこにいるのかすら曖昧になってしまっても。

絶望感だけは酔いで鈍ることなく、コーネリアスの頭の中でますます明晰に研ぎ澄まされていった。

壁に手を這わせて、コーネリアスはよろめきながら立ち上がる。

そして、ゆっくりと書斎の方へと歩き出した。

書斎の椅子に座り、コーネリアスは、深い溜息をつく。

バトラーが、水差しとグラスを持ってやってくる。

コーネリアスはグラスに注がれた水を一気に飲み干すと、バトラーを見やった。

「……しばらくこうして座っていれば気分も収まるはずだ。お前はもうさがって休んで良い」

「しかし……」

と言いかけ、バトラーはコーネリアスの癇癢の発作を恐れて口ごもった。

「すぐに僕も休む、いいからさがれ」

コーネリアスはきつい口調で続ける。

しかし、その声はひどくしゃがれていた。

バトラーはふたたびグラスに水を満たしながら言った。

「では、寝室までお伴いたしますので……」

「さがって良いと言っている！」

コーネリアスが拳でデスクを叩いた。

バトラーに、それ以上の異論をさしはさむ余地はなかった。

随分前にナイトガウンに着替えはしたものの、カロリーノは、まだベッドに入っていなかった。

とても眠りにつけそうな気がしないのだ。

兄の横暴な命令で、午後からずっと、この自分の寝室に閉じ込められていた。

理不尽な仕打ちに、悲しみと怒りで、カロリーノの胸は一杯だった。執事が運んできた食事に、手をつける気にもなれなかったほどだ。

カロリーノは、美しいビクトリア調の長椅子の上で、膝を抱えるようにして座っていた。

そして、そこでずっと手紙を読み返していた。

…… ユージーンからの手紙を。

一番最初にユージーンから届いた手紙から順に、何度も何度も。

バーズが始めて、自分に手紙を運んできたときのことを思い出す。そして、テールコート姿で、ユージーンが部屋に診察に来たときのこと。

「悲しみを抑えるのはいいことではない……泣きたいのなら好きなだけ泣くべきだ」と言っ、ユージーンが涙を優しく拭ってくれたことを。

そして、最初にユージーンに出会った時。

突然に、朝靄の切れ間から現われたユージーンの姿を……。

——身勝手な考えなのかも知れない。

でも、ユージーンの側にいたい。ただそれだけ。

他には何もなくていいのに。

他の人の妻になるなんて、絶対にできない。

カロリーノの色違いの両の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちた。

泣いたって、何の解決にもならない。

しつかりしなくては……

懸命に自分自身を励ましてみたが、カロリーノはどうしても溢れる涙を止めることは出来なかった。

すると、突然、ドアに鍵を差し込む音がした。

カロリーノは飛び上がりそうなほど驚いた。

もうあと数時間で夜明けという時間だというのに？ 一体だれ？

鍵が外れる音がして、ドアが開く。

その隙間から、金色に輝く髪がのぞいた。

「……コーネリアス兄さま？」
カロリーノが声を上げた。

——兄さま。やっと、お気持ちがおさまったの？
カロリーノの表情がわずかに明るくなる。

コーネリアスは部屋に入り、後ろ手でドアを閉めた。
ゆらりと、揺らめくようにコーネリアスが足を踏み出す。
カロリーノは、あわてて椅子から立ち上がり、危なっかしい足取りのコーネリアスに腕を伸ばした。

コーネリアスがカロリーノの伸ばした腕を取る。
そしてそのまま、妹をその腕にかき抱いた。

突然にコーネリアスに抱きしめられ、カロリーノは驚きに身を固くした。

しかし、すぐに、その抱擁を和解の印と受け止めた。
おずおずと、兄の背中に腕を回す。

「兄さま……？」
自分を抱くコーネリアスの腕の力が強さを増し、カロリーノは戸惑いの声を上げた。

コーネリアスの片腕が、カロリーノの腰へと回り、もう片方は、カロリーノの滑らかな銀髪を激しくまさぐる。

「ママ。レディ・レティス、レティシア……どうして？ 僕をひとりぼっちにするの？」

コーネリアスは、まるで幼いだっ子のような泣き声を上げた。
そして、カロリーノをきつく抱きしめながら、その髪に顔を埋める。

ふと、カロリーノの脳裏に、父の臨終の言葉がよみがえった。

——レティス……ああ、レディ・レティス！ どこに行っていた？
……お前

「兄さま……兄さま？ どうしたの、痛い、痛いわ」

まるで、骨が砕けてしまうのではないかと思うほど強い力で、カロリーノはコーネリアスに抱きしめられた。

兄の手から逃れようと、カロリーノは必死で身をよじる。

だが、コーネリアスはますます強い力で、妹を抱きすくめた。

そして、コーネリアスはカロリーノの顎を掴んで、そのくちびるを自分に引き寄せた。

「……んっ」

カロリーノのうめき声を摘み取るように、コーネリアスのキスがくちびるをふさいだ。

肩をよじり、コーネリアスの腕から何とかして逃れようとするカロリーノのくちびるをこじ開け、コーネリアスの舌が、奥深くにまで差し入れられる。

カロリーノのエメラルドとアメジストの瞳から、涙が溢れる。

わずかに、コーネリアスの腕の力がゆるんだところで、カロリーノが兄を押しつけた。

今、兄がしたことが一体何だったのか。

カロリーノは混乱のあまり、声を上げて助けを呼ぶこともできないでいた。

ただ、激しく呼吸をしながら、コーネリアスを見上げる。

次の瞬間、カロリーノは右頬に熱い痺れが走るのを感じた。
コーネリアスは、逆手で妹の頬を打っていた。

カロリーノは短く悲鳴を上げ、ベッドの上に倒れ込んだ。

「に、にいさま、なに……や、いや」

カロリーノの言葉は、はっきりと声にはならなかった。
それはまるで喘ぎに近いものだった。

コーネリアスはベッドの上に片膝をのせると、カロリーノの口を片手で押さえ込んだ。

「……んんっ」

カロリーノがうめき声を上げて、首を大きく振ろうとする。
しかし、兄にしっかりと押さえ込まれ、それもままならない。

「レディ・レティス……なんて綺麗なんだ、あなたは」
コーネリアスは、うっとりとした表情を浮かべて、横たわるカロリーノを見つめた。

そして、カロリーノのガウンのベルトを乱暴に解き、その胸元に手を入れると、カ一杯、妹のナイトドレスを引きちぎった。

結実への軌跡(5)

53

カーテンの隙間から、晩夏の白い朝日が差し込んだ。
一筋の光が床に伸び、ベッドのシーツの上を横切る。

そして、それは部屋の奥の方へと伸びていき、カロリーノの銀色の髪を照らす。

まるで、光る刃のように。

羽布団は床に落ちて丸まり、激しく乱れた白いリネンのシーツの上には赤黒いシミがついている。

カロリーノは床の上に座り込んでいた。

ベッドの側面に背中をもたせかけ、放りだされた人形のように、身体を傾げ、微動だにしない。

投げ出されたカロリーノの白磁のような腿と足に、赤い糸のように血の跡が絡みついていた。

瞬きを忘れたスミレとエメラルドの色の目は、焦点の定まらない視線を宙にさまよわせている。

すこしずつ明るさを増していく陽差しが、その部屋のすべてをはつきりと照らし出していた。

その朝、ベッツィーが、普段よりもずっと早く起き出し、階上の廊

下を歩いていたのは、ほんの偶然からだった。

大貴族の館で長くメイドをしていた姉に貰った、小さな銀とエナメルで出来たペンダント。

いつも服の下に身につけているベッツィーのチャームだ。お守り

昨日の午後ミセス・ポーラーから、レディ・カロリーノの銀の手鏡を磨くように言いつけられたとき、ベッツィーはこっそりとそれと一緒に磨いたのだった。

明け方にふと目を覚まし、ベッツィーは自分のペンダントをレディ・カロリーノの衣装部屋に置き忘れていたことを思い出した。

——ミセス・ポーラーに見とがめられたら……。

ぞつとするようなミセス・ポーラーの厭味な声が頭の中に響き、居ても立ってもおられず、ベッツィーはこっそりと起き出して衣装部屋へと向っていたのだった。

手鏡の横に、ベッツィーのペンダントが光っていた。
ほっと安堵し、ベッツィーはそれを自分の首にかける。

衣装部屋を出たベッツィーは、向いのカロリーノの寝室のドアが少しばかり開いていることに気がついた。

館の主のひどい癩癪のせいで、昨日から、カロリーノは部屋に閉じ込められていたはずだった。

——お嬢様の部屋の鍵は、たしかバトラーのジョーンズさんがお持ちじゃあなかったかしら？

ベッツィーはこんな早朝、中途半端な開き方をしているレディの寝室のドアに、得体の知れない奇妙さを感じた。

そつと近寄って、ドアの隙間から中をのぞく。

「お嬢様？……レディ・カロリーノ？」

小さな声で呼びかけて、部屋の様子を見たベッツィーは、息を飲んだ。

床に座り込んだカロリーノの夜着は、胸元が引きちぎられていた。細い肩とデコルテが露わになり、頬の片側は赤く腫れ上がっている。両の手首には青黒いあざが、いくつも残されていた。

メチャクチャに乱れたベッドのシーツについている赤い汚れ。

これが、一体何を意味するのか……。

この状況をひとめ見て、何も気がつかないほど、ベッツィーはうぶな娘というわけではなかった。

ベッツィーは、すぐさま部屋の中に身を滑らせると、後ろ手で素早く、そして静かに扉を閉めた。

「お嬢様……レディ・カロリーノ。しっかりなさって下さいまし」

ベッツィーはカロリーノのもとへ歩み寄ると、その横で跪いた。

そつとカロリーノの肩に触れる。

冷え切って、ひどくつめたかった。

すると、今初めてベッツィーに気がついたかのように、カロリーノがゆっくりと顔を動かした。

仕掛け人形のように、ひとつ瞬きをして、ベッツィーの顔を見つめる。

まるで、それが誰だか解らないとでもいうように……。

「カロリーノ様……」

ベッツィーがカロリーノの手を取り、そっと両手でさする。

「……ベッツィー？」

カロリーノにそう問いかけられ、ベッツィーは強く頷いた。

「ベッツィー、ベッツィー……」

それ以上は言葉にならなかった。カロリーノの肩が激しく震えた。

「お嬢様、大丈夫ですよ。あたしが何とかいたします……なにもおっしゃらなくてもよろしゅうございます」

ベッツィーが、カロリーノの肩に手を回す。

「……めてって、やめてって、言ったのに……言ったのに」

ベッツィーに肩を抱かれながら、カロリーノが何度も繰り返す。

「頼んだのに……なんともなんとも」

カロリーノは、ベッツィーのガウンを握りしめる。

「ああ、もう怖いことはありませんから、ね？ ……お嬢様」

ベッツィーはカロリーノの震える肩をゆっくりとさする。

「さあ、この服を着替えてしましましょうね、お嬢様。このお部屋も、メイド達が起こしに来る前に、あたしがすっかり綺麗にしていますから」

ベッツィーはカロリーノを何とか立ち上がらせ、窓辺の長椅子に座らせた。

「いろいろ持つてこなければならぬので、ちょっとだけ待って
くださいましね？ カロリーノ様」
カロリーノの肩にそつと手を置き、ベツツィーはこう言うと、素早
く部屋から出て行った。

しんと音のない部屋に、カロリーノはまたひとり取り残された。

朝の湿った冷たい空気の匂いを嗅ぐ。

もう、ほんの数十分もすれば、この独特の匂いも、世界中がどこか
遠くに行ってしまったかのような不思議なほどの早朝の静けさも、
跡形もなく消えていくのだろう……。
使用人が起き出し、部屋と街の空気が動き出して、冷たい空気も静
けさもみんな消え失せる。

メイドやフットマン達を起こさないよう、ベツツィーは密やかに屋
敷を動き回った。

少しばかりでよいからお湯が欲しかった。
しかし、火をおこすわけにもいかない……。ベツツィーは、なんと
かヤカンに残ったぬるま湯を見つけ出す。

どこかからかシーツを工面しなければならなかった。

あの部屋のシーツは、処分しなければなるまい……。ランドリーに出
すわけにもいかないのだから。

いずれシーツの数が合わず、ハウスキーパー女中頭が帳簿つけに頭を悩ませるだろ
うが。とりあえず、今なんとかやり過ごせばいいのだ。

ベツツィーは、一番いいシーツを使っている西の客間のストックを
つかうことにした。

足音を忍ばせ、ベッツィーは、急ぎ階上のカロリーノの寝室へと戻って行く。

カロリーノはベッツィーが部屋を出たときと変わらず、人形のようにビクトリアンの長椅子の上に座っていた。

ベッツィーはカロリーノの血と体液で汚れた脚を拭いた。

新しいガウンとドレスに着替えさせ、カロリーノの銀髪を梳って一つにまとめる。

ベッドを整え終わり、ベッツィーはやつと口を開いた。

「さあ、ここに横におなりになって、しばらくお休み下さいまし、お嬢様」

ベッツィーは、ふんわりと空気を入れて膨らませた羽布団でカロリーノを包み込んだ。

カロリーノの目は、相変わらず瞬きを忘れたかのように、ぼんやりと見開かれている。

ベッツィーはそつと、カロリーノの瞼に手をやった。

「さあ、目を閉じて。もうなにもご心配はいりません……」

汚れたシートと破れたドレスを小さく丸めて抱えると、ベッツィーは静かにカロリーノの部屋を後にした。

シートはともかく……。

お嬢様のナイトガウンとドレスについては、ミセス・ポーラーに、とことんシラを切り通すしかない。

ベッツィーには、行方の解らないガウンとドレスについて、ミセス・ポーラーが自分にどんな疑いをかけ、どれほどしつこく責めなじる

か、はつきりと予想できた。

しかし、それについてはベッツィーはもう、覚悟が出来ていた。

そんなことなど。お嬢様のしたおそろしい思いに比べれば……。

ベッツィーは思わず身震いをした。

あの部屋に入ることが出来たのは、バトラーだ。

ほかの者が入るなんてできない……。

でも、たったひとり、あの部屋に入ることができる人が、他にもいる。

ベッドを急ぎ整えながらも、ベッツィーは気がついていてた。

シートと羽布団についた髪の毛に。

あんなに美しい金の髪を持つ者は、このチェルシーの館では、ただ一人しかいない。

それが意味するところを思い浮かべたベッツィーの背中に、ぞつと冷たいものが走った。

——なんということだろう、なんという……。

あんなにお美しくお優しいお嬢様が、なんという目に。

カロリーノはベッツィーに優しくかった。

あのピンクのイブニングドレスをインクで汚してしまった一件もそうだったし。

その前からずっとそうだった。

最近では、カロリーノはベッツィーがミセス・ポラーの八つ当た

りを受けないように、何かと気を配ってくれていた。
ベッツィーには、それがちゃんと解っていたのだ。

——だからこそ、「あの夜」に、お嬢様が館を抜け出すお手伝いをしたのだ。

逢いに行くその相手が、誰なのか。

何とはなしにだが、ベッツィーも気付かないわけではなかった。

カロリーノ様はお慕いする方に逢うために、あんな勇敢な真似をなさった。

それほど、強く思われている方がいるというのに。

ベッツィーは、はっとそこで我に返った。

急がなければ……。

そろそろメイド達が、朝の掃除に動き出す。

ベッツィーは、足早にバックヤードの方へ足を向けた。

結実への軌跡（5）（後書き）

こんにちは。

「そうだろうと思ったよ」的な、「もうみなさんおわかりですね」的なイベント勃発。

さらに色々と、わかりやすいフラグも立ってまいりました。

さて、どん引きせずに読み続けていただけるのか……。

今この「ホーソーン」と数日交替くらいで「11月とすべての後で」
<http://ncode.syosetu.com/n5282x/> という話を更新しております。

ロマンス小説分類にあてはめるなら……コンテンツポラリー（現代物）のパラノーマル・ロマンスってなところですよ。

とはいえ、パラノーマルチックな要素は、結構薄めかなと。

政治家と弁護士の名門兄弟に、クールな刑事、熱い刑事、五十代の有力政治家系紳士に、スーパー執事といった感じで、各種とりそろっております。

これらの男子諸君が、天才バイオリニストの美少女を奪い合うという、逆ハー状態といえますか。

男性キャラがふんだんに登場しているところが、なんかロマンス小説としては、王道ではないなあ……ってなところですよ。

もし気が向いたら、立ち寄ってみて下さいまし。

赤い実の毒（1）

54

結局、ユージーン・マクラ克蘭は、学会を切り上げ、パリから早々に帰国した。

ホテルに入っていたダニエルからの第一報は、かなり明確にユージーンの帰宅を促すものだった。

ダニエルがここまで言うということは、本当にすぐに帰国する必要があるということだと、ユージーンは、直ちに理解した。

行方不明だったオリアナ号が事故にあっただらしいという事は、早い段階で確実視されたものの、その後の船や乗員の安否についての続報は、途絶えがちであった。

ユージーンがケンジントンの『ザ・プレイス』に帰宅した時、当主のシェスタベリ伯爵アレックス・マクラ克蘭卿は、情報収集のためにシティ各所を飛び回っており、不在であった。

「おかえりなさいませ、ユージーン様」

『ザ・プレイス』の車寄せに降りたったユージーンの出迎えに、ダニエルがいつもどおり現われた。

「ミ^{旦那様}ロードは、朝からシティの方へお出かけでいらつやいます」
ユージーンの手からドクターズバッグを受け取りながら、ダニエルは言った。

「ジェイン大叔母の様子は？」

ドロ잉グルームに向って歩きながら、ユージーンがダニエルに尋ねる。

「『マアム』はモーニンググルームにいらっしやいます」

ダニエルはさらに続けた。

「一報をお聞きになったときは、卒倒なさいましたが、一日、ベッドで休まれてからはいつも通りの様子で、采配を振るわれております」

ダニエルの言葉に、ユージーンは思わず複雑な表情を見せた。

すると、ダニエルが慌てて口を開く。

「いいえ、いいえ、ユージーン様。わたしたちは、かえってマアムのご気丈さに、救われているのでございます。いつも通り、館の細かい点に気を配って頂いて。なんといつでも旦那様が……」

「父さんが、シェスタベリ伯爵がどうか……？」

ユージーンは声を落とし、軽く目を細めるようにした。

「ともかく、今回の事故の情報がなかなか集まってこないようで……朝早くから夜遅くまで、あちこちに事情を尋ねて回られて」

バトラーがユージーンにシェリーを持ってきた。ダニエルがグラスを整えて、ユージーンに手渡す。

ユージーンがソファアに座り、シェリーに口をつけたところで、ジェイン大叔母がドロ잉グルームに入ってきた。

「ユージーン、帰ったのね、待ちかねましたよ」

ユージーンは立ち上がり、大叔母の手にキスをした。

「ただいま戻りました、叔母様」

「よかったこと。ともかく、今はアレックスの手助けをしてくれる者が必要ですからね、お前もロード・シエスタベリの役に立たないといけませんよ、ユージーン」

ユージーンは、大叔母をエスコートして椅子に座らせると、自分もソファアールに戻り、ふたたびシェリーグラスを手にした。

「起きてしまったことに文句を言っても仕方のないことでしょうが……でもね、一体、どうしてこんな事に？ シエスタベリの跡継ぎが、家族全員で行方不明なんて」

ジェイン大叔母は、大きな溜息をついた。

すかさず、侍女が、気付け薬を振りかけたハンカチーフを差し出す。ハンカチーフを口に当て、ジェイン大叔母はしばらくの間、瞼を閉じた。

しかし、ふたたび目を開けると、いつもの口調に戻って言った。

「ユージーン。必要もないのに船になぞ、乗り回ることなどないと、わたしがいつも言っているのは、こういうわけなんですよ。伯爵家の跡取りともあるう者が……エイルズフォード子爵ともあるう者が、荒くれ者でもあるまいに、船で遠い異国に行くなど」

ユージーンの兄エイルズフォード子爵の一家は、アゾーレス諸島に保養旅行に赴いていたところだった。北極や南米に行こうとしていたわけではない。

しかし、保守的なジェイン大叔母にとっては、ドーバーを渡ることすら、ガラパゴスに赴くほどの大冒険に値した。

ユージーンは黙ったまま、シェリーのグラスを空けた。

と、ホールの方が騒がしくなる。

『ザ・プレイス』の主、シエスタベリ伯爵の馬車が戻ったようだった。

いつもどおりの鋭い光を宿した黒い瞳に闊達とした足取りで、シエスタベリ伯爵がドローイングルームに入ってくる。

しかし、その顔色はやや鈍く、眼窩もわずかだがくぼんでいた。

シエスタベリ伯爵は、立ち上がって自分を迎えたユーージンに、視線を向けた。

「帰ったか、ヤンガー」

ユーージンは静かに頷いて、父に応じた。

「では、私の書斎に來い。バトラー！ 書斎にブランデーを」

それだけ言い捨てると、シエスタベリ伯は、踵を返してドローイングルームを出て行った。

『ザ・プレイス』の書斎はかなりの広さがある。

大きな一枚板のテーブルを挟んで、ユーージンは、父シエスタベリ伯と向かい合って座った。

シエスタベリ伯は、書斎のデスク代わりに、かつてイタリアの修道院の食堂で用いられていたテーブルを使っていた。

豪華さや品の良さという点からは、まったくもって貴族の館に相応しい意匠の品とは言えなかった。

このような物を書斎に備え付けるところからも、シエスタベリ伯の『変わり者』ぶりが吹聴される。

社交界でしばしば話題にのぼる、父のいわゆるところの「風変わり」

というものに対しては、ユージーンは一種、ディレクタントを装う厭味さを感じないではなかった。

しかし、このテーブルに関しては別だった。

ユージーンは、これにはかなり好感を抱いていた。

広さがあって、天板にこたごたとしつらえないデスクというのは、本当に使いやすい物だ。

この大きなテーブルは、デスクとしてごく合理的で、父の持ち物のなかで、ユージーンが羨ましいと思える数少ない物の一つでもあった。

ブランドーを持ってきたバトラーを下がらせてから、シエスタベリ伯爵はゆっくりとグラスに口をつけた。

そして、ひといき溜息をつく。

ユージーンは、手にしたグラスに視線を落とし、父が口を開くのをじっと待っていた。

「この件に関して、お前はどれくらい知っている？ ヤンガー」

シエスタベリ伯はグラスを空にしてから、やっとひと言、口にした。

「一般的に報道されていることと、ダニエルからの報せにあったことくらいです」

ユージーンは低く答えた。

シエスタベリ伯はふたたび黙り込んだ。そして、デキヤンタを自ら手に取り、自分のグラスを満たした。

「船が沈んだこと自体は、間違いないらしい。当時の天候不順自体は大したものではなかったらしいが……。あの辺りの海流は複雑だとかでな、船が上がってくるかも、何とも言えない」

「乗客がボートで船を離れた様子はないと聞きましたが？」
ユージーンが尋ねた。

「通信の状況やなんかから見ても、それは本当らしいな、しかし、たとえボートで脱出できたとしても、イベリア半島へもアフリカへも遠い。あの辺りは島ばかりで、どこかに流れ着いたとしても、細かな情報はなかなか手に入るまい」

シエスタベリ伯はまた、深い吐息をついた。

まったくらしくない様子だ。

ユージーンは思った。

……どこかに流れ着いたとしても。

シエスタベリ伯爵は、そう曖昧に言い淀んだ。

エイルズフォード子爵が、長子のヘンリー・マクラ克蘭卿の『遺体』が、流れ着いたとしても……

という、最も認めたくないが、最も蓋然性の高い事態への言及を避けている。

ユージーンにはそう感じられた。

常に剛胆な父、アレックス・マクラ克蘭からは、とても考えられない言い草だった。

シエスタベリ伯は、口元に持って行きかけたブランデーグラスの手をふと止めた。

「ヤンガー、お前はと思う」

「どう……とは？」

ユージーンは、ゆっくりと視線を上げ、父の瞳を正面から見つめた。

「……ヘンリー達がどうなったかということだ」
シエスタベリ伯爵は、ここまで言って口をつぐむ。

「まだ、事故からそれほど経っているわけじゃない……乗客がここに漂着していたとしても、無事の情報がこちらに届くまでに時間が必要でしょう。ただ……」

ユージーンは、もう一度シエスタベリ伯の目を覗き込む。

そして、続きを口にした。

「……事故が起きたと思われる海域を、すぐに搜索することができていればいいのですが」

もちろん、それは無理な話だった。

意気消沈しているとはいえ、さすがに、シエスタベリ伯はユージーンの言わんとするところを察した。

「やはり、絶望的だな……エイルズフォードの家は」
シエスタベリ伯爵は、きつぱりと口にした。

「父さん……」

ユージーンが呼びかけると、シエスタベリ伯爵の瞳に宿っている、いつもの力強い輝きが、ふとかが消えた。

「いつもなら、ヘンリー達は『ポードーズ・アビー』に行っていたはずだったんだ、この時期は……」

シエスタベリ伯アレックス・マクララン卿の言葉は、吐息に変わる。

「アビーを売り払ってから、一度もヘンリーに逢わないままだった、あれは、あそこを気に入っていたからな」

そして、ふたたびグラスを口元に運び、一気に中身をあおった。

「まだ、あそこがあれば……なんにもアゾーレスなどに行くことも」

ユージーンは、父の言葉を遮った。

「ヘンリー兄さんは、マックスをパブリックススクールに入れる前に一度、外国に連れて行きたいと。それは、以前から聞いていたことです。不運な事故だったんだ、父さんのせいじゃない」

ユージーンは、立ち上がってテーブルの端を回った。父の方へと歩み寄る。

シエスタベリ伯の隣に立って、少しためらってから、その肩に手を置いた。

生まれてこのかた、ユージーンが、こんなことをするのは初めてだった。

……父を、アレックス・マクラ克蘭卿を慰めるなど。

憎たらしいほどに剛胆な父親、そして、決して憎めない茶目っ気のある気丈な男だった。

そんな父が、自分にこれほどまでに弱さを見せたことに、ユージーンはたまらない寂しさを覚えた。

兄の一家に起こった悲惨な運命に対する悲しみが、よりいっそう強くなる。

顔を覆っていた手を離し、シエスタベリ伯爵は一度、瞬きをした。ふたたび、瞳にいつもの輝きが戻る。

「……エイルズフォード子爵も息子のマックスも溺れ死んでたら、伯爵を継ぐのはお前って事になるな、ヤンガー」

シエスタベリ伯はユージーンを見上げた。

「もう、『ヤンガー』じゃないってわけだ、ヤンガー？」

こう口にすると、シエスタベリ伯爵は、軽く笑い声をたててみせた。

兄と甥がいなくなる……。

そのことにより、自分が引き受ける事になるものについて、父にこう言われるまで、ユージーンはまったく実感していなかった。

自分がシエスタベリを継ぐことになるということ。

いつものように少々どぎつい物言いをして見せた父親に対して、ユージーンの方はといえば、いつもの皮肉めいた苦笑で応じる気力はないままだった。

赤い実の毒（2）

55

カロリーノ・ウォーレンは、ストラウドのカントリーハウスに帰る気持ち固めていた。

エメラルドとアメジストの瞳には、いまだ、あの夢みるようなきらめきは戻っていないかった。

あれ以来……。

その理由を知っているのは、ベッツィーだけであつた。

いや、ベッツィーと、もう一人。

レディ・カロリーノのナイトドレスとガウンの行方に関するミセス・ポーラーの手厳しい追及に、気丈にも、ベッツィーは耐え続けた。

ミセス・ポーラーは、ベッツィーがそれらをどこかへ売り払ったに違いないというような汚らしい濡れ衣を着せた。

持ち主であるカロリーノではなく、直接、主であるコーネリアス・ウォーレン卿に告げ口したほどであつた。

コーネリアスにとっては、そのような侍女の愚痴など、瑣末過ぎることではなかった。

ミセス・ポーラーの言うことなど、まるでコーネリアスの耳には入っていない。

いや、その時のコーネリアスにとっては、あらゆることがすべて、自分からどんどん遠ざかっていくようにすら思っていた。

カロリーノの夜着についての話が、自分の犯した罪に結びつくということにも、コーネリアスが思い当たる様子はなかった。ブラッドショーとカロリーノとの縁談すら、もはやどうでもよかった。

……終わりだ。すべて。

コーネリアスの頭に渦巻くことは、それだけだ。

カロリーノがストラウドに戻りたいと言い出した時も、コーネリアスは何も言わなかった。

コーネリアスがそれを聞き、きちんと理解していたのかすらもわからない。

「ベッツィー、やっぱりここを辞めることに決めたよ」

厩舎の裏を通りかかったベッツィーに、馬丁のジョーグルムが声をかけた。

「レインズ男爵のところに移る……バトラーのジョーンズさんから紹介状がもらえたし」

ジョーは、カロリーノがコヴェントガーデンに行ったとき、ベッツィーに頼まれて馬車を回した馬丁だった。

そして、ベッツィーは、バックヤードでジョーが焚き火を起こしているところに、レディ・カロリーノのガウンとドレスを紛れ込ませて始末をつけていた。

ジョーはなかなかの器量よしで、メイドたちの中には、本気で血道をあげている者もいたほどだった。

しかし、ジョー自身はいたって性格のまっすぐな優しい男で、女た

ちのおだてや甘やかしに乘せられるようなことはなかった。
そんなジョーとの間に、ベッツィーは、ひっそりと友情以上の感情
を育てつつあったのだった。

「どうするんだ？ ベッツィー？ さっきメイドたちが話していた
けど。レディがカントリーハウスに戻るって。ついてこいって言わ
れてるのかい？」

ジョーはきれいな水色の瞳で、ベッツィーを見つめた。

「……まだ、何もいわれてないけど」
ベッツィーは言いよんだ。

カロリーノの様子は、まだまだ、はたで見えていても不安なものだっ
た。

ひとりにしてしまうのは心が痛む、とベッツィーは思っていた。
でも、暇を出されてしまえば、どうすることもできない。

「オレ……何となく思うんだけど、ベッツィー」
周囲には誰もいなかったが、ジョーは少し声を小さくしていった。

「今のうちによそに移っておいた方がいいんじゃないかって。別に
給金が途絶えてるとか、何がどうっていうんじゃないんだけどさ」

ジョーに改めて言われるまでもなく、ベッツィーも、それについて
は同意見だった。

カロリーノのことがなければ、自分も次の奉公先を見つけるために
動き始めていただろう。

そう、何がどうということはないのだ。
今はまだ……。

しかし、下にいれば下にいるなりに判るのだ。
鼠が沈みゆく船から逃げ出すように……。

この屋敷は、もう、あまりうまくいなくなるだろうと言うことが。

*

何かに脅かされたかのように、カロリーノはベッドの上で身をよじった。

恐ろしい夢から覚めた時のように。

あれから、ずっと身体が重かった。

微熱が続く。

ひどくベッドに押し付けられ続けていた背中が、いまだに痛む。

……身体が引き裂かれるような、あの熱い痛み。

泣き叫ぼうにも、声も出ないほどに。

腕も足も、強い力で抑えつけられて、ほんの少し動かすこともできなかった。

コーネリアス兄さまは、ずっと母さまの名前を呼んでいた。
レディ・レティス……と。

カロリーノの身体に、突き抜けるような激しい悪寒が走る。
身体中に残るコーネリアスのくちびるの感触とあの無理やりに押し入ってくる感覚が、カロリーノを苛み続けていた。

カロリーノ色違いの両の目は、日差しで輝く窓枠にぼんやりと向けられている。

もう、涙さえもこぼれなかった。

ただ、自分の両腕を抱きしめて、カロリーノはベッドの上で震えていた。

*

ストラウド侯爵コーネリアス・ウォーレン卿は、書斎のデスクの前に座ったきり、何時間も頬杖をついたまま微動だにしていなかった。

バトラーもメイドも、この部屋の掃除には、もう随分と長い間入っていない。

ときおり、乱雑に積まれた本と書類がバランスを失って崩れ落ち、しずかな書斎にその音が響き渡る。

埃が舞い上がり、カーテンの隙間から差し込む陽光の筋が、それをくつきりと一本の筋のように映し出した。

今、コーネリアスの気持ちを責め苛んでいたのは、自分が犯した恥ずべき行為に対する罪悪感だった。

その気持ちはコーネリアスの中で、次第に膨れ上がり、家の問題を凌駕するほどの大きさになりつつあった。

コーネリアスの中では、自分があの夜、力づくで押さえつけ幾度も激しく犯したのが、母レティシア・ウォーレンだったのではないかという気持ちが強くなっていた。

レディ・レティスは、もう、とうに亡いというのに。

……違う、あれはカノだった。

コーネリアスの心がそう叫ぶ。

妹のカロリーノだ。母と同じスミレ色の瞳を持つ妹。

僕と同じ緑の瞳をもあわせ持つ……。

そして、父と同じ色の。僕と同じように罪を犯した父と……。

いや、どちらを犯したとて、罪の重さは同じではないか？

母親であれ、妹であれ。

とうてい許されることではないのだから……。

石膏の胸像のように固まっていたコーネリアスが、ぴくりと震えた。ふと、笑い声を洩らす。

そして、立ち上がり、大きく体をのけぞらせると、激しく声をあげて笑い続けた。

そのヒステリックな笑いは、コーネリアスの声が枯れるまで続いた。

エメラルド色の瞳にあふれた涙を乱暴に指でぬぐいながら、コーネリアスはふたたび、くずおれるように椅子へと座り込んだ。ゆっくりと視線を動かす。

嵐の後のようなデスクの上におかれた、山羊革の装丁のノート。そして、封筒が二つ。

コーネリアスは、封筒の一つを手に取り、中の手紙を取り出した。もう、何度読み返しただろうか。折り目はすりきれている。

封筒をデスクの上に戻し、コーネリアスは、便箋を両手でゆっくりと広げた。

*

「レディ・カロリーノ、お呼びですか？」

ベッツィーは、カロリーノの寝室の扉をノックした。

カロリーノはベッドに座っていた。

ヘッドボードとクッションに背中を預けて、半分だけ身体を起こしたような形だった。

「起き上がったりなさらず、カロリーノ様。どうぞ、横に」

ベッツィーが慌てて、ベッドサイドに駆け寄る。

カロリーノは微笑して、首をふった。

その微笑みはひどく弱弱しく、ベッツィーの胸は鉤爪でギュツとつかまれたように痛んだ。

カロリーノはベッツィーの手を引きよせて、両手で握った。

「わたしね、ベッツィー……ストラウドに帰ることにしたの」

ベッツィーは精一杯の笑顔を作って、カロリーノに頷いてみせた。

「ええ、ええ、それはようございますけれど。でも、今はまだ無理ですよ、カロリーノ様。そんなお身体では」

カロリーノはベッツィーの言葉には、微笑みで応じただけだった。

しばらくの間、部屋に沈黙が流れた。

「……あなたがいてくれて、本当によかったわ。ベッツィー。いろいろ助けてくれてありがとう」

カロリーノがゆっくりと口にした。

「……レディ」

ベッツィーはこういったきり、言葉に詰まる。

「あのね、わたしあなたが大好きよ、ベッツィー」

カロリーノの言葉に、ベッツィーは黙って頷いた。
声を出そうとすると、涙があふれそうだった。

「ずっと、側にいてくれたら嬉しいのだけど……」
カロリーノはふと、目を伏せる。

「カロリーノ様がお望みなら、わたしはずっとついて参ります、ストラウドへもどこへでも」

ベッツィーは声を詰まらせながらも、懸命に言った。
カロリーノは何も答えなかった。

「……レディ・カロリーノ？」
ベッツィーはおずおずと口にする。

「あなたは素敵な人よ、ベッツィー。優しくて機転が利いて……。いろんな人があなたを必要とするわ」
カロリーノは続けた。

「ミセス・ポーラーといるときのあなたは、本当のあなたじゃない」
ベッツィーはカロリーノの言わんとすることを、理解しようと懸命に耳を傾けた。

「それに……この家に、ストラウド伯爵家には、きっと、もうこれ以上いない方がいい」

弱弱しい声ではあったが、カロリーノはきっぱりとこう言い切った。
このところ世間を騒然とさせているオリアナ号の遭難について、カ

ロリーノはかなりの洞察力を持って、その事態を認識していた。

「カナンの肖像」にまつわる呪いなどではなく、もつと本質的な問題を見抜いていたのだ。

……コーネリアスを、ここまでおかしくしてしまった理由が、この事故にあるということ。

海難事故の保険をめぐって、シティが、ロイズが大わらわであることは、カナンの呪いにまつわるゴシップと並んで、連日のように報道され、人の口の端にもものぼっていた。

カナンの肖像が失われたことによる、莫大な損害賠償についてだ。

……おそらく、この件がストラウド侯爵家とかかわっているに違いない。

カロリーノはそう悟っていた。

この家がどうなるのか、具体的には何の知識もないカロリーノには全く想像もつかないことではあったが、使用人たちにとって良い職場ではなくることだけは確かだ。

ベッツィーの将来を思えば、ストラウドのカントリーハウスにまで彼女を連れていくことなどできない……。

カロリーノはそう決めたのだ。

「よい紹介状を書いてくれるように、バトラーには言っておくわ。わたしも書いておくから」

カロリーノはベッツィーにこう言って、握る手に力を込めた。

ベッツィーは返事ができなかった。

泣いていたからであった。

赤い実の毒（3）

56

カロリーノにあてパリで書いたユージーンの手紙は、出せずじまいとなっていた。

クラムリーからオリアナ号の件についての知らされたのは、内ポケットに入れていたその手紙を投函する直前のことだったからだ。

ユージーンは『ザ・プレイス』の自室で、それを取り出して、読み返す。

そして、ふたたび封筒に入れて、デスクの引出しへと収めた。
その封筒には、カロリーノからの一番最後の手紙も、共に収められていた。

——愛しています。

口に出してあなたに伝えられる時がくるまで、もう待てないのです。
あなたを愛しています。

そう書かれた手紙が……。

ユージーンがパリへ向った後、カロリーノからは、相変わらず連絡が途絶えていた。

手紙の横には、金の縁取りがされた真紅の小箱がある。

カロリーノの瞳と同じ色をした、あのイヤリングが納められた箱だ。

その箱を見つめながら、ユージーンはカロリーノのくちびるの感触を思い出していた。

コヴェントガーデンからの馬車の中で、指で触れたあの感触を……。

ユージーン、ユージーン……

初めて自分の名を呼んだカロリーノの声が、ユージーンの耳元でよみがえる。

愛しさが募った。

カロリーノと、もつと話をしたかった。

どんなことでもいい、手紙のやりとりで綴ったような、他愛のないことでもかまわなかった。

……いま、何を考えている？

どんな花を愛でているのだろうか。ロンドンの雑踏の中で、この空気にどんな印象を抱き、いまは何の本を読んでいる？

そして……。

そして、わたしを恋しいと思っていてくれるのか。

……この気持ちと同じように。

ストラウドの庭で語り合って以来、カロリーノとほとんど会話をしていないことに、ユージーンはあらためて思い至る。

互いにロンドンにいるというのに、顔を合せることも思うに任せない。

わずかの時間の邂逅すらも、自分の性急すぎる行為だけで過ぎ去らせてしまった。

抱きしめ、くちびるを奪うだけで……。

言葉にして、思いを十分に、カロリーノに伝えることもできずに。

そんな自責の念に反して、ユージーンの肉体の方は、熱い火照りに悩まされ始めていた。

ユージーンは、デスクの引出しを閉めた。
そして、長椅子に身体を投げ出す。

欲望に火が付くのを抑えようと、ユージーンは閉じた瞼の上に左手をかざし、歯を食いしばった。

だが、その努力が無駄に終わるであろうことも、ユージーンには、すでに判っていた。

——また、夢の中で自分は激しくカロリーノを犯すだろう、何度も何度も……。

それでもユージーンは、身体を固くして震える吐息を押し殺した。

チエルシーにあるストラウド侯爵の邸宅の玄関に、馬車が横付けされた。

馬丁に手を取られながら、カロリーノ・ウォーレンが乗り込む。

彼女を見送るのは、バトラーだけだった。

ベッツィーは、すでに新しい屋敷に移っていた。その合わない侍女を追いついたばかりの某伯爵夫人が、今、すぐにでも来て欲しいと強く望んだからだ。

ごくひっそりと、カロリーノは屋敷を去っていった。

主のストラウド侯コーネリアス・ウォーレン卿は、妹を見送らなかった。

自身の書斎から、顔を出すことすらしなかった。

——もう、二度とロンドンに来ることはないだろう……。

馬車の中で、カロリーノはそう思っていた。

そして……。

二度と、ユージーンに逢うこともないと。

カロリーノにとって、それは予想ではなく、決意だった。

ユージーンには、もう決して逢わない。

そんなことは、許されないのだ……。

わたしには、もう。

許されない。

ユージーンのことを考えると、カロリーノの胸は、氷の塊を押し当てられたように疼いた。

心も身体も、冷え切っているというのに、まるでやけどを負ったかのように、胸の内がひりつく。

ユージーンの名を思い浮かべるだけで、まるで一晩中泣き叫んだ後のように、身体の中がズキズキと痛む。

涙など、もう先から一滴も出なくなってしまったというのに……。

カロリーノは、ユージーンの声进行思出そうとする。穏やかな、低い低い声を。

自分の名を呼ぶ、あの声を。

でも、それはもう、ひどく遠く、かすれていて良く聞えなかった。

そして、彼の大きな掌の感触を、長い指を思い描く。

深い闇のような漆黒の瞳を……。

そのすべてが、すぐに白いもやの中にかすんで行く。

自分の心は、芯まで燃え尽きてしまった石炭のようだと、カロリーノは思った。

形だけは残っているものの、真っ白で……。

ふと何かが触れると、すべて粉々に砕け、さらさらとこぼれ落ちて、飛び散ってしまうだろう。

馬車の揺れに、激しいめまいを感じ、カロリーノは固く瞼を閉じた。

赤い実の毒（４）

57

帰国後のユージーンは、オリアナ号の事故に関する情報収集のため、父シエスタベリ伯爵の手伝いに奔走することとなった。

もちろん、これまでの研究者、医師としての自身の日々も相当に忙しいものではあった。

だが、いま出入りし、接触すべき相手は、それまでユージーンが交流を持っていたのとは全く異なる世界の人間であった。

シテイ、ウエストミンスター、弁護士……。

オリアナ号に乗船し、行方不明となったエイルズフォード子爵一家の手がかりを求めて、ユージーンは、父に協力して、それらの界限を渡り歩いた。

しかし、乗客の状況が絶望視されるとともに、彼らのユージーンへの対応にも変化が生じていた。

彼らは、ユージーンを次期エイルズフォード子爵、次のシエスタベリ伯爵として扱い始めたのだった。

ユージーンが踏み込み始めていたのは、父を手伝う次男としての範疇を超える活動だった。

自らの医師の仕事の方は、受け持っていた患者の面倒を見るだけで、手いっぱいとなっていた。

もはや、ユージーンは新たな患者を診察することが、ほとんどできない状況だった。

父も……シエスタベリ伯爵アレックス・マクラクラン卿も、いつの頃からか、きつぱりとヘンリー・マクラクランと孫のマックスのことを諦めたようだった。

シエスタベリ伯の中では、跡継ぎはユージーンと、もう心が落ち着いていた。

兄と甥の死に戸惑い、いまだ、それを受け入れきれないのは、いまや自分だけとなってしまうたのか……？

時折、ユージーンは自分ひとりか、なにかどこかへ取り残されてしまったような気持ちになることがあった。

「なぜ、今、セインズ卿のティーパーティーなどに赴かなければならないのです？ 父さん」

ユージーンはキャリッジの中で、シエスタベリ伯と差し向かいで座っていた。

父と馬車に同乗するのにも、ユージーンは、随分と慣れつつあった。ふたりはすでに、長い足同士、互いに膝がぶつからないように上手く座るコツを体得していた。

「セインズ卿は、ロンドンのホテル協会のトップで、シティの顔役だ」

シエスタベリ伯爵は、グローブを外してハットの中に入れながら息子に答えた。

「そんなことは知っています。だから、なぜ……」

ユージーンは少しいらだちの見える口調で、さらに父に問いかける。

「向こうは、気を遣って茶会にしてくれたんだ。晩餐会などには、こつちが到底来る気にはならんだろうからと」

シエスタベリ伯爵は、それだけ言って、片方の口の端を引き上げた。これは、彼の気分を害したことをアピールするための表情だった。

これ以上、何を訊ねても聞えないふりを決め込まれるであろう……。ユージーンは、追及を諦めた。

キャリッジの中に、沈黙が流れた。程なく、馬車はセインズ卿の館に到着した。

「ごきげんよう、ロード・シエスタベリ、ロード・ユージーン。ノートン卿の妹君のアリシア嬢をご紹介させて頂きたいわ……」

十二人目以降は、ユージーンは、数えるのを諦めた。引き合わされる令嬢の数を、である。

茶会女主人のホステス、セインズ卿の妹、老嬢フロレスからエインズレイのティーカップを手渡されるやいなや、それはもう、ひっきりなしだった。

レディのショッピングで店が出してくる帽子の数でさえ、かくやありなん？ というほどだった。

……よくもまあ、次々とこれだけ出てくるものだ。

ユージーンは、驚くのを乗り越して、もはやあきれ果てるような心持ちだった。

何のことはない。

その茶会は、いわゆる、お見合いパーティーだった。

誰も、まだ口に出してはユージーンを「エイルズフォード子爵」とは呼ばないものの、シェスタベリ伯爵が、ヘンリーの死を届け出さえすれば、すぐにでもそう呼び始めるであろうことが、ありありと伝わってくる。

これまでは……。

ヤンガー・サン

第二子であるユージーンなど、結婚相手としては埒外である旨を、母親からきつく言い渡されていたであろう良家の令嬢達だった。

たとえ、ユージーンに惹かれてはいても、母の言いつけに背くことも出来ず、ただ、遠巻きに彼を眺めるだけであつた彼女達……。

それが、シェスタベリ伯爵の嫡子の座をえたユージーンの周囲に、こぞつて集まりだしたというわけだ。

いや、むしろ、今度は母親にも、こう言いつけられたに違いない？ ユージーンは意地悪な考えを巡らせる。

……次期シェスタベリ伯の妻の座を狙え、と。

親のいいなりの「お人形」のような娘たちに、ユージーンの気持が動くことなどなかった。

——人形のように美しい。

カロリーノの姿形は、まさにそのように形容するのが相応しいだろう。

しかし、それはユージーンにとって、いま、周囲に集まる令嬢たちのような「お人形」ぶりとは全く違っていた。

書物の上からだけ得た知識ではあるかもしれないが、カロリーノの博識さ。

彼女が話し相手に示す好奇心と思いやりは、ユージーンを決して屈させなかった。

こちらの言うことに、ただ頷くだけの娘たちとはまったく違っている。

そして、その美しさ自体も、他とは、まるで比べ物にならない……。カロリーノ以上に美しい少女に、自分はいまだ出会っていないのだということ、ユージーンは改めて実感する。

なによりも心をつかんで離さないのは、相手をまつすぐに見つめ返すカロリーノのあの瞳だった。

エメラルドとアメジストの、アンバランスな輝きが、心をかき乱す。

ユージーンのカロリーノへの渴望は、増すばかりだった。

……お茶もお菓子も令嬢たちの紹介も、もう沢山だ。

残してきた山のような雑事へと、ユージーンの気持ちは飛んでいた。

——いかにわたしが社交に疎い人間だからって、君の置かれている立場くらいは想像に難くないよ、コーネリアス。

ユージーンは、ストラウドの五月の庭でコーネリアスとかわした言葉、ふと思い出した。

…… 午後の光の中を、ふたり並んで歩いた。

—— 独身の次期ストラウド候とあわよくば縁続きになりたい人間はごまんというだろうからね……。

自分は、こうコーネリアスに言った。

あの時……

コーネリアスの置かれていた立場の辛さなど、自分には本当に分かってなどいなかったのだ……。

自分が今感じている、この苦痛、束縛感。

突然、変化したように感じられる周囲の目。

シェスタベリ伯の嫡子として、その名とともに課せられるなにやら得体のしれないものは、風変わりと評されるほどに、周囲に左右されない生き方をしてきたユージーンにとっても、気の重くなるような状況の変化だった。

父を亡くした旧友の感じていた重荷が、いかばかりのものであったろうかと、ユージーンの心は痛んだ。

そして、そのことを、いまさらながらに実感している自分に対して腹立ちのような後悔の念が込み上げてくるのを抑えようがなかった。

ふと、お茶のおかわりの勧めに、途切れ目が生じた。

ユージーンは、やっと席を離れることができた。

ユージーンにしては滅多にないことではあったが、シガーの部屋に足を向ける。

…… セインズ卿は愛煙家と聞いている。

おそらくこのパーティにも、そのための部屋が用意されているだろう。

バトラーに訊ねると、すぐにビリヤード台がしつらえられた部屋に案内された。

残るのは、かすかなシガールの香りだけで、部屋には誰もいない。

おそらく、いましがたまでセインズ卿がふかしていたのだろう。この茶会に、他にそんなことをしそうな客は、見当たらない。なんといっても、女性だらけなのだから。

テラスのフランス窓を開け放ち、ユージーンはシガレットケースを取り出した。

ふと、風が通り抜けた。

窓と反対側にあたる部屋のドアが、開かれたのだった。

ドアのところから声がした。

「しばらくぶりにお目にかかるわね？　ロード・ユージーン」

ドアを振り返ったユージーンが目が一瞬、見開かれた。

そこには、エミリア・ウォショースクが立っていた。

赤い実の毒（5）

58

ドアを閉めると、エミリアは部屋の中へと歩みを進めた。

「ひとつ、いただけないかしら？」

ユージーンの隣までやってきたエミリアが、妙にすっぱりとした様子で、こう口にした。

「……どうぞ、レディ」

ユージーンはシガレットケースを差し出す。

慇懃さの中に、決して相手が見誤ることがないような明らかに軽蔑の色をのぞかせた声音で言いながら。

それは、男相手にシガレットをねだるような女に対して、まっとうな紳士なら、必ず見せる類の態度だった。

そして、ユージーンは、エミリアのシガレットに、火をつけてやる。もちろん、すぐには、そうしてやらなかった。

ひと口目の煙を吐き出しながら、エミリアが口を開いた。

「……お兄さまのご一家には、お気の毒なことでしたわね、ロード・ユージーン」

ユージーンはエミリアの言葉を無視して、彼女から離れ、さらに窓辺に近づいた。

「今日のご令嬢の中には、夫人にしてもいいと思える娘はいたのか

しら？」

エミリアがユージーンの背中に向けて、さらに言葉を投げた。

ユージーンは窓枠に軽くもたれ、庭に目をやる。

窓に映り込んでいるエミリアの姿が、次第に大きくなっていく。

エミリアは、ユージーンの後ろで立ち止まり、その肩に手をかけた。

すぐに、軽く肩をゆすって、ユージーンはエミリアの手を払い落した。

シガレットを口元に運び、エミリアは嫣然と微笑して見せた。

「いるわけないわね、今日はストラウド候の妹君はいらしていないようだし……レディ・カロリーノとおっしゃったかしら？」

眉を上げそうになるのを、ユージーンはすんでのところで押しとどめた。

表情には出さずにすんだとはいえ、エミリアは、一瞬、自分の感情が激しく動いたことくらい、即座に感じ取っているに違いないという苦々しい思いが、ユージーンの胸の中にこみ上げる。

エミリアは吸いさしのシガレットを、クリスタルの器に放った。

「ええ、レディ・カロリーノとはね、ロイド卿夫人の『音楽会』でお目にかかって……少しお話ししたのよ。可愛い方ね」

そして、黒檀のオリエンタル趣味の扇を取り出すと、エミリアはゆつくりと開いて見せた。

孔雀の雄が、翼を広げるように……。

「ああいう娘が趣味なんてね……知らなかったわ、ユージーン？」

……なぜ、エミリア・ウォシヨースクは自分とカノとの仲を？
カマをかけているだけなのか。

ユージーンはエミリアの真っ赤に彩られた唇をぞつとする思いで見
やった。

いや、理由などないのだ。

女性の勘というヤツは、そういったものなのかもしれない。

エミリアは、背伸びをしてユージーンの首に腕を巻きつけた。

「また、何か聞きたいことがあったら、いつでも仰つて、ユー
ジーン？ そうね、たとえばストラウド候の近況とか、ね？」

ユージーンの耳元で、エミリアは囁いた。

と、その瞬間、ふたたび部屋のドアが開いた。

シエスタベリ伯爵アレックス・マクララン卿だった。

シエスタベリ伯は、エミリア・ウォシヨースクに抱きつかれ、顔を
寄せられているユージーンを見ても、シガーの煙が目に入ったほど
の反応も見せなかった。

エミリアは、ゆっくりとユージーンから腕を解いた。

そして、開いた扇で口元を覆いながら、ドアの方へと歩いて行つた。
やや高慢なほどに、顎を高く持ち上げた姿勢で、シエスタベリ伯爵
の横を抜け、廊下へと歩み去っていく。

「ヤンガー、こんなところでいつまで煙を吐いているつもりだ？
さっさと席に戻らないか、皆さん待ちかねている」

シエスタベリ伯爵は、いつものような、ややぞんざいな口調で、ユ
ージーンにこう言った。

ユージーンは窓から離れ、手にしたシガレットを灰皿に置いた。そして、父の方へと歩みを進める。

ユージーンがそばにやってきたところで、ふたたびシェスタベリ伯爵が口を開いた。

「お前……あんなのと遊んでたのか？」

ユージーンは、軽く眉をひそめて見せた。

「ちよつと付き合いがあっただけです……昔々に」

シェスタベリ伯は、口の端を片方だけ引き上げて言った。

「ほほう、昔むかし、ね。そういうのを何と言うか知っているか？
ヤンガー」

「……『若気の至り』ですか？」

自嘲の表情を浮かべて、ユージーンは呟いた。

「まあ、そんなところだろうな」

シェスタベリ伯爵は、即座に賛同の意を表明した。

しかし、すぐに、いつにない真剣な表情を見せて、こう続けた。

「以前はともかく……今のお前は、少し立場が違う。言わんとすることは分かるな？ お前はシェスタベリの跡継ぎだ」

そして、シェスタベリ伯爵は、ユージーンが言葉を返す前に、また口を開いた。

「向こうも、^{エミリア}それを考えているだろう。付け込まれんようにな」

ユージーンは、言葉に詰まった。

すると、父は小憎らしいほどの笑みをたたえて、ユージーンの肩を

「つ叩いた。」

「お前は重要なところで、脇が甘いからな、ヤンガー」

赤い実の毒（6）

59

流れていく景色を目で追う気力は、もうカロリーノ・ウォーレンには残っていなかった。

じつと瞼を閉じ、列車の揺れに身を任せる。

メイドもシャペロンもなく、たったひとりで列車に乗っている若い婦人を気遣ってなのか、車掌が頻繁にコンパートメントの側を通りすぎる。

はしたなくも、ひとり旅などしているレディへの単なる好奇心かもしれない……

カロリーノは、まるで自嘲するかのよう^に思いついた。

しかし、ふとチャリングクロス駅でのことを思い出し、強く首を振って、そんな考えを振り払う。

チエルシーの館から駅まで馬車を駆ったのは、まだ若い水色の瞳の青年だった。

カロリーノは、彼に見覚えがあった。

コヴェントガーデンまで、こっそりと馬車を出してくれた馬丁^{グルーム}だ。

馬丁は、列車に乗る前からすでに気分の優れない様子だったカロリーノを、ひどく心配していた。

チャリングクロス駅で。

彼がポーターに荷物を預けた後、車掌に心付けを渡し、何事かをを

言い含めていたことを、カロリーノは写真を見直すように思い出したのだった。

「……ベツツイーが、レディのことを心配していました」
優しげな水色の瞳をした馬丁は、初めてカロリーノに話しかけた。そして、おそらくこれが最後となるであろう会話だった。

「俺に、レディをきちんとお見送りをするようにって……せめて、ストラウドまでお供をしたかったと言っていました」

ベツツイーの名を聞き、切なさや心細さが押し寄せる。
カロリーノの気持ちの糸は早くも途切れそうになった。
しかし、なんとか気を張って、それを押しとどめる。
カロリーノは馬丁に向って、微笑して頷くのがやっとであった。

「レディ？ お加減でも……」
車掌がドアをノックして、カロリーノに声をかけた。

「……大丈夫」
わずかに瞼を開け、カロリーノは、それだけをやっとなににした。

——お願い、そっとしておいて。
心の中では、そう懇願しながら。

「駅には家の者が迎えに来ているから、大丈夫」
車掌にそう言い添えて、カロリーノはふたたび、瞼を閉じた。

ストラウドを経つ前の……バーンズの、あの視線を。
カロリーノは思い出していた。

あれは、六月の終わり。

——分かっているわ。兄さまのことね、マクラランさんをお願いするわ、きつと。

あの朝、わたしは、バーンズにそう約束した。
なのに……。

どうして、こんなことになってしまったのかしら。

わたしが、ミスタ・ブラッドショーとの結婚の話に、兄さまの言う
とおり、従っていれば？

そうしたら……あんなおそろしいことは起きなかったの？

わたしが、ユージーンを好きになったりしなければ良かったの……？

どうして。

ロンドンへの道中では、車窓の景色と同じように飛ぶように過ぎた
時間。

でも、今のカロリーノには、この列車が、駅へと辿りつくまでの時
間が、まるで永遠のように長く思える。

列車の揺れが、カロリーノの疲れ果てた身体を苛んだ。

駅で列車を降りた時、カロリーノには、音も景色も自分からはとて
も遠くにある物のように感じていた。
踏みしめる床の感覚も、曖昧だった。

カントリーハウスのフットマンの顔を複数、思い浮かべる。
見覚えのある顔が出迎えていないかと、カロリーノは周囲を見渡し
た。

ふと、カロリーノの視界に飛び込んできた顔があった。

「……バーンズ？」

バトラー自ら、屋敷を空けてまで、カロリーノの出迎えにあらわれていた。

カロリーノはバーンズに向って、足を進めようとした。
たぶん、それは上手くいかなかったであろう。

それよりも、ずっと早くに駆け寄っていたバーンズが差し出した腕
の中へと、カロリーノは倒れ込んでいた。

カロリーノの力なくくずおれた身体を、バーンズがしっかりと支え
た。

「……ごめんなさい、バーンズ」

兄の助けにはなれなかった……。

道中、ずっとカロリーノを苦しめていた、バーンズへの罪悪感だっ
た。

この後は、なにも言葉にならない。

カロリーノの瞳からは、止めどなく涙がこぼれ落ちていたからだっ
た。

とうに枯れたはずだと思っていた涙が……。

赤い実の毒（7）

60

シガーの部屋から、再び茶会の席に戻ったところで、ユージーンはセインズ卿に話しかけられた。

館の主である彼と、しっかりと顔を合わせたのは、その日、それが初めてのことだった。

もちろん、ユージーンとは互いに初対面である。

「シエスタベリ伯爵から、君のお噂はかねがね。ロード・ユージーン」

セインズ卿はユージーンに軽く微笑みを向けた。

ユージーンは、それを意外に感じた。

「おそろしいほど時間に厳しく、気難しい」との噂が絶えない卿のイメージとは、少々そぐわない。

「この茶会のことを、恨まないでくれたまえ、ロード・ユージーン」セインズ卿は、声をひそめた。

「……妹にせがまれて仕方なくてね。私がアレックスと古い知り合いだと判った途端、君を茶会に招け招けと矢のような催促だ。まったくもって、言い出したら聞かないのだよ、あのオールドミスは」と、セインズ卿は、会のホステスである老嬢フローレスの方へ、ちらと視線を走らせた。

苦笑交じりとはいえ、妹へ向けた微笑みには、彼女への慈愛の気持ちも溢れていた。

セインズ卿は、小太りで丸顔、見た目は愛嬌たっぷりである。先ほども、ユージーンに見せる笑みは、いたずらっ気に溢れていて、知らず相手の気持ちを和ませる。

これほどにあたりのいい人物というのに、セインズ卿の「人となり」については「手厳しいやり手」という噂が絶えなかった……。

この目の前のシティの重鎮である男は、必ずしも見た目通りではないのであろうと、ユージーンは察しを付けた。

とはいうものの、自身の父も含め、このような狸親爺たちの化かし合いには、ユージーンはどうにも鼻白むような心持がしてならなかった。

……こんな化け物たちと渡り合うには、わたしなど、まだ場数も年期も、当然足りまい？

ユージーンは半ば開き直るような気持ちで、今まで確かめてみたかったある噂の真偽のほどを、セインズ卿に、ごく率直に訊ねてみることにしたのだった。

それは、未曾有の金額と噂されるオリアナ号の海難保険についてだ。その金額の途方もなさは、とかく人の口の端にのぼり、あらゆる新聞雑誌が書きたてた。

しかし、その支払は一体どこが、どのように行うのかについては、まったくの謎のままであった。それもそうであろう、これはシティの最重要機密だ。

だが、ユージーンが父と共にシティ界隈に出入りする中、耳に入ってくることも、まるでないではなかった。

この海難事故保険を、おぞましいジョーカーを引いたロイズのアンダーテイカーのことについてだ。

「……否定はしませんな、その噂に関しては」

セインズ卿は、口先だけは曖昧な言葉を吐いたが、その声音は、はっきりと噂を肯定したものに違いなかった。

ふとユージーンが気付くと、父も、シエスタベリ伯爵アレックス・マクラランも会話に入ってきた。

「そいつは、あれだろう？ この間死んだ、バークレーズの『ギャンブラー』チェスタートンの最後の大博打だったとか」

セインズ卿はアレックスの言葉に頷く。

「もともとは、先に落馬で亡くなった『さる』侯爵が主たる引受人でね……」

「……では、引受人というのは」

ユージーンがうわごとのように口にする。

その問いに答えたのは、セインズ卿ではなくアレックス・マクラランだった。

「ストラウド侯爵、ロード・コーネリアス・ウォーレンということだな」

……やはり、そうだったのか。

ユージーンは血の気が引く思いだった。

バートラム男爵家での……。

チェスタートンの臨終の場で、あの尋常ならざるコーネリアスの取り乱しように、改めてユージーンの脳裏によみがえる。

どうしているのだろう？

コーネリアスは、今……。

そして……カロリーノは？

すぐにでも、ユージーンはここを飛び出し、チェルシーのストラウド侯爵のタウンハウスへと向かいかけた。

——礼儀も儀礼もなくくらえだ。
いてもたってもいられない。

今ここを飛び出せば、古狸二匹、セインズ卿と父アレックスに、完全にその理由を悟られるだろう……。

だが、そんなことも構わなかった。

「……チェルシーまでだ、とばせ！」

気づくと、ユージーンは往来で辻馬車と呼び止めていた。

一体、どういう理由を付けて茶会を中座したのか、自分でも思い出せない。

そのハンサム辻馬車の御者は、とてつもなく馬車扱いが荒かったが、その分スピードも凄かった。

それでもなお、ユージーンは、焦る気持ちを抑えることができなかった。

——バトラーに門前払いを食らわされようが、玄関に門をかけられようが……。

窓を蹴り破ってでも、コーネリアスに逢ってみせる。
逢わなければならない。いま逢わなければならない……。

ユージーンの脳裏にあったのは、その思いだけだった。

書類がぶちまけられた。

床の上には、すでに本や帳簿が散乱していて、敷いてある上物のタブリーズ織の図柄は、ほとんど見えない。

その上に、さらに様々な物が投げつけられる。

コーネリアスは書棚のガラス戸を開くと、両手をつっこんだ。

中の物をすべて掻き出して、床へと叩きつける。

分厚い紙束が落ち、まるで伝書鳩が一斉に巣箱から飛び立った時のような音が響き渡った。

カーテンの隙間から差し込む光のなか、スポットライトを当てられたように、紙と埃が照らし出される。

じきに、静寂が訪れた。

書斎の中で聞こえるのは、コーネリアスの激しい息遣いだけだった。

荒い呼吸が、次第にすすり泣きへと変わる。

コーネリアスは、デスクの上から封筒を取りあげた。

……美しい字だ。

コーネリアスは、いつだってそう思っていた。
寮で教室で、思わず、その筆跡に目を奪われることも少なくなかった。

どこで見てもすぐにそれと判るほど、コーネリアスにとってはなじみのある旧友の文字。

ロード・ユージーン・マクラ克蘭からの手紙を、今一度、開く。

優美で端正なその筆跡とは裏腹に、文面は美辞麗句とはほど遠い。ユージーンの手紙は、端的で实际的だった。

コーネリアスは、すすり泣きの合間に、ふと笑い声を洩らす。

……ユージーンらしい、まったくもって。

だが、初めて……。

これは、ユージーンから来た初めての手紙だった。

この五月までは、父が亡くなるまでは、ユージーンと手紙をやり取りするなんて考えたこともなかった。

ユージーンとは……。

わざわざ、そんなことをする必要などない、そんなよそよそしい付き合いなどではなかったのだ。

めったに顔を合わすことがなかったとしても、彼は親友だった。手紙など書かずとも、心はつながっていると信じていた。

侯爵家の行末を案じ、そして、一縷の望みも消え失せた絶望の中で、何度、この手紙を読んだろう？

ユージーンの裏切りに、身を引き裂かれそうになっている時でさえ、幾度も幾度も。

コーネリアスは手紙を封筒に戻し、静かにフロックコートの内ポケットに入れた。

そして、ユージーンの手紙と共にデスクの上に置かれていた、黒い

山羊革の手帳を手にする。

表紙裏に挿んであったのは、アニックの大叔父コーネリアス・ウォーレンからの手紙だった。

あとにも先にも、おそらく大叔父からの手紙は、これ一通きりだろう……。

初めてこれを読んだ時……。

すぐに燃やしてしまおうとした。

だが、燃やすことができなかった。

知りたくもなかった父の過去が書かれた、このおぞましい便りを。

……父は奪ったのだ。

実の兄アーサーから、その爵位を。

そして、妻を……。

そのことは、ウォーレンの一族では、知らぬものはいない醜聞だということであった。

先代のストラウド侯爵ジョージ・ウォーレンが、父が、兄の婚約者を奪ったことは……。

ジョージは、兄の婚約者であったレティシアの貞節を奪った。

そして、それだけでは終わらなかった。

レティシアは、ジョージの子を身ごもったのである。

絶望したジョージの兄アーサーが不慮の死を遂げたのは、レティシアの懐妊が判明した直後だったという。

……それは事故だということにされた。

恋人を奪われ絶望した挙句、教会で弔いすらしてもらえないというのでは、あまりにもアーサーに気の毒だというのが、一族の一致した意見だったのだ。

ジョージとその妻レディ・レティスは、アーサーの葬儀への参列を許されなかったという。

ジョージがストラウド侯爵を継いでからも、ウォーレンの一族が侯爵とその妻を許すことは一切なかったのだった。

だからだったのだ……。

レディ・レティスが、一族の墓所に埋葬されなかったのは。

コーネリアスは、かみしめるように思った。

もちろん、彼女の遺言でもあった。

屋敷のホーソーンのもとで眠りたいというのが……。

だが、たとえ、そう言い残さなかったとしても、彼女がアーサーの眠る場所に葬られることは、決して許されなかっただろう。

そして、ジョージも、コーネリアスの父もまた、そうであった。

それらすべての厄災のもとに生まれ、それを大きくしたのが自分なのだ……。

この顛末を知り、コーネリアスは、自分の出生を何度呪ったことであらうか。

黒い山羊革の手帳は、故ジョージ・ウォーレン卿の日記であった。コーネリアスが、最初にこの日記を手にしたのは、ほんの偶然からだった。

ストラウドのカントリーハウスからチエルシーに運ばせた帳簿の類に、この手帳が紛れ込んでいた。

コーネリアスの父が、愛馬パーシバル号から落馬して亡くなる前日まで、綴られていた日記帳であった。

コーネリアスは、もう、すすり泣いてはいなかった。

その代りに、押し殺したような笑い声を立てながら、ぞんざいに父の日記のページをめくっていた。

そして、日記の最後の方、まだまったく使われていないページを、適当に開いた。

手探りでペンを探し、コーネリアスは、その白いページに乱暴にペンを走らせる。

書き終わると、そのまま床に座り込んだ。

しばらくの間、コーネリアスは、まるでゼンマイの切れた仕掛け人形のように、そこを動かなかった。

しかし、ふと何事かを思いついたように立ち上がると、テーブルに置いてあった日記帳をふたたび手に取った。

コーネリアスは部屋の端の壁に向かって、それを思い切り投げつけた。

そして、コーネリアスは、暖炉の方へと歩き出す。

マントルピースの上は、埃まみれだった。

コーネリアスは、そこに置かれたシガーマッチを手に取る。

手が震えて、コーネリアスはなかなか火をつけることができなかった。

太いマッチが、鈍い音を立てて折れる。

やっと、一本、火がとる。

コーネリアスは、それをこみくずのように、床に投げ捨てた。また一本、マッチを擦る。

次々と、火をつけては、シガーマッチを床へと放った。

床や本の上に落ちた火のいくつかは直に消えたが、いくつかは紙の上に燃え広がった。

コーネリアスはすべてのマッチを使い果たした。

炎こそいまだ上がないが、あちこちに飛び火した小さな火種が、激しい煙をあげて広がりつつあった。

コーネリアスはひどくせき込みながらへたり込み、部屋の壁にもたれた。

何に憤っていたのだろうか？ 自分は。

なぜ、カノに、妹にあんなことを？

コーネリアスは、止まらない咳に息を乱しながらも、奇妙なほど冷静に考えを巡らせていた。

……この何カ月かの間に、自分はこんなに冷静だったことが、あったらうか？

レディ・レティス？

あなたは、父を愛していたの？

どこかさみしげな旋律の、あの唄を口ずさむ白い花の下の母の横顔が、コーネリアスの前に現れる。

雪のように降りしきるホーソーンの白い花びらの下で。

どうして、僕を生んだの？ 僕を愛してくれた？

どうして？

身体の無理を押して、カノを生んだの。

…… コーネリアス。

低い声で呼びかけられる。

振り返ると、日差しの差し込む回廊の先に、ユージーンがいた。
テールコートの少年たちの群れが流れていく中、頭一つ分、周りから飛び出している。
漆黒の髪。

そうだ、最初に出会った時には、すでにもう、あの低い声だった。

ユージーン、ユージーン、ユージーン……。

コーネリアスは親友である、その男の黒い瞳を思い描いた。

そして、思考の全てが、ユージーンの瞳と同じ色をした深い闇の中へと吸い込まれ、消えていった。

「旦那、ここから先は行けませんや。ボビー警官が道を封鎖してます」
猛烈なスピードで飛ばしていたキャブ辻馬車の御者が、急に手綱を引いた。

「なぜだ？ なぜ通れない！」
天井の窓から御者を見上げるユージーンの口調は、知らずきつくなっていた。

「ああ、ちょっと待ってくださいよ、旦那」
御者は台から飛び降りると、人だかりの方へと進んでいった。

「なんか、この先にあるお屋敷で火事があったんだそうですよ」
戻るなり、御者はユージーンに告げた。

……火事？

ユージーンは御者の手に金を押しこむと、急ぎハンサムを降りた。

「旦那！ 歩いて行っただってその先は、通してはもらえませんか？
！」

御者は、ユージーンの背中に向かってこう叫んだ。

しかし、まるで何も聞こえなかったかのように、ユージーンは先へ先へと歩みを進めていった。

人だかりの先にいる警官の姿は見えていた。

ユージーンは周囲の誰からも、頭ひとつほど、背が高い。

しかし、そこへ行きつくのは至難の技だった。

人を押しのけ、かき分け、やっとのことで警官の元へとたどり着く。

「サー！ この先は通れません」

警官が乱暴に言い捨てる。

もう、何度もこの言葉を口にして、ほとほとうんざりしているといった様子だった。

「わたしはどうしても、この先に行かねばならない。いったい、どこの屋敷が火事なのだ？」

ユージーンも引くわけにはいかなかった。

「火事はストラウド侯爵の屋敷です、サー、ともかくこの先は……」

何かを考えるよりも先に、ユージーンの腕が警官の肩を押した。

ユージーンよりも何インチも背の低い警官は、よろめき身体を斜にした。

その横を、ユージーンが大股ですり抜ける。

警官の怒号が、ユージーンの背中に向けて発せられた。

野次馬にざわめきが広がる。

そのいずれも、ユージーンの耳を、頭を通り抜けていく。

気がつくど、ユージーンは全力で駆け出していた。

赤い実の毒（8）

61

焦げたような煤っぽい匂いが、段々と強くなってくる。

ユージーンは息を切らし、走り続けていた。

空気に混じる黒い煙が、次第に濃くなっていく。

ストラウドのタウンハウスの門が見えたところで、何人もの警官にユージーンは行く手を阻まれた。

「サー、この先は通れません」

^{警官}ボビーは、判で押した様に同じ台詞だった。

警官を押しつけようと、ユージーンはもがいた。

今度はそう簡単には、通らせてもらえそうになかった。

門の側にメイドやフットマン達が固まっている。

不安そうな表情で館を見つめる者、ヒステリーの発作を起こした同僚の面倒を見る者。

その中に、コーネリアスとカロリーノの姿はなかった。

テールコートの方が消防夫に囲まれ、何事かを説明している。

「……バトラー！！ バトラー！」

ユージーンは荒い息づかいのまま、その背中に呼びかける。

警官達に乱暴に押し戻され、ユージーンの語気が高ぶる。

「わたしはストラウド侯爵の友人だ、通してくれ！」

ユージーンと警官が、軽くもみ合いとなる。

ふと、バトラーが背後の騒ぎに気を向けた。

「……マクラ克蘭様！」

近寄ってきたバトラーが事情を説明すると、警官たちは渋々とはあるがユージーンを奥へと通した。

「火事だと聞いた……一体、何があった？ コーネリアスと……レディは？」

ユージーンは、矢継ぎ早にバトラーに質問を浴びせる。

煤で黒く汚れたハンカチを取り出すと、バトラーは数回咳き込んだ。そして、ユージーンに咳の非礼を詫び、咳払いをしてから言った。「ミirrorの書斎から、火が出たのです。ええ、それほど燃え広がる前に火は消し止めました。しかし、あのお部屋には燃えやすい物が多くて……」

バトラーはふたたび咳の発作に襲われる。

ユージーンに、医師としての感覚と矜持が蘇った。それは随分と久方ぶりのことであつた。

「随分と煙を吸い込んだようだな、良く喉と口をゆすいで置いた方が良い……」

ユージーンはそう言って、バトラーの胸に手を当て、呼吸音に意識を集中した。

——ドクターズバックを持っていれば……聴診する事もできたのだ

が。

最近では、診察バックを持ち歩くことが、随分と減っていた。バッグを持たずに出かけることが、あれほどユージーンに取っては落ち着かないことであつたというのに……。

バトラーはユージーンに礼を述べてから、さらにこう続けた。

「火の手の方はさほどでもなかったのですが、とにかく煙が酷うございました……誰も、書齋に近づけず……」

「では？ コーネリアスは……」

ユージーンの表情がこわばる。

「おそらくお部屋の中に……いま、やっと消防隊が屋敷の中に入れるようになって」

バトラーは声を絞り出すように言った。

……なんてことだ。

ユージーンをつぶやきは、もはや声にならなかった。

「……レディは？ レディ・カロリーノは」

ユージーンの問いかけに、バトラーは少し驚いた表情を見せたが、すぐ合点のいったような顔に戻った。

「カロリーノ様は、先だつてストラウドのご領地の方にお帰りになられました……ええ、おひとりで」

「帰った？ ストラウドのカントリーハウスに？」

ユージーンの繰り返しの問いかけに、バトラーはハンカチを口に当て、ただ苦しそうに唸った。

と、館の玄関が大きく開かれた。担架を持った男達が、表へと出て

くる。

使用人の一群が、一瞬息を飲んだ。

バトラーがドアの方へと駆け寄る。

「ミーロード……！」

その声を合図にしたかのように、男たちは、担架をポーチの端に置いた。

ユージーンもバトラーの後を追う。

奇妙な静けさの中、担架の脇に跪いたバトラーの悲痛なうめき声だけが響く。

近づいてきたユージーンに、担架を運んできた消防夫たちの怪訝そうな、そして不機嫌な視線が向けられる。

「わたしはマクラ克蘭といって、ストラウド侯の友人で医師だ」
消防夫達に短くこう続けると、ユージーンはバトラーの横にかがみ込んだ。

シーツを剥がす。

担架に横たわっていたのは、コーネリアスだった。

その金の髪も、手の甲も煤で黒ずんでいたが、その彫刻のように端正な顔だけは、白いままだった。

コーネリアスの膚の色はもともと白かった。だが、今のその顔色はまるで大理石の彫刻のような白さだった。

そして、頬とくちびるは、まるで水彩絵具でひとはけ、色を置いたかのように紅に染まっている。

……煙に巻かれて命を落とした者に特有の死顔だ。

ユージーンは深い溜息を吐き出す。

そして、友の名を口にした。

しかし、ユージーン自身がそう思っただけで、実際には、それは声になどなっていないかったのかも知れなかった。

「ご覧のとおり、侯爵は火に焼かれたのではなくて、煙に燻されて亡くなってまさ……。書斎も全焼しているわけじゃありませんでした」

消防夫のひとりが、ユージーンとバトラーに何かを差し出した。

「……なんです？ これは」

バトラーが消防夫の差し出した物を見て、怪訝そうに眉を寄せた。

「マッチの……燃えさしか？」

ユージーンは、そう言っただけで消防夫に視線を向けた。

消防夫は頷いた。

「これが、書斎の床にたくさん落ちてましてね……。侯爵様は、なんで火の付いたマッチを書斎の床にばらまかなきゃならなかったんでしょうかね……」

消防夫は曖昧に言い淀んだ。

その「理由」、何のためにコーネリアスがそうしたのか……。

消防夫は、本当に「判っていない」のではないのだ。

ただ、それを公にしても良いか？ ということ。それをユージーン達に遠回しに問うているのだ。

「そういう『不注意』が起きてしまう事情が、なにかあったのやもしれません……」

バトラーはすかさず消防夫に、やんわりと釘を刺した。

——その件については、こちらに一任願いたい。
バトラーの言いたいことは、消防夫達に明確に伝わったようであった。

人の口に戸は立てられない、とは。
よく言ったものだ。

どこからどう漏れるのか、ストラウド候のタウンハウスの火災の翌日には、既に社交界では、その不慮の死について憶測が飛び交っていた。

……自殺らしい。

どうやら財産管理が上手くいっていなかったようだ……。

——噂というのは、おそろしいほどに正鵠をいっていることが、まあある物なのだ……。

今更ながら、ユージーンは身をもって、そう感じていた。

元来が、社交界の噂話には縁も興味もなかった男である。

あらためて、自分の世間知らずさに鼻白みながら、ユージーンはブランデーのグラスをあおった。

そこは、ユージーンが、めったに立ち寄らないような類の場所である。

昔々、まだユージーンが少年といっても良い時分には、こういう場所に好奇心といたずら心で立ち寄り、覚えはじめの酒を飲ったこともある。

そう、昔、ここへ来たことがあった。
ユージーンが記憶が、不意に蘇った。
コーネリアスと共に。

ひどい目眩がした。

疲れ果てているというのに、昨晚も一睡も出来なかった。
昨日の深酒も、眠りへのいざないとはなかった。今晚もそうなるであろう。

……気持ちが張り詰め、逆立っている。

——もし、ふとしたきっかけがあったら……自分の中のすべてが崩れ落ちてしまいそうだ。

ユージーンは、自身の自制心という物に、まったく信頼を置くことが出来ない気持ちになっていた。

そんなことは、生涯で初めてのことといって良かった。

幾晩も眠っていないような、憔悴しきったコーネリアスの在りし日の表情が脳裏に浮かんだ。

どうして……。

なぜ、もっとコーネリアスに寄り添うことが出来なかったのだろう……。

これで、自分が医師だ、友人だなどと……よくまあ、厚顔であったことだ！

ユージーンはグラスを重ねた。

——カノはどうしているのだろう。

父を亡くして、まだ一年にもならないというのに……。兄までも失ってしまった。たったひとり、取り残されて。

ユージーンはすぐにでも、ストラウドに立つことを考えていたが、カロリーノがこちらに出向く可能性を考え、今は思いとどまっていたのだ。

それに、どうして？

なぜ、わたしにひと言も告げず、カノはロンドンを立ったのだ……？
一体、何があったというのだろう。

新しく酒が満たされたグラスを、ユージーンが手に取ろうとした時、さしのべられた白い手が、それを止めるようにグラスを覆った。

面倒そうにユージーンが視線を上げた先にあったのは、エミリア・ウォシヨースクの顔だった。

「……………」

ユージーンはなんとも奇妙な心持ちがした。

こんな類の店に、エミリアのような身持ちの女が居たとしても、そう不思議なことではなかった。

だが、今晚のエミリアは何か、いつもとは違う……。

——何が？　なぜそう思うのだろうか。

ユージーンは、ぼんやりとかすむ思考で、そう自問した。

「随分とお召し上がりのようね、ロード・ユージーン？　貴方にし
てはめずらしいことでなくって？」

エミリアの口調と声音は、随分と丁寧なものだった。

——おやおや？　レディ・エミリアは、まるで「本物の」レディのようではないか。

ユージーンはそう思いつき、知らず苦笑を浮かべていた。

そして、ユージーンはエミリアのくちびるの色に、ふと目をとめた。ほとんど、紅が差されていない……。

ドレスも襟が高く、袖も手首まで覆う長さ。貞淑そのもののデザインだった。

だからか？

だから、こんなにエミリアが違って見えるのだろうか……？

——いや、それだけじゃない。なにか、もっと何かが違うような。

ユージーンはエミリアの手を取り、グラスの上から退かせた。

「ちょっと前に入った、わたくしの新しい使用人。もともとはチェルシーのお屋敷にいたの。そう、ストラウド侯爵のタウンハウスよ」

エミリアは、誰に語るともなく語っていた。

ユージーンは、もう何杯目だか判らない程のブランデーのグラスに口をつけ、聞くともしにそれを聞く。

「ロード・コーネリアス・ウォーレンは随分と荒れたご様子だったようね、癩癩が酷くて、バトラーすら近寄れないありさまだったとか、そのせいか、妹君もおひとりでストラウドにお帰りになったのか……」

「なぜ、そんな。たったひとりで？」

ユージーンはふと、こう口にした。

エミリアは軽く微笑して、静かに続けた。

「さあ、ともかくお兄様のあまりご様子に、愛想が尽きて仕舞われたのではなくて？ お部屋に閉じ込められたりしたこともあったと

聞くわ」

カノを？ 部屋に閉じ込める……？

まるで、亡くなった父親と同じことをするじゃないか？

コーネリアス……？

……しかし、たとえどれほどのことがあるとも、あのカノが兄を、コーネリアスを見捨てるように去っていくことがあるだろうか？

ユージーンは、腑に落ちない思いを噛みしめた。

「だが、随分と口の軽い使用人を雇ったじゃないか、レディ・エミリア。そいつが辞めた後は、行った先で何を触れ回ってくれることやら分からないな？」

ユージーンはこの上もなく皮肉めいた口調で、こう吐き捨てた。

エミリアは、静かに微笑して、何も答えなかった。

「もう、そのくらいになさったほうが良くてよ、ユージーン」

エミリアの言葉を見無視するように、ユージーンは新しいグラスの身を、一気に空けた。

次第に、酒場のざわめきが、まるで浜辺の遠い波のうねりのように聞え始める。

打ち寄せては返す、意味のない水音。

「……すっかりなさって、ユージーン。誰か、私の馬車から御者を呼んできて」

エミリアの声が、遠く、そして近くに聞えた。

がくりと傾いた自分の顔が、なにか滑らかなものに触れたことに、ユージーンは気がついた。

誰かの腕のようだった。

やわらかい掌が頬に触れ、顎と首筋にドレスの感触があった。

……この香りは？

知っている。この香りを知っている。

これは六月の香りだ……。

ユージーン意識は、そこで深い闇をたたえた沼のようなものに引きずり込まれ、ふつつりと途切れた。

赤い実の毒（9）

62

焼けつくように喉が痛む。

ユージーンは固く目を閉じたまま、無意識のうちに、タイの結び目に手をやった。

しかし、上手くタイを解くことはできなかった。

乱暴に何度も引っ張り握るうちに、腕から力が抜け、首元から指が滑り落ちる。

微かに衣擦れの音がし、ふと、ユージーンの首元が楽になった。

——ダニエル？

ユージーンはフットマンの名を呼ぼうとして、ひどく咳こんだ。

と、ユージーンの顎にひんやりとした指があてがわれ、同じくらいひんやりとしたグラスがくちびるに押し当てられた。

グラスから口に流し込まれる液体を、ユージーンはうまく飲みこめない。

それは、ユージーンのかちびるから溢れだし、首筋を伝ってドレスシャツに染みてゆく。

むせそうになったユージーンのかちびるから、ゆっくりとグラスが離される。

渴いた喉は、まだ一向に潤ってはいなかった。

もっと。

もっと水が欲しい……。

ユージーンのかちびるは、氷のようなグラスの感触を渴望した。

だが、次にくちびるに押し当てられたのは、グラスではなかった。

ユージーンのかちびるはやわらかい物にこじ開けられた。

そして、熱く渴いたユージーンの中に、直に冷たい液体が注ぎ込まれる。

その注水が止んでもなお、ユージーンは押し当てられている冷たいくちびるを、自分のくちびるで貪るように絡めとる。

もっと、もっと潤してくれ、この渴きを。

早く……。

再度押し当てられた、やわらかなくちびるから溢れる清冽な湧水を、ユージーンは存分に味わった。

甘い香りがした。

朝露を浴びた白い花の香りが。

六月の香りが……。

ユージーンは息苦しさに耐えかね、ボタンを引きちぎるようにしてシャツをはだける。

誰かの指先がシャツのボタンの隙間から、ユージーンの胸へと滑るように入り込んだ。

ひんやりと冷たいその指は、ひどく火照ったユージーンの身体に心地よい安らぎを与える。

ふと気がつくと、ユージーンの身体の下で、白くなめらかな物が蠢いていた。

それは、シーツの上に横たわる、一糸まとわぬ女の身体だった。長い黒髪は乱れ、豪華な髪飾りが、枕の上に散らばっている。

いつものように深紅には彩られてはいなかったが、ぽってりと厚みのある、淫らな形に歪んだ蟲惑的なくちびるは見間違えようもなかった。

……エミリア?!

ユージーンが、身体を引き離そうとした瞬間、その腰にエミリアの脚が絡み付いた。

「……だめよ、今更やめても……ユージーン。あなたは、もう私の中にいるんですもの」

エミリアはユージーンの首に手をまわし、その顔を引き寄せた。そして、激しくユージーンのくちびるを食った。

「私たちもう、最後まで行き着くしかないの、そうでしょ？ ああ、そう。もっと私を味わって……ユージーン」

ユージーンの欲望に火をともしたのは、エミリアのこの淫猥な言葉ではなかった。

エミリアはいつもと違っていた。

いつもエミリア・ウォシヨースクが皮膚のように纏っている、あの刺すような麝香の官能の香り。それが、今、彼女の身体からは一切

立ちのぼってはこなかった。

代わりに、シーツの波間に満ちていたのは、初々しいほどのガーデニアの香りだった。

ユージーンは固く眼を閉じ、さらに深くエミリアの中に自分を押し付けた。

ユージーンは心の内で、白い花の名前を呼んだ。
一番大切にしている、六月の白い花の名前を。

降りしきる雪のように花びらを散らせる、五月の白い花の名前を……。

何度も何度も……。

その名を呼び、激しく腰を打ちつける。

その呼びかけは、声となってユージーンのかちびるから、溢れだしていたのかもしれない。

だが、たえそうであつたとしても……。

その低く悲痛な呼び声は、激しくベッドの軋む音とエミリアのすすり泣きにも似た悦楽のあえぎ声に、かき消されてしまっていたに違いなかった。

赤い実の毒（10）

63

日も随分高くなってから、ユージーンは目覚めた。
部屋の奥まで深く差し込む陽差しに、秋の訪れを感じる。

こめかみが脈打つように痛んだ。身体を起こした瞬間、天井と床が逆になったかのような目眩。

昨晚、自分がどれほど酒を浴びたか考えれば、当然すぎる状態だ、ユージーンは苦々しく口元を歪める。

エミリアと身体をつなげ、欲望を解放した禍々しくも猥雑な記憶がよみがえった。清々しいガーデニアの香りが、どろりとした甘い腐敗臭に変わる。

エミリア・ウォシヨースクのベッドで、朝の陽差しを浴びたくはなかった。

欲情に流されるまま、自制をなくし、すべての心の掛けがねを外しても、それだけは踏みとどまりたかった。

ベッドの上に座り、額に手を置いて目を伏せる。

ダニエルの音でノックがあった。

「お加減はいかがです？ ユージーン様」

いつもよりも静かにダニエルが問いかけた。

「……良いわけではないな」

ダニエルに当たっても仕方がないと分かっている。だが、昨夜の自分の愚かさを思い返すと、こみ上げる情けなさど苛立ちを、とても

制御できない。

それでも、ダニエルの運んできたコーヒーの香りは、ユージーンのささくれだった心と身体にしみいるような安堵感を与えた。

ダニエルは無言のまま、カップをコーヒーで満たした。

昨晚、とは言っても明け方に近かったが、『ザ・プレイス』に戻ったユージーンを出迎えたのは、ダニエルだった。

ユージーンの帰宅を、ダニエルは夜通し待っていた。翌朝の仕事はいつも通り、早くから始まるというのに、疲れた身体を横たえることのできるわずかの時間を削って、ダニエルは待っていた。

普通なら、普段なら……そんなことはしない。

医師としての使命に忠実なあまり、夜通し治療をし、明け方に呼び出されることもあるユージーン的生活。多忙ぶりがあまりに目に余る時のみ、釘を刺す。それがダニエルがユージーンに接するやり方だった。

だが……。

このところのユージーンは、どこかひどく危なっかしい。

ストラウド侯爵、コーネリアス・ウォーレン卿が亡くなってからずっとだった。侯爵の死にまつわる様々な噂は、フットマン達の間にも、すでに広まっている。

ダニエルはユージーンの変化に、不安を抱いていた。

沈着で、安定した心の持ち主。ダニエルは、ユージーンの精神力の強さを信頼していた。

昔から、何かを達観したかのように一種の諦念を持って、誤解も批判も困難も、すべて静かに引き受けてきた。その穏やかなユージーンの漆黒の瞳を、ダニエルは信頼していた。

冷静さは、けっしてユージーンの心の冷たさの現れではなかった。ユージーンがどれほど思いやりに溢れた人間であるか、ダニエルはよく知っている。

そして、凧いだ海原のようにも見えるユージーンの心の、その奥底には、押さえこまれた様々な嵐が渦を巻いているはずだということも。

険しい表情で、カップのコーヒーを飲みくだすベッドの上のユージーンを、ダニエルはそつと見つめた。

眼窩に頬に、疲れとやつれの陰が落ちている。

ユージーンの身体中のそこかしこには、女の印が残されていた。着替えを手伝った昨夜にも、ダニエルは、それに気付いてはいた。だが、今、日差しの中でユージーンのあらわになっている首筋や腕、胸に……。

はつきりと赤黒い痣が、毒々しいまでに浮き上がっている。

それだけではなかった。昨晚のユージーンの服や身体には、甘い花の移り香が残っていた。

手紙を受け取るといつもユージーンが見せた、あの優しい表情。ダニエルだけが気がつくことが出来るほどの、ほんの微かなユージーンの口元に浮かぶ微笑。

——ユージーン様に抱かれたのは、あの手紙の主ではない。あんな幸福な表情を、ユージーン様にさせていた人なわけがない。

『ガーデニアの君』が、こんなあからさまではしたくない印を、男の身体に刻むような女であるものか？！

ダニエルは確信していた。

ろくな女ではないのだろう……。

ユージーンの昨晚の相手を、ダニエルはこうみなした。

しかし……。

こんなことは、今まであっただろうか？

こんなに捨て鉢で、こんなに心をすり減らしたユージーンなど、ダニエルは見たことがなかった。

ダニエルの心は、締め付けられ、痛んだ。今はただ、ユージーンの心と身体が心配で仕方ない。

そんな不安を、ダニエルは静かに自身の胸の内にしまい込んだ。

*

規定量よりもやや多めの鎮痛剤を飲み下し、ユージーン・マクラ克蘭は帽子を手に取った。

ストラウド侯爵のタウンハウスへ向かうつもりでいた。チエルシーの執事ジョーンズから、連絡が入ったのだ。

コーネリアスの遺体が、今日ストラウドへ帰ると。

これで最後にしようと思えながらも、思わず洩れる溜息の数も、いくつになったか分らない。ユージーンのひどい憂鬱は、二日酔いのせいだけではなかった。

『ザ・プレイス』の大階段を、ユージーンはいつもよりも、ずっとゆっくりとした足取りで降りる。

ホールを通りがかったシエスタベリ伯爵が、ごくさりげない様子で

ユージーンを見上げた。

ユージーンは、無言で父に目礼をする。口をきくのがとてつもなく億劫であつたからだ。

階段を降りたユージーンが、脇を過ぎようとしたとき、シエスタベリ伯爵の方が口を開いた。

「……ストラウド候は気の毒だったな」

「ええ」

ユージーンは、こう返答するのがやっとだった。

父には、理由が判っているはずだ。コーネリアスの死の理由が。そして、それが事故というよりは自死であるということも。

シエスタベリ伯爵は続けて口にした。

『「ギャンブラー」チエスタートンといい、ストラウド候といい。

呪われてでもいるのか？ いやにバタバタと若死するじゃないか、お前の友人は。よもやパブリックスクールで、皆して罰当たりなことでもしていたんじゃないかな？ ヤンガー」

ユージーンは理解していた。

父がわざわざ、自分が出かけるころ合いをみて、ホールに出てきてくれたのだということも。それがユージーンに言葉をかけるためだということも。

これは、いつもどおりのシエスタベリ伯爵一流の軽口だ。下品に紙一重なほどあけすけで、悪びれないやんちゃな口調。それが、父特有の慰め方なのだと、ユージーンにはきちんと判っていた。

だから、ユージーンは笑ってみせようとしたのだ。

いつもどおり、口の端に皮肉めいた笑みを浮かべて、厭味の一つでも仕返しをしながら。

しかし、短く乾いた笑い声をひとつ立てただけで、ユージーンはそ

れ以上、何も言うことができなかった。

ただ、手にしたボーラーを掲げ、それを父への挨拶にする。
そして、ユージーンはホールを歩み去った。

ホールを歩き過ぎてから、父の悪趣味な冗談にユージーンは、知らず含み笑いを洩らし始めていた。

キャリッジの扉を開いて待っていたダニエルが、ひどく怪訝な顔をしてユージーンを覗き込む。

馬車に乗り込んでも、まだユージーンは笑い続けていた。

扉を閉めようと、馬車の中のユージーンの方を向いたダニエルの表情が、僅かにこわばる。

ダニエルの奇妙な表情の変化に、ユージーンはふと疑問を感じた。

だが、ダニエルはすぐに頭を下げると、いつてらっしゃいませと挨拶し、馬車の扉を静かに閉めた。

馬車が動く。止まらない笑いの発作を抑えようと、ユージーンは口元を掌で抑える。

ふと、その手にはめられたグレーの革手袋に小さなシミが浮かび上がった。

まだ新しいはずの手袋だ。こんな汚れをつけた覚えもないが、とユージーンは怪訝に思う。

すると、シミがひとつ、また、ひとつと増えた。
ユージーンは手袋を外す。

そこで、ユージーンはやつと気がついたのだった。
自らの頬をつたう涙に。

ごく幼いころから思い返してみても、ユージーンは泣いた経験など、ほとんどなかった。
だからなのだ。

そのまるでなじみのない感触が何であるのか、思いつかなかったのは。

その液体が意外なほどに暖かいものであることに、ユージーンは驚きすら覚えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6799q/>

ホーソンの庭で

2011年11月29日15時52分発行